
レイモンドール綺譚

青蛙

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

レイモンドール綺譚

【Nコード】

N5941C

【作者名】

青蛙

【あらすじ】

国境を魔道で封じ、五百年もの間繁栄してきた島国、レイモンドール。しかし長く続いたこの国にも変革の時が訪れようとしていた。レイモンドール国の北部の州候の三男、クロードは自分がその変革の中心になること知らなかったがどんどん渦にまきこまれていく。

はじまり（前書き）

前に別サイトに連載していた物を訂正しながら書いております。初心者ですので変な所が満載かもしれませんがよろしく願います。もう、なんでもいいので感想、つつこみ等おまちしています。

はじまり

「これは……」

薄暗い廟の祭壇の上、焚いていた炎が何の前触れも無く灰色の煙を細く上げて消えた。

王に異変が？

「ルーク様、祭壇の火が！」

周りの魔道師たちが怯えたように最上位の魔道師であるルークを見る。

「解かっている、リチャード付いておいで。サイトスに行く」

青灰色のローブの裾を翻してルークは直ちに印を素早く結んで呪文を唱える。

『アルベルト！ ルーフアス！ サイロス！解せよ！サイトスへ通せ』

その声に応えて人一人が通れるくらいの漆黒の闇がぱっくりと口を開けた。

「直ぐに帰ってくるから。この事は口外しないように」

言ってルークはリチャードと呼んだ魔道師を連れてその闇に沈むとその闇は忽然と姿を消す。

廟の内部のように薄暗い石畳の洞窟然とした道を進むこと一ザンと少し。

二人の目の前に双頭の竜を象った彫金が細工されている扉が姿を見せた。ルークが手前に引いて開けるとそこはうって変わって眩しい光が差す大きな部屋。

そこは先程の廟と同じくたくさんの魔道師たちがいたが室の様子は廟とはまるで違って庁舎のようだ。

「ルークか」

そう言つて書類の山に埋もれるように座つていた茶色の髪の魔道師が顔を上げた。

「『鍵』に変化があつたのではないかと来てみたんだけど……」

それを聞いて茶色の髪の男は慌てて立ち上がる。

「朝は何も変わったところは無かつたが……ルーク、王の執務室へ行こう」

首都サイトスの主城内の廊下を三人の魔道師が足早に王の元に急ぐ。

「今度の王はまだほんのひよつこだろう？ その子供はまだ殻つきほどの雛だ。大丈夫なのか？」

赤毛の巻き毛を揺らしてリチャードが横の魔道師をつつく。

「四十一歳をひよつこ扱いとはおまえも爺になつたもんだよねえ」

ルークが笑いながらリチャードにお返しとばかり背中をぱしりと叩く。 そんな二人に前に行くガリオールが振り返つて厳しく咎める。

「お前達、ここはゴートの廟じゃないのだ、そんな軽口を誰かに聞かれてもしたらどうする」

「はいはい、爺とは言い過ぎました。お年寄りですね」

「ルーク！」

冷たい視線を受けながらも肩を竦めるルークにガリオールは溜息をつく。 話の内容に反比例してその三人はまだ二十代の若者に見えるが……。

「ゴートの廟長としての仕事にルークを専念させてリチャード、おまえがもっとしっかりしてくれなくてはならないと言うのに。いつまでもそんなでは亡きヴァイロン様もお嘆きになられよう」

「もっと大人になれ、という事だ、リチャード……これ以上大人になるのは大変だ。なんせ四百年かかってこれなんだからさ」

ルークが真面目くさつた顔を作つて言う。

「ルーク、おまえに王の半身を教育させるのを止めたほうがいいな。私の一番の失策だ。」

苦い顔をしてガリオールはまた溜息をつく。

「心配なく、ガリオール、せっせと立派な上位の魔道師を量産して
るから」

ルークが苦りきったガリオールの横で笑いながら言った。

レイモンドール国の王は即位の時に魔道と契約を交わし、正式に
王となる。

その即位以降、王は魔道の加護を受け、国政に携わるがその在任
中外見の歳は変わらない。つまり不老となる。

しかし、不死では無いため寿命は只人と変わらないと言われている。
だが、外に漏れてくる話はどこまで本当か嘘なのかはわからない。
秘密めいた国レイモンドール。

その実は他国はおるかレイモンドール国の国民さえ解かってはい
ない。

「うつつ、寒いっ」

肌を海峡から吹く冷たい風が駆け抜けてクロードは首を竦めた。

もうレイモンドール国の首都サイトスでは国花である白霧花が咲
き始め、春の賑わいを見せる頃合だ。

しかし北部に位置するここバルザクト・ロイス・ヴァン・ハーコ
ート公爵が治めるモンド州の州都エリアルはまだ冬の名残を色濃く
のこしていた。

だいたいがレイモンドール国自体が温暖な国ではない。

一年の大半は冷たい海からの風が吹く寒々しい季節が続く、春が
来たと思うと一斉に花が咲き乱れ短い夏を迎える。

「クロード、父上がお呼びだぞ！ おまえはすぐに供も付けずに居
なくなるから捜すのに骨が折れる」

州城は海を見下ろす小高い丘に造られている。クロードと呼ば

れた少年はその海を望む城壁の上に立っていた。

城壁に立ったところで見えるのは海岸線から僅かに覗く青い色だけ。

直ぐ目の前には国境に巡らされている結界のために一年中、濃い霧が晴れる事がない。

「ダリウス兄様、春はまだ遠いな」

従者を後ろに控えさせて髪を押さえながらこちらを仰ぎ見ている兄に向けてクロードは呑気に答えた。

従者ついていったって俺には端から決まった従者なんていないじゃないか。

心の中でそう悪態をついたが何も言わず兄の方へ向かう。ダリウスはやって来た弟の姿を認めると主城に向けて歩き出した。

「先ほど、首都サイトスから父上にお客様が来たのだ。高位の魔道師らしいけど……父上に何の御用かな」

レイモンドール国は三十ほどの州に分かれていてそれぞれ州候が自治を任されていた。

その州候を補佐する者として多くの州が魔道師の州宰を置いているがここモンド州は魔道師の州宰がいないため高位の魔道師という存在自体が珍しいものだった。

先を行く兄、ダリウスの漆黒の長くてまっすぐな髪が白いマントの上で揺れている。

俺と兄様って似てないよな、やっぱり。こっそりとクロードはつぶやく。

クロードの父、バルザクト・ロイス・ヴァン・ハーコートは公爵の地位にある。

現国王コーラルの兄であるからなのだが、なぜ弟が王位を継ぎ、公爵である彼がこのような辺境の地に州公として居るのかクロードには解からなかった。

しかし、このモンド州の山からは良質の金や銀が採れる。大半は国の直轄地になっているがその差配は州公に任されている。

それゆえこの土地は国にとって重要である。そしてもう一つ、この州の半分を有するゴート山脈には魔道教の本山がある為、ともいえる。

ハーコート公は逞しい体躯に釣り合う四角くがっしりした顎に強い意志を秘めた黒曜石のような瞳。

しっかりした鼻梁を持つ高い鼻、情に厚そうなふくらとした唇。顎には豊かに髭が蓄えられていてなかなか堂々としていた。

長男のダリウスはその父親の特質を一人で持ち逃げしたかのようによく似ている。

男らしい風貌と闊達な性格により、彼の評判は天井知らずだった。次兄のユリウスは十七歳、母親似で亜麻色の髪に薄い水色の瞳を持つ線の細い女性と見紛う美形だ。

ところがニヤリと時々つり上がったように笑う口元のせいで酷薄な印象を与える。クロードはこの次兄が苦手だった。

なんにおいても顔に出るダリウスと違ってユリウスはいつも突然現れて謀るような顔してクロードにちょっかいを出してはしれつとした態度で立ち去っていくのだ。

さつきもそうだ。

ダリウスがやって来る一刻も前、クロードは自分の部屋で長椅子に寝ころがって読書をしていた。

いや、していたつもりだったがいつの間にか掲げるように持っていた本は垂らされた右手に持たれてはいたが、今は床に伏せられていた。

何か柔らかいものが頬に触れてきて。

「ん？」　クロードは眠りから覚めて薄目を明けた。

「兄様！　ユリウス兄様」

目覚めた視界一杯にユウリウスの顔があることに驚いて飛び起きようとして、クロードは自分の顔にひたとユリウスの両手がかかっているのを知ってもう一つ動揺した。

こういう奴だった。いつも不意をつくのだ。

ユリウスの軽くウェーヴのかかった髪が流れてまるでカーテンのようにユリウスとクロードの周りを囲んでいる。

「よく眠っておいでだったね、クロード。もしかしたらおまえの一大事だっというのにさ」

ユリウスの唇の右端がニツと上がる。

「何のことです、ユリウス兄様、一大事って何です？」

今度はユリウスの目がすっと細くなった。

普通なら笑顔ってことになるのだろうが、この兄がやると何でこんなに酷薄な顔になるんだ？ クロードの思いなど関知するはずもなくユリウスは楽しそうだ。

「サイトスから客が来てる」

「だから？」

「その客はおまえに用があるのさ」

「なんでそんな事、ユリウス兄様が知っている……」

クロードの言葉はユリウスの手がクロードの口を塞いだ為続かなかった。

「……なんだよっ……」

暴れる弟の両腕を掴んで動きを封じるとその耳元にささやく。

「少し静かにしないと教えてやらないよ」

竜印刻印

これに対して文句を言いたかったが、サイトスから来た客がなぜ自分に用があるのか大いに興味があつたクロードは取りあえず静かにした。

しかし、次期当主と本人はもとより、周りや父親でさえ思っているダリウスよりもどこで仕入れて来るのやら。

ユリウスはこの州の内情はおるかサイトスの事まで良く知っているのだ。

「いつもこんな風に大人しくしていれば良いのに」

ユリウスはクスリと笑った。

「サイトスから来た客は王宮付き魔道師の長のガリオールだ。宰相さいしやうも兼ねている魔道師がお供を一人しか連れずに人外の道を使ってここまで来たようだ」

「人外の道？」

「そう、魔道師と王しか通れない……竜道とも言われている道。それを使えばサイトスから二ザンもかからずここへ来られるな」

そんな道がサイトスからここへ繋がつていようとはクロードは思つてもみなかった。

その道を使って魔道師が俺に何の用があるのだ？

ますます混乱するクロードにずっと再びユリウスの顔が近づいて慌てて顔を背けるクロードの耳に触れる程、唇を寄せた。

「おまえ、あの男、ハーコートを本当の父親と思っているかい？」

あまりの事に顔を戻したクロードは結果、ユリウスとキスした状態になる。

「おや、これは何のキス？ 起きぬけのキスじゃあ時間が経ち過ぎているが」

「だーっ！ 大人しくしているんだからもうちよつと離れてよ、兄様」

「はいはい」

笑いながら手を離れた兄を押しつけてクロードは長椅子から立ち上がった。

「どういうこと？ わたしは父様の子供ではないの？」

確かに自分は父親似ではない。髪はシルバーブロンドで瞳の色は黒に近い藍色だ。鼻も細いし、唇も厚くない。

しかし、それを言うなら線が細いのは自分が十四歳だからだろうし、目の前にいるユリウスだって男としては細すぎるくらいだ。

ユリウスが母親に似ているように自分も母親に似たということ…

…じゃあないの？

「自分の母親の顔を知ってるのか」

クロードの心を見透かしたようにユリウスが尋ねる。クロードは頭を横に振った。

彼の母親はクロードを生んですぐに亡くなったのだという、州城に仕えていた女官の一人だった女性。

クロードは後継者としては二人の兄が健在であるうちは俎上そじょうにも上らない庶子だった。

しかし、それも違うというのか。

「兄様は私の出生を知ってるんですか」

クロードが思わず詰め寄る。

「ちよっと喋りすぎたなあ、だっておまえの反応面白すぎ」

言ってクロードのおでこに口付ける。

「今は、さよならのキスだ、クロード」

ユリウスは、硬直したクロードを残しさつさと退室していった。

ばかやろう！ 俺はさよならのチューなんて歳じゃない！

馬鹿兄貴！

もやもやとした気持ちを何とかしたくてクロードは、お気に入り
の場所、海を見下ろす城壁の上に立っていたのだ。

手の先さえ見えないほどの霧のその先はどんな世界なのか。

島国であるレイモンドールの東は狭い海峡を挟んで大陸が広がっているという。この国で大陸に繋がっている港は首都サイトスしかない。

サイトス以外から大陸へ船を出す事も大陸から船がくることもない為、クロードは外国船を見たことが無かった。

ダリウスに続いてクロードは州城の貴賓室^{きひんしつ}へ行くものとばかり思っていたが、ダリウスは普段あまり使われた事の無い部屋の前に立った。

いつもいる取次ぎの下官もいなくて、ダリウスは一瞬躊躇^{ためど}った後に自分の拳を扉に当てようとしたがその直前に。

「ダリウス殿か、クロード殿もどうぞ入られよ」

中から声がかかり、ダリウスは深呼吸をして扉を開けた。

中央に置かれた大きい円テーブルに父親のハーコートが座り、その斜め横に灰青色の全身を覆うローブを身に纏いフードを後ろに跳ね除けている若い男が座っている。

部屋の奥にはガリオールが連れてきた魔道師がフードを深く下ろして控えていた。

「ダリウス・ザクト・ヴァン・ハーコートでございます。お初にお目にかかります」

「サイトで魔道師長を勤めております、ガリオールといいます。あれはゴートの廟を取り仕切っているルークといいます」

ガリオールの声に、ルークと呼ばれた魔道師が浅く頭を垂れた。にこにこ愛想よく挨拶を交わした茶色の髪をきっちり後ろに結んでいるガリオールはハーコートにも愛想の良い笑顔を向ける。

「お父上によく似ておられる。良い継君をお持ちですな、公」
そして……ガリオールの髪と同じ茶色の瞳がクロードの前で止まる。

「クライブ様と同じ……ヴァイロン様に似ている」

小さいつぶやきが洩れる。

「クロード・ヴァン・ハーコートでございます」

軽く会釈をしてクロードはガリオールの茶色の目が一瞬猫のように細くなつたのに驚いて隣の兄をみるがダリウスは気付いていないようなのだ。

「いくつにおなりですか」

「十四歳です」

「まだ、お若いですね」

笑いかけたガリオールが次々と手を複雑に組んで意味の解からない言葉を発して。

それを補佐するように後ろに立つルークが古代レイン文字を宙に描いて大きく印を切る。

『刻印！』ガリオールの細長い筋張った指がクロードの左の胸をつく。クロードは急に目の前が暗くなり、大きな声が頭に響いて茫然とする。

「印が完成するころ迎えに参ります」

あまりの左胸の痛みと熱さに胸を押さえていたクロードはそのまま眩暈におそわれて崩れるように倒れた。

人の話し声にようやくクロードが目を開けたのはそれから一刻以上経った頃。

寝台から身をやつと起こすと女官が部屋を出て行く音がして、時を置かず父親が部屋に入って来た。

選ばれた者

今まで父親が自分の部屋に来たことなど無かった。そのせいでクロードは酷く落ち着かない気分で父親を見上げた。

「もう、体はいいのか」

手ずから寝台の側に椅子を置いて腰掛ける。

「父様、先ほどはお客様の目の前で申し訳ありませんでした」

暫く無言のままの父親にクロードは自分の出生についての疑問をぶつけてみようかと口を開きかけた。

「父様、あの……」

「先ほどのガリオールの言葉はダリウスには聞こえていないし、あれは何にも見ていない」

「えっ？」

さっきのあれを兄様は見えてないし、聞いてない？

「呪をかけられたのだよ、おまえは」

言つて、クロードのシャツのリボンを解くと左の身頃を肌蹴た。見るとクロードの左胸に薄く何かの模様が浮き上がっている。

火傷のような赤紫の模様。

「これって？」

「……竜印」

父親がぼそりと言う。

「わたしもこれを見たのは今日が初めてだが」

クロードの目を見据える。

「クロード、おまえはわたしの子供ではないのだ」

ハーコート言葉にクロードはこれから自分が知りたかった話が始まることを知った。

「わたしの子供では無いが、血の繋がりが全く無いわけでもない。

我々は王の血脈で繋がっているのだ。おまえは、現王コーラル、わたしの弟の子供なのだ」

クロードの目が大きく開かれる。父様は、この人は何を言っているのだ？ 俺がこのレイモンドール国の国王の息子だって？

クロードが混乱しているうちにもハーコートの話は続く。

「あと数年の後、現王コーラル陛下が崩御される。次期国王となれるのはおまえの兄、クライブ殿下だ。クライブ殿下が即位なされる時、おまえもサイトスに赴き王の影として王崩御の時までお側に付き従う事になる。おまえとクライブ殿下は双子として生を受け、この国の王は双子の内一人が継ぐことになっているのだ」

「選ばれたのがクライブだった　と、いうことですか」

「いいや、選ばれたのはおまえだ、クロード」

ハーコートの言葉にまた、混乱する。

だいたい、双子なんてそんなに頻繁に生まれないし、それが条件であるというのならこのレイモンドール国が五百年も続いてきた事が嘘くさくなる。

そして、王では無く王の従属として生きる方が選ばれた者とはどういう事なんだ？

父の話を聞いていても他人事のようだ。

こんな事が俺と関わりあるはずが無いではないか……。

唾を飲み込む音がやけに響いてどきりとする。

クロードは、父親の話を神妙に聞いているのだが、その話は手のひらからこぼれる砂のように頭から落ちていく。

「王の即位の日までおまえはここでそのまま暮らすがい。しかし、これからはある勉強が必要になる」

ハーコートはクロードから目を離して扉の方へ顔を向けた。

「ユリウス、いるか」

「はい、ここにいますよ、父上」

戸の外に控えていると思っていたハーコートは、思ったより近い声に眉根を寄せた。

「おまえ、いつの間にかそこへ」

寝台の天蓋から下がっている布を掻き分けてぬつとユリウスが顔を出すと慄然とした顔を隠そうともせず、ユリウスをねめつけた。

「あなたが来る前から居ましたのでね。ルークが私の城に寄って行きましたのでお話は全部伺いましたよ、話が早くて良かったでしょう。じゃあ、明日から始めてよろしいのですね、父上？」

不機嫌な父親に対していつものように唇の端をニヤリと吊り上げてユリウスが笑う。

「今晚は無理をせずにゆっくり休みなさい」

ハーコートは優しく言うのと最後にユリウスに冷たい視線で一瞥すると部屋から出て行った。

その様子をクロードは何も言わず、見ていたが……。

何でこの二人はこんなに仲が良くないのか？ クロードが物心ついた時にはすでにユリウスと父親の仲はギクシャクしていた。子供らしくないユリウスのせいだと思っていたが、それだけでは無いのかもしれない。

「どれ、見せてごらん」

口の端を上げたまま寝台に腰を降ろしてユリウスは父が肌蹴たまにしていたクロードの胸元に指を滑らす。

「くくつ、立派な祝だな、ガリオールは流石にきっちりしている」
言いながら胸の模様を指でなぞる。

「あの……くすぐりたいから止めてもらえませんか？ 兄様」

「ハーコートの言っていた事、聞いたろ？ 私とおまえは兄弟じゃないんだ。二人の時は名前だけでいいよ」

「じゃあユリウス、触るの止めてよ！」

「はいはい」

ユリウスは笑いながら手を引くとすつと表情を変える。

「今日ハーコートから聞いた事はこの先、私以外の人間がいる所で口外してはだめだよ。ダリウスやちび姫にもね」

「解かった」

「よし、いい子だクロード」

ユリウスはすいつと立ち上がると部屋を出て行き、クロードはぽつりと部屋に残された。

明日から何が始まるのか……そして思い返してみれば現国王が崩御するなんて何で解かるわけ？

しかもそんな恐れ多い事を父様やユリウスも何で平然と言っているのか。

今晚はとても眠れそうに無い。 胸のじくじくする痛みと共にクロードは長い溜息をついた。

ユリウスの城へ

「兄様あ、おきて、もう朝ですよー!」

大声と同時に自分の腹の上にダイブしてきた妹の頭をくしゃくしゃとかき混ぜながらクロードは体を起こした。

こうやってクロードの部屋に供も連れず、ふいに入ってきて来るのはユリウスかこの妹姫だけだった。

「エスペラント、おまえも結構重いんだから兄様は潰れちゃうよ。だからこんなマネは止めて欲しいんだけど」

一応、兄らしくいいながらもエスペラントのわき腹をくすぐるとエスペラントがきゃあきゃあと笑い声を立てながら身を振って寝台から降りた。

「いつまでもお寝坊しているからよ。言わせてもらえば、この頭どうしてくださるの？ ニザンもかけて女官に結わせたのにこんなにしてくれて」

リボンの取れかかった黒髪を指差してエスペラントがぶくつと頬を膨らませた。

「あはは……ごめん、ごめん、だけどその方がさつきより断然可愛いけど」

クロードの言葉に猛然と抗議するエスペラントを適当に受け流しながら寝台から降りて衣装部屋の扉を開ける。

「どこまでついてくるの？」

「え？ ああ、お着替えするのね、兄様。お食事の後、私を馬に乗せてくださる？」

おねだりする、妹にうんと言いつつになって昨日の事を思い出した。

「ごめん、エスペラント、今日は朝から用事が出来て無理なんだ。また、暇が出来たら乗せてやるから」

「えーっ、嫌よ、兄様!」

素早く衣裳部屋にすべり込んで扉を閉めてクロードは服を着替え始めたが扉はドンドンと叩かれている。

やれやれ……クロードは扉の向こうの妹姫を思っ
て溜息をついた。十二歳のエスペラントは父親によく似た黒髪とくるくるよく動く黒い瞳の少女だ。

小さい時から何となく城内で放っておかれたような疎外感を味わって育ってきたクロードにとってはしがみついてくる、邪気の無い妹姫のエスペラントは可愛くて仕方が無い。

女官達の「女としてお生まれになったのなら、お母様に似ていらつしやたら良かったのに」などという声をどうかエスペラントは聞かないで欲しいと切に思うのだった。

ダリウスとユリウス、エスペラントの母親であるエリーゼは亜麻色の髪で色素の薄いユリウスと同じ水色の瞳の絶世の美女だったらしい。

しかし、エスペラントを生んだあと、体調を崩し南のザーリア州に転地治療に行ったままあっけなく亡くなったのだ。

まだ幼かったクロードやエスペラントはまったく覚えてないのだが、ダリウスは綺麗な人、だったと思う。

これまた不確かな記憶でしかないがそう言っていた。

転地治療に行く前から病弱でめったに人前に姿を現さなかったらしいが城に絵が一枚残されていて、それは彼女が伝説のように美しかったことの証明になっていた。

少し前に、初めてその絵を見て、何でユリウスが女装して描かれているんだと兄、ダリウスに聞いて笑われてしまったのだが……。

「だって、すごく似てるんだもの」

言ったクロードにそうだなと、ダリウスが頬を染めて言っていた事を……思い出した。

とにかく、それ以降ハーコート公は正式に妻を娶った事は無く愛妾を城下の屋敷に住まわせているらしい。

誰に遠慮しているのか、クロードは解からないが子供達では無い

事だけは確かだ。

ダリウスもエスペラントも父親が新しい妃を迎えるべきだと常々言っているし、クロードも同意見だ。

ユリウスは父親の事なんか興味無さそうだし。

物思いに浸っていたクロードは、バキツと扉の一部が壊れる音に我にかえる。

「エスペラント、そんなに叩くとルーバーになってる所が壊れちゃうよ」

着替えを終えて扉を開けると頬を膨らませたまま、エスペラントがクロードに抱きついて来た。

「馬に乗せてくれるまでこの手を離さないんだから」

「ええ？ 聞き分けてよ、エスペラント」

うーんと唸って困り果てたクロードが天を仰いだ所に戸を開ける音がした。

「何だ、騒々しいし、乳臭い匂いがすると思ったらやっぱりおまえか、チビ姫」

今日も一人でふらつと寄った風情で壁に寄りかかってユリウスが目だけエスペラントへ向けた。

「んゝもう！ チビじゃあ無いわよ、失礼ね！ ユリウス兄様には関係無いのよ。あっち行ってらして」

宿敵の登場にエスペラントも熱くなる。

「チビだからチビって言うてるだけだけど？ もっと他の事も言うてやってもいいけど」

泣きそうなエスペラントにクロードも加勢する。

「もう、止めてよ！ ユリウス……兄様。大人気ないまねは止めてください」

それを聞いて、そーだ、そーだと嬉しがるエスペラントにつかつかとユリウスが近寄ってクロードから引つ剥がすとそのまま長椅子に放りなげた。

「痛 いっ」

「何だよ、乱暴な」

二人の抗議など鼻で笑い飛ばしてユリウスはクロードの腕を掴む。
「さっさと顔を洗って……目やにがついている。食事を済ましたらわたしの小宮においで、クロード」

目元に手をやるクロードをニヤリと見る。

「あ、それと食事は軽めにしとけよ。後で吐かれると面倒だからな」
腕を離して部屋を出て行こうとして思い立ったように振り向く。

「エスペラント、悪いけど当分、クロードは私が預かるからね。この前まで使ってた木馬にでも乗っておきよ。そっちの方がお似合いだと思うけど」

しっかり無駄口を最後にユリウスは部屋を出て行った。

「んもう！ 私、ユリウス兄様、大嫌いよっ」

扉に向かつて大声で叫んでからしょんぼりとうな垂れる。

「絶対、近いうちに乗せてやるから」

クロードがエスペラントの肩を軽く抱く。

「絶対よ、兄様」

部屋を出て行くエスペラントと入れ違いに女官が入り、朝食と洗面の用意をする。

「後で始末をしにまいります」

用意が整うと女官達は側に付くことも無く下がって行く。クロードが父親や兄のダリウス、妹のエスペラントと一緒に食事を取らなくなってもう久しい。

それでも昔は、横で女官が何くれと世話を焼いていたのだが、一人で食事を出来る歳になってからは鬱陶しくていつも追い出していたら、いつの間にか誰も付く事が無くなっていった。

また、ユリウスは、州城の敷地内にどういう理由か小さい城を貰い、そこを居室としている為やはり一緒に食事を取った事が無い。

それどころか今までその城へクロードは入った事も無い。

テーブルの前に座って並んだ朝食を見たが、さっきのユリウスの言葉に早速食欲が無くなったクロードはフォークで添え物の茹でた

かぶをグサグサと突き刺した。

今日ぐらい、エスペラントを誘って一緒に食べれば良かったかな。

結局、一口も食べずにクロードは立ち上がるとユリウスの小宮へ向かった。

小さい時からクロードだってそれ相当の勉強を先生についてやらされていたが、ユリウスが先生について勉強しているなどと聞いた事が無かった。

まあ、離れた小宮に先生を呼びつけていたのならクロードが知ることは無いだろうが。

十八歳で成人となるこの国ではダリウスも去年、大々的に成人のお祝いをし、父親について政務を学びながら早くも権の移譲も少しずつ行われている。

後継者が決まっている今の状態であれば、クロードもユリウスもごくつぶしに違いない。

しかし、クロードについて言えば仮の姿だったわけだ。俺が王の影だとして俺の役目ってなんだろう？ 反乱とかあったら身代わりになる……とか？

一体、ユリウスから何を学ぶのか、それさえ解かっていない。自分より三つ年上なだけの兄が何を知っているのか？

まあ、本人に聞くか。考え事をしながら歩いていて綺麗に刈り込まれた庭園をすでに過ぎ、ちよつとした森の中を歩いている。ようやく森の中にユリウスの小宮が姿を見せた。

ここまでちよつとしたハイキングコースだよなあ。

クロードは自分が来た道を振り返り、目を前方に戻して城の門の所に長身の男が立っているのに気付いた。

黒っぽい長めの上着を着た男　州城にいる官吏や下男とは服が違うがユリウスの従者だろうか？

「クロード様、お待ちしておりました」

その従者は顔色の悪い頬骨の浮いた顔をにっこりと笑い顔にして

クロードを城へと案内する。

殺風景な石造りの玄関ホールから一つ扉を開けるといきなり大きな部屋に続いていた。

地下室

「いきなり部屋なの？」

「お早うクロード、わたしの城は気に入ったかい？」

この城の主がゴブラン織りの長椅子に寝転がって読みかけの本を傍らの先ほどの男に渡す。武骨な外観の中でこの部屋は中々に見事だった。

毛足の長い複雑な模様を織り込んである絨毯が敷かれてその上に置かれている調度類も細工の凝った見事なものばかりだ。

「陰気な城だけどこの部屋は綺麗だね」

クロードの物言いにユリウスはクスリと笑う。

「そうだな、この部屋と寝室ぐらいしか上は使っていないからな。クロード、来て早々悪いが早速着替えてもらわないと」

「着替えるって何に？」

「そこにある」

ユリウスが指し示した美しい螺鈿細工を施した机の上には、見覚えのある灰青色のローブが他の薄物と一緒に折り畳んであった。

「これってガリオールが着てたやつだよな？」

クロードが広げて問うようにユリウスを見た。

「ふん、同じだな、これを着ないと下には行けないからね。これから行く所は呪で結界が張つてあるから常人では行けないのさ」

立ち上がるとその言葉が終わらないうちからクロードの上着を背後からするりと引き抜いた。

「着替えくらい自分で出来るよ」

クロードが抗議する。

「じゃあ、どうぞ」

ユウリウスが後ろに下がって腕を組んで人の着替えを楽しそうにみている。

ローブを手にとって見ると灰青色の厚みのあるローブには濃い灰

色の系で何やかや模様や、異国風の言葉が隙間無く刺繍されていて、下に着る薄物には嗅いだ事の無い香が焚き染めてあった。

「着ただけ……」

「そのようだね」

ユリウスが懷から銀で出来た、竜の飾りに革紐を通したペンダントを取り出した。

「最後にこれを付けるのを忘れるな、クロード」

「この模様は……」

「そうだ、おまえの胸についている物と同じだ」

ユリウスが、ローブの上からクロードの左胸に指を突きつけた。

「おまえの竜印は完成してないからね。その代わりだ。竜印が完成したらペンダントもローブも必要なくなる」

竜印が完成するのは、現王が亡くなってクライブが王に即位した時か

「じゃあ行くよ」

「ユリウスは着替えないの？」

歩き出したユリウスにクロードが不思議そうに言う。

「そうだな……ラドビアス」

「はい、こちらに」

いつの間に控えていたのか背後から短い応えがあつてクロードはビクツと振り返ると、ラドビアスと呼ばれたユリウスの従者が立っていた。

「私のローブを持ってきてくれ」

「はい、畏まりました」

ラドビアスは静かに出て行くとすぐに黒いローブを手に戻って来た。

そして、慣れた手付きでユリウスの服を脱がして服をさつと畳んでいく。あつと言う間にユリウスは下着一枚になる。

さっき自分も同じようにして着替えをした筈なのにクロードは視線をもじもじと彷徨わせる。

「何をそわそわしている、クロード？」
楽しそうなユリウスの声。

くっそう、人が弱みを見せたら食いついてくることは解かってたのに。

こつという所は絶対取りこぼさない奴、それがユリウスだった。

「可愛いよね、赤くなったりして」

クロードの顎を持ち上げてにたりと笑う。

ローブを手にしたラドビアスが「風邪を召しますよ」と、言うがそんな事を聞く彼では無い。

しかし、同じ男の体の筈なのにこつちが恥ずかしくなるような肌なのだ。

牛乳に薔薇を溶かした、あり得ないような色香を放つ体に亜麻色のウェーヴのかかった髪が揺れて……。

どぎまぎしているクロードの前でクシュン！ と、ユリウスがくしゃみをした。

「だから風邪を引きますよと言いましたのに。いい加減、服着て下さいまし」

ぼそつとラドビアスが言いながら薄い裾の長い前開きのシャツを着せ掛ける。

「うるさいよ、おまえ」

言いながらも手を動かして黒いローブを着ると壁際にあつた燭台に火を点けた。

「じゃ行くよ、クロード」

部屋の最奥に竜の彫刻が施してある一見、扉には見えない壁に向かって印を結ぶ。

『アルベルト！ ルーファス！ サイロス！ 解せよ！』

低く唱えると壁が消え、下方に続く階段が現れた。

薄暗い中、燭台の灯を頼りに下りていくと後ろから足音が聞こえて振り返るといつの間に着替えたのか灰青色のローブを着たラドビアスが付いて来ていた。

「灯をもう一つお持ちしました」

って、ユリウスもこいつも魔道師って事？

階段を半分くらい下りた所でクロードは頭痛が酷くなり、壁に手を付きながら下りていたが眩暈がして前を下りるユリウスに倒れこんだ。

「おや、気分が良くないのかい？」

抱きとめたユリウスに吐きそう、それだけ言ってクロードは気を失った。

「竜門をくぐった所では何ともなかったのに……鈍いのかな、この子」

「私がお連れしましょう」

差し出した手をユリウスが払う。

「いいよ、軽いし」

「ですが」

ラドビアスはユリウスのロープを指差す。

「吐かれてますよ、ここに」

「うっ！」

ユリウスの顔が引きつる。

「クロードは預ける」

「だから最初に言いましたのに……」

「うるさいっ！」

主人の慚然とする顔などどこ吹く風で、ラドビアスはクロードを肩にかついでさっさと下りて行った。

この匂い。 今日着替えた服についているのと同じだ。

クロードは、部屋中に満ちている香りに刺激を受けて目をさました。

薄暗い壁一面に装飾的な外来の文字が描いてあり、床と天井は円や直線の組み合わせの図にやはり字がびっしり描いてある。

二方の壁は天井から書棚が作り付けてあり、丸めた書物やら太い本がぎつしりと詰め込まれていた。

その書棚の手前に置かれている長椅子にクロードは寝かされていた。頭を上げて起きようとするの後頭部がズキリと痛む。

「目が覚めたか」

「うん」

つらそうなクロードに構わずユリウスが手を引いて起き上がらせる。

「頭、痛い」

「すぐ、慣れる。それより、おまえ私が何者か知りたいだろう？」

「そりゃあ知りたいよ」

クロードは頭を押さえながらも座り直した。その横へユリウスが座る。

「私はこの州を任された魔道師……ということになっている。ハーコートに対してはね」

「って……それじゃあそうじゃ無いって事？」

モンド州には魔道師の州宰がいらないと思っていたが、そうではなかった。

州宰が魔道師なのでは無く、魔道師は州公の子供になりすましていた……と、いうこと？

「なんでまた、そんな事？」

そりゃあ父様も気分良くないか……。

「なんでって……」

ユリウスの眉が上がる。その様子を見てクロードはあっと思う。

「俺のお目付け役なの？ ユリウス」

クロードの言葉にユリウスが軽く息を吐く。

「そうだな……そんなものかも」

ラドビアスの咎めるような顔をユリウスは無視する。

「さてと、勉強しなきゃあな。じゃあ、この国の成り立ちから……」
言いかけたユリウスの言葉をラドビアスが遮る。

「ユリウス様、ダリウス様が城に後一ザンもすればお着きになりますが」

ユリウスが大きく舌打ちする。

「ちっ！ 今日から始めると言っておいたのにハーコートめ、息子を放っておいたか」

眉を顰めながらふらつくクロードを立てて肩を貸すと歩き出す。
「さっさと歩け、クロード」

有無を言わせずに歩かされてクロードは気持ち悪いと泣き言を言うが無視された。

「ラドビアス、ダリウスを足止めしてくれ」

「はい」

ユリウスに答えた後、ふいにラドビアスの気配が消えた。

二人の仲

地下室から何とか元の部屋に戻り、クロードは不意ながらユリウスに手伝って貰いながら来た時の服に着替えて長椅子に寝転がった。

「気分が悪いなら寝室で横になればいいのに」

「そんな事危なくてできないよ」

クロードを気遣って言ってるとはとても思えないのでとりあえずそういう甘言は断ることにする。

「ああそう」

どこまでも人の弱っている所をみるのが好きな性分のユリウスはにやりと唇の片端を吊り上げた。

二人が何気無くをどうにか装った頃合を見計らったようにラドビアスの声が来客を告げる。

「ダリウス様がお見えです」

今日は従者を一人しか伴わないでかなり急ぎで来たのか肩で息をしている。

「どうしました兄上、何かご用でも？」

いつの間に用意したのか、八重の花を模した華奢な茶器（わじゃ）に入れたお茶を美味しそうに飲んでいるユリウスは今までバタバタと動いていたとはとても思えない。

ダリウスは眉間に皺を寄せてつかつかとユリウスに歩み寄るといきなり両肩を掴んでそのまま椅子に押さえつける。

「何をするんです、兄上」

「ガリオールは何をしにこの州城にやって来たんだ？」

茶器をそつとテーブルに戻して訝しげに見上げるユリウスに強い口調でダリウスが問う。

「そんな事、父上に聞けばいいじゃありませんか」

自分の肩を掴んだ手を埃を払うようにのけながらユリウスがニタ

リと笑ったのを見てダリウスの右眉がぴくりと動く。

「父上は何も教えて下さらない」

苦々しく言いたく無かったものを絞り出すようにダリウスが言った。

「それでなんで私が知っていると置いていらっしゃるんですか。兄上が知らないことを」

しれつと言うユリウスにダリウスはを自分抑えられなくなる。

ガターン！ と、テーブルに拳を叩きつけてその勢いでテーブルに置かれていた茶器が受け皿ごと盛大な音と共に床に落ちて割れる。
「おまえ、父上とクロードの部屋で密談していたろっ」

青筋をたてているがそれでも何とか声を抑えようとしているので語尾がわずかに震えていて両の手を硬く握り締めている。

「あーっ、この茶器、私のお気に入りでしたのに」

ユリウスが溜息をつく。

「ラドビアス、直ぐに片付けて。絨毯じゅうたんにしみが残ったら大変だ」

言いながらお茶が自分の服に跳ねてないか点検するようにあちこち引っ張って見る。そこへ、ラドビアスが掃除道具を手にとって来てしゃがみ込む。

自分を無視された会話にダリウスの抑えていたいらいらが暴発する。

膝をついて片付けている、ラドビアスの頭ごしに伸ばした手がユリウスの胸倉を掴んで引き上げる。

「私を馬鹿にするなよ、ユリウス、どういつつもりだ。私は……私だけ何も知らないなんて事は許せないし、そんな状態は好きではないのだっ」

「いた……痛いですよ」

ユリウスが抗議の声を上げるがダリウスは力を緩めようとしなない。
「何も知らないって……あなたが知らない事なんて山ほどありますよ。今まで全部知っていると思って暮らしていたなんて何て幸せ者だったんだか」

ますます、自分を窮地に追い込むような馬鹿にした口調にダリウスの自制心も吹っ飛ぶ。

しゃがんでいる、ラドビアスを避けて横にユリウスの胸倉を掴んだまま引きずっていく。

「何を父上と話していたのか全部喋ってもらうぞ、ユリウス！」

「解かりましたよ、苦しいから離して貰っていいですか。それにクロードが心配そうに見えますよ、兄上」

ユリウスの言葉にはっとして部屋を見回したダリウスの目に長椅子から身を乗り出して心配そうに見ているクロードが映った。

「クロード、なんでここに？」

ユリウスから手が離れ、片付ける手を休めて見ていたラドビアスが片付けに戻る。

「別に密談なんてしていませんよ」

逆にユリウスからダリウスに近づいてダリウスの肩に手を置く。

「大げさなことじゃ無いんですよ、兄上。魔道師長のガリオールに挨拶にも行かなかったのを、クロードの部屋に居るところで見つけて説教されていたんですよ」

クスリと笑ってダリウスを見上げる。

「あんまり兄上が必死なんで、ちよつとからかいたくなりまして……申し訳ありません」

「かつ、からかうなどと！」

ダリウスが慥然とするのを幼い子か、はたまた恋人がするように腕を絡ませて上目使いでダリウスを見る。

「私は兄上を敬愛しておりますよ、信じていただけませんか？」

「おまえはどこまで信用していいのか……。ともかくそういう事ならもう、良い、帰る」

絡められた腕を慌てて振り解いてダリウスは城の外に待たせていた従者を連れて帰って行った。

一体、二人の関係はどうなっているの？ 弟に腕をとられて顔を赤くしている兄さんって？

しかしさつきユリウスの着替え見て俺も顔を赤くしていたんだと思ひ出した。

「あはははは……ダリウス、あいつ、何しに来たんだ、変な奴!」
お腹を押さえて笑い転がっているユリウスを見る。こいつと関わるととにかく自然なことが不自然になる。

「あんたの方がよっぽど変だ」
思いつきり冷たくクロードは言ってる。

「おや、気分が良くなってきたのだろう、クロード? 明日からは少しは実のある時間を過ごさないと王の即位に間に合いやしない。いいかい、クロード。明日からはサクサクいくからね。吐いてる場合じゃないよ」

クロードのおでこを人指し指で弾いてユリウスが言った。
「わかったよ」

サクサクって……いろいろ言いたかったが吐いて一刻以上寝ていたのは本当だったので 大人しくクロードは返事を返す。

「今日は体も慣れていないし、もうお帰り」
「はい」

何が無だか何も身には付いていないが恐ろしい程自分が昨日までの境遇と違う事、だけは実感出来た一日だった。

ユリウスの正体

次の日の朝、クロードが小宮の前まで来るとやはりラドビアスが門の所で待っていた。

「おはよう、ラドビアス」

「お早うございます、クロード様」

「俺が来るの、ずっと待ってたの？」

そうだと悪いなあと思いながらラドビアスを見ると、ラドビアスがにっこり笑う。

「いえ、途中に使い魔を見張りに出して、知らせを聞いてから出て参りますのでご心配無用ですよ」

使い魔ってそんなおっかない物がいたの？ クロードは今来た道を振り返ったがそれらしい物は見え無かった。

城に入ってそそくさと着替えてラドビアスに続いて地下に下りるがやはり気分は良くない。

地下室には昨日嗅いだ例の香の香りが満ちていた。 その中ですでにユリウスが机について分厚い異国の文字で書かれた本を開いて読んでいた。

「クロード様がおいでになりました」

ラドビアスの声に顔を上げる。

「ああ、今朝は吐かなかっただろうな、クロード。」

「吐いてません」

朝の挨拶がこれからこのやりとりだったら最低だ。

ユリウスは黒いローブを着て髪を黒のリボンで結んで先生モード全開のようだ。

「では、この国の成り立ちから……」

「成り立ちくらい、俺、習ってるよ。」

昨日と同じ所でまたもや話を中断されてユリウスがむすつと顎で言えと示す。

「じゃあ、言ってみろ」

「えっと……レイモンドール国は五百年前、太陽王と言われたヴァイロン王によって統一された。王は、一人の魔道師に命じて魔道を使って国境に結界を張らせ、国を外国からの侵略から守り繁栄させて今日に至る。……んでしょ？」

ちよっぴり間の事をはしょったけどまあ、こんな感じだった筈とクロードはユリウスを伺う。

「まあ、それは表側の歴史だな、本当の所は少しずつ違う。」

見てきたかのごとくユリウスは言い切る。　へーえ？　と、クロードが興味を示してユリウスはそうこなくちゃと満足そうに話し出す。

レイモンドール国の五百年と少し前、この島国は今は州となっている小さな国が互いに争って疲弊していた。

この島の豊富な鉱物資源を手に入れようと大陸側からも何度と無く戦を仕掛けられて戦乱の時代は長く続きどの国も貧しかった。

この島の北部に位置する、モンド国の三年前に王に即位したばかりの若い王、ヴァイロン。

大陸側からルクサン皇国ドリゲルト率いる今までに無い大軍に他の国が次々と倒されていく。

つい三日ほどの短い間に主城を落とされ、モンド国の半分を占めるゴート山脈に逃げ込んだ。

彼は、そこでそのゴート山脈で一人の魔道師と契約を交わしたのだ。

「どんな契約？」

クロードの質問は、黙って聞け！　と、一喝される。

その契約とはこの島国を魔道を奉じる国にする事、その代償としてヴァイロンを島国を統一した、建国の王とする。

王は即位する度に自分の半身を魔道側に引き渡すこと。　王が即位する為には前王が死んだ後に直ちに『鍵』と契約を交わすこと。

『鍵』？　　またもやクロードが口を出すのをユリウスがぺしっとク

ロードのおでこを指で弾いた。

「痛っ！」

「これから話してやるから大人しく黙っておけ！」

王が契約を交わすのは『鍵』だ。それは王と契約すると王の意思によって剣となり、指輪となる。

いつもは王は指輪にして身に着けている。それを持っていることが王の証だ。

「もつともこの平安の世の中で『鍵』を剣に変えた王などいないが」「それと……」

ユリウスが付け加えるように話す。

「王の剣でその魔道師を斬ればこの島にかけられている呪はすべて無くなり、契約を破棄する事が出来る」

「それはお教えしなくても宜しいのでは」

ラドビアスが困ったように口を出す。

「うるさい！」

これまた、ユリウスに一喝された。

しかし、そんなことよりクロードが気になったのは

「五百年以上前にヴァイロン王と契約した魔道師がまだ生きてんの？」

そっちの方が凄い。クロードの言葉にユリウスとラドビアスが顔を見合わせた。

「クロード様、これをご覧下さい」

ラドビアスが胸元をぐつと下げて自分の左胸を見せる。赤紫の鮮やかな、クロードの薄いものとは違って少し模様に沿って盛り上がっている。

「これを頂いた者はそれが完成した時点から歳を取りません。つまり、ヴァイロン様と契約をされた魔道師のイーヴァルアイ様が亡くなるまで、不慮の事故や相当の怪我以外は不老不死となります」

じゃあ俺はあと数年後に成長が止まってしまうということ？
「初期の頃にイーヴァルアイ様から直々に竜印を頂いた魔道師は三

人おりますが、その者たちは今でもおりますよ。先ほどお会いになった、ガリオールもその中の一人です」

歴代の王の半身が竜印を受けて上位の魔道師になり、州宰や各所の代官を務めているということか。

「じゃあ、ガリオールも何代目かの王の半身だったの？」

いいえと、ラドビアスは即座に首を振る。

「国内の各所にある廟から上がって来た優秀な魔道師にも竜印が授けられますから今は、ざっと二百人あまりでしょうか」

それでも何十万人という魔道師の中での二百人とはほんの一握りの人数ではない。

「ねえ、ラドビアス、竜印を持つ魔道師がエリートなのは解かったけどそのラドビアスが従者みたいなことをしているって事はユリウスがラドビアスと同位の魔道師な訳無いよね？」

クロードの問いにラドビアスはユリウスを見る。

「……まあ、そうだな」

言いにくそうにユリウスが肯定するのを見てラドビアスがくすつと笑う。

「私の名前はもう一つ、あつてそれは……イーヴァルアイという」「イーヴァルアイってあの五百年前、ヴァイロン王と契約したっていう……」

「そうだ、十七歳よりは少し、上だったかな」

「そりゃあ思いつきりさば読みし過ぎだって！」

「うるさい！ 人を年寄り扱いするなよ」

ユリウスがプイツと顔を背けた。

「宰相のガリオールは王の半身じゃ無いってさっき言ってたけど？」顔を背けたユリウスに代わりラドビアスが答える。

「初期のモンド州の廟で飛び抜けて優秀な魔道師が二人おりまして一人が首都サイトで宰相と魔道師長を勤めております、ガリオールで今一人がモンドの廟を束ねている廟長のルークともうします」

ラドビアスが昔語りをする親戚の小父さんみたいに話すのを聞い

て少し背中がぞくりとする。

見た目は二十代後半から三十代前半に見えるが、なんといっても十七歳と偽称してきたユリウスが五百年以上生きているのだ。

十四歳のクロードにしてみれば考えの及ばない長い年月だった。

「歴史はもういい、次だ、次」

ユリウスが書棚から巻物を抜き出して机に広げる。

「印の種類と、範字の読み、書き……だな」

それを覗き込んだクロードが声を上げる。

「知ってる。それって大陸の東にあるバラナシっていう国の昔の文字だよ」

「何で知ってる？」

訝しそうに聞くユリウスにクロードが種明かしする。

「言うからさ、そんなに怖い顔しないでくれる？」

怖いと言う割りに平然と机の上に腰掛けてユリウスと向かい合う。
「話は簡単、昨日、帰りに予習したいってラドビアスに頼んだら最初はこれでしょうって見せてくれたんだ。で、どんぴしゃりってわけ」

「ラドビアス！」

ユリウスのきつい声に、はいと返事をしたラドビアスにユリウスが手に持った巻物で殴りつける。

「やめろよっ」

驚いたクロードがユリウスに組み付く。

「やめろ、俺が頼んだんだっ」

「離せ、クロード、ラドビアスは従者じゃなくて私の僕だ、僕が勝手な事をするからだ。おまえも私の僕のこと口出しするんじゃない」

「嫌だ、俺が関係してるんだから口出して何が悪いんだっ」

「まだ十四のガキのくせして生意気な口を利くな、クロード」

「なんだよ、それを言うなら人の何倍も生きてるくせに大人気ないんだよ」

だんだん話がずれて子供の喧嘩のようになっていく。

始まる、勉強

「がき！ がき！」

「うるせーじじい」

ラドビアスが二人の間に入ってクロードの襟を掴むユリウスの指を外し、ユリウスの髪を掴むクロードからユリウスの髪を開放する。「出過ぎた事をして申し訳ありません。さあ、お勉強の途中だったのでは？」

「そう……だつたな」

ほどけた髪を半ば強引に結い直されながらユリウスは机に広げた巻物を指した。

そこには普通、レイモンドールや大陸の西側で使われているインクとは違う黒い物で書かれている。

装飾的な文字が縦書きしてあるがクロードにはまったく解からなかった。

「これが範字というもので古代バナシで使われていた文字だ。この一つ一つに呪が封じ込まれている。例えばこの文字は「力」と読むがこの右中指と左の薬指をこう組ませて呪を発動させる」

『爆！』言葉が終わった途端、目の前で激しい爆風が起こる。

クロードは机から吹っ飛んで反対の書棚にぶつかり背中を打ちつける。

その彼の上にバタバタと書棚から巻物が降り注いだ。

「痛いっ！」

腰をさするクロードにユリウスがにやりと笑う。

「少し威力が過ぎたか……悪かった」

全然悪かったと、思っていない口調でユリウスが言うがさっきの意向返しのもりに違いない。

「くっそう」

ユリウスとの勉強には体力も必要らしい。

「では次の字だが……」

字と言われれば字にも見えるが、クロードには模様の一つにしか見えない。

それは、読むのも書くのも難しそうでこれを使いこなすのはかなり苦労しそうだ。

「基本はこれだが私の呪法は古代レーン文字を組合わせている」

今度は鹿皮に燻し銀の飾りを施した立派な表装の分厚い本を取り出して開いた。その中の一つを指差す。

「フェイユーと読む。力を現す言葉だ」

尖ったもので引つかいたようにも見える、横書きに書かれている文字を説明しながら巻物の方を今度は指差す。

「これは『ラ』火を現わす」

言いながら印を結ぶ。

「左人差し指を立てて他は握り、その立てた左人差し指を右手で握る。智拳印という 意味は風勢だな」

その直ぐ後、『焼尽せよ！』ユリウスの言葉が終わる前にクロードが一足先に脇へ飛びのく。

恐ろしいほどの火柱がクロードが座っていた椅子を直撃して椅子は一瞬で燃え尽きた。

「解かつちやったか」

「笑い事じゃあないだろう！ 殺す気かよ、まったく」

楽しそうに笑うユリウスと真つ黒な椅子の残骸を横目にクロードは大きく息をはいた。

レーン文字『力』と範字の火を組合わせて後は風の印とくれば予想がつくが、早い所これらを覚えないと逃げるばかりではいか大怪我、いや殺される。

まったく物騒な師についてしまったとクロードは冷や汗をかいてユリウスを見る。

まだ、心臓がばくばくいつているが当のユリウスは至極楽しそうでクロードは再度大きく溜息をついた。

「この本、借りていい？」

「うーん、本当はここから出たくないがおまえがやる気になって
いるようだからいいよ。しかし、他の者に見つかるなよ」

ユリウスは軽く本に触って『解』と小さく言った。

「何？」

「ここにある物には持ち出せないように呪を施しているからそれを
解いたんだ……そうだ」

ユリウスは書棚へ向かうと次々と巻物と本を取り出して、クロ
ードの差し出された手にのせていく。

新たに二冊のごつい本がのせられるに至ってクロードは慌てて書
棚から離れる。

「もう、勘弁してよ、こんなに覚えられるわけないだろ」

「明日までに印をここまで覚えるように」

クロードの手の上から一つ巻物をさらりと広げると机に置いて、
ユリウスはクロードの目の前で鮮やかに流れるように印を組んで見
せた。

「書物を机の上に置け」

言うとおりに書物を机に置いたクロードの背後に回り、手を添え
て一通りクロードに印を組ませる。

「じゃ、一人でやってみろ」

えっと……とつぶやきながら、クロードがぎこちなく印を組む形
を所々手を取って直してやりながら何度か組ませて。

「それじゃあ呪の発動は無理だな、明日までにしっかりやっておく
ように」

ユリウスは、あっさりとクロードを開放してラドビアスを呼ぶ。

「もう、外が暗い、送ってやれ」

「はい」

ラドビアスについて階段を上りながら一人で帰れるよとクロード
は言うが。

「主の命ですから」

ラドビアスに却下されて、服を着替えて薄暗くなった空の下。
クロードは、ユリウスの小宮を後にする。

人通りの全く無いしんとした森の中。

前を風除けの付いた蠟燭台を持ったラドビアスが歩き、その直ぐ後から心持よたよたとクロードが歩いている。

「あのさあ」

「はい、何でしょう？」

分厚い本三冊と巻物まで持たされて重くてそこら辺に投げ捨ててしまいたい衝動と戦いながら、クロードは目の前のラドビアスに話しかける。

「重いですか？ お持ちします？」

言って振り向いたラドビアスが片手を差し出す。

「違うって」

手を動かせないのでクロードは首を振る。

「この本さあ、書き込みとかやつちゃだめかなあ。さっき一応説明されたけどもうさっぱり忘れちゃってるし」

「それはだめですね」

きっぱりと言われてしよげるクロードにラドビアスが優しく言う。
「お部屋に戻られたら少し私が説明させていただくというのはいかがです？」

「えーいいの？ ラドビアスさえ良ければお願いするよ！ あいつさあ、説明するの速すぎだし他の奴にもあんな教え方してんの？ 命がいくつあっても足りやしないよ」

クロードの不満顔にラドビアスが笑む。

「あの方が自ら術をお教えるのはクロード様だけです。そうですね……教師としてはいくらか問題あり、ですから」

そうなの？ だよな、うんうんとクロードは一人頷く。

あんな乱暴な教え方をした日には、そこらじゅう死体の山と瓦礫の山で、ただでさえ少ない竜印を持つ者は全員死滅しているはずだ。

なんだって俺に直々に教えようと思ったのか勘弁してもらいたいものだ。

部屋に戻ると、半刻ほどラドビアスに今日のおさらいに付き合ってもらって。

クロードは心底先生はラドビアスがやって欲しいと思った。

ラドビアスが帰るとテーブルの上に用意されていた、冷え切ったラム肉を一口切って口に入れるがやはり美味しくない。

散々つついた後、横に添えてあるマッシュポテトを丁寧にラム肉に塗りたくって遊び、そのまま皿を押しやって夜着に着替えると寝台に潜り込んだ。

誰にも干渉されない代わりに放ったらかしの生活。

俺今日風呂入ってないよな……まあ、いいかとクロードは目を閉じた。

明るい光が顔に当たり、ああ俺カーテン閉め忘れたんだなと薄目を開けた。

夢の中でユリウスに追いかけてられて呪文やら印やらでそこから爆発の炎が上がり、ほうほうの体で逃げ続けて……朝を迎えてしまったのだ。

寝た気のしないクロードは枕を頭の上に乗せてもう一眠りと思っただ。

「兄様、起きてる？」

妹姫の乱入によって叩き起こされてしまった。

「うーん、今日は勘弁して」

「朝しか一緒に居られないのに寝ちゃだめー」
クロードの懇願も一蹴^{いしゅう}される。

「ねえ、兄様朝ごはん一緒にいいでしょ？」

言葉の内容は疑問形だがはなからクロードの返事なんて気にはしてない。そしてテーブルに目をやってその惨状を見る。

「何あれ、兄様汚すぎる」

寝台の下に脱ぎ散らかしている服にもきゃーきゃー言いながら外にいる女官たちに声をかける。

「早く部屋を片付けて。テーブルの上もよ、綺麗にしたら朝食を二人分用意しなさい」

エスペラントの命に三人の女官が入って来て片付け始める。クロードは仕方なく寝台から降りて衣装部屋に向かった。

洗面と着替えを済ました頃、丁度朝食の支度も整って二人は向かい合わせにテーブルに着く。

「ねえねえ、あの意地悪ユリウスの所に何しに行ってるの？」

ベーコンを頬張りながらエスペラントがクロードの皿からラディッシュを突き刺して自分の皿に入れる。

「うーん……」

意地悪ユリウスには思いっきり賛同するが何をしているか話すわけにもいかず、パンを齧りながら言い訳を考えていると。

「意地悪って誰のこと？」

当の本人の声がして思わずむせてゲホゲホと口からパンや水を吐き出してしまった。

「汚ない、兄様」

エスペラントがうえっと顔を歪める。扉に寄りかかっていたユリウスがテーブルに近づくとフォークを振り回して牽制する。

「今、朝ご飯の途中よ、ユリウス兄様」

「だから何だよ、もうご馳走様したほうがいいよ、エスペラント。そんなに食べるとチビにデブがくっついてチビデブ姫になるよ」

「もう、ユリウス兄様なんて大嫌いよっ」

エスペラントが大声を出す。

「なんか久しぶりに意見が合うな、私もおまえなんて大嫌いだ」
冷たくユリウスが言い返してエスペラントが泣き出す。

そこへ

「いい加減にしないか、二人とも！」

凜とした声^がして長兄のダリウス^が立^っていた。

ダリウスの婚約

クロードの何で今日はこんなに俺の部屋、満員御礼なんだ？
しかも、ちつとも嬉しくないんだけどという思いが伝わるわけもなく。

ダリウスは朝早いというのにきちんと髪に櫛を入れて、お気に入り
の長めの上着にマントまで羽織っている。

朝から面倒だなとクロードは息を吐いた。

「お早うございます。ダリウス兄様」

大人しく挨拶する弟にお早うと、簡単に挨拶を返してダリウスは
エスペラントを見る。

「朝食の席にいないと思ったたらここに居たとはな。父上がお怒りにな
っていらしたぞ。朝の挨拶もしないで何をしているんだ。エス
ペラント」

「ごめんなさい、兄様、今から行って来ます」

悪戯が見つかった子供のようになそこそとエスペラントが部屋を
出て行った。明らかに次兄のユリウスに対する態度とは違う。

「まったく、なんてお子様だろうねえ。躰がなっていない」

エスペラントが出て行った方を見ながらユリウスが言う。

「おまえも同じだということに気付いていないのか」

ダリウスの怒気を含んだ声が飛ぶ。それに対してダリウスの肩
に手を置いたユリウスが失笑気味に言う。

「私が兄上や父上と同じ食卓で朝食を取ったりしたら父上は心臓が
止まってしまうんじゃない？ それとも兄上はそれを狙ってい
らっしゃる……とか」

「また、お前はそんなことを」

説教を続けようとするダリウスの話をユリウスが遮る。

「兄上、ご婚約のお話があるのでしよう。おめでとうございます」
話をころつと変えてダリウスを黙らせてしまう。

「……何でそれを知っている？」

肩に置かれた手を払いのけて、ダリウスが睨むようにユリウスを見る。

「ダリウス兄様、本当なの？ おめでとうございます」

クロードのお祝いの言葉にダリウスは渋々頷く。

「まだ、正式な話では無いが内々にそんな話があるにはある」

ダリウスは正当な跡継ぎで十九歳、そんな話があるのは不思議でも何でもない。

しかし、堅物のダリウスらしく、正式に決まったわけでも無い話を弟といえども話すのは憚^{はば}られるらしい。

「それにしてもそんな情報をどこから仕入れてくるのだ？」

「まあ独自のルートがあるとしたか申し上げられませんか。相手はサイトスのクライブ殿下の姉君、マーガレット様。ますますうちの格は上がるけど相手は従兄弟でしょ？ そんなに血を濃くして大丈夫なのかな。それに兄上も大変だ。上から降される姫なんていうのはさあ」

ユリウスが理由知り顔でダリウスを見る。

「え？ 何で、何かあるの？ お姫様なんてすごいじゃない」

クロードの無邪気な意見を当のダリウスは無視する。

「あのねえ、一国の皇女なんて矜持^{きょうじ}の塊みたいなものなんだよ。それが公爵っていったって臣下の嫁になるんだから自分の夫は自分の臣下だと錯覚してそりゃあ大変……」

「ユリウス！」

ダリウスの強い声にユリウスがペロツと舌を出した。

ダリウスにしても気が重いには重いが、自分にとって結婚は、社会的地位を強固にするための契約に他ならない。

そこには私情をはさむ余地などないと割り切っている。

貴族の、しかも州公の公子である身で自由な恋愛結婚などと夢物語を思い描いても仕方無いことだ。

「まあ、兄上には可愛い妾妃を見つけてあげるよ」

事も無げに言うユリウスにクロードは目を丸くする。

「結婚もしてないうちから妾妃の斡旋話かよっ」

「何言ってる、おまえも妾妃の子だらうに」

「やめなさい、ユリウス」

すかさず、ダリウスがたしなめる。

あーもう、鬱うつとおしい……とクロードはため息をつく。

「だいたい、お二人とも朝っぱらから何の御用です？ 私は用があるんでもう行きますからね」

話を終わらせてクロードは部屋を飛び出して行った。残された格好になったダリウスにユリウスが話しかける。

「クロードが気になっていらっしやるんですか兄上？」

「ああ」

ダリウスがクロードの出て行った方を見ながら言う。

「クロードも気になるがおまえとクロードがこそこそ何かをしているのが気になっている」

「あははは……」

ユリウスが破顔はがんする。

「兄上はいつも真っ直ぐですね。じゃあ少しだけ教えて差し上げますよ、耳を貸してください」

ユリウスの方へ頭を傾げたダリウスの耳に口を近づけて肩に手を置く。

「どこにでもいる州宰と兼任している魔道師がなぜこのモンド州だけないと思います？」

ユリウスが何を言うつもりなのか見当がつかず、頭を上げようとしたダリウスの頭をユリウスの手が押さえる。

「それは……私がいるからですよ、兄上」

驚いたダリウスが頭に置かれた手を振り払ってユリウスと対峙たいじする。

「私が魔道師なんですよ、兄上」

唇の片側を吊り上げてユリウスが笑い顔を向ける。

「どういうことだ？」

ダリウスはユリウスの言っている事がすぐに頭の中に入っていない。

「二人でこそそこそしているのはクロードも私の仲間にとしようと画策中でして」

ダリウスが尚も質問しようとするのをダリウスの口に指を押し当てて止める。

「少しだけと言ったでしょう、クロードを誘いにきたんですよ。では、クロードを見つけに退散いたします」

ユリウスが部屋から出て行き際に振り向きもせずと言っ。

「ああ言い忘れてましたが、マーガレット姫、大変な美人らしいですよ。ラッキーでしたね兄上」

手だけ後ろでに振ってユリウスは出て行く。その後姿が消えてダリウスはいまいますように彼らしくも無くテーブルの足を蹴り付けた。

何処に行くあても無くユリウスの小宮に早々と着いたクロードをラドビアスが門の所で待ち受ける。

「お早う、ラドビアス」

「お早うございます、クロード様。ユリウス様にお会いになりませんでしたか」

部屋に通されて椅子に座ったクロードにラドビアスがお茶を入れた茶器を出しながら聞く。

「会ったけど……何？」

「今日は急な用がお出来になったのでお勉強はお休みにすると仰つておられたのですが」

「えーっ？ 聞いてないけど」

まあ、そんな話をするには聞かせたくない面子が大勢いたが、そこでクロードのお腹がグーッと鳴る。

「おや、お食事がまだでしたか」

「うん、まだみたいなもの、かな」

「何かお持ちしましょう。朝の残り物ですがよろしいですか」

「何でもいい」

クロードの言葉につこりとしてラドビアスは部屋を出て行く
と直ぐに戻ってきた。　まるい甘いパンといくつかの果物が盆にの
っている。

「これくらいしかありませんが」

そう言っ出て出されたパンをわしわしとクロードは口に入れる。

「うまい、ありがとうラドビアス」

その前に座って器用に赤い楕円の実をナイフで剥いて四つに割
つて皿に落とし、次に黄みがかつた実の方へと手をのばす。

食事時に世話を焼かれるのが嫌いなはずなのに、ラドビアスに
してもらうのは何だかとても居心地がいい　くそっ、こんないい従
者をユリウスは独り占めに行っているとはずるい。

「お腹いっぱい、ご馳走様」

と、言ったところで濡らした綿布を渡され、手と口を拭いている
ところにこの城の主が帰ってきた。

東の庭

「クロード、捜していたのに。何、人ん家に勝手に上がり込んでご飯たべているんだよ、おまえは」

「今日休みなんて聞いてなかったんだもん」

「うるさい！ 無断で食べたものを返せ」

「なんだよ、ケチ！」

テーブル越しに組み合った手をラドビアスが両手で押さえる。

「理由を見つけて喧嘩をするのを止めてください。ユリウス様、お急ぎなのでしょう？」

「そうだった……クロード、宿題はちゃんとやっただろうね」

「いや……その……」

そういえばあの後さつさと寝台に潜り込んで寝たんだっけ。

「もちろん、やったさ」

後ろめたさゆえの強気で言いながらユリウスを見る。

「へえ……」

「まあ良いよ、貸した本と巻物をすっかり勉強しておけよ、クロード」

「ラドビアス行くぞ」

何か言われるかと思ったがユリウスは竜門を開いてさつさと、潜っていく。

「それでは失礼します、クロード様」

頭を軽く下げてラドビアスも主を追って竜門を潜り、闇はふいと消えた。なんだよ、さくさく急いでお勉強するんじゃないのかよ。ほっとしたのか、がっかりしたのか自分でも解からないままクロードは暫く椅子に座っていたが。そうだ、と立ち上がる。

エスペラントを馬に乗せてやるか。またいつ休みになるか解からないのだからと自習なんて棚上げてクロードはユリウスの小宮を後にした。

「あんな大昔の詩やら歌やら今更何の役に立つっていうわけ？」

丁度、古典の勉強が終わったところで少々げんなりしながらもエスペラントは威勢よく言った。

その大昔の言葉が俺には大問題なんだよと思いながら、自分の部屋に置きっぱなしになっている本のことを考えてクロードは苦笑した。

「今日は葦毛のロッシュに乗せてやるよ」

「早く、兄様」

エスペラントに手を引かれながらクロードはダリウスの結婚話を思い出していた。

俺は結婚なんてこの先縁がないのだろう。

したいのかと聞かれれば今は全く好きな娘もないし興味もない。しかし、一生できないと決まってるとなるとしてみたくなくなる……かなと思う。

確か魔道師は妻帯出来ないと聞いた事がある。

この国の国教であるはずの魔道教は在家で魔道師になることを禁止している。

つまり魔道師はすべて出家して各地にある廟に属しているか、首都サイトスにある魔道師庁に属しているのだ。

一般の人が魔術を日常使うことは無いが、まれに廟から脱走して街中で暮らす辻魔道師がいるにはいるらしい。

そんな事を考えながら厩舎に向かう。横で姦しくエスペラントが何か言っているがクロードは上の空だ。

「ドレイク、いる？」

厩舎やうしやの入り口から声をかけると太りじしの中年の男が手ぬぐいで首の後ろを拭いながらやって来て齒の欠けた口を開けて笑いかけた。

「これはクロード様、今日はどの馬になさるんで？」

いつもふらりと一人でやって来て馬の世話や馬丁の子供と遊んでいた子供が、自分の雇い主の庶子とはいえ、本当なら口を利くこともない身分だと知ったのはつい一年ほど前だ。

相変わらず一人でやって来て自分のような下賤の者にも町の子供じみた気安い口を利くクロードにすっかり慣らされて、今では膝を折ることも無く普通に話をしている。

「うん、今日は二人で乗るから体の大きいロッシュにしようかと思ってる」

「あれは足が遅いですよ」

「今日は速くなくていいよ」

「左様で」

そう言ったところで厩舎の外にいる豪華なドレス姿の少女が目に入り、ドレイクは狼狽するが。

「ああ、こいつは気を使わなくていいから」

クロードが少女の方へ顔を向ける。

「エスプラント、父様や、兄様に告げ口なんかするなよ」

「そんなの、するわけ無いでしょう」

勝気な返事が返ってきて、ね？ とクロードは馬丁の男に片目をつむってみせた。

大きい馬具をロッシュに着けると、クロードはドレイクに手伝ってもらってエスプラントを馬に乗せて、自分は身軽にエスプラントの後ろに飛び乗る。

「じゃ、東の庭に行くか」

楽々と手綱を取って並足よりやや速い速度で走らせ始める。

東の庭は庭とは言っても手入れのされていないややうらぶれた広い州城の敷地の東にある荒地なのだがそれだけに馬で走り回っても誰にも文句を言われない。

整備されている馬場みたいに人がうじゃうじゃ寄って来ない。クロードのお気に入り場所だった。

白い小さな花が咲き乱れて雑草といえど群生している様はそれなりに美しい。

「きれいな、兄様」

「うん」

そこら中じぐざぐに馬を乗り回してエスプラントをきやあきやあ言わせて。

ゆつくりと並足にさせて歩かせているとクロードの前に乗っているエスプラントが振り向いた。

「兄様、また乗せてね。私が大きくなってもよ」

「ああ」

エスプラントにそう言ったがクロードはそれが無理なことも解かっていた。

エスプラントは十三歳になる。貴族社会で女の子が十三歳といえば、社交界にデビューする歳だ。

こんな風に城を抜け出して遊びまわるわけにもいかないだろう。

クロードだつてそうなのだ。あともう二、三年の後には現王が死んでクライブが王となり、胸の竜印が完成する。

そうしたら嫌もおうもなく、サイトスに行つてクライブが死ぬ時まで彼に仕えなくてはならない。

そしてその後は……際限の無い月日を魔道師として生きていかなくはならない。クロードはふつと気持ちが冷めて馬を厩舎に向けた。

「今日はこれで終わり」

「え？　もう、終わりなの兄様」

エスプラントが残念そうな声をあげたが、クロードは早く自分の部屋に帰りたくなっていた。

自分の部屋に帰ると本棚の奥へ隠していた巻物と本を取り出して、机に広げて自分の思いを誰に言うでもなく口にする。

「俺は一歳やそこらで魔道師として生きる運命を与えられた。竜印の完成とともに俺は歳を取ることも無く人としての範疇はんちゆうを超えた生き物になってしまう。今までの王の半身たちは自分の決められた将来について葛藤は無かったのだろうか。俺は……俺は恐ろしい」

しかし、もし俺がクライブだったとしても寿命が尽きるまで歳を取らない王として生きる道があるだけだ。

王という名の半身を魔道に人質に差し出す為に双子を世に送り出す存在……。

暗くなるばかりの考えを振り払ってクロードは本に集中しようとして
昨晚のラドビアスの説明を思い出しながら古代レイン文字を悪戦苦闘しながら音読していく。

「俺ってクライブに仕えるんだよな。でもさ、そいつが嫌な奴だったら最悪だよな」

印を結ぶ練習をしながらそんな事をぶつぶつ言っている時点で勉強に身が入ってないのは一目瞭然だ。

「どんな奴が見に行つてやるか」

声に出すと、クロードは立ち上がった。今ならユリウスの城には誰もいない。

今のうちにローブとペンダントを取りに行こう。サイトスなら

竜道も整備されているから俺でも通れるはずだ。

そう算段をつけるとラドビアスやユリウスが竜門を開けるときに使っている呪文と印を思い出して、さっきとは雲泥の差の熱心さで練習してみる。

その一刻の後にユリウスの城の地下からごく若い魔道師姿の者がこっそり竜門を開けた。

サイトスの半身

「少し、休もうか、クライブ」

「あ、はい父上」

クライブは手に持っていた羽ペンをインク壺に入れて父親を仰ぎ見た。

最近、少しお疲れのご様子だけれど……。

二十代半ばの赤っぽい茶髪とスカイブルーの瞳の我父親をクライブは心配そうに見やる。

物心ついたときには自分の目に映る父親はいつもこの姿だ。

今年四十一歳になる筈だが王は即位した時から死ぬまで歳を取らない。

つまり、二十七歳で即位した現王コーラルは死ぬまで二十七歳の姿なのだ。

自分が大きくなってもいつまでも若い父が不思議といえばそうなのだろうが、王が歳を取らないことを小さい時から教えられているクライブにとってはそれも自然なことだった。

そのことがより、王を神格化させている大きな要因でもあった。

王は王であるがゆえに歳を取らない。なぜなら王は人ではないのだから。

今では母親とすっかり歳が離れているように見えてそれが少し切ない気がするが……。

前々から政務についての勉強はしていたが。

ここ最近、急に王の執務室で王の隣に座らされて。しかも横にはびつたりと宰相のガリオールがついて政務上の書類への裁可を代行するようになった。

とは、いつでも何が何だかクライブに判断出来る筈も無くて、いちいち横のガリオールに意見を聞いたり父親に説明してもらったりしているのだが。

ガリオールも午後からは魔道師庁に戻る。

そのため、父親が忙しい時には父親の影であるクロードに見てもらっているのだが、自分がいることで政務が二倍も三倍も時間がかかっていることは否めない。

急にこんな生活になって肩に力が入っている所為か少しの時間でもとても疲れていた。

それを父は解かっけていてくれる。その事がクライブは、嬉しかった。

「少し部屋に下がっても宜しいですか」

「ああ」

「では、ライル、ドレーンお付きして……」

「少し、一人になりたいだけだから」

クライブは慌てて供を断って席を立った。

「では主城からお出になりませんように、殿下」

「解かっている」

ガリオールに返事を返すと急いで執務室を出て行く。

息が詰まる……今は一人になりたい。

足早に廊下を歩いて行きながら途中、魔道師庁に続く西側の廊下を何気なく見る。

薄暗いしんと静まり返った長い廊下が続いている。大昔、レイモンドール国の創世期の頃、あの西側でたくさんの血が流される出来事があったらしい。

その後はどう掃除しようとも血の跡が消える事が無かったという大広間があったと聞く。

しかし主城自体はその後建て直されたのでその大広間はすでに無いのだが、その西側一帯が今の魔道師庁として使われている。

サイトスの城の中にはたくさんの魔道師が官吏に混じって働いているが、魔道師以外の者がこの西側一帯に近づくことは無い。別段禁止されているわけでも無い。

父はガリオールについてよく行っているようだがクライブは魔道

師庁へ立ち入ったことが無かった。

今は違う出入り口が表側となっている為、この廊下は人通りも無くまるで廃墟のような風情を漂わせている。

その薄暗い廊下の壁に突然闇が口を開けた。

竜門？ ガリオールや他の魔道師たちも竜門は魔道師庁内で使う為、クライブは名前は知っていても竜門が開くのを見たのは今が初めてだった。

固唾かたすをのんでクライブが見守る中、出てきたのは被ったフードでよく見えないがまだ歳若い魔道師のようだった。

「あー気分が悪い。魔道師庁内からちよつと外れただけなのにやっぱりだめだ。吐きそう」

目の前の魔道師は今までクライブが見たり、会ったりした魔道師からも聞いた事の無い口調でげえーっ！と、口だけで吐くまねをして……こちらを見た。

声を聞いたときから既視感を覚えていたクライブは顔を上げた魔道師の顔を見て声を失った。

「どうやって搜そうかと思っていたけど俺って運がいいや」

もう一人の自分が声を上げて笑った。目をまるくしているクライブの手を取ると内緒話をするように声をひそめた。

「ね、君の部屋に行こう。見つかることやばい」

何がやばいのか解からないままクライブはその魔道師を自分の部屋に連れ帰った。

「俺はクロード、君の弟なんだそうだ。よろしく」

差し出された手を握り返して、そうかと納得する。

「私はクライブ・アスター・ヴァン・レイモンドールだ」

手を強く握るこの少年が自分の半身なのか。クライブは父親に付き添うローブ姿の男を思い、クロードを見た。

それにしてもこの少年も名をクロードと言いはしなかったか？

きつちりと前髪を揃えて丁寧ブラシをかけたシルバーブロンドを肩上で切り揃えた髪型。

派手な飾りは抑えているが上質で上品な装いのクライブに対して、目の前のクロードときたら寝癖なのかあっちこっちに跳ねているいささか伸びすぎの前髪。

いい加減に後ろで髪をくくっている魔道師姿だ。

鏡を見ているようでもあるが顔立ちや髪の色以外まるで別人だと思っただのも事実だ。

「会いに来てくれてありがとう、クロード」

「俺も会いに来て良かったよ」

胸を撫で下ろすしぐさをしてクライブに笑いかける。

「おまえ、いい奴そうだから、ほっとしたよ。変な奴に仕えさせられるんじゃあ死んでも死にきれ……じゃなくて死ぬことも出来なくなる身の上なんだから」

クライブは生まれてから初めて聞く汚い言葉づかいに絶句したが、この自分の半身にすでに好意を覚えているのを感じた。

王になるのは当然だと思っていたし、疑いはない。でも、自分がその重責を果たせるのか……。

この所、王の職務の一端に触れるようになって心に錘がのっかっていくような気持ちになっていた。

しかし、父にクロードがいるように私にも彼がいる。

ほっこりと胸が温かくなって今までに溜めていた^{おり}澱を吐き出すように長い息を吐いた。

「また、来るよ、今度は直接ここに竜門を開けるし」

さつさと立ち上がるクロードにまだ挨拶しかしていないと引き止めるがクロードは掴んだ手を空いている手で包むように持つてから外した。

「俺さあ、本当はまだこんな事やっちゃあだめなんだよ。見つかったらユリウスに何されるか」

「ユリウス？」

「いや、こつちの話。気にしなくていいから」

啞然とするクライブを残し、バタバタとクロードは竜門を廊下に

開けっ放しにしていたのを思い出して走り去っていった。

その直ぐ後に入ってきたガリオールが長椅子にぼんやりと座り込んでいるクライブに声をかける。

「クライブ様、どうかなさいましたか」

「いや、何も」

はっと我に返って見上げるクライブにガリオールは何を感じたのか辺りを見回した。

「何かございましたか」

やはり一人にするのでは無かったかとちらと思いつながら目を細めた。

「いや、なにも無い、執務室へ帰る」

クライブの一步後ろを歩きながらガリオールは魔道師庁へ続く廊下に目を向けた。

クライブの部屋でも感じた魔術の痕跡……やはり魔道師庁の外で術を使った者がいるのだ。

普通の魔道師なら見すごすか、初めから解からない程の魔術の痕跡。

光の残像のようなものをガリオールは見ることができる。

規律を作ることにもそれにのっとって行動するのが好きなガリオールは、この魔道師長になって以来四百年あまり。

数々の規律や規則を作ってきたが、その中にサイトスの王城内での魔術の使用は魔道師庁の中に限っている条項がある。

それは魔道師以外の者に竜門から出て来る魔道師を見られてむやみに怖がらせたり、異質だと思われたりしたくないからだ。

レイモンドールの国教であるからにはあまり変なイメージを持たれるのは困る。国教に定められている割には在家の魔道師はいない。

魔道師以外が呪文を日常的に唱えるなんてこともない、一般の人々と隔絶されている。

かなりそれだけで異質な集団であることは充分承知しているのだ。

彼としては、なるべく魔術の実態は伏せておきたいのだ。
もし、禁を破った者がいるなら厳しく罰せねばならない。
ガリオールは眉根に皺を寄せて執務室に向かった。

人外の者

「もう、死にそう」

込み上げる吐き気と戦いながらクロードは竜門を閉じる。よろよろとユリウスの小宮から自分の部屋まで戻るが、ハイキングコースなんて言ってた自分を呪いたくなる。長い道のりを這うように戻って、やっと自分の部屋の寝台に倒れこんだ。

「俺って天才かも……！」

体はきついが達成感は十二分にあつて、青い顔をにまりとさせた。この場合、もし呪文を間違えて竜門から出られなくなったら。

あるいは、まったく違う場所に出てしまったらとか、ちらりとも考えない。

クライブ、あいつ、思ったよりいい奴そうだった。あいつのびっくりした顔ときたら……とにやにや笑っていると。

「楽しそうだな、クロード」

ユリウスの声。

「げっ！」

さっきまでの事がばれたかと冷や汗が流れる。

「べっ、別に楽しくなんてないけど……」

「隠れて何してた？」

「いつ、いや何にも」

だめだと思うが口がうまくまわらない。

「そんな理由無いだろう、そんな格好でペンダントつけて魔道師ごっこかい？」

そうだった。あまりの気分の悪さに着替えるのを忘れてユリウスの小宮に置いてきてしまったのだ。我ながら馬鹿だと思うが今更遅い。

あつという間も無くユリウスに胸倉を掴まれてずいっと持ち上げられた。

「魔道師姿を他の者に見られたらどうするつもりだったのか、意見を伺いたいね」

ユリウスが冷たく言うが、意見を聞きたいわけじゃないのはクロードにも解かるので無言でユリウスを見上げる。

「今度、勝手なことをすると術の贅^{にえ}にしてやる。解かったか」

小さい声でそれだけ言うと、ユリウスは手を離してクロードを寝台に落とす。

「明日、出した宿題をみせてもらう」

言うだけ言ってユリウスがクロードの忘れていった服を投げつけるように放つ。部屋を出て行った後、クロードは暫く身動きができなかった。大きく息を吐いて息をするのも忘れていた自分にびっくりした。いつもの軽口にごまかされていると大きく怪我をする。

あいつは五百年以上生きている人外の生き物なのだ。

竜門を使ってすぐまたサイトスへ行ってやるうと思っていた浮き立った気持ちがぺしゃんと萎む。つまんねえと声に出したクロードは、そのまま寝台へ潜り込んだ。

ユリウスの前にラドビアスがお茶を入れた茶器を置く。

「私達がいらない間にクロードが何をしたと思う？」

ユリウスの問いにラドビアスは首を傾げる。

「さて？ 何かされたんですか」

「竜門を勝手に開いてどこかへ行ったらしい」

え？ と驚いた顔をラドビアスはユリウスに向ける。

「それは、かなり筋がよろしいのでは」

今度は片眉を上げてユリウスがラドビアスを見る。

「それはそうだが気にするのはそこじゃあ無いだろう、ラドビアス。それに竜印を持っているか、ペンダントをつけているなら竜門を開けるのはそう難度の高い術じゃない」

「どちらへ行かれたか、ですか。調べますか」

「おまえねえ！」

ユリウスの声に明らかに怒気が混じっているのにラドビアスは知らぬ顔をする。

「では、クロード様に廟から誰か呼んで付けさせますか」

「どこへ行ったかなんて、竜門の番人のルーファスかサイロスにでも聞けば解かる。それより勝手をしないようにクロードをこの城に連れ込んじゃうか……」

「それはお止めになったほうがいいですよ」

「あの親父には私から言うよ」

「そうでは無くて」

ラドビアスの手がユリウスの手を押さえる。

「クロード様のお気持ちの事ですよ、問題は」

「あれは、私の僕になるべく生まれた子だ。どうしようと私の勝手だ」

ユリウスは乱暴にラドビアスの手を払っていまいましそうに睨んだ。

「でもクロード様にも心の準備がいるでしょう？ 無理やりこちらに連れてこられて反感を買ってもよろしいんですか、嫌われても？」

「うるさいっ、おまえゴートの廟へ帰れ。代わりにルークを寄こしてくれ。あいつはおまえと違って主に逆らったり意地悪なことを言ったりしないからな」

指を突きつけられたラドビアスがぴしゃりと言い返す。

「半年後の結界の張り直しに向けてサイトのガリオールと私、王に付いているクロード以外竜印を持っている者はすべて準備にかかりきりです。残念でしょうが私の代わりはいませんよ」

十年前に州公の子供になると言って廟から出てきた主は、前々から子供っぽい所はありはしたが。この所、それが前面に出てきて内心、ラドビアスも驚いていた。

最近のクロードとのやりとりなどは本気でやり合っているとしたか

思えない。

あんな主を見たのは五百年以上も昔、ベオークの朝陽宮に居た頃のまだ。ほんとにお小さい頃くらいか……。

「じゃあ」

ラドビアスは主の声に物思いから引き戻されて顔を向ける。

「結界を張る時クロードも連れて行く」

「それはどうかと……魔道師の中にも術に巻き込まれて精神を病むものがあります。竜印が成ってからでよろしいのでは。百年後の次回になさっては」

「うるさい、反対ばかりするな。この国の結界がどうやって張られているのか知るのは重要だし、いい勉強になる。あいつは次王の半身なんだ」

話は終わりとユリウスは茶器を指差す。

「お茶が冷めたから入れ直せ」

「はい」

ラドビアスはそつと息を吐くがこれ以上は何も言えないことも承知していた。

「頭が痛い」

ずきずきする頭を押さえながらクロードは目を開けた。ユリウスが帰ってその後、そのまま寝台で寝てしまったのだ。クロードは西に傾いた太陽の光が斜めに長く差し込んできているのに気付いて、思ったより自分が長時間眠りこけていたことを知った。

そうだ、服、着替えなくちゃと寝台の中でもごごとロープを脱いで衣装部屋に行こうと寝台から降りる。大きく開かれたバルコニーに面する掃き出しになっている窓から下を見ると、たくさんの灯が庭に灯され何やら賑やかな音楽まで聞こえてくる。

今日何かあったっけ？　そういえば何か言われていたような

……。

暫くのうちにクロードは思い出してげつと唸った。 エスペラントのお披露目のパーティが近々あるって……今日だった？

この国では誕生日を特別に祝う習慣が無い。 大陸側の国の中にはそんな事をする国もあるらしいのだが。

しかし、何も無いわけでもなくて節目、節目にはお祝いもする。

しかし、その年の都合の良い時で日にちはあまり関係ない。 ダリウスは春の生まれだが成人のお祝いは夏ごろやっていた。 エスペラントは冬の生まれだが、この国で冬にパーティをやっても招待されたほうが大迷惑だろう。

この国の冬は深く厳しいのだ。 一番は成人のお祝いで男子は十八歳、女子は十五歳で大人として扱われる。

貧しい者も豊かな者もそれなりにお祝いするが貴族階級の女の子は十三歳がその歳になる。 と、いつてもすぐに嫁入りするわけではなく、社交界へのデビューの意味合いが強い。 だがもちろん、その歳から結婚話がまいこんでくることもある。

貴族の子女の結婚は政略のためなのだ。 多少、歳が離れていようと、相手が十代を超えたばかりだろうと関係ないといえばそう
だ。

とにかく、貴族の女の子にとって十三歳のパーティは特別なのだ。 早いところ服を着替えて下に行かないとダリウス兄様に大目玉をくらう。

クロードは急いで衣装部屋に駆け込む。 豪快に中をあさって、目についた黒の裾の長い上着と対の細めのズボンを取る。 上着の下にはリボンがついたドレスシャツを着込んで。 慌てながら同色の靴をひっかけるように履いた。

ついで、鏡を見る間も惜しんで引き出しから黒のリボンを見つけ出すと、髪に何とか結び付けて階下に下りて行った。

階段の途中で大広間にかなりの人数がすでに集まっているのが見える。 しまったと思いながらクロードは兄、ダリウスを捜す。

パーティの夜

玄関近くで父親とダリウスが、先触れの後に入って来る近隣の主だった貴族、豪商から来賓の挨拶を受けているのをクロードは見つけた。そつと後ろから近づくと足音に気付いてダリウスが振り返る。「遅いぞ、クロード。昼に使いをやった時には部屋に居なかったらしいし……」

「すみません、兄様。ところでエスペラントは？」
「あそこだ」

兄の指差す方へ眼を向けると白いレースを胸元にこれでもかとあしらったドレス姿。その上、山のように高く髪を結い上げて化粧をがんがんに施された妹、妹だよな？ が中央付近で来賓客と挨拶を交わしていた。

「あつちに行ってもいいですか」
ダリウスの背後に小さく声をかけると、大人しくしとくのだぞという兄の声が返ってきた。

クロードは来賓客の途切れたところを見計らってエスペラントに声をかける。

「十三歳おめでとう、エスペラント」
「クロード兄様」

振り向いたエスペラントがえーっという顔をする。

「何なのその思いつきいい加減な頭……」

そういえば起き抜けで櫛もいれてなかったか。

「どう、今日の私？」

エスペラントが期待しながらクロードを見るのでクロードは戸惑う。

「えっと、そのドレス、すごいレースとフリルだよな」
「それだけ？」

「ええっ？ 今日の顔さ、すごい塗ってるよね、びっくりした」

エスペラントの物凄いい落胆した表情に間違いを犯したことをクロードは気づいたが、どこら辺がまずかったかは解からない。

「兄様、だいつ嫌い」

思い切り足を踏まれてクロードは壁際に逃れた。

「これが嫁に行ける歳のお祝いなんて絶対嘘だ」

毒づいて、ついでに溜息もつく。もう少ししたら部屋に戻ろう。ちゃんとパーティに顔を出していると父と兄に見せたからにはもう自分は用済みだ。クロードは早くも帰る算段を始めた。

エスペラントには悪いが主役のエスペラントより目立っているのは長兄のダリウスで、まるで彼の二度目の成人のお祝いのようだ。

貴族の若い娘達に囲まれて長身で見栄えの良いダリウスが爽やかに笑っている。と、誰か足りないと思っていたらユリウスがいない。きよろきよろと見回すと丁度クロードの反対側の壁際に置いてある椅子に腰掛けているユリウスを見つけた。

深い紫の服を着て今日は髪をゆるく三つ編みにして後ろに垂らしている。そのまわりに結構女の子たちが集まっている。それなのに彼女らにまるで声をかけるで無く、そ知らぬ顔でひたすら酒を飲んでいるせいで誰も近寄れないようだ。そうでなくともユリウスの風貌は気安く声をかけるには気がひけるほどの美しさなのだ。

そこへ、貴族の子弟らしい流麗な様子の男が近寄って何事かユリウスに話しかけている。あいつに知り合いなんていたんだと興味がわいたが、変にかかわるのはまっぴらと知らんふりを決め込むクロードの前をダリウスが足早に通り過ぎた。

「ユリウス、久しぶりですね」

親しげに呼び捨てされた自分の名前、その声に顔を上げる。

「前に会ったのは君の兄上の成人のお披露目の時でしたよね」

につこり笑って握手を求めて手を差し出すのを見て、ユリウスは小さく舌打ちをして立ち上がり手を握った。

「ボルチモア州のドミニク候のご子息、トラシュ様ですよ」

首を軽く傾げてユリウスが言う。

「覚えていて下さって嬉しいですよ」

「もちろん、忘れるわけありませんよ」

言いながらユリウスは、トラシュが握ったままの手をやりわります。

「今日はエスペラント姫の美しい姿を見られて良かったですよ」

「では、お気に召しましたか。嫁入りの話なら父上か兄上のほうが話が早いんだけど、まあ私も口添えますよ」

そう、返して脇のテーブルに置いていた背の高い杯を持って酒を飲もうとしたが背後から手首を掴まれた。

「ユリウス、飲みすぎだぞ、もう止めなさい」

「……兄上」

暫くユリウスを挟んでダリウスとボルチモア州候の子息トラシュが睨み合う。

「丁度良かった。今エスペラントのいい縁談の話があって……ねえトラシュ様」

その二人の間の緊張感など知らぬ素振りでユリウスが朗らかに言う。反対側の壁にいるクロードには何の話をしているのか解からないが、あれで相手が女の子なら普通なのにと眺めていた。どう見ても三角関係だけど。あんなところのこのこ行かなくて俺はえらい。

食べ物もそこそこ食べたし、俺は酒なんて飲まないし。そろそろ引き上げ時だな。クロードは、階段を半分ほど上がりかけて踊り場から上階へ上がって行く女性が目に入った。

「あの……すみませんけど」

クロードの声にびくつと肩を震わせて女性が振り返った。

「……何かしら」

振り向いたのは自分とあまり歳が違わないと思われる少女だった。そう思うがクロードには女性の歳がよく解からない。化粧をさ

れてしまうともうさつぱりだ。

「お客様の控え室はこっちじゃないんですけど」

「あ、ああそうなの？ 案内して下さるかしら」

なんか下官に間違われているみたいだが、訂正するのも面倒で庭へ向けて手を向ける。

「こちらです、どうぞ」

少女を先導しながら横目で見ると、自分もブロンドだがクロードは銀髪に近いブロンドだ。後ろから付いてくる明るく黄みの強い太陽を思わせる色とは大違いだ。この子が太陽なら俺は月だな……ふと思う。髪に似合う大きい明るいブルーの瞳の可愛い顔立ちだ。ここの辺のたぶん貴族の娘だろう。

「あちらですよ」

庭の左手にある二階建ての小宮を手で指し示して立ち去ろうとした、クロードに少女から声がかかる。

「ありがとう、クロード。あなた、ハーコート公の三男のクロードでしょ？」

少女はにっこり笑って続ける。

「私は隣のボルチモア州の州姫でアリスローザといっています。トラッシュ兄様について来たのだけど兄様ったらあなたの二番目のお兄様にご執心で私なんて放つたらかしなの」

ああ、あの三角関係の……とクロードはトラッシュの顔を思い浮かべた。

「しかし、なんでユリウス兄様？」

「そうよね、州候の次期当主が男性好きじゃ困った事だわ。でもあなたのお兄様、凄い美形ですもの。ここの辺では有名なのよ、写し絵なんて出回って」

へえ、あいつの本性知ったら皆手を挙げて逃げ出すだろうに。そうクロードは考えていたが思い切りくだけた口調のアリスローザのことは別に変だとは思わない。

「ねえ、もう少し話さない、クロード？」

「いいけど」

アリスローザがクロードの手を取って庭の奥の方へぐんぐん引って張って行く。いくらなんでもこれはおかしいとクロードも思うが、「私前からクロードの事気になつていたのよ、知ってる？」

いや、名前も顔もさつき知ったばかりなので知らないと答えると、ぱしりと頭を叩かれてクロードは目をまるくした。

「何度か私、ここに来てあなたに挨拶したことがあるのに全然覚えてないの？」

そう、言われても思い出せないが一応、ごめんと謝っておく。

「いいわ、許してあげるから私と一勝負しないこと？」

え？ 一勝負って……。

アリスローザは辺りを見回して庭の隅にあつた手頃な棒きれを二本拾うとその内の一本をクロードに投げる。

「私、結構鍛えてるのよ」

そう言つて棒を構えるアリスローザにクロードは面食らった。

やはり自分に色気のある話はまだ早いだろうが、何でパーティーに来た隣の州姫と剣術の真似事をするはめになるんだ？

アリスローザからの誘い

「やめようよ、こんな……」

クロードの声を打ち消す、アリスローザの気合とともに打ち込まれた棒を自分の棒でやっとな止める。

「逃げてもむだよ。戦いなさい、クロード」

今度は横から払うように棒を打ち込んできたのをクロードは、上から叩いて何とか逃れる。

「俺さあ、剣術あんまり得意じゃないし、止めない？」

どうにか逃げようとするクロードは、背後の下弦かげんからすくうように飛んでくる棒を跳んでかわしてわざと棒から手を離れた。

「いてっ」

そこへ容赦なく、ばこつと棒が打ち込まれてクロードは声を上げた。

「君って本当に強いね」

手首をさすりながらクロードが言う。

「毎日、鍛えてるのよ、ごめんなさいね。やりすぎたわ」

アリスローザがクロードの手首を持って、腫れてないか確かめる。
「いいいや、いいって、何とも無いから」

どぎまぎしてクロードは手を引いた。

「私、お転婆がすぎるっていつも言われているのよ。でも何が好きて、ダンスより、歌より剣術が好きなんですもの。まあ私もクロードと同じ庶子なのよ。で、あまり厳しく他のお姉さまたちみたいに言われないから。父様も兄様も私を可愛がってくれているから自分が庶子だなんて普通は忘れているんだけど」

そういえば、ドミニク候は名君と名高いが英雄色を好むの例え通り、たくさんの妾妃がいるらしい。確か二十人を超える子供がいると聞いたのを思い出した。

その中で庶子といえど父親の目に留まり、可愛がられているのな

ら確かに庶子なんて関係なく幸せなのだろう。

「で、私に興味があるのは庶子同士ってことで？」

「うーん、なんか前に見たときに周りから浮いていてね、ほっとけない気がしたのよ。それにクロードって今の生活に疑問を感じているみたいに見えて……私の仲間にしたいって思ったの」

「仲間……？」

「うん、私ね、この国の現状を憂^{うれ}いているの。そういうの思った事無い？」

急に話が政治色を帯びてまたまたクロードは面食らう。

「この国の……現状？」

「魔道師がこの国を牛耳^{めがつか}っている事がおかしいってことよ」

アリスローザの声がわずかに高くなる。

「王や州候の側に控えている宰相、州宰がなんで皆魔道師なわけ？
国事、州事すべて王、州候の意見より宰相、州宰の意見が通って
今じゃあ言いなりよ。この国は魔道師庁の意向で動いているのと同じよ。」

鼻息荒く話すアリスローザにクロードは言葉も無い。

アリスローザはこの国の成り立ちというか根幹を否定している。

こんなだいたいそれた事を初めて口をきく俺なんかに言っているの？
と心配になる。それに俺はどちらかというとアリスローザが敵視している側の人間になるべく準備しているのだ。どう、返事をしようかと考えている横から聞き知った声がした。

「おや、クロード、おまえもなかなか隅におけないな」

声の方へ顔を向けるとユリウスとトラシュが立っている。

「そんなんじゃないよ、兄様こそどこへ？」

「彼が居城へ帰るといので送って差し上げるところですよ」

トラシュが代わりに答える。それを聞いて女の子じゃあるまいしと、自分がこの間ラドビアスに送って貰った事は当然棚に上げてクロードはへつと小さく声を出した。

「アリスローザ、城へ戻りなさい」

トラシュに不服そうな顔を見せるアリスローザの背中にクロードは手をやる。

「送っていきます。おやすみなさい」

送って行きながら、アリスローザを盗み見ながらさっきの話を思い出していた。

自分だけの考えじゃあないよな、やっぱり。そんな考えを持った、アリスローザに影響力を与えられる誰か……。建国から五百年、魔道に守られたこの国の内側から少しずつ崩れてきているのかもしれない。

長い安定した王朝が滅びる一因はお家騒動だ。しかし、この国にはその争いが起きる懸念^{けねん}は無い。なぜなら、王は生まれた双子の内のどちらかに限定され、魔道側が選んだ子の片割れが王になる事に決まっているからだ。そこへ、他の王子や王女が入り込む余地は無く、王となる子供は魔道によって王になるまで守られている。

そして、他の一因は……魔道師の持つ利権、権力を取り返そうとしている集団が生まれている。その集団がどこまで結集しているのか、各州にどれだけ生まれているのかは解からないが、ボルチモア州は州姫が加担しているかもしれないのだ。

その上が知っていると考えたほうが自然だろうし、扇動^{せんどう}している可能性すらある。何かきな臭い匂いが漂って来る予感にクロードは溜息をついた。

アリスローザを送って広間を横切って階段を上がっているとダリウスに声をかけられた。

「ユリウスを見なかったか、クロード？」

「私はユリウス兄様の従者じゃないんですよ。いつも居場所を知ってるわけないでしょう」

そう答えながら知っていたりする。

「もう居城へ帰ってましたけど」

「そうか、なら良い」

クロードの返事に頷いて下へ降りる兄にふと悪戯心がわく。

「トラシユが送って行っただけだ」

一言言い添える。

顔色を変えたダリウスが外へ出て行くのをクロードは抑えきれず大笑いして見送る。

それにしても一応、兄弟って事になっているのにこれではトラシユより性質が悪いではないか。ダリウス兄様も女の子にもてもてなのに勿体無いよな。まあこの後、どうなるか知ったことじゃないと鼻を鳴らしてクロードは自分の部屋に帰った。

「今度、私の城にご招待させて欲しいのだけれど」

エスコートするようにトラシユがユリウスの背中に手を回す。

「ダリウス兄上では無く、私ですか」

「ええ、うちの城でサロンを開いているんですが身分に関わらずいるんな方を呼んで語らっているんですよ。貴方にもぜひ来て頂きたいのです」

「一人であまり城を離れた事が無いので……弟を連れて行っても構いませんか」

ユリウスは暫く地面に視線を落として心細そうに言う。

「もちろん、いいに決まっています」

「では、ご招待楽しみにしております」

「何か企んでいる」

ユリウスの片側だけ唇を吊り上げたその顔はクロードが側に居たらそう、言っただけのかなり性質の悪い笑顔だった。

「ユリウス！」

大きな足音とそれに負けない程の声に二人が揃って振り返るとダリウスが険しい顔でやって来ていた。

「兄上、どうかしましたか」

ダリウスはユリウスの問いには答えず、ユリウスの隣のトラシユ

をちらと見て視線をユリウスに戻す。

「父上に挨拶も無く居城に戻るなんて」

説教しつつユリウスの手首を掴んで自分側に引き寄せる。

「少し飲みすぎて気分が悪くなってしまったものですから……兄上から言っておいて下さい」

「だからあまり飲むなといったのだ」

「ダリウス殿、本当に気分が悪そうだよ」

トラシュがユリウスとダリウスの間に割って入る。

「いや、そうだな、トラシュ、ありがとう。後は私が送るよ」

ダリウスが応酬^{おうしゅう}してしばし、無言で睨^{にら}み合う。その沈黙を破ったのは……。

「ユリウス様、お迎えにあがるのが遅れて申しわけありません」

灯を片手にラドビアスが現れた。

「ダリウス様、お客様、ここからは私がお連れいたします。では参りましょうか、ユリウス様」

「おやすみなさい、兄上、トラシュ様」

啞然とする二人を残し、あっさりとユリウスはラドビアスの元に行く。と後ろを気にするでなく歩み去って行った。

地下室の勉強

次の朝早くにユリウスの城に来たクロードが、ロープに着替えてラドビアスと共に下に降りる。そこには、すでにユリウスが長椅子に腰掛けて本を広げていた。

「お早うユリウス」

「今日は吐かなかったんだろうな」

本から顔を上げずにユリウスが言う。

「吐いてないって！」

クロードがむくれる。

「そりやそうと、おまえ、ダリウスにトラシュが私を送って行く事を言っただろう」

「さあ？ 兄様は二人が一緒に出て行くのでも見かけたんじゃないの？」

内心どきどきしながら、クロードはしらじらと言って席につく。

「まあいいよ、近々ボルチモアへ出かけるからね」

「え、ああ行つてらっしゃい」

「じゃなくしておまえも行くんだよ」

ユリウスがくくつと笑う。

「一人じゃ寂しいから弟を連れて行くって言ってやった」

「もう、寂しいとか口からでまかせ言わないでよね。俺を巻き込むのも勘弁して」

クロードの抗議にユリウスは楽しそうに笑う。

「何？ これからもどんどん、巻き込むつもりだけど」

クロードの更なる抗議に知らん顔をする。

「ところで宿題を見せてもらおうか」

ユリウスが急に先生モードに切り替わったため、クロードは緊張しつつ座りなおした。その後二刻ばかり。竜巻が部屋の蔵書を飛ばし、火柱がそこから立ち上り、鉄砲水が壁を濡らして部屋

中恐ろしいくらい滅茶苦茶になっている。

それは、クロードが結ぶ印が稚拙で力が一定していないこと。その上、ユリウスが寸止めしないで術を繰り出すせいだっただ。

「少しお休みされては？」

ラドビアスの声にユリウスが答える。

「じゃあ、少し休憩」

肩で息をするクロードはほっとして長椅子に倒れこむ。クロードは自分の足がびんびんに張っているのに気付いた。知らず知らずのうちに体中に力が入っていたからか。

さつき自分の方へ向かってきた火柱に強い風の印を結んで、空間にエイワズというレーン文字を描くと『防御せよ』そう、叫んだ。すると、突風が火を蹴散^{けち}らしてちよつとクロードはやった！ といい気分だったのに。ユリウスのちっ！ という舌打ちにむかつて範字の『バ』を描いて外獅子印を結んだら今度は、自分のほうへ水が噴出して全身ずぶ濡れになってしまった。それを見てユリウスが大笑いしているのを見てまた、むかつく。『『バ』を描くところまでは良かったんだがその後、レーン文字で正しい位置に戻してやらないから自分の所に水が向かう事になったのさ』

ユリウスが嬉しそうに垂れる講釈を大人しく聞きながら、くっそうと思っているクロードにラドビアスが乾いたローブを差し出す。

「お風邪を召しますよ、お着替えください」

「どうせまた濡れるか、燃えるかするのに」

ユリウスが冷たく言う。

「うるせー」

クロードは、またもやむかつとしながらローブを着替える。

「まだお勉強されて日が浅いの印を組合わせたり、クロード様は飲み込みが早いですね」

濡れた服を片付けながらラドビアスが褒めるが……。

「解かってやってるんならいいがこいつは思いつきでやってるだけ

だからな。始末に負えない」

ユリウスにすかさずけなされたが、まさに核心をついていたのでクロードは反論せず、黙っておいた。

昼食を挟んで一刻半ばかりの後……。

「明日からは別の場所に結界を張ってそこで練習して下さい」

ラドビアスが手を叩いて厳しく言ったところで、今日の練習は終わりになった。縄で蓑虫のようにぐるぐる巻きになって天井からぶら下がっているクロード。それを楽しそうに左右へ振り子みたいに手で突き飛ばしながらユリウスが面倒くさそうに言う。

「何で？」

「これ以上この部屋を使われると蔵書が全滅します。何、考えてらっしゃるんですか」

ラドビアスが冷たく言い返す。

「怒られてやんの」

クロードが声をあげる。

「じゃあ、今日は終わりだ。さて、上にかかるうか」

つんと顎を上げてユリウスが部屋を出て行くとするのでクロードは慌てる。

「うわーっ、降ろしてよ、ラドビアス」

「だめだよ。何でラドビアスに言うんだ、クロード。私に降ろして下さい、もう偉そうな口をききませんと言えよ。だったら降ろしてやる」

「えーっ、そんな守れないことを言えないよ」

クロードの言葉にふーんとユリウスが歩き出す。

「だったら明日までそこに居なさい」

「うわー！ 降ろせっ」

「だめだ」

大騒ぎする二人の間に入ったラドビアスがクロードを降ろしてやる。

「何勝手なことをしているんだ、ラドビアス」

「いい加減になさいませ」

「またもや自分の主にぴしりと言うとクロードに巻かれている縄に手を置く。」

『解！』すばやく印をきると、縄ははらはらと落ちてクロードの足元にたまった。

「ユリウス様、クロード様上に上がって下さい」

「ラドビアスは？」

「これを放っておけるわけないでしょう」

聞いたクロードが後悔するような険悪な面持ちでラドビアスが答える。

「あ……そうだよな」

助けを求めるようにユリウスを見たが、ユリウスはさっさと階段を上っていく。慌ててユリウスの後を追って階段を上がりながらラドビアスとユリウスの関係を考える。ラドビアスはユリウスの僕と言っていたがそのわりには結構あのユリウスに言いたい事言ってる。見かけはラドビアスのほうが年上に見えるが、どっちが年上なのか。魔道師においては見かけの歳などあてにはならない。そんな事を考えながら地下から上がってクロードは自分の体調が悪くないのに気付いてにんまりした。

もう、慣れたってことかなあ、俺ってやっぱり天才？ と、へらへらしているクロードの顔に向けて服が投げつけられる。

「上に戻ったらいつまでもその格好でいるな」

ユリウスは、そっけなく言いながらローブを脱ぎ捨ててシャツの袖に手を通している。

「はいはい」

ユリウスを見ないようにしてクロードも着替え始める。

「あのさあ」

「なに？」

「ユリウスって女の子が好きなの？ それともさ……」

クロードは、脱ぎかけて頭の所にある腕を掴まれてぎよっとする。

慌ててもがいてロープを脱ぐと間近にユリウスがいてしまったと思う。

「何が言いたい？」

「えっと、ほらユリウスって男の人にも結構好かれるからさ……あれはでもユリウスもちよつと悪いよ。なんかにつこり笑ったりしてさ……ぎゃっ！」

言い終わらないうちにユリウスに押し倒されて、馬乗りになったユリウスが印を結ぶ。『縛せよ』

クロードは金縛りにあったように目だけしか動かせない。

「おまえに何が解かる？ 私だってこんな見てくれにしてくれと親に頼んだわけじゃない。こんな女みたいな顔や体つきにしてくれなんて……この見かけのせいで女を見るように見られたり、扱われたり……おまえ、それを私が楽しんでいても思っているのか。どうせそうなら逆手に取って利用してやると思っても……それもダメなのか」

最後のほうは絞り出すようなユリウスの言葉。何か、軽く言ったクロードの言葉にユリウスの過去を決る出来事があったのかと思いに至り、彼にごめんと言いたかった。ユリウスに負けず劣らず思い詰めた顔をするクロードに気付いたユリウスが我に返ったように目を見張る。

そして……にやりと笑った。

「今度、そんな事を言ったら酷いよ、クロード。その手の冗談が私は一番嫌いなんだよ、覚えて置けよ」

両肘をクロードの頭の横について耳元で囁くように言われてクロードは瞬きで解かったと合図する。

「ふん！ 今日だけは許してやるよ。私はがっしりした男が嫌いだが、おまえは私が劣等感を覚える懸念はこの先まったく無い……かな」

クロードは相等失礼なことを言われていたが『縛』されているため反論できず、精一杯眼つきを鋭くした。そしてユリウスが印を

組んで術を解そうと上体を起こしたところに強い声がかけられた。

「何をやってる！」

ダリウスの声。

その声の方へ目をやってクロードは　これって見ようによつては変なことになってるのではと気付き慌てる。　シャツ一枚のユリウスが下着姿の俺に馬乗りになっている状態。　それを見つけたのがダリウス兄様……ってこれはかなりやばいと青くなった。

『解』素早く小さく印を切つて術を解くとユリウスが立ち上がる。

「ダリウス兄様、これは違いますからね」

そう言つてクロードも急いで立ち上がる。

ボルチモアへの誘い

「兄上、人の家にいきなり入ってこられるなんて困りますよ」

結構強気で非難するユリウスにダリウスが声を抑えて言う。

「何をやっているか聞いたのだが？」

「私が自分の部屋で何をしようと勝手でしょう？ 何をつて兄上、今ご覧になってらしたじゃないですか」

「ユリウス！」

とうとうダリウスが大声を出してテーブルを叩く。

「あまり大声を出すと外で待つ者がビックリしますよ、兄上」

言つてユリウスが入り口を見るのにつられてダリウスがそちらを向いた隙に、クロードはその場を離れた。服を抱えて走るなんて間抜けだとは思うが仕方ない。そこへラドビアスが現れた。

「ダリウス様、いらっしゃったとは気付きませんで失礼いたしました。ユリウス様、クロード様、お召し替えの途中では？ ダリウス様、少し失礼します」

ラドビアスはダリウスが口を挟む間も無いくらいとうとうとしゃべり、あれよあれよと言う間にダリウスを椅子に座らせる。おまけにユリウスとクロードは寝室に押し込まれて扉をぱたりと閉められた。

「お茶でよろしいですか」

「え？ ああ」

ダリウスが毒気を抜かれて大人しくお茶を飲んでいるところにユリウスとクロードも着替えを済ませてやってきた。

「私とクロードにもお茶を」

「畏まりました」

「お待たせして申し訳ありませんでしたね、兄上」

さっきのことなど無かったかのようにユリウスがにっこりと笑つてダリウスの正面に座り、自分の横の椅子を引いた。

「クロード、座りなさい」

なるべくダリウスを見ないようにしてお茶が茶器に注がれるのを見つめるクロードの胃がわずかにちりちりする。

「で？ 何の御用ですか、兄上」

沈黙を破ってユリウスがダリウスを見る。

「昨晚、父上にボルチモア州のトラッシュからおまえとクロードを招きたいとお話があつて父上はお受けになった。来月早々行くことになる」

なるだけ事務的に話そうと一本調子に言っているが、内心穏やかでないのが見え見えなのでクロードは俯いて噴出す。 兄様、隣の候子呼び捨ててるよ……。

「承知しました。私はあまり城から出た事が無いので楽しみです」
ユリウスがにっと笑つてお茶を飲む。

「うそつけ、竜門使つてそこから中出かけてるくせに」

クロードのつぶやきは、ユリウスの尖った靴による左足への攻撃を招く。

「ぐへっ」 痛いなのんって……。

「お茶飲んでいる時に下品な声を上げるんじゃない、クロード」
「済みません、兄様」

くっそーと思いながらクロードが顔を上げると、ダリウスと目が合つてしまい慌てて目を逸らす。

「……話はそれだけだ、帰る」

ダリウスはそそくさと立ち上がる。 それを止めもせず、ユリウスが片手に茶器を持ったままダリウスに声をかける。

「さようなら兄上、それとクロードも今日はもうお帰り」

えー？ 何でだよと思ひながらクロードがユリウスを見るが、ユリウスはにんまり口の端をあげている。 この状況を楽しんでると思えない。 はあと溜息をついて仕方なくダリウスと従者の後を歩いていく。

つと、前を歩いていたダリウスの足が止まる。

「お前は一体何者なんだ？」

体は前を向いたまま放たれた言葉にクロードはぐつと詰まるがダリウスは返事を期待していなかったのか再び歩き始めて。クロードは気詰まりなままその後続いた。

「これは？」「えーつとフエイユー」「これは？」「ウルズ」「ふーん、じゃあ意味は？」

「ええと……変化」

開いた本の字を指差して読みと意味を尋ねるユリウスにクロードが答える。

描くのはなかなか難しくて魔方陣にしても基本形がやっとだが、読む方はかなりすらすらと読むことが出来るようになってきていた。自分には魔術が合っているのか……それともやる気の問題なのか印を結ぶのも結構早くなった 筈。

巻物に描いてある範字の下に印がついている印を結ぶ略字を見ても解かるようになってきて、そうになると練習も楽しくなった。この所、人目が無いのが解かるとクロードは魔術の練習に余念が無い。しかもユリウスの教え方は驚くほど早くて予習、復習が必須なのだ。

「じゃあ、忘却の印は？」

「わかんない」

クロードのおでこをすかさずユリウスが中指で弾く。

「いてっ、だってさっき一回きや読んでないじゃないか」

クロードの不平もばっさり斬られる

「一回読めば頭に入るだろう」

一回しか読んでないのに完璧に頭に入る奴いるのかよ。そう思いながら絶対部屋に戻ったら今日中に物にすることをクロードは心に誓う。

「今日はこれで終わりにする」

ぱたんと本を閉じてユリウスが言った。

「まだ、一刻も経ってないのに……？」

何か気に障る事をしたかなと、考えたが今日はまだ何にもしてない筈……だ。

「明日ボルチモアに行くからね、持って行く物を用意しとけよ」

自分はそんな事ラドビアスに任せきりのくせして……と思ったがクロードには決まった従者がいないので、女官たちに指図するのも面倒だし自分でやるしかない。

「解かったよ、じゃあね」

立ち上がるクロードにラドビアスが声をかける。

「ユリウス様の荷はほとんど出来ておりますから後でお手伝いに伺いますよ」

「本当？　ありがとう、ラドビアス」

クロードががばりとラドビアスに抱きつくのをユリウスが冷ややかに見る。

「ラドビアス、あんまり甘やかすなよ」

何にもしないあんたがそれを言うのかよ！　そう、思わず口に出しそうになったがラドビアスを貸してやらないとか言いだしかねないのでぐつと堪えた。

ボルチモア州の州都ケスラーへは片道三日の行程で四頭立ての大型の馬車と荷馬車一台。

随行の従者が、御者、下男を入れて八人という極めて少ない人数だった。当のユリウスには従者がラドビアスしかいないし、クロードには初めから決まった従者がいないのでダリウスから三人貸してもらって、あと二人が御者で残りが下男だ。

「大げさに州公に関わりある者としていくより、こじんまり行く方がよほど危険がありませんよ」

ユリウスはそう言ってダリウスを黙らせ、ハーコート公はそれについて何も言わなかった為あっさりと決まってしまったのだ。だ

けど、今結構国内は物騒になっているみたいなのに……ユリウスは知ってる筈だけど……まるで襲ってくれといわんばかりの軽装備にクロードは頭を捻る。

夕暮れ近くなってクロードの部屋にラドビウスが訪れた。

「遅くなりまして申し訳ありません」

「ううん、ありがとうラドビウス」

ラドビウスは衣裳部屋に入るときばきと服やら下着を手に取りっていく。

「ねえ、何でユリウスの従者ってラドビウスだけなの？ ラドビウスだってたまには休みたいだろうに」

クロードがラドビウスに任せて寝台に寝転がって尋ねる。

「お休み……ですか？ そうですね。私は立ち働いているのが好きなんですよ。休みをもらっても結局主のお世話をしていると思いますよ。それに私の主のお世話が勤まる者が他にいるとは思えませんし」

ラドビウスの返事にそりやあそうだとクロードも思う。何しろユリウスは好き嫌いが食べ物以外においてもべらぼうに多い。

しかも説明がすっぱり抜けていたりするユリウスの意を汲むのは本当に大変だろう。五百年あまりの実績に裏打ちされているラドビウスにはそらの従者では太刀打ちできないだろうし。

「それにユリウス様は魔術以外はほんつとに何もお出来になりませんから」

ラドビウスが旅行用の衣装箱に服を入れながらぼそりと言ったのが聞こえてここへ来る前にユリウスが山ほど我俣を言っただけと知れた。

いつも一見大人しそうなこの男が実はよくしゃべり、表情も豊かなのがユリウスの小宮に行くようになって解かってきた。何しろ主城にはほとんどユリウスが一人で来ていたのでダリウスはともか

く、クロードはユリウスに従者がいることも知らなかったのだ。
背がクロードの知っている中では一番高く、痩せてはいるがひよろ
っとしているのとは違う。動きにも俊敏さが見えて、体を鍛えて
いるらしいとクロードは思っているが。

ポルチモアへの旅路

馬車に一日乗って居るのは結構きついものでその上、ユリウスと差し向かいで二人だ。中で散々、印の組み手を練習させられ呪文の意味と読み方の問答が続く。さしものクロードもユリウスに泣きをいれる。

「ユリウスお願い、もう休ませてよ」

両手を合わせて顔の前に上げる。

「せっかく私が教えてやつてるのに……まあ可愛くお願いされたら仕方がない。休ませてやる」

ユリウスは持っていた外国の文字が書かれている本を広げて目を通し始めた。気付いてみれば、ユリウスはほとんどの時間を読書の時間にあてている。何を読んでいるのか外国語の本が多いのでクロードには解からない。まあ、聞いて説明されても困るので黙っておく。クロードは、する事も無く窓から外を眺めていた。

モンド州の州都を過ぎて馬車は山道へと入って行く。緑の濃い山中のトンネルのようになっていて緑に目を奪われていると黒っぽい人影を見た……ような気がした。

「さつき黒いものが……あれ？」

「知らぬ顔をしておけよ、クロード」

クロードが声を上げたのにユリウスが本を見たまま鋭く言った。

「何で？」

ユリウスが本を閉じてクロードを見る。

「我らをつけているのさ、いつ仕掛けてくるか様子を見ている」

やっぱり人だったんだとクロードが後ろを振り返るが、もう緑の中に何もかも紛れて何も見えなかった。

「本当は私とラドビアスそしておまえだけならもつと動けるのだが、そうはいかなかったな」

ユリウスはクロードに指を突きつける。

「これからちよつと隠れている虫を追いつもりだから口出しや邪魔するのじゃないよ」

言うだけ言うともた本を広げる。やはりユリウスは気がついていたのだ。その上で来州の誘いに乗ったのだ。これはアリスローザに気をつけると言ったほうがいいのだろうか。そこまで考えて俺はどっちよりなんだとクロードは苦笑った。

日が暮れる前の黄昏時。小さな集落について他の従者が宿の手配をしている中、ラドビウスが馬上から馬車の窓に近づいて低い声でユリウスに告げる。

「三人確認しましたが、始末しますか」

「いや泳がしておけ」

「はい」

手綱を引いてラドビウスが馬車から離れて後方へ下がったのを見て、クロードがあわあわとユリウスに尋ねる。

「し、始末って……まさか？」

「殺すことに決まっているだろ、ラドビウスは腕が立つからな」

前にラドビウスが体を鍛えてるのではないかと思ったことが確かめられたのだが、クロードは嬉しくない。人殺しの話を淡々と話す、ユリウスとラドビウスに慄然とする。竜印が完成したら俺もこうやって王の為とかいう理由で人を殺めるようになるのか。

今夜の宿は寂れた場所にあつては唯一宿らしい佇まいがある二階家で、一階は食堂兼酒屋になっている。森の中の集落にあつてはあまり贅沢は言えないが、州公の子息が二人もいることを考えるとかなり粗末な感^{わだち}は拭えない。

途中大きな轍^{わだち}に荷馬車が車輪をとられて横転して、従者や下男総動員で馬車を元に戻し、故障箇所を修理している間に時間が思いのほか経ってしまった。そのせいで今日予定していた宿場町にたど

り着く前に日が暮れてしまったのだ。

「他に宿がございませんゆえ申し訳ありませんが、ここでお休み下さいますようお願いいたします」

従者が申し訳なさそうに頭を垂れるのをユリウスはどうでもいいと手を振って降りようとするが、従者に止められる。

「今、宿から人払いしております。少々お待ちを」

金貨を握らされたのだろう、宿の主人が他の泊まり客や食事、酒を楽しんでいた客を追い出している。

「旦那様、これで宿には客は人っこ一人いませんぜ」

宿屋の主人が大意張りで言っているのが聞こえて、クロードは気が塞ぐ。宿が一つしかないのにそこを追いつかれた者は野宿するしかないではないか。自分が追いつかれたような気分でクロードは馬車の座席に沈み込んだ。

「食事の用意と湯を沸かすように」

「へへえ」

従者に卑屈な返事を返すと宿屋の主人が中へ引つ込むのを確認してから、従者が馬車に戻って来て馬車の戸を開ける。

「お疲れになられたでしょう、ユリウス様、クロード様」

頷きだけ返してユリウスが馬車を降り、クロードも後に続いた。

「うーん」

クロードは体を伸ばすようにあちこち体を捻ったりしてみる。

座っているだけなのにやたらと節々が痛い。明日は馬に乗って行きたいけど……しかし変な奴につけられているんだと思い出して思い直す。

疲れていたがそれに反比例して胃袋は元気そのもの。クロードは、羊肉のローストと黒ずんでいるパンをレンズ豆のスープで流し込みながらユリウスを見る。すると彼は食事にまったく手を付けずに血のようなワインを飲んでいる。

いつものようにユリウスのお酒の飲み方は酒を楽しんでいる感じがまったくない。水を飲むようにぐいっと呷るように飲む……こ

れではダリウスではないが誰だつて心配になる。

「あのさあ、酒ばかり飲んでると体壊すよ。食事をしなきゃあ」

「ここの食事は食べる気がしないんだ。ほっといてくれ」

そう言つて再びワインを飲もうとしたユリウスの目の前に、スー
プの入ったスプーンが突きつけられる。

「ほら、スープぐらい飲まなきゃ」

口元につけてこられたスプーンを暫く見つめていたが口を開けた
ので、クロードはユリウスの口へスープを流し込んだ。

「じゃあ、はい」

スプーンを手渡そうとして差し出したのをユリウスに払いのけら
れる。 えっ？ とクロードはユリウスを見返す。

「このままクロードが飲ませてくれたら食べてもいいけど」

「はあ？」

何言つてんのとユリウスの顔を伺う。

「このまま酒飲んでたら明日、馬車で吐いちゃうかも」

ユリウスがなみなみと杯にワインを継ぎ足す。 じゃあ、飲むの
をやめろよと思つたがここで俺が折れ時なのかと直感する。

「解かつたからワインはもうやめろよ」

にこにこと口を開けるユリウスを見てラドビアスの日々の苦労を
思う。 クロードは大きく溜息をついた。

割り当てられた部屋に戻り、お湯を使い体を拭いて寝台に入つて
みて。 クロードは、いかに自分が恵まれた生活をしているかを感じ
ざるを得ない。 薄い板で作られた寝台は少し動いただけでぎし
ぎし大きな音がするし、中に藁でも詰めているらしい敷布がちくち
くして寝るところじゃない。 引き上げた上掛けの上部は真っ黒に
汚れていて、気付いてしまうと掛ける気もしない。

しかし、蚤や虱がいらないだけでも上等らしいそうだ。 で、蚤と
虱って何だ？ 放っておかれてはいたが決して衣食住に窮した^{うぢやない}こと
など無いクロードには、一般の人々の暮らしは今一つ解からない。

慣れない寝台のおかげで寝付かれずごろごろしていると、隣の部

屋に誰かが入って行く気配がした。

まさか、族か……？ 下の階に従者たちが詰めているからそんな事はないだろうと思いつながらも気になる。クロードは寝台から降りると裸足のまま廊下に出て、そつと隣の部屋の前まで忍んで行く。

「クロードか、入れ」

中から声がしてクロードは大声を上げそうになって、自分の口を押さえながら入る。すると入り口近くにラドビアスがいた。

「おまえだったの？ ラドビアス、ノックも無しで入っていくから誰かと思つたよ」

「済みません。一階におられるダリウス様の従者の方をかわして、そつと出てきましたので」

「ラドビアス、ダリウスの従者に遠慮しているの？」

クロードの問いにラドビアスが薄く笑う。

「そうではありませんが、私だけユリウス様と一緒にのお部屋というわけにはいきません」

そうなの？ そりゃあこつそり後ろ暗い相談をしようとするのは大変だとクロードは部屋の作り付けの椅子に腰掛けた。

「今までの顔ぶれは五名でした」

ラドビアスにユリウスが頷く。

「放っておけよ、どうせこちらに不審な動きがないか探っているのだろつさ。よもや術を使つたりするなよ」

「はい」

ラドビアスが心得顔で返事をするがクロードは得心がいかない。

ユリウスとの約束

「どうして？ 間諜かんちょうの呪か使い魔でも呼び出して見張らせたほうがいいのじゃないの？」

「ここで我らが魔道師だとバレたら台無しなんだよ。いいかい、おまえも余計な事をするなよ」

ユリウスに厳しい目を向けられてますますクロードはわけが解かなくなる。

クロードの顔を見てユリウスが軽く息を吐く。

「いいかい、トラシュも好意だけで私をボルチモアへ招待したわけじゃない、たぶん。まあトラシュの思惑はともかく。州候のドミニクは息子にどう言ったかはわからないが、奴は私を別の理由からボルチモアに呼んだと思ってる」

「……そうなの？」

「それもこれも織り込み済みで行くんだ。何を企んでいるのか確かめるために今は奴の手に引かかったふりをしてやるうじゃあないか。解かったな、クロード」

「解かった」

すうつとユリウスの口の端が上がった。

「それとおまえはあのトラシュの妹、なんていったか……あの娘がかかわっているレジスタンスどもの動向を娘に近づいて探ってくれ」「そんな事やりたくない」

アリスローザをスパイするなんてと断った途端、がしつとユリウスに肩を掴まれてユリウスの右手がクロードの頬に飛んだ。

「てっ、何だよ！」

頬を押さえて椅子から立ち上がろうとするが肩を掴まれているのでそれも出来ない。

「おまえ魔道師になるんだろ。好き嫌いに関わらずそういう運命に足を突っ込んでいくせに青臭いことを言うのはやめろよ、魔道

師を排そうとしている輩を放っておくのは自分の首を絞めることと一緒にだぞ」

尚も頬を張ろうとするユリウスの右手をラドビアスが掴んで止める。

「おやめ下さい」

掴まれた右手はそのままにクロードの肩から手を離れた左手でラドビアスの頬を張る。大きな音がしてクロードは自分が叩かれたように首をひそめた。見るとクロードの時より明らかに手加減しなかったのだろう、ラドビアスの頬に手形がくつきり残っている。

「お静かに、下の者たちが何事かと思えますよ」

ラドビアスがユリウスの右手を掴んだまま小さく言うのに、ユリウスがラドビアスの手を振り払って噛み付くように言う。

「二人とも出て行け！」

追い出されるように部屋から出てきたラドビアスとクロードが顔を見合す。

「あんな凶悪な奴に仕えんの、止めたら？」

クロードが憮然と言う。

「そうですね、首になったらクロード様に拾っていただきます」

ラドビアスが笑いながら言った。

朝、集落は濃い霧に包まれていたが時が経つにつれて日差しが筋

状に射し込むとあつという間にいいお天気になった。馬車の中では、ユリウスは黙々と書物に目を通してクロードを無視している。

重苦しい沈黙が支配してクロードは息苦しくなる。決死の覚悟でクロードはユリウスに声をかける。

「あの」

「……」

「ユリウス？」

「……」

あくまでも知らん振りを決め込むつもりか下を向いているユリウスにむかつ腹が立つ。

「子供みたいに無視すんな！ 俺はまだ十四歳なんだよ」

ユリウスの広げた本の上に手を乱暴に置く。

「まだまだ青臭いことだつて言うし、言える歳だよ、解かってる？」
ユリウスがやっと顔を上げる。

「それは、私に反することがあると言っているのか」

「……解かんないよ。だけど俺は竜印で縛られているんだから分が悪
いよ」

「だったら……私を殺すんだな、クロード」

えっ？

「私を殺せば竜印は消える。但し、前にも言つたが王が契約した『
鍵』の剣でなくてはだめだ」

殺すなんてそんなつもりで言つたのではないとユリウスを見たク
ロードは、ユリウスの目にそれを望むような色が浮かんでいるの
を見つけてしまつてぎくりと青ざめる。

「私が死ねば竜印はすべて消えて竜門も開く事はない」

「それじゃあ竜印を受けている魔道師たちは……」

「本来の姿に戻る」

クロードの後をユリウスが続ける。クロードはぐくりと唾を飲
み込む。王の剣なんておいそれとが持ち出せるわけが無い。も
し持ち出せたとして、それを使ってユリウスを殺せば国中にいる二
百人あまりの魔道師が一瞬にして全員骨になるのだ。そうだ、ラ
ドビアスだっていなくなるってことだ。それをユリウスは望んで
いるのかと言葉も無く。さつきとは別の沈黙が馬車の中を流れる。
そこへ、ユリウスがずいっとクロードの近くに寄る。

「約束してくれクロード、もし私が頼んだら……そんなチャンスが
あつたら逃さないでくれ」

「なつ何の事だよ、頼むつて」

後ろに後ずさって逃れようとするクロードの顔を両手で挟み込むようにしてユリウスが拘束する。

「絶対だ、クロード」

睨むような懇願こんがんするようなユリウスの顔。

「……そうして欲しいの？」

クロードがやっとそれだけ口にする。

暫くの沈黙の後、やっといつもの笑みを浮かべてクロードの頬から手を離す。

「チャンスがあれば、だよ」

窓の外を眺めながらユリウスがつぶやく。

「長いこと待たせているからな……」

「えっ、誰を？」

クロードの問いに答える事もなく外を見ているユリウスはどこを見ているのか。誰のことを考えているのかクロードには見当もつかなかった。

小高い峠に馬車はさしかかり視界が開けてそこに馬車は停車した。

「この峠を越えるとボルチモア州に入ります」

窓からクロードがラドビアスの指し示す方を見ると、小さな砦のある関所の建物が見えた。

「あそこで一休みいたしましょう」

そこでラドビアスがクロードとユリウスの間に流れる空気に気付く。

「どうかなさいましたか」

窓から中をうかがう。

「何も無い」

ユリウスはそっけなく言って本を読み続ける。

「クロード様？」

実は竜印のある魔道師皆殺し計画について頼まれて困っちゃたよ、あははは……とか言えるわけも無く。

「何でもないって」

クロードはへへつと間抜けな笑いをラドビアスに返した。

関所に着いた一行はハーコート公爵の書簡のおかげで何事も無く関所を通り、その関所を統べる官の館で休む。長々と続く官の挨拶をするりとかわしてクロードは部屋を出て行く。と、他の従者と別れて一人歩いて行くラドビアスを見つけて後を追った。名前を呼ぼうとしてふとクロードは立ち止まる。柱の影になつてよく見えないが誰かと話をしている。黒っぽい服の男……道中で見かけた奴、まさかね。

そこへいきなりラドビアスが振り向いて、クロードは顔を背ける暇もなくまともにラドビアスと向かい合った。

山賊の襲撃

「見られましたか」

「誰と会っていたの？」

「知り合いですよ、クロード様」

悪びれる様子もなくラドビアスが言う。

「それをユリウスは知っているの？」

「さあ、言ってはおりませんが、知っておられるかも知れません」
しれっと答えるラドビアスにクロードは啞然とする。

「ラドビアスがユリウスに黙って行動することがあるなんて……ラドビアスはユリウスの僕なんだよね」

「はい、そうですか」

「じゃあユリウスに不利になるような事はしないよね」

クロードに笑顔を向けただけで歩き出すラドビウスの背中に切迫した声をかける。

「ラドビアス！」

「私は主を敬愛申し上げております」

背中越しにクロードに返すとすたと従者に割り当てられた部屋に入り、ぴたりと戸を閉めてしまふ。そのラドビアスの不自然な態度にクロードはわけが解からず、ふらふらと貴賓室へ入るとユリウスがじろりとクロードを見た。

「私より先に出てったくせに今までどこにいたんだ？」

「それは……」

思わず絶句して立ち尽くすクロードにユリウスが何かあると、聞き出すつもりで口を開いたところにノックの音がした。

「ラドビアスです、失礼してもよろしいですか」

ぎょっとしてクロードは戸へ目を向けた。

「良い、入れ」

ユリウスの応えの後に、ラドビアスともう一人の背の低いカルバ

インと言う従者が盆を手に入ってきた。

「クロード様、甘い物でもお召し上がりになりませんか」

なにも無かったかのような落ち着いた声にさっきの事が夢かと思ってしまう。勧められるままに盆の上から小さいタルトを取って齧ると甘い味が口に広がる。何だか今までの体の力みが抜けた気がした。考えすぎか……単なる知り合いだったかもしれないとクロードは思い直すともう一つタルトを齧った。

「ユリウスは要らないの？ このダークチェリーのタルト旨いよ」

ユリウスはここでも書物を読んでいたが顔も上げずに答えた。

「私には要らない、お茶だけでいい」

「ユリウス様、先ほどこの関所の者と話しましたがこの先、物騒な輩が多く出没しているようです。今日はこのままここにお泊りになるか、夜にかからないように早めに立出する方がよろしいかと」

カルバインがユリウスの方へ目を向けるが、ユリウスがそつちへ目をむけると慌てて瞳を伏せた。

「そうだな、じゃあ直ぐ出発だ。たらたら馬車に乗っているのもあきるしこれ以上移動に時間をかけたくない」

ユリウスの答えにカルバインとラドビアスは出発の用意に部屋を出て行く。

「それとクロード！ その手に持っているやつで食べるのを止めろよ」

ユリウスがびしつとクロードに指を突きつけた。

「解かったよ」

言いながら手に持ったタルトを口に押し込み、盆の上から両手にタルトを掴んだクロードに露骨に嫌そうな顔をしてユリウスが冷たく言う。

「一緒に馬車に乗りたいたならその甘ったるい匂いのする手を洗ってこい。でないと置いて行くからな」

その声にクロードは急いで下男に水を持ってきてもらう。何せユリウスの事だ。本当に置いて行かれる恐れが大いにある。か

くして休憩は瞬く間に終わり関所の建物を後にするとまた、深い森の中に入って行く。聞こえるのは鳥の鳴き声と馬車のたてる音ぐらいだ。馬車の前後左右を守るように馬に騎乗した従者が警戒しながら進んでいく。何事も無くこのまま二日目が終わるのではないかと思われたが……。

ひゅつと風を切る音がしたと同時に右側と前を守っていた従者が落馬した。

「クロード、頭を下げる！」

ユリウスがクロードの頭を押さえて座席にうずくまる。後ろに付いていたラドビアスが早がけで前に出て来た。

「族が現れたようです。馬車をおいてこちらへ」

馬車のドアを開けて身を乗り出したクロードを軽々と抱き上げて自分の馬に乗せる。その間にも射掛けてくる矢を腰から抜いた剣で振り払う。

「ユリウスは？」

心配そうな声を上げるクロードに左に付いていた従者が答えた。

「私が」

差し伸べる手をぐいつと掴んでユリウスが従者の馬に飛び乗った。

「お前達馬車を捨てて逃げなさい」

ラドビアスの言葉に馬車と荷馬車は急停止し、御者と下男たちが我先にと逃げ出して行く。

「できるだけ急ぎますので後ろに回っていただけますか」

「えーっ！ そんな曲乗りみたいな事できないよ」

言いながらも必死でクロードは後ろにまわってラドビアスの腰にしがみついた。

「しっかりと掴まっただけで下さい」

クロードが自分の腰に掴まったのを確認するとラドビアスは、後ろのユリウスに目で合図を送り、体を低くして馬の横腹を蹴った。

猛然とスピードを上げる馬に乗り慣れているはずのクロードも振り落とされそうになってしがみ付いた腕に力を込めた。

山道を全力疾走すること、ニザンばかりした後。

「もう大丈夫みたいですね」

ラドビアスの声と共に馬の速度がぐんと落ちた。 やつと身を起こしてクロードが辺りを見ると、森を抜けて畑が散らばる開けた場所にいつの間にか出ていた。

「ユリウスたちは？」

姿が見えないのに心配してクロードが後ろを振り返って聞く。

「もう少ししたら追いつくでしょう。少し飛ばしすぎましたから」
そう言っただラドビアスは馬の横面を優しく叩いた。

「何もかも無くしちゃったね」

逃げたもの達は大丈夫だったかと心配になったが、戻るわけにもいかないのもわかってる。

「金目当てなら馬車と荷馬車を置いてきましたから……まあ大丈夫なのでは？」

「ならいいけど」

術を使っていれば誰も死なずに済んだろうに。 この騒ぎもどこかで見張られているのだろうか？ だったらクロード達が術を使わなかったのは大正解だろうけど。 二人も死んでしまった。 そのことで自分がすごい悪人になったような後ろめたい気分に陥ってクロードは気が塞いだ。

規則正しい馬の蹄たづの音が聞こえて、クロードが目を凝らしている
とやがて馬が疾走して来るのが見えた。

「クロード様もご無事で何よりでした」

一人生き残ったデイビットという名の従者がほっとした顔をみせ

た。

「ユリウスが遅いんで心配したよ」

「その割には後ろも見ずにスタコラ走って行ったけど？」

ユリウスがクロードとラドビアスをじろりと見た。

「私は主を信じておりましたからクロード様をお守りする事を優先させていただきました」

ラドビアスはけろりと言って馬を進ませる。

「このままプリムスという町に向かいましょう」

プリムスの路地裏

プリムスはボルチモア州の州都ケスラーに近いかなり大きな町だった。ボルチモア州は良質の石がたくさん採れるが中でも良質の花崗岩を多く産出している。その石を加工して他州に運ぶ要になっているのがここ、プリムスである。その所為でプリムスのありとあらゆるところで花崗岩が使われていて白っぽい建物が多い。

道の石畳まで花崗岩で敷かれ統一感のある美しい景観を湛えていた。「宿の手配をして参ります」

デイビットが馬を降りると町並みに紛れて行く。

「俺も馬降りる、尻が痛くて我慢できないよ」

クロードが言うのも終わらぬうちから馬から降りて、そのまま自分もプリムスの町を見物しようと思き出す。

「どこにも行くなよ、クロード」

そのクロードの背中にユリウスがきつい声を出す。

ちえっ、せっかく城から出られたのに……とクロードはむくれた。待つこと半刻ほどでデイビットが戻って来る。

「こちらです」

一行が入った宿はこのプリムスでも一番の格式がある宿らしく一見、貴族の館かと思わせる造りになっている。クロードたちは白い丸い石が敷き詰められた廊下を案内されて他の客室から離れた一角に通された。余ほど金を握らせたのか、何にしても手持ちに金を持っていて良かったとクロードは思った。昨日の宿に文句を言うつもりはないがやはり絹張りのクッションの効いた椅子に座るとクロードはほっとした。

ユリウスはクロードの疲れただけの尻が痛い、腹減った等々まるで構ってくれなかったが自身も疲れているのか長椅子に足を投げ出して肘掛に頭をもたれたまま眠ってしまった。

「寝ちゃったの、ユリウス？」

うかがうようにユリウスを見てクロードはにまりと笑った。

「窓は開いているし、ユリウス寝てるしラドビアスはいないし……」
ぶつぶつ言いながら窓枠にクロードは手をかけた。ここは二階だが下には花が植えてある花壇が続いて柔らかそうだ。

窓の横には、装飾的な蔦を模した配管が下まで続いているからこれに掴まれば楽勝だ。クロードは目で降りる算段をつけると後はためらいも無く後ろ向きになって、窓から跳ぶように離れて配管を両手で掴んで降りていった。

宿の裏手にある外壁をよじ登って上に立つと今度はそのまま飛び降りる。ずきんとした痛み顔に顔を顰めたがそんな事よりクロードは早く町を散策したくて駆け出す。

小さい路地から大きい通りに出るとそのまま賑やかな方へと歩いて行く。活気のある物売りの声が聞こえてきてそれを頼りにどんどん足を進めるクロードは大勢の人ごみに紛れていった。市が立っているのが良い匂いがしてクロードを誘うが自分がお金を持っていない事にここで初めて気付いて……がっかりした。まあしかし考えてみれば、クロードは生まれてこのかた、お金を持ったことも使ったことも無かったのだ。州城の敷地から出たことが無かったのだから持っていたとしても使い道も無かったのだが。

「一文無しかよ、俺は」

取りあえず体のあちこち触って何か金目のものがないか捜していて、自分の服についている釦に目が止まった。

「これって金だよな」

釦が付いている服自体、余ほどの上物なのだがクロードにはそんな事は解からない。途端に気分を持ち直してクロードは歩みを進める。その目の先にある店の看板の文字が飛び込んできた。

『換金、宝石、刀剣の鑑定いたします』

「幸先いいや」

クロードはその店のドアを開ける。ドアに付けた金属製の鈴がカランと鳴ったのに気付いて 愛想良く顔を上げた店主の前にいた

のは金髪の身なりの良い少年だった。

「何の御用で？」

店主の問いに少年はよつと上着を脱いで店主に放り投げるようによこす。

「これ、釦が金だと思うんだけど換金してくれない？」

落とさないように慌てて受け取ったその上着が事の他上等の物と解かり、店主はそのまま少年を見た。

「盗品じゃないだろうね、それとも家から勝手に持ち出した？」

「ないない」

少年は顔の前でひらひらと手を振る。

「で、いくらになるの？」

興味津々の顔を見せる。

店主は途端に商売人の顔になると金庫から金貨を三枚取り出して少年をうかがうように見た。

「これが精一杯だな」

「ふーん、じゃあ貰っていくよ」

少年はあっけらかんと金貨を受け取ると店を出て行った。

最近まれに見る上物が手に入った。これが金貨三枚のあるはずが無い。店主は笑いながら少年の置いていった上着を撫でた。

この手触りは絹、しかも大陸の東、ハオタイという国で採れる天繭から作られた恐ろしい程、稀少な絹で織られている。艶のあるエメラルド色は繭の色でこの絹は染色を寄せ付けないのだ。釦を指差して金と言っていたが確かに釦も美しい彫金細工を施してあるにんまりともう一度笑うと今度は急いで店じまいの札を表に出そうと店の外に出た店主に男の声がかかる。

「ちよつと見せて貰いたい物があるんだが……もう、店じまいか」

「今日は済まないね、明日にしてくれ」

店主の胸倉を掴んだ男はにこりと笑ってそのまま店に店主を引きずって入って行った。

一方、店主の思いなど関係なくクロードは手に入れたばかりの金貨を握り締めて市の中心へと歩いて行く。串に刺した肉をあぶり焼きにしている屋台に行くとなまらず店番の大柄な女に声をかけた。「おばさん、一本くれないか」

「はいよ」

串と引き換えに渡された手の中の金貨に屋台の女が固まる。早

くも串に口をつけている少年に女が大声を出す。

「ちよいと、あんた困るじゃないか」

「えっ、足りなかった？」

「何言ってるんだい、この子は！」

屋台の女の大声に周りにいた何人かが注目する中クロードは困惑して立ち尽くす。

「あんたねえ、こんな大金を出されちゃあお釣りをだせないだろうって言ってるんだよ」

女は喚くように言う。

「営業妨害だよ、まったく」

「じゃあ釣りはいいよ」

「へっ？」

女はそのまま口を開けてそのまま暫く突っ立っていたが、思いついたように金貨を齧^{かじ}ってみて手の中の金貨を確認する。それから屋台に来る客を猛然と追っ払い片付けると早足で屋台を押して姿を消した。

クロードはほっとして肉を頬張りながら歩き出す。足りてたらいいのだ。その一部始終を見ていた先程質屋の店からつけている男がクロードの歩いてきた後をゆっくり追う。が、しかし後をつけていたのはその男だけでは無かった。たくさんの人々が行き交う中、人の流れにそって歩いていたクロードは、いつの間にか風体の悪い屈強そうな男たちが集まって来たことに気付いて反対側に行こ

うと向きを変えたが……。

「おい坊主、金の使いつぷりが良いじゃねえか」

頬に刀傷のある男が臭い息と共に言っつてその横の男がクロードの背中に短刀を当てた。

「小父さんたち何の用？」

金持ちの子供だつたらびびつて泣き出すと思いきや、普通に聞く少年に男はクロードの腕を掴むと路地裏に引つ張り込む。

「すかしてんじゃあねえぞ、坊主！ 今持つてゐる金全部出しな。生きて父ちゃん、母ちゃんに会いたいだろうが」

凄みを利かせて言つた言葉に少年が言い返す。

「そんな事言つてはなから生かして返すつもりなんて無いんじゃないの？」

生意気な言葉に背中に短刀を当ててゐた男が短刀を振り上げた。

「じゃあ死ねよ、坊主！」

振り下ろされた短刀はしかし、横から飛び出して来た男に蹴り飛ばされて宙に舞つた。

「誰だ？」

男が問う間にもその男は体勢を低くして手を付き、足で円を描くように広げて男達を蹴り飛ばす。そして逆立ち状態からひよいと飛び上がるとくりと一回転して今度は起き上がった男達の顎を手の甲をはめた手で次々と砕いていった。その間いくらの時間も経つていない。口から血を流しながらほうほうの体で逃げていく無頼の男たちを見送り男がクロードに向いた。

「大事ありませんか」

「大丈夫、ありがとう」

仰ぎ見るクロードはその男の姿に目を見張つた。顔つきが違ふのだ。 とういう風に違ふかと言えば、大陸の東に住んでゐるといふハ才族の顔、もしくはそこら辺りの国の人か。

ポルチモアの外国人

細い顔だがこちらの人間と比べてのつぺりした印象。鼻は高いが細く眉も細い。薄い唇はやや口角が下がっている。

そして一番目を引くのが一重のつり上がった切れ長の目だ。こんな目を持つ者をクロードは今まで見たことが無い。その黒曜石の瞳がこちらを見ている。

「珍しいですか？」

クロードの胸の内を読んだように男は笑いながら言う。そうすると頭の上できつく結っている量は少ないが、腰の辺まであるリボンのような真っ直ぐな絹糸じみた黒い髪が揺れた。

「綺麗な目と髪だね」

「ありがとうございます」

男はクロードに近づくとどこから取り出したのかクロードの上着を着せ掛けた。

「あ、これ俺のだ、どうして？」

「こんな高価な物を金貨三枚きりで手放してはだめですよ。それと屋台で金貨を使うのもだめです。変な者を呼びますからね」

「そうだな、俺って世間知らずなんだよ。ところであなたは関所の所でラドビアスと会っていた人じゃない？」

クロードはなぜ大陸の人間とラドビアスが知り合いなのか。それに俺の名前を知っているのはどうしてなのかと目の前の男をうかがうように見上げた。

「立ち話も何ですからお食事でもしながら話をしませんか」
「いいよ」

男たちにかまれたあたりからクロードは男が見ているのに気付いていた。それでさっきの余裕発言だったのだが。男について茶屋に入ると男は主人に金を握らせて二階へクロードを誘うと鍵をかけた。

「ここは密会に使われるところです。こうして鍵をかければ邪魔が入りません」

「密会って……」

その意味に気付いてクロードはぱつと頬を染めた。

「それにしてもレイモンドールに外国人がいるなんて知らなかったよ」

「ああ、そうですね、首都サイトスには少数ながらいるようですよ」「ふうん」

そりゃあサイトスにはいるかもしれないがここはレイモンドールの北部のボルチモアじゃないか。結界で隔てられているこの国の首都以外にいる外国人とはどんな存在なのかクロードにはわけが解からない。

「あなたはハオタイの人なの？ ……にしては普通にこちらの言葉をしゃべっているよね」

男は薄っすらと笑う。

「私にはこちらの血も混じっておりますので、小さい時から教えられていました」

それが本当のことかどうか解かりはしない。

「名前は？」

「はい、インドラと申します、クロード様」

男は言いながら水の入った杯を傾けて水を少量木のテーブルに零すと指先でなぞって何かを書き付けた。

「その文字は範字だよな」

「はい左様ですよ、クロード様」

「おまえは魔道師……？」

思わず席から立ち上がるクロードの手をインドラが掴んで座らせる。

「そうですね、私は魔道師ですがレイモンドール国の魔道師じゃありません」

「じゃあ大陸の、ハオタイの魔道師なの？」

クロードの質問にインダラは答えず、自分の着ている立て襟の合
わせが肩のほうにある上着とシャツをさらりと腰まであたりまで脱
いで背中を向けた。

「なっ何？」

慌てて何が始まるのかと冷や汗をかくクロードにインダラが言う。

「背中を見てください、クロード様」

言われてクロードがインダラの背中を見ると、その黄みがかった
陶磁器のような白い背中の左側上部に黒い龍の彫り物に見える物が
ある。

「これって……竜印？」

クロードやラドビナスにあるものとは似ているが違う。赤紫の
クロードのそれに比べて濃い紫とも黒ともつかない色の大きな角の
ある蛇のような姿に五本爪の足がついている。

「爪が五本あるね」

思わず手で触れるとわずかにその部分が隆起している。

「五本爪の龍は一番徳が高いと言われております。サンテラにもあ
る筈ですが見てませんか？」

「サンテラって？」

「ラドビナスのことです」

「ラドビナスがサンテラってどういうことだ。きみと同じ黒い竜
印を持っているってどういう……。だってラドビナスはユリウスの
僕の筈だよ。だって俺はラドビナスの左胸にある竜印を見たのに」

クロードは筋の通らない話に啞然と椅子にもたれた。

「驚かれたようですね」

インダラは世間話をしているように淡々と言って脱いだ服を直す。

「インダラ、一体何をしにレイモンドールに来たの？」

「いきなり核心をつきますね」

インダラは少し考えるように窓の外を見た。

「罪人の捕縛と送還……だっしゅ奪取された物の回収ですかね」

「それは俺にも関係あることなの？」

インダラはクロードのほうへ向き直る。

「それは…… あるいはありますね、カルラ様の事ですから」

言いながらインダラは立ち上がって戸の鍵をはずすと戸を開けた。そこにはラドビアスが慄然とした表情で立っていた。

「お迎えが来たようですよ」

「クロード様、勝手をなさっては困ります」

前に立っているインダラを無視してラドビアスは奥のクロードに声をかける。

「まあまあサンテラ、許してやれよ。ちょっとした冒険さ、何も無かったんだし」

「その名を呼ぶな、インダラ」

とりなすように言ったインダラに、ラドビアスがきつく言い返してクロードの方へ歩く。

「宿に戻りましょう。主が……」

ラドビアスはそこでちらっとインダラを見た。

「ユリウス様がお待ちです」

「解かった」

クロードは部屋を出て行きながら頭を下げたインダラを見ながらカルラって誰だ？ と胸の内でつぶやいた。宿に戻る途中の道すがら前を歩くラドビアスの背中にクロードが言い放つ。

「知り合いつて外国の魔道師だろ！ おまえは外国の魔道師なのか」
クロードの言葉にひたと歩みを止めてラドビアスが振り返った。

「クロード様？」

「インダラはカルラっていう者を捕らえる為に来たと言っていた。そしておまえは別の名前を持っているのだろう」

「そんな事までしゃべったんですか」

ラドビアスが長く息を吐いた。

「インダラの背中には黒い竜印があったよ。ラドビアスにもあるって言ってたけど」

ラドビアスにクロードが掴みかかる。

「ユリウスを裏切っているの？ カルラってユリウスの事だろ」
ラドビアスは遙か昔、同じ事を同じような髪で同じような瞳の青年に言われた事を思い出して二、三步後ずさる。

あの時私はヴァイロン様に何と答えたのだったか。

「私は主の僕でございますよ」

ラドビアスのかすれ気味の声にヴァイロンの面差しを持った少年はかつての青年とは違う言葉を継ぐ。

「じゃあおまえの本当の主って誰なんだっ」

真っ直ぐに向かつてくる瞳の力強さにラドビアスは怯んで顔を背けた。そのまま無言で宿まで帰り、クロードはユリウスの部屋の前に立つ。

「あのクロードだけど……入っていい？」

「入れ」

戸をそつと開けるとユリウスは酒の入った杯を片手に本を読んでいた。

「楽しかったか？」

ユリウスが本から目を上げずに言った。

「え……あの……ごめんなさい」

ここで楽しかったですなどと答えるべきでない事はクロードにも解かる。

「じゃあ悪いことだとは思ってるんだ」

ユリウスが本から顔を上げてじろりと見た。

結界が緩むという事

「今は高位の魔道師たちがごっそり出かけていてどこもかしこも結界が緩んで危ない時なのにおまえ、少しは自覚しろよ」

ユリウスの言葉にあつとクロードは納得する。それは結界に緩みが生じているということ。で、なければ他の国の魔道師が易々とこの国へ入ってはこれないだろう。

もっともレイモンドール側から高位の魔道師の手引きがあれば違うかもしれないが。

「明日には州城から迎えが来てくれるらしい」

ユリウスは物思いに沈むクロードを不審そうに見る。

「……それにしてもあいつ、食事でもしながらって言いながら結局何も食べさせてくれなかった」

クロードのつぶやきにユリウスが反応する。

「あいつって？」

クロードはつい、ユリウスに答えてしまう。

「市で知り合った人、食事でもしながら話しようって茶屋の二階に誘われてさ……」

「何だと？」

クロードの話は凄いい剣幕のユリウスに遮られた。

「お前自分がどんな無謀な事をしたか解かっているのか」

勢いよく立ち上がって膝から本が滑り落ち、酒の入った杯は音をたてて床に転がった。

実はその前に上着を質草に入れて族に襲われたが、それは言えるわけではない。

「それで何も危害を受けなかったんだろうな、クロード。おまえは大事な体なんだ。少しは自重しないか、まったく」

「ごめんなさい」

はあとわざと大声を出してユリウスは溜息をついて目の前の少年

を見る。

「本当にどうしようもないがきだ」

現王コーラルがせめてあと五年でも生き永らえたなら少しはましになるのだろうか、それは無理だろう。例の兆候が現れた王はよくて三年、大概は二年ほどで亡くなるのだ。

そして、そのがきに執着しているのは他ならぬユリウスなのだが、ヴァイロンが亡くなってこの数百年、ゴートの廟から必要な時以外、出ることも無かったはずが何を思ったか竜印が完成する前の王の半身にこんな深くかわるとはユリウスも思っていなかった。

この子を見るまでは……ヴァイロンに瓜二つの子供。だがいつもと違うことをしているのが吉と出るか凶と出るか。それは、ユリウスにも解からない。が、クロードに関わることは止められない。今更、すべてをモンド州ゴートの廟にいるルークに今迄の半身のように任すなんてできない。

「どうしたのユリウス？」

黙ってしまったユリウスの顔を見上げるクロードにユリウスが屈みこむ。

「何すんだよっ」

そのままおでこに口付けられて真っ赤になってクロードが抗議する。

「久しぶりだと思ってさ。遅くなったけどお帰りのキスだよ、クロード」

ユリウスが目を細めてにたりと笑った。

「くそー！俺部屋に戻る」

悪かったとちらっと思っていたのに油断も隙もない。

次の朝、ボルチモア州の州旗を立てた馬車が宿の車寄せに何台もつけられた。そのものしさに宿屋の者たちが右往左往する。そしてその中の一際大きい立派な馬車から美しい身なりの貴人が

降りたつ。

「トラシュ・ゴイル・ヴァン・ドミニク殿下であらせられる」

従者の慇懃^{いんぎん}な声に宿屋の主人が慌てて膝をついた。

「よい、頭をあげてくれ。それより私の客人がお世話になっているらしいな」

「お早いお着きで。しかもトラシュ様が直々にお越しくださるとはうれしいですが政務が滞りますでしよう？」

宿の玄関口まで出てきたユリウスが作り笑顔で言った。

「このボルチモア州内で族に襲われるなど大変申し訳ありませんでした。族はすぐに捕らえて厳しく処断致します」

トラシュが許しを請うようにユリウスに手を差し伸べる。

「トラシュ様、そのような事。命に別状があるでなし、どこの州にでも山賊、盗賊の類はおりますよ。取り締まるのはもちろんですがどこからでも湧いて出るようなもの。今回の事はお気になさらないで下さい」

ユリウスは営業用の笑顔でにっこりとトラシュに向けて微笑んだ。
「クロード、行くよ」

ユリウスに腕を取られてクロードが不貞腐れる。

「昨日の今日でこんな事言うのはどうかと思うけどどこにも行かないからさ。手を離してよ、小さい子みたいじゃないか」

「小さい子だろう、やってる事は」

冷たくユリウスが言った。

「まあ暫くは仕方ありませんね」

ラドビアスにも言われてがつくりとクロードは手をひかれたまま馬車に乗り込んだ。

プリムスからケスラーへの道は花崗岩で舗装されていて乗り心地が今までと格段に良い。そのためか、二刻ほどでケスラーに着い

た。大理石が多用された首都サイトスも美しい都として名高いが、ケスラーもなかなかだとクロードは思った。モンド州の州都、エリアルは黒曜石の都として知られているのと対照的に眩しいほどの白い都だった。

「綺麗な所ですね」

クロードが建物に光が反射するのを目を細めながら見ている。

「そう言ってもらえると嬉しいね」

トラシュは朗らかにクロードに笑いかけた。

クロードは首をかしげる。好人物に見えるが。本当に隣の州の公子をボルチモアに悪意を持って誘い込もうとしているのか。考えすぎなんじゃないのとユリウスを見た。

町の様子からこのボルチモア州がかなり豊かなのだろうと解かる。花崗岩を産出し、大きな河が広い平野に何本も流れて北に位置している割に安定した農作物が採れるのだ。そこで桑が栽培され良質の絹が作られている。街の隅々まで舗装された道が続き、上水、下水道も整備されていた。

レイモンドール国の三十ある州の中でも頭一つ抜きん出ている州。それがここボルチモア州であった。そのことは勉強で習っていたが、話しに聞くのと実際目で見るとは大いに違う。ボルチモア州候ドミニクはやり手なのだろう。そうだからこそ実力があつて上昇志向の強い州候がサイトスの魔道師庁の存在など厄介払いしたいと考えることがあつてもおかしくない。

そして今は州宰として詰めていた魔道師たちがこぞつて各州を留守にしているのだ。河に囲まれた大きな中州になっている土地に盛り土をしてそこにボルチモアの州城は建っていた。その広大な敷地の中に入る為には、東西南北各場所のどれかの跳ね橋を降ろして入らなければならない。クロード達を乗せた馬車は山側を下った西側の跳ね橋から州城へ入った。馬車は主城を離れて敷地の一角にある小宮の前に止まる。

「今日はお疲れでしょうからこのままこちらでお寛ぎください」

「ドミニク様にご挨拶をしなくては失礼になりましょう」

ユリウスが眉をひそめる。

「父上がそのようにと言ったのですよ、ユリウス、気を使わないでください。主城には明日私がお迎えに参りますよ」

どさくさに紛れてユリウスの手を取ってトラシュがユリウスを馬車から降ろす。案内された小宮はユリウスの居城に似た小さな城だが内装はかなり美しく三階建ての中はどれも凝った造りになっていた。

クロードは一つ一つ戸を開けて見ながら歩いてきたがこの小宮にほとんど警備の者が居ない事に気付いた。まあ州城の中で何かあるわけもないか……しかし、他もことまではいかにしても警備が薄いのなら何か訳があるのだろう。例えば他に兵を集めているような……。昼間プリムスからの道中そんな事を考えていた所為何を見ても怪しく思ってしまう。

ユリウスの告白

「ユリウス、後で話があるんだけど」

トラシュの横に立っているユリウスに後ろからそつと声をかけると、ユリウスは振り返らずに手を動かして合図を送った。指し示された部屋でクロードが待っているとユリウスがするりと音を立てずに部屋に入って扉を閉めた。

「話とは何だ、クロード」

「うん、俺達ねずみを追っていたと思ったたらきつねの穴に入っていたかもって思ってたさ」

「きつね……？ どちらかというと猪に近いご面相だが、そんな事はなから承知していると言っていただろう。それとも」

ユリウスがクロードの胸倉を掴むとぎりりと締め上げて睨む。

「私に話してない事があるのじゃないか？ この前歩いて帰って来てからおまえの様子が変わったものな。無理やり呪をかけてしゃべらせても良いんだよ」

「わ、解かったよ、話すから……離して」

げほげほと咳こむクロードを離してユリウスが腕を組んだ。

「で、何をかくしている？」

「インダラっていう魔道師がボルチモアに来てる」

「インダラ」

明らかにユリウスの顔色が変わる。

「カルラって奴を捕らえに来たって言ってたけどカルラってユリウスのことじゃないの？」

「どうして……」

ユリウスの口から思わず漏れる声。

「インダラがここに居るということは、このどたばたの絵を描いたのは奴だな」

ユリウスが溜息と共に言う。

「インダラってユリウスの何？」

「あいつは……私の兄の僕だ」

「兄さん？」

ユリウスに兄弟がいたっていいんだけど、とクロードはつぶやく。しかし、何かクロードにはしっくりこない。

「私には一応、建前上四人の兄と一人の姉がいる。それぞれに僕がいるがすぐ上のバサラには二人僕がいた。インダラとサンテラという名の」

「サンテラってラドビアスのことだよな」

「そんな事も知っているのか」

いつの間にとユリウスの顔に書いてある。

「で、ユリウスが犯した罪って何なの？」

「一番上の兄、ビカラの頭をかち割って秘宝の経典を盗んで逃げた事、かな」

えーっとクロードは絶句するがユリウスはそんな凶悪なことをさらいと言って薄く笑った。

「私は一番下で兄達から逃げ回っていて……ある日一番上の兄、ビカラの僕に捕まって寝所に連れ込まれた時、ビカラが油断した隙に脳天をかち割ってやった。そして逃げるときにビカラが隠していた経典を盗んで逃げたんだ」

「あの……寝所に連れ込まれたって……？」

「ふん、伽の相手に決まってるだろ」

ユリウスが苦々しく言う。

「だってユリウス、男じゃないか。しかも兄さんの寝所って」
たじろいたようにクロードが言う。

「そうだ、私は男になるんだ」

自分に言い聞かせるようにユリウスがつぶやく。

クロードは目をしばかせてユリウスを見る。着替えの時に何度も見たがそりゃあ綺麗だけど女の子みたいに胸が大きいわけでもなかった。

「男になりたいってどういう事？」

クロードの問いにユリウスは不貞腐れたような顔で吐き出すように喋りだした。

「気味の悪い話だぞ」

大陸の東にあるハオタイ皇国という国。他民族国家だが大多数のハオ族という民族が支配している。そのハオタイの北の高地にベオーク自治国という魔道師だけの国がある。ベオーク自治国自体は、小さい都くらいの大きさだがその影響力は大陸全土に及んでいる。

「それってどういう……？」

クロードが首を傾げる。

「レイモンドール以外の国にいる魔道師はすべてからくベオーク自治国の支配下にあるということだ」

自ら生産する事のないベオーク自治国は魔道師たちへの允許や地方からの租税、国王、貴族たちからの献上金、各地にある廟からの上納金などによって恐ろしいほどの財を持つ。

また派遣している魔道師が各国において権力を持って国に多大な影響を与えている。

大陸では王の戴冠式にベオーク自治国の教皇の御璽ぎじが押印されている書面の無い王は正統とはみなされない。そのベオークの宮殿、朝陽宮に住んでいる者たちの頂点にいるのが魔道教会で神と呼ばれている一族だ。その一族は恐ろしく長命だ。そして中々子孫を増やせない。なぜなら長い間一族の血統を守るために極端な近親結婚を繰り返した為だ。今では血族以外の者と交配できるか定かではないほどだ。直系の僕たちにしても相手にはなり得ない。

彼らには繁殖能力かんじゆはない、つまり竜印を受けて自分の主と同じ寿命と不老を甘受した代償として子孫を残すことを手放すのだ。ユリウスは長い溜息をつく。

「まだ、この気色悪い話を聞くつもりがあるかい、クロード」

「もし、聞かせてくれるなら」

クロードの答えにユリウスはもうひとつ溜息をついた。

「私達一族は普通の人とかなり違っている。まるで違うともいえるが。私達は生まれてから暫くは雌雄同体しゅどうたいの体だ。魚や虫の一部にそんな例があるのと同じだ。力の無い者、強く望む者が女になる。姉のハイラは女を望んでそうなった。私は……生まれた時から兄達に女になるよう望まれていたんだ」

「兄達つて、そんな」

「兄達と言っても厳密に言えば直ぐ上のバサラ以外は兄弟じゃない。しかし、それがどうだっていうんだ？ 私達は長年に渡って家族内で婚姻関係を結んでいたんだ。吐き気がするだろ？ 私の父親は長兄のビカラだし、母親は長姉だ。同腹にバサラという兄がいるがそれ以外は前教皇のアンテラとアンテラの母親との間に生まれた現教皇のビカラ。そしてその後はアンテラと長姉アニラとの間の子供だ。次男クビラ、三男メキラ、次女ハイラ。私を生んだ長姉アニラは、私が十五歳の時にクビラに殺された。その間子供を産む道具のような人生だった。私はそんな人生はまっぴらだったから、兄のバサラから僕を一人奪って最西の寂れた島に逃げ込んだんだ」

あまりの想像外の話しにクロードはユリウスにかける言葉も無い。「うまくいったと思ったのにビカラは經典に呪をかけていた。何年もしないうちに護法神が追いかけてきて私は捕らえられてしまった」五百年以上も前のことなのに昨日のことのようにユリウスが唇を噛む。

「だが、護法神が来る前にあらかた經典の中身を私は頭に入れていたからね。護法神をある程度手なづける術を見つけていた。それで護法神と取引をしたのだよ」

「取引つて？」

「詳しくは教えるわけにはいかないがとにかく、私が經典を害さないかわりに私の縛めいましを解くことだ。經典はその日から大事にある所

に仕舞ってある。護法神は今王を守っているが、今でも私にとつては害悪で触れることもできない。あれで斬りつけるだけでもそこから壊死する。それ以外で私を殺すのは骨が折れるだろうな。私はひつこいから」

「しかし」

そう、言つてにまりとユリウスの唇がつり上がる。

蔵書室の火事

そう、言うてにまりとユリウスの唇がつり上がる。

「血が濃い為私以外の兄達にも護法神は効くようだね」

思い出し笑いしているユリウスは酷薄な笑い顔になる。

「ここに結界を張って五、六十年経った頃バサラが取り戻しに来た事があったがヴァイロンが奴の腕を……」

そこまで言うてはつと夢から覚めたように唐突に言葉を切った。

「とにかく、私はあいつらに経典も私もやるつもりはない。もし、私が捕まったらクロード、王から奪い取ってでも『鍵』で私を殺してくれよ」

「うん」

クロードの心もとない返事にユリウスは声を落とす。

「私を生き地獄へ落とさないでくれ。頼むから」

いつもの彼らしくない言葉にクロードはユリウスの頼みを退けることができない。

「解かった」

「ラドビアスはその時からユリウスの味方なんだよね」

「さあな……私が一番とか言いながらインダラと通じていたわけだし」

ユリウスがまた悔しそうに言った。

「私をお連れください、そう言ったのは、おまえだったのに」

攪乱かくらんするために放った火が瞬く間に燃え広がり、魔道師たちが消火の術をかけようと駆け去って行く中、カルラは抱えた経典きでんこといきなり背後から男に抱えられた。

男は地下に降りる長い階段を下っていく。

「蔵書室にも火を点けておきましたので皆、そちらに向かっている
と思われます。今のうちに地下の抜け道から外へ」

そう言った男の顔をやっと思える余裕がでたカルラは足をばたつか
せて男から逃れる。

「おまえ、バサラの僕の一人じゃないかつ」

「はい、サンテラと申します」

「どういうつもりだ、バサラに何を言われた！」

「バサラ様はご存知ありません。カルラ様、私と一緒に連れ下さ
い」

信じられるかとカルラはサンテラをねめつけた。

「おまえはあの時、蔵書室の大扉を閉めた奴だ。側に寄るな、殺し
てやる！」

「地下は迷路ですよ、殺すのは無事ここから出られてからにされて
はどうです」

サンテラが迷わずカルラの血にまみれた手を掴むと、そのまま走
るようについて行くのでカルラも引きずられるように歩いた。頼
る者などいないと気を張って生きてきた。その自分の腕を力強く
引いていくこの者を……信じていいのだろうか。ほんの少し頼っ
てもいいのか。

「それは、おまえの意思なのかサンテラ」

「はい、カルラ様」

そう、言ったくせにとユリウスは思い切り唇を噛んだ。

「ユリウス」

過去の思い出に沈み込むユリウスをクロードの声が現在へぐいと
引き上げる。

「何でもない」

思ったより話し込んでしまったとユリウスは戸を少し開けて廊下
を盗み見る。

「私はドミニクの血縁の者がどれだけこの企みに加担しているか調べる。おまえは今からこの部屋に結界を張ってやるから竜門を通ってガリオールに連絡を取ってここの城下町ごと結界を張る者と、ゴート山脈一体の結界を張る者をよこすように言ってくれ」

指を噛んで血をクロードの胸に垂らして竜印をなぞりながら呪を唱える。

「これでペンダントとロープの代わりになる」

そう言うのと部屋の四隅に範字を書き付けてある札を置いて自分は外に出た。外からレーン文字を扉に指で描きつけて扉に触れると扉は一寸の隙もなくぴたりと閉まった。

「クロード、始めろ」

「んじゃあ、やりますか」

クロードは再びサイトスへと竜門を開く。

サイトスへの竜道は途中から石畳の道になり一ザンも歩くと目の前に手すりのついた階段が現れる。クロードはその階段を上がって双頭の竜が翼を広げている飾りのついた扉を開けた。そこは魔道師庁にあるガリオールの執務室の一角に繋がっている。それは誰が竜門を使うのかしつかり自分が管理したいガリオールの性格を現しているようだ。

「クロード様、ですか」

書類にサインをしていたガリオールが顔を上げて訝しげに見る。

一人で竜門を使うのは少し早いのではと眉をひそめる。しかし、ガリオールの思惑など関係なくクロードはガリオールの机に手をつく。

「ユリウスから伝言があるのだけれど」

その言葉にガリオールの面が引き締まり、クロードにうなずくと部屋から仕事上の魔道師を出して自分の前の椅子をクロードに勧めた。

「ボルチモアの城下町とゴートの廟一帯に結界を張る魔道師たちを何人が振り分けて欲しいのだけど」

「それは……主に危険が迫っているのですか。私とルーク、ラドビアスがいれば直ぐにでも結界は張れますが」

「ラドビアスは勘定に入れないで欲しい」

クロードの言葉にガリオールは怪訝な顔をする。

「ラドビアスを外すと？」

「そう」

クロードが声をひそめて身を乗り出す。

「ところで親父さんの容態はどうなの」

「国王陛下のことですか。この所ご不調の事が多ございましてお休みになれておりますが……一体何をお聞きになりたいのです？」

ガリオールはへつと笑うクロードをややあきれて見る。クライ

ブ王子と瓜二つというのに受ける印象がまるで違う。

「『鍵』のことだよ、今は指輪のままなの？ 剣になっているの？」

「それを聞いてどうなさいます」

顎を引いてガリオールはクロードを油断無く見つめる。

ユリウスの使者

「別に、親父が死にそうなのかどうなのか知りたいのは当然じゃないか」

クロードは不敵に笑いながらガリオールを見返す。

「親父などと仰ってはなりませんよ、クロード様。確かに貴方様のお父上であられますが国王陛下ですよ」

タン！ 机をクロードが叩く。

「じゃあ国王陛下の『鍵』はどうなってるの？ 俺、ユリウスの使者だよ。ユリウスにどう言ったらいいんだ」

クロードの強い態度に僅かにたじろいでガリオールが答える。

「今は存知ませんが今朝ご機嫌を伺いに参りました時には剣になっておりましたが」

ユリウスが知りたいっていうのは嘘だけこの際、俺の知りたい事も駄賃代わりに聞いても罰はあたらないだろう。

「ボルチモアと廟には私とルーク、リチャードが行きます」

リチャード、クロードは初めて聞く名だ。

「初代国王ヴァイロン様のお子でございます。知っておられるかもしれないませんが王がお亡くなりになるまでの半身の名はすべてクロードです。王が無くなった後、王の半身は王の御名を頂いて正式に魔道師庁へ下られますからそれ以降は「様」はつけません」

…… そうなんだ、 初耳だった。

「じゃあ俺はクライブになるのか、あいつが死んだら」

「ご逝去されたら、ですね。もちろんそうですよ」

わざわざ言い直されてクロードは憮然とするがまあ、役目は終わった。

「解かった。じゃあユリウスに伝えるよ」

竜門の扉を開けて出て行くクロードをガリオールは立ち上がって見送りながらつぶやく。

「ボルチモアですか、結界が緩んで忙しいときに面倒な事になった。その最中に主がいるなんて。先に私に調べさせて頂きたかったが。こちらからも直ぐに調べなければ」

クロードは竜門から出ると部屋の四隅に置いた呪符に『解』と唱えて印を結ぶ。呪符はもろく粉々になって消えた。それを確認してから外に出ると丁度そこへラドビアスがこちらにやって来た所だった。

「クロード様、そこにおられましたか、もう直ぐ夕食の時間です。下へおいで下さい」

クロードが出てきた部屋を一瞥^{いちへつ}だけしてラドビアスは下へ降りて行った。

気付いた？ まあ、いいか。ラドビアスほどの魔道師を出し抜くなんて難しすぎる。あいつの相手はユリウスに任せとこう。一階の食堂に行くとユリウスはすでにテーブルについていた。

話は後で聞くと、開口一番ユリウスが言った。ユリウスの真横には当然のように座っているトラシュと向かいに座るアリスローザが目に入った。アリスローザが手を高々と上げる。

「クロード、やっと会えたわ、楽しみにしていたのよ」

「アリス、大声を出すものではないよ、はしたない」

妹のその明け透けな行動にトラシュが眉をあげる。

「クロード、小宮を熱心に見て回っていたらしいけどこの城は気に入って貰えたのかい」

トラシュが笑いながら聞くのをそういう事になっていたらしいと話を合わせることにする。

「とてもすてきなお城ですね、どの部屋の趣向^{しゅきう}もどれも綺麗で快適そうです」

答えながらトラシュに他意はあるかと顔をうかがう。しかし優しいような笑みを浮かべた顔は、あくまでも爽やかでクロードには裏があるようには見えない。

「ユリウス、君はどうだい、気に入ってもらえたか」

トラシュがさり気なくユリウスの手を握る。

「勿論ですとも。ここはとても落ち着きます。お心遣い有難く思っております」

クロードにはうそ臭さ全開の笑顔を見せてユリウスは重ねられたトラシュの手をさつさと外す。

「私達は持ち物をすべて失いましたので今日のところは着替えなどもお貸し頂くとして。明日の朝、私の従者に調達させに城下に行かせたいと思っています」

「私ので良かったら何でも使ってください」

「有難いですが私はトラシュ様に比べて背も低いし体も細くて、トラシュ様の服を着ても可笑しいだけです。ラドビアス、悪いが滞在に入用な物を見繕って来ておくれ」

「畏まりました」

ただでは起きない奴というか、もしかして襲われる事前提だったのかとクロードはユリウスを見る。これでラドビアスを半日はこの州城から追い出せるのだ。その間に何をする気なのか。

しかし、『悪いが……』なんて普段言わなくせにラドビアスにバレちゃうんじゃないの？

「今晚の夜着なら私のはどうかしら。ユリウス様細いし、お兄様のは大きすぎるでしょう。この前あつらえたのが丈も長いしお揃いのガウンもあるし」

アリスローザの提案にトラシュが厳しく言う。

「女物など失礼じゃないか」

「では、そうさせて頂きます」

ユリウスの返事にえっ？ とトラシュが口を開けたままユリウスを見る。

「今晚寝る時だけですから誰に見せるわけでもありませんでしょう？ お湯を使わせて頂いてから貸してもらえますか、アリスローザ様」

ユリウスの返事に気を良くしたアリスローザがクロードに聞く。

「クロードはどうする？」

「じよ、冗談！ 俺、じゃなくて私はトラシュ様に貸してもらいます」

自分まで女物を着る羽目になるのを防ぐためクロードは勢い込んで言った。

「私の衣装部屋からこの前作った、水色の夜着とガウンを持ってきなさい。銀糸で蝶の刺繍がある物よ」

アリスローザは女官に言いつけると嬉しそうにユリウスを見た。

「きつと、お似合いになるわ」

夕食が終わって先にお湯を使つて言つた通り、だぶだぶのトラシュの夜着を大きくウエストで弛ませて着たクロードの横にはユリウスの夜着姿を見てから主城に戻ると言い張るアリスローザが座っていた。

かちやりと軽い音をさせてユリウスが部屋に入つて来たのを見てクロードは冷や汗をかいた。水色の薄い生地レースがついた夜着にガウン姿のユリウスは完全に女の子で長めとはいえ、アリスローザ用の夜着はユリウスの脛までしかなく白い足がよつきり出ている。それが呆れるほど男の脚ではありえない。

「……自信が無くなつてしまいますわ、ユリウス様……」

アリスローザが溜息交じりに言う。

「何をばかなことを、アリスローザ様は本当にお可愛いですよ。私と比べるなんてとんでもないことです。ラドビアス、アリスローザ様を主城にお送りして差し上げなさい」

「あら、私従者がいますてよ」

首を傾げるアリスローザにユリウスが優しく言う。

「お供させてください。確かにお帰りになったか心配ですから」

「では、お送りして参ります」

アリスローザと女官の後をラドビアスが続いて部屋を出て行った後、クロードがまったくもうと唸る。

「それ着たのもラドビアス、追っ払う為だろう。アリスローザが見

たがるのを予想してたんだな」

クロードの言葉を見殺してユリウスは長椅子に行儀悪く脚を投げ出して座る。

「で、ガリオールは何と言っていた？」

「ガリオールとルーク、リチャードが来るって」

「そうか、解かった。じゃあ私の収穫は」

ユリウスが羊皮紙を広げる。

ボルチモアの企み

「何？」

クロードがのぞくと手で頭を払われる。

「邪魔だ、クロード。今から読んでやる」

ユリウスは、こほんと咳払いを一つして。

「長女、アンはライクフィールド州候夫人、次女ジェーンはミルフ
オード州候夫人。次男マイクはドートル州のガウス伯爵に婿養子に
いき、三男ロイスはサイトスのスノーフォーク伯爵に養子にいつて
る。まあ、他の庶子たちは臣下と婚姻させているようだな」

ユリウスが羊皮紙の上を埃を払うように手をすべらせると、書い
てあった字が紙の上をすべって床に落ちた。その上で改めて羊皮
紙を広げて呪を唱える。黒い粒子の細かいもやのような物が紙の
上に現れた。それは、レイモンド国の地図になり、それでも暫く
蠢^{うごめく}いていたがやがて紙に定着していく。ユリウスはさっき言った
関係のある州に印を書き入れる。

「どう、思う？」

「普通ならサイトスの魔道師庁を押さえようとするだろうけど、イ
ンダラがいるということはモンド州のゴートの廟を狙うよね。魔道
の本拠地だもの」

「そうだな」

ユリウスもうなずく。

「ドミニクの企みのためなら、手っ取り早いのは私を殺すことだが。
インダラがそんな事を言う筈ないし、インダラがどういう餌さをぶ
ら下げてドミニクを釣ったのかまだ解からない。少しライクフィー
ルド、ミルフオード、ドートル各州とサイトスに間諜^{かんてい}を付けて様子
を見るか」

「ゴートの廟はどうするの？」

「あれは放っておく」

クロードの問いかける顔に黙って聞けと口にして。

「ここモンドの廟は逆にあいつらを招き寄せてから結界を張って全滅させてやる」

にやりと笑ってクロードに向く。

「まずは私の城に戻ろう。お前にペンダントを渡しておかなくては面倒でいけない」

手に持っていた羊皮紙にふっと息を吹き掛けると、黒いインクはもとの黒い粒子に戻り消えた。お湯を使って落ちてしまった血の呪印を新たにナイフで指を切りつけてクロードに再度付けるとユリウスは竜門を開けた。

「モンド州ハーコート公の次男ユリウスと三男クロードを人質に取って州兵を密かに送り、モンドの廟を落として廟主イーヴァルアイなる魔道師を押さえてしまえば魔道師どもは身動き出来ない、でしな」

ボルチモア州州候、ジークフリート・ステファン・ヴァン・ドミニクは暖炉の前に立つ男に向かって確認するように言った。自身はすでに寝ようとしていたので体は寝台の中だ。

突然、寝酒を楽しんでいたところに暖炉から炎が激しく上がる。

彼は驚いて誰か人を呼ぼうとしたが、当の炎の中から男が出てきてドミニクに礼を取って頭を下げた。

思わず落としそうになった杯をどうにかサイドテーブルに置く。

「インダラ様、でしたな」

この二年程前、このところ州宰と意見が合わなくなり、イライラと過ごしていたドミニクの前に現れたベオーク自治国から来たという男。大陸ではベオーク教皇の力が絶大だと言う事は爵位を継ぐ前にサイトスに遊学していたドミニクは知っていたが。ここでベオーク教皇の後ろ盾を得られ、レイモンドールの上位の魔道師ども

を駆逐^{くちく}したら……。あの死ぬ事の無い人間の皮を被った化け物ども！

一見すると慈悲深い優しげな顔をしているが、冷酷な内面で何を考えているか解かったものではない。あいつらを排除した暁には、自分の未来は揚々と開けている。

私はたかが北部の州候に納まっている器ではないのだ。今の魔道教に守られている王はレイモンドールの魔道教が滅びることによってその正統性をも失うのだ。

そして……ドミニクは一人ほくそえむ。モンド州にあるゴート山脈その一帯にある魔道教の廟の中に今も生きていると言われるレイモンドールの魔道教の祖である老魔道師、イーヴァルアイの身柄をこの男に引き渡せば取引は終わる。

百年に一度の結界の張り直しに向けて、上位の魔道師が出払っている今こそ絶好の好機であることは間違いない。縁戚^{えんせき}に繋がる州候や息子たちには魔道師庁の横暴に対する義憤による反逆を振りかざして地下組織を作らせている。だが、ドミニクの本心はそこには無い。私は新しい国の王になるのだ。

しかし、そのイーヴァルアイという魔道師を捕らえるより、サイトスの実権を握る宰相のガリオールを捕らえたほうが宜しいのでは。イーヴァルアイという魔道師の名は、ドミニクには初めて聞く名前前でレイモンドールの歴史書にも出てこない。初代太陽王と言われたヴァイロンがレイモンドールを強固な結界で守る事を命じた魔道師の名前がそうであったのか。

「ガリオールとてもイーヴァルアイの僕なのですよ、候」

ドミニクに諭すように言って、インダラが懐から筒にした書面で見慣れぬ文字が書き連ねてあり、最後に名前らしいものに五本爪の龍を模^{かたど}った四角い印が押印されている。

「これは？」

「ベオーク教皇の親書です。お読みしましょうか」

「頼む」

ではと、インダラは手渡したばかりの書面を奪うように手に持つと読み上げ始める。

「我、ベオーク教皇ビカラはレイモンドールに潜伏せる罪人の引渡しに助力されるボルチモア州、ジークフリート・ステファン・ヴァン・ドミニク侯爵殿に対して事成就の暁には、候にふさわしい地位をベオーク教皇の名に置いて贈呈差し上げる事を確約するものである。尚、そちらに使わしたインダラを私の名代として候に進言させることを了解するを望む旨記す、とあります」

「うむ、承知した。イーヴァルアイは必ずや捕らえて引き渡ししましょうぞ」

ドミニクの返事に満足そうにインダラはうなずくと書面をドミニクに渡し、部屋の窓を開けた。

「それではおいとまいたします。候」

「どこへ、ここは三階ですぞ」

慌てて言うドミニクにインダラは笑顔を返す。

「お気遣い無く、知り合いが主城に来ておりますので会って参ります」

インダラはそう言う窓枠に手をかけると姿を消す。

アリスローザが女官と主城に入るのを見送ってラドビアスは帰ろうとしたが、自分の背中に伸ばされた手に気付いて払い退ける。

「サンテラ、カルラ様からから目を離してはだめじゃないか」

「解かっている」

「ビカラ様をはじめクビラ様、メキラ様、バサラ様、皆カルラ様のご帰郷を心待ちにしていらっしゃるのだ。この数百年、ビカラ様の傷の癒えるのを待っていて後回しになっていたがそろそろ本腰を入れてお連れすることになった。お歴々の方々もさすがに御歳を召されてきたからな。バサラ様以外は八百歳を超えていらっしゃる。しかも……」

一旦、口を切ってインダラは薄く笑った。

「カルラ様がご出奔された後褥しごきに仕えられたのがハイラ様だからな。他のご兄弟も足が遠のくというものだ。ことに我が主バサラ様は一度もハイラ様を寢所にはお入れになっておられない。他のご兄弟との間にもまだハイラ様は御子を生しておられないのだ」

大抵の男より男らしい容貌のハイラが女性化した後もほとんどその姿が変わっていないことでバサラはもとより、他の兄弟らも彼女を寢所に呼ぶのを躊躇ためらしているのだ。

「カルラ様がいらっしゃる所ならどこへでもお供するつもりだ」
ラドビアスはつぶやくように言った。

主はベオークに連れて行かれる事になったらどんな手を使っても命を断ってしまうだろう。しかしベオークが本気で連れ戻そうとしているのならこれに勝つことはないだろう。

であるなら、私は主の命に背いても主をカルラ様を死なせはしない。僕としては破綻はじょうしているのは解かっている。主より自分の思いに殉じてしまっているのだから。

「しっかりとカルラ様に張り付いている」

黙りこむラドビアスにインダラは一言言つと闇に消えた。

朝の出来事

「本とか持ってくれば良かったかなあ」

部屋に竜門が開いて姿を見せる前にクロードの声がする。

「大声を出すな、クロード」

「いってえ！」

耳を引っ張られながらクロードが竜門から出て、ユリウスが竜門を解した途端に扉を叩かれてデイビットの声がする。

「何かございましたか」

ほら、見るとユリウスがクロードを見る。

「何も無い、ラドビアスが戻ったらおまえもお休み。私もクロードも、もう休ませて貰う」

「畏まりました」

従者の立ち去る足音が消えるのを待ってからユリウスがクロードに話しかける。

「ペンダントはこれからいつも服の下に付けておけ」

髪を掻きあげながら持ってきた香炉や巻物を手早く検分してしまつていくユリウスを見ながらクロードは、やはりユリウスは十七歳の女の子に見えると思つた。しかし体が成熟するまで性別が決まらないなんて、ふしぎな種族だ。でもユリウスは本当はどっちになりたいんだ。

「やっぱり、女の子になるのは嫌なの？」

つい、言つてしまつて速攻後悔してその場から逃げようとしたクロードの足に『縛！』声がかかる。足をひっかけられたようにクロードは顔から倒れこむが咄嗟にユリウスに向かつてレーン文字の『イサ』を描く。その上で宝瓶印を結ぶと左右の手の間から息を吐いた。

息は『イサ』の文字により氷化してつららとなりユリウスに向かつて飛ぶ。ユリウスはあっさりそれに範字を描いてつららを溶か

して消す。二人の間に水蒸気が上がる中、抵抗もそれまでだった。足を縛されているクロードにユリウスが一本だけ溶かさず持っていたつららを顔の真横に突き立てる。

「ひえっ！」

「女になるのは……なんだって？ よく、聞こえなかった。もう一度言ってくれ」

「いや、もういいです。好きに生きて下さい。わーお助け！」

「クロード様、ユリウス様、もうお休みの時間でしょう。小さな兄弟みたいに遊ぶのもいい加減になさって下さい」

大きくは無いが、よく通る声が二人の騒ぎを止める。

「ラドビアス」

ユリウスの悔しそうな声とクロードの嬉しそうな声が同時に重なる。

「ユリウス様、今晚は特にそのような格好をなさっておられますのに。夜着が破れますよ」

クロードに跨^{またが}っていたユリウスの夜着は太腿のところまで捲くれ上がっていて、確かに破れそうだ。大きく聞こえるように舌打ちして立ち上がったユリウスは、さっさと寝台に入ると二人に背を向けた。

「もう、寝る」

やれやれとクロードは立ち上がるうとして……こけた。

そうだ、足を縛されていたんだ。

クロードは印を組み『解！』と唱えると足が自由になった。そしてあせらず先に解しておけば良かったかと頭をかく。

「おやすみ、ラドビアス」

「お休みなさいませ、クロード様」

ラドビアスの声を背中受けるながらクロードは自分の部屋に戻る。部屋に戻るとはあと息をついて、ユリウスが咄嗟に押し付けてきた巻物や香炉^{たる}やらを弛^{たる}んでぶかぶかの袂から出して寝台の下に隠す。寝台に寝転がってユリウスの話を思い出していた。

そうだ、自分にとつてもショックな話だった。　どうも俺は子供を作れないらしいのだ。　結婚と一緒に今は子供なんて欲しいとも思っていないが。　持てないのと持たないのとは違う。　王の半身として生まれて何か得なことはないのかな……。　うーんと唸ってクロードは寝返りをうった。

次の朝早くトラシュが朝食と一緒にとやって来ていた。　アリスローザに昨晚の様子を聞き及んで、一目見ようと思つてのことだと見え見えだったのでクロードは関係ないと掛け布を頭に被った。　が……。

「クロード様もお召し替えは宜しいので一緒にと言われております」

そう言う声で渋々起きる。

そりゃあお召し替えはしない方がいいだろうさ。　特にユリウスは。

クロードが食堂に入るとすかさず、先に来ていたユリウスが冷たく言う。

「遅いぞクロード」

「すみません兄様」

「本当にこう言うては何ですが、国中の美姫も霞みますよ」

トラシュはユリウスの真正面に陣取つて嬉しそうだ。

「お世辞は嬉しいですが女性の服でトラシュ様にお会いするのは恥ずかしい限りです」

今朝は髪を一まとめにして高いところで結んでいるので、どこから見ても女性にしか見えないユリウスがにっこり笑つてトラシュに返す。

「昨日の夜に俺が女になるって聞いただけで殺そーとしたくせに」
ぶつぶつ言うクロードの皿に乗っているパンにナイフが刺さる。
「いっ！」

「ナイフいるだろ、取ってあげたよ」

「あ、ありがとう兄様」

ナイフなら自分のがあると言いたかったがぐつと堪える。

まったく年寄りなくせに凶暴で地獄耳な奴だ。

ラドビアスは既に出かけていていないようだ。

「午後には私の従者も戻りましょう。その後トラシユ様のサロンにお邪魔しても宜しいですか」

「勿論、クロードも来るかい？」

トラシユの誘いにちらつとユリウスをうかがうとユリウスはわずかに眉をひそめた。

「いえ、私は難しい話はちょっと……遠慮します」

「では、お昼に」

上機嫌で帰るトラシユを見送る。すると朝から酒を飲もうとするユリウスに気が付いてクロードはラドビアスがいない今、止められるのは俺しかいないとユリウスから杯を取り上げる。

「いいだろう、少しくらい」

「やめろ、この酔っ払い」

「このくらいで酔うものか」

「あのねえ、酔っ払っている人は自分のことを酔っ払いだとは思ってないの」

あーそうとクロードから酒の入った杯を取り戻そうとしたユリウスの目の前で、クロードが杯に口をつけてごくごくと一気に飲み干した。

「これでよし」

クロードが言った途端に倒れこむ。

「クロード」

ユリウスが抱き起こすがクロードは目を開けない。

「何がこれでよしだっ、お前にはいろいろやつてもらっ事があるのに」

ユリウスが、がくがくとクロードを揺らす。

「起きろ、クロード起きろ」

僅かにクロードは薄目を開けた。

「クロード、起きたか」

「気持ち悪い」

「えっ、ちよっちよっと待てクロード、あーっ」

ユリウスのガウンはクロードの吐しゃ物をまともにうけてしまう。

「おい、クロード、これ借り物なのにどうするんだよ。私に二回もこんな事して」

当の本人は吐いてすっきりしたらしく、ガウンを脱いだユリウスの膝の上ですうすう寝ている。

「デイビット、来てくれ」

ユリウスがダリウスから借りてただ一人残った従者の名を呼ぶ。

「いかがされました。あっ」

薄い女物を着たユリウスが膝の上にクロードを乗せているのにデイビットが固まる。

「何ぼさっとしている。こいつを寝台に運んで女官を呼んでガウンをきれいにしてくれ」

ユリウスの声にはっとしてデイビットはてきぱきと動きだした。飲んだ量もたいしたことが無かったせいで半刻もした頃、クロードはぱつちりと目を覚まして顔を横にする。

見ると、寝台の横でユリウスが巻物にさらさらと書き付けている。……ユリウス、何だってそんな薄着でいるのさ」

クロードの問いに柳眉を上げてユリウスがこちらを見る。

「目を覚ましたのか、そんな薄着ではよくいつてくれたな。まあいい、こき使つてやる。昨日の服に着替えてこれを届けてこい」
くるくると巻物を巻いてクロードに渡す。

「うん、解かった」

何で頭がずきずきするのかと思ひながら竜門を開けてサイトスへ向かう。そして思い出した。ユリウスのいや、もといアリスロ―ザの新調したてのガウンに吐いてしまったのだ。　　どう言い訳し

ようかと考えながらサイトの魔道師庁の扉を開けた。

インダラ来襲

クロードを見送って自分もモンド州の廟に出かけようとした時。扉の開く音がしてそちらへ向いたユリウスの夜着の左袖のレースを引っ掛けて細い剣が柱に突き刺さる。

レイピア……突き刺さった剣を見てユリウスが苦い顔をした。顔を戻す間にインダラがユリウスの右手を掴んでいた。

「お久し振りです、カルラ様。今日は一段と艶やかですが私では相手不足でしょう。私の主が待つておられますよ。経典をお持ちになりバサラ様に御くだりなさい。悪いようにはなりませんよ、カルラ様。お転婆も大概になさいませ」

顔を近づけたインダラに唾をとばして注意を逸らしてユリウスがレイピアに止められたレースを引きちぎって片手で印を結ぶ。風と火の範字を宙に書いて叫ぶ。『爆！』

咄嗟に風の盾を出して爆風を防いだインダラは柱からレイピアを引き抜いて壁を蹴ってジャンプする。ユリウスの背後に飛び降りるとユリウスの足を払いうつ伏せにさせた。その背中に自分の片膝をついて押さえ、レイピアを顔のすぐ横に突き立てる。

「観念なさい、あなたは体術も剣術も私に敵いません」

「つ……解かったから足をどけろっ」

「本当にお解かり頂けましたか、なかなかカルラ様は油断出来ませんからね。経典の在りかをお教え下さい。そうしたら信用いたしましょう」

レイピアを引き抜いてユリウスの髪を結っているリボンをぶつりと切る。インダラは、それで両手を後ろ手に素早く縛る。

「言っておきますが呪文だけの呪は私には効きませんよ、反呪の札を身につけておりますから」

この細身の男のどこにそんな力があるのか、立ち上がると片手でユリウスを立たせる。

「経典はモンドの廟だ」

ユリウスが答える。

「では取りに参りましょう、竜門を開けて下さい」

「これでは印が結べない」

弱弱しくユリウスが言うが。

「だめですよ、その手にはのりません」

インドラが笑う。

「何を結べばいいのか言ってくだされば私がやります」

ちつと大きく舌打ちしてユリウスが早口で言う。

「内獅子印、不動根本印、宝瓶印だ」

次々と印を結んでインドラがユリウスを見る。

「アルベルト！ ルーファス！ サイロス！ 解せよ！」

ユリウスの声に暗闇が現れた。

「お先にどうぞ、カルラ様」

促すインドラを一睨みしてユリウスは竜門に飛び込むや否や呪を唱えた。『閉じよ！』ユリウスと共に闇が姿を消す。

驚いているインドラの直ぐ後ろにもう一度竜門が開いてユリウスが飛び出してくると振り返ったインドラに体当たりする。その先に現れるもう一つの穴。

「何？」

インドラが不意をくらって竜門に落ちたのを確認してユリウスが呪を唱える。

「アルベルト！ ルーファス！ サイロス！ 天地四方を閉じよ！」

レーン文字を宙に描いて床にくたりと座りこんだ。

「捕まえたか、竜道の主の私が腕を封じられたくらいで竜門を一人で使えぬと思ってくれたのが幸いしたな」

ユリウスがにたりと笑顔を浮かべたところに風きり音のような声が聞こえた。

「主よ、残念ですが穴を空けられて逃げました」

「解かった、アルベルトもう良い。それより解してサイトスから戻

るクロードが通れるようにしてくれ。それと私の手を自由にしてくれ」

「御意」

黒い影がユリウスを包むと手首に巻かれたリボンがはらりと落ちた。

「やっと帰れたよ」

大きな声とともにクロードが竜門から顔を出した。

「何か急に竜道が目の前で閉じちゃってさあ、壁が出来たようになったからびっくりしちゃったよ。その壁にレーン文字を描きつけて爆したら光が飛んで壁に穴が空いてやっと出られると思ってたら壁が急に消えてさ。あれって何だったんだろう……ってどうかした、ユリウス」

「おまえか」

ユリウスが額に手をやって溜息をついた。

「それに、どうしたの、その格好」

ユリウスの夜着の袖口から肘まで美しいレースが無残に引きちぎられて焼け焦げまでそこに出来ているし、髪は結ってないし。

「……インダラが襲ってきたんだ」

ユリウスがぼそりと言った。

じゃあここで戦いがあったのか、インダラはかなりの体術の使い手だったけど。でもここにいないってことは。

「やつつけたの？」

クロードの言葉にユリウスの目は冷たい。

「捕らえたと思ったがおまえが逃がしてやったんだよ、おまえのお得意の術でさ」

「と、いうことは。じゃあ、竜道が閉じてたのって」

「インダラを閉じ込めてた」

あー、そうだったのか。

「あのさ、夜着の事は俺がアリスローザに謝るからね」

「殊勝なことを言っているけどそんな事ぐらいで割が合うわけがな

いだろう、クロード」

「わー！ 御免なさい」

クロードは言いながらユリウスの攻撃に備えてレーン文字の『エイズ（防御）』を宙に描く。

「そんな小細工をするところが頭にくるんだっ」

ユリウスが風と力の範字を描いて宝瓶印を結んで押すようにすると稲妻が床近くを走り、クロードに向かう。稲妻が『エイズ』を引き裂いて轟音と共に四方へ飛ぶ。あまりの音に外からデイビツトの声がする。

「ユリウス様、何の音です？」

そこで、二人ははっと部屋を見回した。

「クロード、片付けろ」

「俺？」

片付けろってダマスク織りのカーペットは四方向にひどい焼け焦げが出来ているし、そこら中めちやくちやじゃないか。

「もう、自分の感情にまかせて術だすのやめてよね」

クロードはぶつくさ言いながら取りあえずテーブルや椅子を起こして元の位置に戻す。暖炉から引き抜いた炭状になっている薪を使って魔方阵を描いていく。その中にレーン文字で『ダガス』（打開）を中心にした復活呪文を書き入れる。

「これでどうかな」

クロードは額の汗を拭いながらクロードの後ろで腕を組んでいるユリウスに声をかけた。クロードは魔法陣があまり得意ではないので練習も他に比べて怠りがちだったせいで声も小さい。

ふーんと言いながらユリウスは少し眺めて所々描き加える。

「……まあやってみろ」

何か含みのある言い方で言われたがこれ以上考えられないので、クロードは魔方阵の真ん中で印を組んで自分の書いたレーン文字を左から読んでいく。空間がぐにやりと歪んでゆらゆらと陽炎のように揺らいだ後。色という色が混ざっていくような感覚に眩暈を

覚える。

クロードはぎゅっと目を閉じて耐えていた……。

「終わったぞ」

ユリウスの声がする。

「成功した？」

クロードの問いにユリウスが答える。

「まあまあだな、自分で見てみる」

言われて恐る恐る薄目を開けたクロードは、部屋を見てユリウスのまあまあの意味が解かった。

「全部新品にしちゃったのか」

何だかぴかぴかと安っぽく光る室内に内心焦るがクロードにはどうしようもない。アンティークの家具は作りたての軽い色合いに変わっている。

「土台の魔方陣自体がすでに違っていたけどまだ教えてなかったし、これだけでも上等かな」

ユリウスが珍しく褒めてくれたのはいいがこれを直してくれる気もないらしいのに焦りが募る。そこへラドビアスが入って来た。

「外でデイベットが心配しておりましたが、どうなさいました……

あ、これは」

ラドビアスは時と場合によっては使用人としては思えない事をする。例えば今のように何のおとないも無しに許可なく主人の部屋に入って来たり。入ってきてからラドビアスは挨拶をした。

「ただ今もどりました。で、これはどうなされたのです、ユリウス様」

一渡り部屋を見回して最後に自分の主へ目を留める。

「また、何かやらかしたんですか」

「なんで私に聞くんだ。クロードがやったんだ」

ユリウスがさも心外という顔を見せて言った。

僕の想い

「クロード様、ですか」

クロードはラドビアスに背を向けていたが背中越しにもラドビアスの視線が感じられて何かうまく言わなくちゃと思うが何も浮かんでこない。

「部屋を綺麗にしようと思ってさ」

自分でもこりや嘘だと思うような事しか口に出来ない己の正直さを呪った。

「綺麗は綺麗ですが後で問題になりますよ、私が手直しして宜しいですか」

クロードの嘘っぱちに何の突っ込みを入れるで無くラドビアスがクロードに問う。

「お願いするよ、助かった」

クロードはほっと胸を撫で下ろす。

「それより服をお持ちしましたよ、早速お着替え下さい。ユリウス様もその小汚い夜着をお脱ぎ下さい」

話が他へずれてやれやれとクロードは服を着替え始め、その横でラドビアスはユリウスの着替えを手伝っていたがユリウスの手首に目を止めた。

「それはどうされたんです」

うつすらと残る手首の赤い紐の跡。

これは……と、ユリウスがうつと言葉につまる。

「これは、何ですか」

ラドビアスが畳み掛けるように聞く。

「これは　クロードがしたんだ」

苦し紛れにクロードの名前を出してユリウスがそっぽを向く。

「クロード様ですか」

片眉を上げてラドビアスがクロードを見る。

何で俺なんだよ……くそつ。

「ごめん、俺です。俺がやりました」

クロードはやけくそ気味に大声を出すと、何でとか、どうやってとかというラドビアスの追求が始まる前に部屋を飛び出して行く。ラドビアスは脱ぎ散らかった二人分の服を片付けながらクロードが出て行った方を見やった後、つと屈んでユリウスの方へ顔を向けた。

「インダラが来たのですね」

ユリウスの目の前に一本の長い絹糸のような黒髪を突きつける。

「髪を結ってくれ、ラドビアス」

片手でラドビアスの手を払いのけてユリウスが今着替えたばかりの深紫の服と同色のリボンを突き出す。

「この後、ドミニクに挨拶に行つてトラシユのサロンに顔を出す」

「はい」

ユリウスの髪にブラシをかけて片側に寄せてリボンで結び、髪を前に垂らす様にまとめながらラドビアスは頷く。

「それと、クロードを呼んでくれ」

クロードは部屋に戻るとガリオールから渡された呪符の分厚い束を懷から取り出して、ユリウスから預かっている品々と一緒に寝台の下に隠した。それにしても今日は朝から左胸の辺りがじくじく傷んで仕方がない。

「竜印が完成するときはもつと痛いのかなあ」

そして竜印が完成したらクライブに仕えて何十年かの後。

魔道師庁に組み込まれてクライブと名を変え、ユリウスともラドビアスとも別れているのだろう。

その考えはとても寂しくて自分で考えておきながら急いで頭を振った。俺らしくもない。

その時はその時だ。

「クロード様、主が呼んでおります」

外からラドビアスの声が聞こえた。クロードが部屋に入るとユ

リウスが手招きする。

「私が主城に行っている間にこの州城の城壁に沿ってガリオールから受け取った呪符を貼って来い。場所はこの地図を見る」

「解かった」

返事をして踵を返して部屋を出ようとするクロードの腕をユリウスがやや乱暴に掴んで引き止めた。

「何？」

「クロード、おまえを信用しているからな」

「どういうこと？」

「もう、いい、行け」

怒ったように言うユリウスにわけも解からず部屋を出ると、ラドビウスが入れ違いに入っていく。

「主城においでになりますか」

「……」

無言のまま先に行くユリウスにラドビウスが声をかける。

「何かお気に障ることはありませんか」

「……」

「カルラ様」

わざと主の嫌う昔の名前を出す但振り向きもせず、答えないユリウスにラドビウスが溜息をついてユリウスの右手を掴んで振り向かせた。

「何をするんだ、手を離せ」

「……主が私を避けていらっしやるからです」

ラドビウスがひたとユリウスを見る。

「そう思うのは自分に後ろ暗いところがあるからじゃないのか」

ユリウスはラドビウスをじろりと見ながら自分を掴まえている彼の手をゆっくり剥がす。

「私は、主を、あなたを失いたくないだけです」

ラドビウスが再度離された手を掴んで強く引いて自分の方へ倒れこむユリウスを抱き抱える。

「あなたを失いたくない」

絞りだすように言いながら背中に戻る手。

「やめろ！ ラドビアス、離せ！」

もがくユリウスをさらにきつく抱きしめて目はユリウスの薄い唇へと移るが……。 ラドビアスは、ユリウスの顔に怯えの色を見つけてはっと腕を緩めた。

「お許しを」

言葉が終わる前に拳が頬に飛ぶ。

「許せるわけないだろう、大ばか野郎！」

ユリウスがもう一度拳を握る。

「私に二度とこんな事をしてみる、殺すぞ！」

「それは…… 確約出来かねます。ベオークにいらした頃からお慕い申し上げていたのですから」

「ベオークのことなど言うな！ 思い出したくも無い！」

ユリウスが目を閉じて嫌な物を吐き出すように言った。

忘れえぬ苦い記憶

幼い頃、母親が顔と言わず体と言わず痣だらけになっていることがあり、カルラは子供心に犯人を見つけてやるとある夜半過ぎ寢室を抜け出すと主殿の廊下をあても無く歩いていたが、細い母親の叫び声を耳にした。

「あれは母様」

声のした部屋に飛び込もうとしたカルラは十歳違いの兄バサラに軽々と抱きとめられた。

「止める、カルラ」

「兄様、誰か、母様に酷いことをしているに違いないよ、助けなきゃ！ 母様を殴る奴をぶっ殺してやる！」

おのれの腕の中で暴れる弟を落ち着かせようと意識してバサラは声を落とす。

「静かに、おまえに敵う相手じゃない」

「兄様、この中に居るのが誰か知っているの？」

バサラがカルラの頭を優しく撫でながら静かに言う。

「クビラ兄様だよ」

「は……？」

力が抜けて床に座り込んだカルラの背中をバサラが優しくさする。

「アニラ、いや母様を助きたいなら強くなるしかない。このベオークでは強い者が弱い者を支配できる習いだ」

バサラが淡々と諭すように言うのにカルラが素直に頷く。カルラにとってバサラは特別なのだ。

「強くなつて母様を泣かす奴を皆ぶっ殺してやる。クビラもだっ！」
そう言つて拳を握り締めるカルラをバサラは抱きかかえたまま立ち上がった。

「手伝つてやるよ、そしておまえは私が守つてやるよ。部屋まで送つて行つてやるう、もう、寝る時間だよカルラ」

「うん」

カルラは急に眠気を覚えてバサラにしがみついた。兄とは言っても他の兄弟たちは実際は兄では無い。皆、カルラより二百歳以上歳が上でとても兄弟の情などを持てる対象では無かった。

日常的にもまだ幼いカルラは兄たちのいる主殿から離れた宮に住んで居る為、兄たちとめつたに会うことも無い。それに比べてバサラは十歳位しか離れておらず、ついこの間まで一緒に 同宮に部屋をおいていたため、カルラにとって頼りがいのある大好きな兄だ。そのため、暇さえあれば後ろについて歩いていたし、バサラも何くれと自分の修業の合間に弟の面倒をみていた。

カルラが十二歳のある日、カルラは夜遅くまで術の練習をしていた。昼食時一緒に食事をしたバサラに出されていた課題に取り組んでいたのだ。

「おまえには少し難しいかな」

バサラの笑い顔にムキになって夜更かしをしてしまったがやっと成功したのだ。

「出来た、兄さま起きていらっしやるかなあ。すぐ見てもらいたいのだけど」

こんな遅くに主殿まで行くのはどうかと迷ったが勉強熱心な兄はまだ起きているだろう。

前にも雷が怖くて兄の寝室へ潜り込んだ時も寝台の中で分厚い本を読んでいたっけ。

「仕方ないなカルラ、今日はここで寝なさい」

あのときも、そう優しく言ってくれた。その時のことを思い出して足早に辺りを気にしながらバサラの寝所に向かう。

「兄様、今日出された忘却術の魔方陣を見て下さい」

闇の中を走って来たため、言うが早いか扉を開けて兄の顔を見ようとバサラの寝所に入って来たカルラの足が止まる。バサラの寝

台にいたのはバサラだけでは無かった。

「カルラか、ああ忘却術が出来たのかい、見てあげたいけど今、ちよっと取り込み中なんだ。明日見てあげるよ、もう遅いからお休み」固まっているカルラに寝台の中からバサラがいつものように話しかける。が、しかし何事もないように平然としているバサラの下には女がいたのだ。良く見知っている、カルラが母と呼ぶ女。そして勿論バサラの母でもある。

がくがくと震える足を叱咤しながらカルラは部屋を出る。その後は自分の部屋にどうやって帰ったのか覚えていない。

ただ一つはつきりしたのは自分には母も兄も要らないということだ。自分は一人きりで生きていくのだ。頼るものなど無くていい。その日以来、母親や兄達を避け独学を続けた。

十五歳の時に母アニラが死んだがカルラは葬儀にも出なかった。しかし、アニラが死んだことがカルラにとって大きく関わっていることがこのときはまだ解かっていなかった。

それから二年後、気が遠くなるほどの膨大な量の書架の林の中。巻物を捜していたカルラが伸ばした手の先の巻物をすらりとした手が背後から先に取り上げた。

「そら、これだろう欲しいのは？」

少しハスキーな聞き覚えのある声に振り返ると、自分より頭一つ大きい自分によく似た男が巻物を手に立っていた。

「バサラ」

「兄様とはもう言うてはくれないのか、残念だな」

バサラは薄く笑って唇を片側吊り上げた。

「私には兄などいない。ここで兄弟などというのは言葉遊びだ。何の意味も無い。おまえが教えてくれたんだぞ」

憎しみを込めて睨むと、奪うように巻物を取ろうとしたが反対に腕を取られる。

「久しぶりの対面にそれはないだろう、カルラ。まあそうだな、我々にとって親兄弟なんて形だけの呼び名だ。アニラが死んでピカラ

兄様は次をおまえに正式に決めたようだけど、先に渡しちゃうのは惜しくなったな」

バサラが言いながらカルラを書棚に押し付ける。

「何を言っているのか解からない、どけバサラ」

バサラがカルラの腕を掴んでいないほうの手をカルラの顔の横に突く。

「私が守ってやるって言ったのを覚えているか、カルラ」

「覚えてなんかいるものか、離せ」

「守ってやるから私のものになれ、カルラ。他の奴なんかに渡さない」
「い」

囁くように言ってからバサラが大声で扉の方へ命を出す。

「インダラ、サンテラ、蔵書室を閉めろ！ 外を見張って誰も入れるなよ」

「畏まりました」

二人の男が異口同音に答える。

「サンテラ、早く扉を閉めろ」

黒髪の男が室から出ようとしない同僚にきつく言う。

「解かっている」

もう一人の男が振り切るように蔵書室の大扉を閉めた。

「私のものにするよ、カルラ」

酷薄な笑みをバサラは浮かべた。

三日後、長兄ビカラの寢所に召しだされたカルラは、ベオークを出奔した。

アリスローザの裏の顔

遠い過去を思い出し、ユリウスは齒噛みする。

「許さないぞ、ラドビアス。ベオークのことも私を女扱いするのも絶対に。私の僕でいたいのならさつきみたいに触れるな。いいな、次は殺すぞ」

ユリウスの平手が飛んでラドビアスの口が切れて血が流れた。

何も言わず頭を下げるラドビアスに怒りが募るがどうしようも無く、ユリウスは、ただ苛々と急ぎ足で主城に向かう。そこに主城の入り口でこちらに向かって歩いて来る魔道師を見て、ユリウスが立ち止まった。

「お、お迎えにあがろうと思っておりましたのに申し訳ありません。トラシユ様もご自分がお迎えにうかがうと言っておられたのですが、急なご用事ができてまして」

しどろもどろの魔道師にユリウスはにこりと笑って手を横に振る。「いえいえ、お迎えが来る前に来てしまった私が悪いのですよ。気にしないで下さい。あなたが誰か聞いてよろしいですか」

「初めに名乗ることさえ忘れているとは、申し訳ありません」

四十台前半に見える少し薄くなった頭を撫でながら魔道師がしきりに恐縮する。

「あ、あたしは州宰のラジムの留守を預かるダニアンと申します」

「では、ダニアン。ドミニク様のところへ案内を頼みます」

通された貴賓室は美しい大理石で床を敷き詰め、上の階をぶち抜いた高い天井のせいで益々広く感じられる。壁には一面、長大なタペストリーがいくつも掛けられている。高い位置にある窓にはステンドグラスがはめ込められていて、午後のきつい陽の光がステンドグラスを通して床に複雑な模様を投げていた。

「た、ただいまドミニク様は執務中でございまして、少しお待ちをお願いします」

ダニアンと名乗る魔道師はどもりながら、やっとそう言うにあたふたと頭を垂れて下がっていった。

馬鹿だなドミニク。大人しくしていればこのまま裕福な州候として安穩と暮らしていられたのに。インダラにいいように操られていることも解からぬとは。しかし私を裏切るからにはその罪はその血で購ってもらうぞ。

ユリウスは唇の端をついっと上げる。

それからいくらか経たない間に、何人かの足音が部屋の前で止まる。

「ドミニク様がお見えです」

さきほどの魔道師の声の後に恰幅のよい男が満面の笑みを浮かべて入って来た。

「ボルチモア州候のジークフリート・ステファン・ヴァン・ドミニクです。ユリウス殿、途中暴徒に襲われたとか。我が州内で大変な目にあわせてしまいお詫びの言葉もない」

この男が腹の中にどんな暗い企みをいだいているのか知らなかったらうつかりと信用しそうな穏やかな善人に見えるが。

「ユリウス・ヴァン・ハーコートです。今回のお招き大変有難うございます。ご挨拶が遅れて申し訳ありません」

ドミニクに負けないくらいの笑顔でユリウスが応じる。

「弟君はどちらに」

「申し訳ありません、何せ城を離れたことが無かったものですから、はしやぎすぎて少し体調を崩しております。それで今日は部屋で休ませております」

「そうですね、何かご不自由なことがあれば遠慮なく言って下さい。自分の家のように思っただけです」

「有難うございます」

ユリウスはにこりと応じた。

一方寝ているはずのクロードは城壁に沿って結界術のアンカーに

なる呪符を貼っていた。

くっそーっ、まだこんなにあるよ、『貼って来い』で済むやつはいいよな。愚痴りながらもユリウスから渡された地図を見ながら指定の場所に札を貼っていく。

ばれないように隠蔽魔法いんぺいを使って周囲に紛れ込ませる。一枚一枚そんな事をしていたので全部貼り終わる頃にはすっかり陽が西に傾きはじめていた。

正門に続く跳ね橋が下ろされて、四頭立ての馬車が何台も入っていくのが見えた。馬を四頭もつけて走らせる馬車を持てるとはかなりの豪商か貴族だけだろう。トラシュはサロンと称してどんな秘密の会合をしているのか。

「クロード、あなたそこで何をしているの？」

女の声にぎよっとして見ると、何人かの騎乗した州城へ戻ろうとしている者たちの中に男物を身につけたアリスローザを見つける。

「アリスローザ、君こそ何でその格好？」

反対に尋ね返されてアリスローザは言葉に詰まる。

「あ、ちよつと散歩に」

「へえ、君って散歩に出る時、男装して帯刀するのかわ」

目ざとく腰の剣を見つけられてうろつくと目を彷徨さまよわせる。

「それは……物騒だから」

「だろうね、ブーツに血がついている。何かあったのかい？」

小さく飛び散った血痕を指摘されてアリスローザは言葉に詰まる。

「こいつ、始末しましょう」

男の一人が背負った蛮刀をすらりと抜いて馬の腹を蹴って走りこんでくる。クロードは小さく後ろ手に印を組んで馬の脚に呪を飛ばした。『縛！』クロードは言ってから大急ぎで逃げるまねをする。

「わー助けてアリスローザ、何とか言ってよ」

「止めて、トーマス」

アリスローザが叫ぶと同時に脚を縛された馬が、体勢を崩してト

「マスがどうつと宙に体を投げ出された。その拍子に手から離された蛮刀がクロードに向かってくる。」

クロードは、大げさにわあわあ言いながら頭を大きく傾げて刀を避けて馬の脚にかけた呪を解く。

『解!』

「大丈夫、トーマス?」

駆け寄るアリスローザに男は何でもないと手を振った。

「ああ、肩から落ちたが骨は大丈夫そうだ。変だな、俺の馬が急におかしくなるなんて」

肩を押さえるトーマスに剣を逆手に持ってクロードが近づく。

「はいこれ」

睨むトーマスに慌ててアリスローザがとりなす。

「トーマス、この人私が言っていたモンド州の第三公子よ。クロードって言うの、今お兄様が第二公子と会っているわ」

「そうかよ、おまえ命拾いしたな」

トーマスは言いながら刀を鞘に収めた。

「まったく、馬が体勢を崩さなかったらあなた殺されていたわよ」
アリスローザがため息交じりに言う。

「あなたとあなたのお兄様には武術方面はまったく頼れないわね」

「あはは、ごめん」

「これから州城内に帰るけどクロードはどうするの。来るなら馬に乗せてあげるけど」

ひらりとアリスローザが馬に跨る。またが

「じゃあお願い、手を貸してもらえるかな」

「ここはへたれてみせる方が得策かとクロードは手を差し出した。
手が掛かるわね」

アリスローザは呆れた顔を見せたが、実はクロードの世話を焼くのは嫌ではない。手を引いて引つ張り上げると彼は、以外にすんなりとアリスローザの後ろに跨った。

クロードは馬に揺られながらアリスローザに話しかける。

「ねえ、彼らは何者で君たちは何をしているんだ？」

「知りたい？」

そりゃあ洗いざらいそっくり聞きたいけど。

「少し、怖いけどさ」

「後でクロードの部屋に行つて教えてあげるわ」

アリスローザと分かれて部屋に帰つたクロードの部屋に、半刻もしないうちにアリスローザがドレスに着替えて一人でやって来た。

「デイビット、女官にお茶の用意をさせて」

クロードが従者を部屋から出して自分の前の椅子をアリスローザに勧めて自分も座つた。

「それで何を話してくれるの、アリスローザ」

「前にモンドのお城に行った時に言つた事覚えてるかしら」

アリスローザの言葉にクロードは少し考えるふりをする。

「ああ、魔道師の横暴うんぬんの話かな」

アリスローザが思い切り真剣な顔でクロードを見つめるのでクロードの心臓が早鐘のようにどくどく速さを増す。その音がアリスローザに聞こえるのではないかとそればかりに気をとられる。

トラシュのサロン

「魔道師の勢いを削ぐ戦いを私達はしているの」

「そんな危険なこととして……大丈夫なのか」

クロードの言葉にふつとアリスローザの口元が緩む。

「危険が無いとはいえないけど。今の所各地の廟を襲ったりしているだけだ。今年の夏至の日は今までに無い好機らしいのよ」

そうか……結界を張りなおす日だ。

「何で」

取りあえず聞く。

「あのね、詳しくは知らないけどそこら中の大きな廟の廟長や州宰、魔道師庁の上位の魔道師がそっくりどこかへ行くのよ。おまけに夏至の日の夜は国中外出禁止になるらしいわ。夜陰に乗じてモンドの廟や国府にも入り込んで、悪辣な魔道師どもを成敗できるってわけなのよ」

「勇ましいね、はは……」

「絵空事だと思っているんでしょう」

反応の薄いクロードにアリスローザが憮然として大声を出す。

「ええっ、いや、そんなこと」

まあ落ち着いてと手を上げたクロードの手をアリスローザが掴んで降ろす。

「このレジスタンス活動にはお父様をはじめ各州候の後ろ盾があるのよ」

アリスローザは鼻息荒く、どうだと腰に手をやった。

こんなに簡単に活動の裏のことまで喋っていいのか。クロードは人の事ながら心配になる。

「そ、それは頼もしいよね、各州候ってうちの父様もはいつてるの？」

重大な秘密を打ち明けたにしてはまたしても軽く返事を返すアリ

スローザは眉根を寄せた。

まだ、事の重要性も解からない子供なのかしら、確か私より二つほど下だったはずなんだけど。

「あなたのお父上は現王コーラルの兄ですもの、サイトスに近すぎるわ」

「だろうね」

俺とユリウスはその子供って事だけど、それはいいのか。

心の中でクロードは突っ込む。

「ライクフィールド候、ケースワース候、ミルフォード候、ガウス伯爵等々たくさんのお味方がいるわ。あなたはどうか？　ここまで聞いてやめるなんて言わないでしょう」

ここに至って初めてクロードの意志を確認しようとするアリスローザに、笑い出しそうになるのを堪えてクロードは深刻そうな顔してみせる。

「こんな私に出来る事があるかな」

「そんな事、お父様や兄様が考えてくださるわ、クロード大丈夫私がついているし」

すっかり保護者気分のアリスローザに両手を握られる。

「うん、がんばるよ」

調子よく答える自分にあきれる。

しかし、アリスローザの自分の意に誰もがたやすく応じると思っていることの危うさに内心心配になる。　今まで自分の意に背かれたことが無かったのか。　彼女は人の外側だけを見て信じてはいけないという事がわかっていない。　簡単に仲間に引き入れたと思っているクロードさえ、実はアリスローザの敵側の人間なのだから。

ああ、そんな事を熟知り顔で思っている俺は十四歳にしてどんどん腹黒くなっていくのだとクロードはため息をついた。

主城の二階の南側の端にトラシュのサロンがあった。　南側は大

きく窓になっっているが今日は厚めのカーテンが天井近くから下げられていた。

真夏にでもならないとこの海に近い水で周りを囲まれた城は肌寒いのだ。その為、午後とはいえまだ日は暮れていないのに灯の灯されたこの部屋は薄暗い。それが返って親しみがわく空間になっているのかも知れない。毛足の長い絨毯にそのまま腰を降ろしている者、長椅子に足を投げ出している者様々に寛いでいる。

「皆様に今日、ご紹介するのは私の友人、隣州のモンド州第二公子のユリウス殿です」

トラシユの言葉にユリウスがにっこりと微笑む。

「ユリウス・ヴァン・ハーコートです、よろしく」

集まっていた者たちが様々に囁きあっているが、ユリウスは構わず奥の長椅子に陣取って早速酒を飲み始めた。ざわざわと他愛もない話が続く中、トラシユがすくつと立ち上がって話を始める。

すると皆、話を止めてその姿を仰ぎ見た。

「皆さん、夏至の日まであといくともありません。皆様のお力を借りる日がやってまいります」

トラシユは余韻を計るようになつぷりと間を取りながら話を続ける。

「モンド州との州境近くへ密かに集結させております、うちの州兵が途中こちらにおられるモーギャン卿率いるライクフィールドの州兵と合流してゴート山脈側からモンドの廟に入ります。廟を制圧した後、イーヴァルアイなる老魔道師を捕縛。それにより、このレイモンドールに巢食っている魔道師どもの首根っこを押さえる手筈になっております」

「我らが州境を侵犯しようとしている州の公子など呼んで大丈夫なのか、トラシユ」

モーギャン卿がトラシユに厳しい目を向ける。

「だからこそ第二公子ですよ、モーギャン卿。彼には将来モンド州を担ってもらうお手伝いをさせて貰う代わりにこちら側について

もらいます」

「そうなのか」

モーギャン卿がユリウスの方へ顔を向けたため、皆の視線がユリウスに集まる。

「そのように承知しておりますが」

酒を飲むのを一旦やめてそれだけ言うともた杯に口を付けてぐいと呷ってユリウスは、立っているトラシユを見上げた。

「先程の話ですが、大事なところで穴が空いておりますよ」

「どういう意味だ!」

モーギャン卿が馬鹿にされたのかと大声を出す。

「我がモンド州のゴートの廟ですが、皆様行けば何とかなると思われているのなら大変だと思ひましてね」

ユリウスが笑いながら言うのを、トラシユが皆に目配せしてまああと宥める。

「理由を聞かせてくれますか」

「モンドの廟と皆様は一言で言うてらっしゃいますがモンドの廟は昔ならいざ知らず、今ではゴート山脈一帯に広がっているのですよ。山脈のあちこちに大小の廟が建っていてそれを一つ、一つ捜してゆかれるのかと思ひまして。そんな事をしている間に私がイーヴアルアイなら竜道使ってスタコラ逃げているかなと思ひますが」

ユリウスの話に皆ぐうつと黙り込む。

「だからこそ、モンドの廟に詳しいあなたをお呼びしたんですよユリウス。あくまでも廟へは奇襲でなくては意味がありませんからね。そして、お酒はもうだめですよ」

トラシユがユリウスの手から杯を取り上げてテーブルに置く。

「このくらい大丈夫ですよ、トラシユ様」

無然とした顔を隠そうともせずユリウスは立ち上がった。

「私の知っていることはお教えします。それでは皆様、お先に失礼します」

言うだけ言うてさっさとサロンを出て行くユリウスをトラシユが

慌てて追いかける。

「皆様すぐに戻りますので」

「ユリウス、待って」

「あのモンド州の公子、女のような顔であれであてに出来るのか」
自慢の顎鬚を撫でつけながらモーギャン卿が苦々しく言った。

「でも美しい方ですわね、噂以上でしたわ」
横に座った豊満な体の女が嫣然^{えんぜん}と笑った。

「ユリウス、気分を害したのかい」

先を行くユリウスに走り寄るトラシュにユリウスは立ち止まって
振り返る。

「あんな穴だらけの計画に私を引つ張り込むつもりだったのですか、
トラシュ」

「それは」

ユリウスにじっと見つめられてトラシュは僅かに目を背けた。

「父上や兄上を裏切って、成功するわけのない反乱ごっこに加わる
ほど私は世間知らずではありませんよ。いくら上位の魔道師がいな
くても州境に兵が集められている事くらい廟は把握している筈です。
それとも廟に対して、または、父上に対して何か他に有効な策があ
ると言うのですか」

「……それは……」

「私には話せない事がまだあるようですね、トラシュ様。廟の様子
については思いつく限り詳しく描いたものをお届けします。それで
は失礼します」

素早く踵を返して立ち去ろうとするユリウスにトラシュが追いつ
がるように言う。

「ユリウス、どうかわたしの話を」

「ラドビアス、いるか」

トラシュの言葉を断ち切ってユリウスが自分の従者の名を呼ぶ。

「はいここに」

柱の影から姿を現したラドビアスがトラシュに頭を下げた。

「では明日またお目にかかります」

トラシュが差し出した手を仕方無く握ると、その手にトラシュが唇を寄せる気配にユリウスはすうつと手を引いた。

身を翻^{ひるがえ}して帰るユリウスの後姿をトラシュは見送つて。出したままの自分の手を見ながら呟く。

「つれないな」

そして、にやりと笑った。彼らしくない笑み。しかしそれは直ぐに消えていつもの好青年の顔に戻った。

レジスタンスのアジト

クロードは隣のユリウスの部屋の扉が音を立てたのを聞いてユリウスが返ってきたのを知った。

「アリスローザ、兄様が帰って来たみたいなんだけど仲間を紹介してもらうの、兄様も一緒にいいでしょ」

「そうね」

立ち上がりかけたアリスローザを制してクロードが席を立つ。

「呼んで来るよ、待ってて」

「ユリウス、帰って来たんでしょう、入っていいかな」

「どうぞ、クロード様」

ラドビアスが応じて扉を開けた。部屋に入るとユリウスは羊皮紙に向かって何やら描きこんでいる。

「それは何？」

「モンドの廟の大まかな地図だ」

「何で？」

「トラシユに渡す」

顔を上げずに羽ペンを動かすユリウスの右手を、クロードは思わず押さえて止める。

「そんな事したらこっちが不利になるじゃないか」

ペン先からインクが漏れて黒いシミが広がるのを側にあった布に急いで吸い取らせて、ユリウスが顔を上げた。

「何も詳細なものを渡すつもりは無い」

「……え」

「それ、らしいものだよ。邪魔するなクロード」

そういうことか。

「ねえ、アリスローザがレジスタンスの連中に引き合わせるって言うてるんだけど。ユリウスも来てよ」

クロードの言葉にユリウスは、面倒臭そうにペンをインク壺に突

っ込んで羊皮紙をラドビアスにぽんと渡す。

「仕舞っておいてくれ」

そう言つと、渋い顔のままクロードの部屋の扉を開ける。

「アリスローザ様、先程クロードからあなたもトラシユ様と同じくレジスタンス活動を主導しておられると伺いました。さすがトラシユ様の妹君、凛々しくていらっしゃる」

直前までの渋面はどこへやら、アリスローザにお世辞を言いながらにこにこしているユリウスの背中にクロードは小さく舌を出した。「主導しているなんて大げさだわ。でもトラシユ兄様のお手伝いをしているのは本当なの。お二人が力を貸して下さるなら嬉しいのだけど。アジトへご案内しますわ」

先に立って出て行くアリスローザの後ろからクロードとユリウスも続く。ユリウスが付いて行こうとする、デイビットとラドビアスに冷たく言う。

「ついてこなくていい」

「ですが」

デイビットが食い下がるが。

「聞こえなかったか」

ユリウスの有無を言わせぬきつい調子にデイビットも黙った。

小宮を出ると、主城に行くのとは反対方向へ向かう。そのうち前方に古い教会の尖塔のような物が見えてきた。

「あれよ」

アリスローザが指差すそれは、近づくにつれ無残な姿をさらしていく。崩れかかった建物の中はそれこそ瓦礫の山。ここに人がいるなどとはとても思えない。その瓦礫の山を半分以上迂回した先の床に金属で出来た四角い蓋があった。アリスローザは慣れた手付きで取っ手を引き起こすとそれを掴んで立ち上がるように持ち上げた。

そこに地下に続く階段が現れ、暗く斜度のきつい階段をやっと下りて行く。すると降りきった所に分厚いドアが立ちはだかつてい

た。

どん、どん、……どん。

「二回続けて少し間をあけてもう一回叩くの」

アリスローザがドアを叩くとすぐに低い男の声が聞こえた。

「モンドの蝶は」

「蜘蛛に捕らわる」

アリスローザの答えの後に内側から門をはずす音がして、軋む音を立てながらドアが開いて男が顔を出した。

「私よ、モンド州の公子を二人連れてきたの」

アリスローザに入ると、それだけ言って男は姿を引っ込めた。

階段と同じくらい薄暗い足場の悪い通路を抜けると急に開けた部屋に出る。そこには大きな机とベンチ式の椅子が置かれていて、その椅子に五、六人の男たちが座って談笑していた。だが、アリスローザの連れてきた新顔の二人に気づくと注目して黙り込んだ。

「紹介するわ、モンド州の公子のユリウス様とクロード。クロードにはさつき皆会っていると思うけど」

なんで俺は呼び捨てなんだよ、アリスローザ。クロードはこっそりつぶやく。

「そして右からヘンリー、クリストファー、ステファン、マーク、ウィリアム、そしてトーマスよ」

アリスローザの紹介の後に男達から不満の声が上がる。

「おいおい、モンド州っていえば今の国王の兄が州公をやっているところだろう。大丈夫なのか」

ヘンリーと呼ばれた男が胡乱そうに言う他男たちも大きく頷く。

「そんなぺらぺらした服を着たお姫様みたいなのと可愛い坊ちゃん二人に何が出来るといんだ」

クリストファーがおどけたように言う。

「剣をふるうのは確かに出来ないし、するつもりも無いが。わたしの立場と資金はこの活動に有益だと思うが」

ユリウスが一同を見回して言う。

「ちえっ」

トーマスは面白くなさそうに椅子から立ち上がると壁にもたれて腕を組んだ。

「まあこの場所も武器も何もかもあんたらが提供してくれているんだから好きにすりゃあいい」

「次の襲撃の場所だが……」

机に地図を広げてヘンリーがペンで何箇所か印を付ける。そこにいる人数分印があるということはここにいるのは各グループのリーダー格の者らしい。そう、クロードは見当を付ける。ヘンリーが話出すが、遮るように地図の上にトーマスの大きな手がどかっと置かれる。

「今日はその話は無しだ」

そう言ってユリウスの方へ顎をしゃくってみせると、他の男たちもはたと黙り込んだ。じろりと見るトーマスにユリウスも負けずに見返して、暫くの間二人の睨みあいが続いたが先に視線をはずしたのはトーマスだった。気まずい空気が流れる。

「その刀、変わってるよね、大陸で使われている物みたいけど」
張り詰めた空気を破ってクロードがトーマスの背負っている刀を指差して尋ねた。

「シャムシール」

ユリウスの声。

「違うな」

と、トーマスが応じる。

「よく似ているがタルワールだ」

ぼそりと言って背中から抜いた剣をクロードの鼻先に突きつけた。
「この剣は片刃だよ、突くのには向いていない」

抜き身の刀の背をついと撫でて、クロードはトーマスに笑いかけた。

「それに良く似た剣を使う奴を私は知っているがおまえ、どこでそ

の剣を手に入れたのだ」

ユリウスが探るように目を細めてトーマスを見たが、当の本人は知らん振りを決め込んで壁にもたれている。

「シャムシール使いがレイモンドールにいるとはね。シャムシールは大陸の南でつかわれている湾曲した柄と刀が特徴だ。そいつのは柄が長い。振り下ろした時にてこの力が加わってより強力な力で切ることが出来るようにもなっているのだろうさ」

ユリウスの解説にウイリアムがへえーと感嘆の声をあげた。

「俺も剣術習いたいんだよね」

クロードが呟く。

一応モンドの城でも基礎は習っていて結構好きでもあったが今までもう少しつっこんで極めたいとは思っていなかった。ところが最近身の危険を感じることが多くなり、自分の命を他人に託すばかりなのが厭わしい。つまりは強くなりたいのだ。魔術においてはユリウスでいいが事、体術、剣術においてはからつきし頼りにならないことは解かっている。だからラドビアスに頼むつもりでいたのだ。

「トーマス、私に剣を教えてくださいませんか。ここにいる間の、空いている時でいいのだけど」

「俺はいつもここにいるわけじゃないぜ」

「それはいいわ、トーマスは剣術の達人だもの。二日はいるでしょう、トーマス」

やっと場が和んだとほっとしたアリスローザが口を出した。

「はっ、面倒なこった!」

トーマスが地面に向かって言う。

「嫌だつて言わないってことはイエスよね」

アリスローザがクロードに笑いかけてきてクロードもつられて笑うが心からは笑えない。それは、さっきクロードに近づいたユリウスが耳元に短く言葉を残し離れたからだ。

「トーマスを探れクロード」

え？　と思ったときにはユリウスはクロードの側から離れていてどういう理由かも解からなかった。

「クロードがやる気になってくれて私も嬉しいわ。早く私の相手ができるくらいになってね」

「あ、そうだね」

アリスローザに曖昧に返しながらクロードはトーマスを見やっだが、トーマスはこちらを見ようともしなかった。

「では今日のところは私達はお邪魔のようですので失礼します」

ユリウスがすたすたと帰る後姿にクロードも追いつこうと走る。

「ユリウス、俺剣うまくなるからね」

「何だ、急に」

「だからさ、おれの事頼りにしてって事だよ」

ユリウスの背中が震えている。

経典の在り処

「笑ってんの？」

「いや、頼りにしているよクロード、勿論」

ユリウスを追い越して顔を確かめるとユリウスは笑っていたが、それはいつもの人をばかにしたような笑みではない。もつと暖かなものでクロードはびっくりしてその顔に見入ってしまった。

「私は独学で苦労したからな。このごたごたが終わったらちゃんとした剣術の先生をつけてやるよ。期待しているからな、クロード」
そう言ってまたほっこりと笑った。

ユリウスが、こんな優しい笑い顔をする事があるなんて今まで気付かなかった。

「魔術は誰かに習っていたんでしょう？」

「十二歳まではね」

「その後は？」

「経典を自分で探して勉強した。だから私はラドビアスやインダラ達とは術が違うのだ。いろんな術を混じって覚えたからな」

それでラドビアスと違うのか。今迄ラドビアスの方が異端だと思ってきたが、レイモンドールの魔術の祖はユリウスなのだからガリオールやルークが同じなのは当たり前なのだ。正当な魔術とっていいのか、それはラドビアスの術の方だったのか。

「私の術は禁術を用いることが多い。結界術もその一つだ。普通は結界を張る場所に何箇所か呪符を置いたり貼ったりして術をかけるが、私のははるかに呪力が強い」

「あー今日の呪符の事？」

尋ねるクロードにユリウスが頷く。

「そうだ、あれだけでも一応結界の呪文を唱えれば術は発動するが……」

言つか言つまいか、少し迷っていたが言葉を繋げる。

「血を使う。それも大量の」

「血」

おうむ返しに聞くクロードにユリウスはうなずく。

「私はビカラから秘伝の経典を盗んだからな」

ユリウスの口が半円を描くようににまりと上がる。いつもの笑

顔。

「禁術には大量の血が必要だ。だからわたしの結界術もまたしかり。大勢の贄^{にえ}が必要になる。おまえも連れて行くつもりだからそのうち解かる」

酷薄な顔で笑うユリウスを見て禁術について解かりたいんだか解かりたくないんだか自分でも判然としなかった。ただ、その時に使われる贄^{にえ}ってどういう経緯で得られたものなのかが酷く気になるのだが。

「クロード、トーマスとか言う男、どうも引つかかる」

「うん、探ってみるよ」

話しながら歩いていたのもう小宮の前に来ていたのだ。 ラド

ビアスが城の前で立っている。

「お帰りなさいませ」

「ただいまラドビアス」

挨拶を返すクロードの横をユリウスが知らん顔で通り過ぎて行く。

「どうしたのラドビアス、ユリウスと何かあった？」

いえ、何も、といういつもの返事を期待していたクロードは、はいというラドビアスの返事にびっくりして聞き返す。

「どういうこと？」

「先程私の気持ちを口走りまして、主の怒りを買いました」

「早く来い、クロード。やることが山のようにある！」

何を言ったのか大いに気になったが、前に行くユリウスの冷たい声に断念する。一体どこで何を怒り出すやらクロードには今一解からない。いい加減結構な歳なんだからまるくすることを覚えて欲しいと心の中で呟く。

しかしこれを口に出しては、ばかを見ることぐらいは経験値を上げたクロードだった。帰ると早速書きかけの先程の羊皮紙に廟の名前と場所を書き込んでいるユリウスに長椅子に足を投げ出しているクロードが話しかける。

「きつとインダラは経典を廟に隠してると思ってるよね」

はつと顔を上げたユリウスに、クロードが得意げに続ける。

「でも良く考えれば経典のありかなんて簡単に解かるよね」

「クロード！」

いきなり大声で怒鳴られてその後の言葉をぐくりとクロードは飲み込んだ。ユリウスの形相にやつちやったかと悟る。あつという間に口を塞がれ、床に転がされてクロードは絶対体術も習ってやると決意する。

「それ以上一言でも言つと忘却術をかけておまえの頭の中を真っ白にしてやる」

ぐいつと掴まれた喉が苦しくてヒューヒュー言っているのに容赦なく力を入れられて気が遠くなる。

「お止めください、クロード様が死んでおしまいになりますよ」

ラドビアスがユリウスの体ごと抱えてクロードから離す。

「クロード様、しっかりして下さい」

頬を軽く叩かれてクロードはうつすらと目を開けた。

「気がつきましたか、起きられますか」

ラドビアスがクロードの背中に手をまわして抱き起こす。

「死ぬかと思った」

「おまえが聡いのは解かったが、なんでもかんでも口に出す癖を止めないと早死にするぞ」

殺そうとした本人が言うのだから間違いないか。

「喉に跡が残りますね」

クロードの首に心配そうに触れながらラドビアスが言う。

「それを見て自分のおしゃべり癖を反省する縁にすればいいんだ」
書き上げた羊皮紙をくるくると巻き上げて、ユリウスがラドビア

スに巻物を突き出す。

「これをトラッシュに渡してこい」

「はい」

ラドビアスが出て行った方をなんとなく二人は同じ目線で追った。

「口に出すなよ」

顔を見合わせた途端にユリウスがけん制するように言う。

「どこに耳があるのか解からない」

「うん」

「このままインダラを廟に向かわせて始末しようと思っているのだから」

「そんな事できるの？」

「やるんだよ」

いつものように唇の端を上げて笑い顔を作ったユリウスをちらとクロードが見る。

「自信満々の顔だと思ってたよ」

「何が」

「その、顔の事」

クロードが前を向いたまま膝を抱える。

「この顔って」

首を傾げて問うユリウスを無視して前を見ているクロードにじれてユリウスがきつく言う。

「クロード、気に障るまねをやめろよ。最後まで言え」

「んじゃあ、言うけど余裕のあるときにする顔だと思っていたけどさっきのは違うんじゃないかと思ってさ」

クロードはくるりとユリウスに顔を向ける。

「すぐく切羽詰まった時もそうやって笑うんだと思ったのさ」

酷薄な笑顔の皮一枚下はどんな顔をしているのか。ベークから逃げて来た時、ユリウスは自分とそう歳の変わらない十七歳だった筈だ。追っ手がいつ来るかと思いいながらいかに自分を守ろうかと経典を自分の頭に叩き込んでいる彼は。その頃からニヤ

りと笑っていたのだろうか。 余裕があるように見せていた顔の正体をちらりと見た気がした。

「おまえは可愛いが可愛くない」

ユリウスは謎賭けのような事を言いながらクロードの頭をぺしりと叩いた。

「言っている事解かないよ」

「解からなくていい」

クロードの言い分にも何も無く切り捨てられた。

そこへ何の前触れも無く竜門が開く。

ガリオールの訪問

「大変です」

ガリオールが自ら竜門を使ってサイトスから離れるのは、クロードに竜印を刻みに来た時以来かもしれない。と、するならば。

「王に異変が？」

ユリウスの問いにガリオールは頷いて一旦竜門を閉じた。

「しかしあまりにも早いな、普通は二、三年は持つものだが……」

言いながらユリウスは、ヴァイロンの死期も慌ただしかったのを思い出していた。

「朝、剣が鍵のすがたに一刻ほど戻っておりまして」

「それで王の容態は？」

「それは今までとお変わりありませんが」

「夏至の日まで持つかな」

ガリオールにユリウスが声を低くして言う。

「なんとも、どちらとも言いかねます。初代の王、ヴァイロン陛下の時とよく似ておられますが」

ガリオールも思い出していたらしくヴァイロンの名を出して目を細める。暫くの間の沈黙をユリウスが破る。

「ここの結界は私とルークとクロードに任せておまえはリチャードとサイトスに残れ」

「クロード様ですか」

「王の崩御が近いのだ、おまえはサイトスから離れるべきではない」

「主がそう仰せならば従います」

ガリオールは深く頭を垂れる。ガリオールにとっての主イヴアルアイは絶対神である。自分がレイモンドールの魔道教の魔道師を養成する廟の学生だった頃から尊敬し、崇拜していた。

その主に認められて竜印を頂いたときの誇らしい気持ちは忘れる事が無い。

その為に、時に主に意見し、軽んずることを口にするラドビアスに我慢が出来ない。それを態度や顔に出すガリオールではないが、主の一番の僕は自分であると自負している。

主によって不死の力を与えられているのだから。ラドビアスとは違う。

ガリオールにとってレイモンドール国の魔道教による支配、今の状況の他を考えることなどあり得ないことだった。そこがイーヴアルアイ自身のことしかみていないラドビアスとの違いなのだということ、ガリオールにはわからない。

ラドビアスにとってイーヴアルアイ、いやカルラの身が無事ならば、いる場所はどこでもいいのだ。いわんや生きていたならその場所がベオーク自治国のバサラの寝所であってさえも。

「変わった事があればすぐに知らせてくれ」

「畏まりました」

ガリオールが竜門に消えてクロードがささず声を上げる。

「ガリオールの抜けたあとに俺って」

「ふん、結界を張るくらい本当は私一人で出来る。寝小便を見つけたときみたいな顔をするなクロード」

「寝小便なんかするかっ」

「ついこの間までしてたくせに、覚えているぞ」

怒るクロードにユリウスがからかい口で言う。

「それよりこれからモンドの城に帰ってこの書状を父上に」

そう言ってからぷつと吹き出す。

「おまえと私の間で父上はないよな、ハーコートに渡してくれ」

「解かった」

「モンドの城内の人間から私達の記憶を消すことにしたから。クロード、しっかりやれよ。術式はおまえがかけるのだ」

まるめられた書状とユリウスを交互に問うように見る。クロードはこの十四年間の生活と唐突に別れることになるのを悟る。この騒ぎが収まっても俺はモンドの城の三男坊じゃなくなっているの

だ。こんなことならもう少しダリウス兄様の言うことを聞いて、エスペラントを馬に乗せてやれば良かった。無為に過ごしてきたと思っていた日々がただ懐かしく感じられた。

「ユリウスはどうだった？」

「何が？」

「十七年間モンドにいたんだろう？」

「ああそのことが、私が居たのは十年間だけだ」

「十年間って……あ、それに美人のお母様っていうのは？」

「あれは術で過去を捏造したのさ、あの絵は勿論私だ」

やっぱり……そりゃあユリウスが本当の公子で無いのだから母親も違うだろうけど。今迄お母様似なら良かったのと言われ続けていたエスペラントに、クロードは哀切の情を禁じ得なかったが、それも今日で終わる。

「ハーコートの子は正妃は州城から離れた所にいるが、そのことでハーコートはずいぶん私を嫌っていたようだな」

そうか、ユリウスとハーコートとの確執はここから来ているのか。州宰として来るはずの魔道師が自分の子供として入り込んで、妻を城から出すことになってさぞかし腹の煮える思いだったろう。

「その書状を開いて見てごらん、クロード」

ユリウスに言われるままにクロードが書状を開く。かなり複雑な魔方陣が描いてあるがクロードが読みやすいように中にながふつてある。その上、印を組む順番と何を組むかが範字の上に書いてあった。

「レーン文字はこの印から左回りに読むんだ。いいな」

ユリウスが書状をもう一度くるくると巻いて封印をかけてクロードに渡した。

「もう、モンドの城に帰ることはないんだね」

クロードはしんみりと言う。

「お家に帰りたくなつたのか、クロード。がきだな」

小ばかりしたようにユリウスが鼻をならした。

「うるせー、行って来る！」

竜門に飛び込むように出て行くクロードを見ながらユリウスが呟やく。

「私はこの十年、とても楽しかった」

忘却術

クロードはユリウスの小宮の地下室に竜門を開けて嗅ぎなれた香の匂いにほっとする。そして、思いだした。

俺の部屋に置きっぱなしにしている魔術関係の本や巻物を、ここに戻しておかなきゃあ。

クロードは主城の正面ではなく裏手の使用人が使う裏口を目指す。そこで何人もの使用人とすれ違ったが、誰も自分の雇い主の息子に気が付かない。そのまま二階の自分の部屋に飛び込む。すばやく隠し場所から本と巻物を取り出して、同じように下へ降りようと部屋を出たところで覇気とした声がかかる。

「クロード、何だってお前がここに居るのだ」

今一番会いたくない人間に会ってしまった。もっと注意深くしていれば……と井戸の底まで後悔しきりだったがもう遅い。

「えっと……それはその事情が……」

「何の事情だ」

語尾を上げてダリウスが返す。

「えっ……とあたりなかつたり……」

「どっちなんだ！」

ダリウスの声が廊下に響く。

「あの、これについては父上の部屋でお話します。あと一ザンの後に父上のお部屋で会いましょう、兄様」

驚いた表情のダリウスを残したまま、大荷物を抱えてクロードはユリウスの城に向けて走り去った。

一ザンの後、クロードはハーコート公の部屋に父親と長兄と共にテーブルについていた。

「で、話してくれるんだろうな」

ダリウスが横に座るクロードに視線を外すことなく言う。

「えっと」

クロードはダリウスに気を取られないように向かいに座るハーコートに顔を向けてユリウスから託された書状を手渡す。

「ユリウス、いやモンド州付き魔道師イーヴアルアイからモンド州公バルザクト・ロイス・ハーコート様への書状です」

「イーヴアルアイ？」

眉根を寄せながらハーコートは書状の封印を切って広げる。

その他人行儀な弟の口上にダリウスが驚く。

「クロード、どうした」

しかしクロードはダリウスに顔を向けることも無くハーコートを見ている。

「これは、本当に私宛なのか、意味が解からん」

書状を広げたままハーコートがクロードに尋ねる。広げられた羊皮紙に書かれているのは現世の文字ではない。あるのは複雑な形の魔方陣。そして細かく書き込まれた古代の文字。テールに置かれた書状を見ながらクロードが立ち上がると、おもむろに左回りに文字を読んでいく。

そして次々と組んでいく印。

「一体何をやっているのだクロード。それじゃあまるで魔道師のようじゃないか」

顔色を変えて言うダリウスの声を聞きながらもクロードの呪文は止む事が無い。

どうしたんだ。

ダリウスはふっと空気が震えた気がして辺りを見回す。空気の乱れは書状のなかの魔方陣が紙の上から浮き上がった所為だった。それはそのまま大きく広がり、部屋を抜け尚も広がりながら高くなつて行く。やがて州城の敷地を見下ろすほどになるとぴたりと止まった。書状が忘却術の術式だった。封印を取ったことによりすでに術式は始まっていたのだ。

延々と続いたクロードの呪文を唱える声が止み、最後の印を組む。『我の命により忘却すべし』クロードが言い終わった途端、空一杯

広がっていた魔方阵は霧散し、テーブル上の無地の羊皮紙も跡形なく消えた。その間にクロードは竜門に消える。

暫く茫然としていたハーコートとダリウスはふっと我に返ってお互いの顔を見あわせた。

「父上、私は何の用でここに？」

引かれたままになっっている自分の横の椅子をダリウスは不審そうに見る。

誰か来ていたのか。

「さて何だったか」

ハーコートは何も無いテーブルをしばし見つめたが何も思い出さない。

二人は途方にくれたように今一度お互いの顔を見た。

「行ってきたよ」

「ああ、少し休めクロード」

うんと言ってクロードはユリウスを見ると指に綿布をまいていた。では、あれはユリウスの血で書かれたものだったのか。クロードは重い気持ちを引きずりながら部屋に戻る。何でこんなに気分が沈むのか。

いろいろユリウスがお膳立てしてくれたとはいえ、間違えずに一人であんな大きな術式を行ったのに少しも嬉しくない。モンドの城の自分の部屋から何か記念に持ってくればよかったのかな。しかし、考えてみても取り立てて思いいれのある品などクロードには無かった。借り物の生活に見合うように何もかも自分の物では初めから無かったように。

それでも俺にはモンドの城の思い出がある。俺の事をあの人達が忘れてしまっても俺は覚えている。もし、俺が不死となったら忘却術なんてかけなくてもあつという間に人は寿命を迎えて、

俺のことを知っている者などいなくなるのだ。思わずモンドに居た頃の思い出に浸ってしまいそうになってクロードは両頬をぺしっと手ではたいて気合をいれた。

俺は今迄の十四年間よりこれからの方がずっと、そうずっと長い人生なのだ。いくらでも思い出は作れる、しかし。

「取りあえず飯、飯。放っておくと一日中飯抜きでこき使われてしまう。あつちは五百年以上生きている年寄りだからあんまり食えないだろうけど俺はまだまだ育ち盛りなんだから」

さっきから鳴りっぱなしの腹を押さえてユリウスの部屋の扉を叩いた。

ユリウスの弱み

さつきから鳴りっぱなしの腹を押さえてユリウスの部屋の扉を叩いた。

「ラドビアス居る？」

扉が開いて、ラドビアスがクロードを中に入れる。

「俺、腹へって死にそうだよ」

クロードは大げさに声をあげてみせる。

「一食抜いたくらいで死ぬもんか」

ユリウスがすかさず冷たく言う。

「年寄りと俺と一緒にしないでよ、俺は一食抜いただけで死んじゃうんだよ」

クロードは、よたりと部屋の床にわざと倒れ込んだ。　おや、ま

あとラドビアスが笑い顔になる。

「まだ、お夕食の時間じゃありませんが、何か持って来ますね」

そう言うって部屋を出て行く。

「喚わめけばだれも彼も言う事を聞くと思っっているんだろう。この万年餓鬼小僧！　そんなに腹へっているのなら柱でも食べとけ」

ユリウスが片眉を上げて床に伏せているクロードを見下ろした。

前半のセリフはそのまま自分のことだろうが。　文句を言いそうになったがそこへ、かちやりと軽い音がしてラドビアスが温かい湯気をたてているシチューとパンを盆に載せて入って来たことで霧散する。

「うわ美味しそう、頂きます」

「ゆっくり食べて下さい」

テーブルについた途端に、がつがつ食べているクロードにラドビアスが声をかけた。

「あの一人残った従者、この騒ぎが収まったら始末しろ」

長椅子に足を投げ出して書物に目を通しながら、ユリウスがラド

ビースに告げる。

「記憶を無くすだけではいけませんか？」

「記憶を無くしてモンド州に帰しても話がややこしくなるだけだ」
ユリウスがぱしりとラドビースに言い返す。

「話がややこしく、ではモンドの方々の記憶を消されたのですか」

ラドビースが驚いた顔をした。

「あっそれ俺がやりました」

クロードがパンを持った手を挙げる。

「左様でございましたか、それなら承知しました」

「ちよつと待てよ。承知したってことはデイビットを殺す事を承知したって事？ それどうにかならないの」

「どうにもならないな」

あつさりと了承するラドビースに慌ててクロードはユリウスを見るが、ユリウスは本のページをめくる手を休めずにスパツと言いつ切る。

それを聞いてさっきまでの空腹感がどこかへ消えたようにパンが喉につかえる。

「そろそろドミニクも動き出す」

「ドミニクが何？」

「ドミニクは私達を人質に取ったつもりなのさ。その価値があると思っっている。私達を盾にとってモンド州に越境して廟を家捜ししようと思っっているんだろう」

「だから忘却術を」

お宅の次男と三男を預かっているので廟を荒らすのを大目に見てね、と言ったところでハーコート公はせせら笑うだろう。うちには次男も三男もはなから居ませんと。ドミニクは知らずに一番欲しいものをすでに手の内に入れているというのに。

「既にガリオールがライクフィールド候からドミニク候へ送った密約書を押さえて国軍を向かわせているだろうよ」

ユリウスが本をぱたんと閉じてにやりと笑った。

「密約書？」

「ああケースワース候、ミルフォード候以下有力なドミニクに加担している貴族、將軍らの名前がばっちり入っている」

「そんな都合のいい」

「偽造したのだから、そりゃあばっちり全部ある事無い事書いてある」

ユリウスがしゃあしゃあと言う言葉にクロードが絶句する。

国軍動かす根拠が偽造文書って……。

「ふん、形さえ整ってさえいいばいい」

ユリウスが事も無げに言った。

「じゃあその三州とボルチモア州を国軍が囲むわけだ」

「国軍に囲ませてここに集結したレジスタンスのリーダーたちも境界を張って閉じ込める。と、同時に州兵を動かしてモンドの廟にいつている奴らにも境界を張って二つともなかに居る奴ら全員殲滅する」

にっこり笑ってユリウスが続ける。

「それとも生かしといて境界を張りなおす贅の一部にあてるか」

「すでに境界の張り直しには充分の贅の用意はできておりましょう。ここから海岸線へ運ぶ手間がかかります」

ラドビアスの事務的な言い方にぞっとする。話だけでお腹一杯

に成るほどの血なまぐさい話に、クロードは顔色を失くしついでに食欲も失くした。

「ごちそうさま」

「もうよろしいのですか、お口に合いませんでしたか」

皿を脇に押しやるクロードにラドビアスが心配そうに聞く。

「さっきあれ程騒いでいたくせに。全部食べてしまえ、クロード」

「うるさいっ」

ユリウスがまたも冷たく言うのにクロードがいい返す。

ドミニクだろうがミルフォードだろうが。レジスタンスだ

ったとしても、ただの人間どもなどいくら集ってこようがどうにでもなると思う。だが問題はインダラの出方だ。ふとユリウスは自分の口元に手をやる。自分が引きつった笑みを浮かべているのを確認して苦笑いする。私はそんなに切羽詰まっているのだろうか。問題はインダラだけでもてこずりそうなのに、そうでない気がするのだ。

他にももつと悪いものが入って来ている気がする。

「酒を、酒を持って来てくれ」

「このところ連日お酒が過ぎますよ。今日はお止めになつては」心配げに言うラドビアスに向けてユリウスが持っていた本を投げ付けた。

「うるさい！ 酒を持ってこいと言ってるんだ！」

だんだん大声になる。

「僕のくせにいちいち説教めいたことを言うのは止める。二度も三度も言わすな。酒を持って来い、ラドビアス」

「解かりました」

ラドビアスは大きく息を吐いて、片手で受け取った本をテーブルに置く。

「果実酒を水で割ったものでは」

「なんでもいい」

ユリウスはラドビアスが部屋を出て行くと、テーブルに置かれた本をもう一度扉に叩きつけるように投げる。ユリウスの剣幕に驚いてあつけにとられて見ていたクロードはふと思う。

今のは八つ当たりだよな。でも何で？

「インダラのことを気にしてるの？ ユリウス」

「おまえはどう思う」

問いを問いで返されてクロードは答えに窮する。インダラは経典を捜しにモンドの廟に行くだろうが闇雲に捜すわけではない。

「ユリウスの身柄を確保してから口を割らせる方をとるよね」

だがどうやって口を割らせる？ ベオーク自治国に連れて行

かれるくらいなら死んだ方がましだと言っているユリウス。その彼から経典のありかを吐かせることが出来るのか。弱みなんてどこにも無いし、と考え込むクロードを眺めていたユリウスは、はつと目を見開く。

「おまえか」

「俺が何？」

意味が解からず眉を寄せるクロードにユリウスは答えず、椅子から立ち上がってそわそわと部屋中を歩き回って……つと止まった。

「サイトスへ行け、クロード」

「サイトス？」

「そうだ、私の側にいるな。おまえも私の枷になりたくないだろう。今直ぐだ」

ええっ、どういうこと。

「早く行け！」

質問する間も与えられず、ユリウスの大声に仕方なくクロードは竜門を開けた。クロードが消えてユリウスはほっと椅子に座り込んだ。

「危ないところだった」

クロードを盾に取られたら私は経典の場所を言わないわけにはいかない。

そこへ酒の用意をしてラドビウスが部屋に戻ってきた。

「お酒をお持ちしました。……クロード様は？」

「さあ部屋に戻ったのだろう」

ラドビウスは部屋に残る竜門の揺らぎの跡を認めて目を細めたがなにも言わず、果実酒を背の高い細い杯に半分注いで半分为冷水で満たして主に渡す。

「カシス酒です」

奪い取るようにユリウスが杯を取ってぐいと呷る。

「ゆっくりお飲みください」

ラドビウスの言葉が終わらぬうちにユリウスはお代わり、と杯を

ラドビアスへ突き出した。　はあーと盛大に溜息をついて二杯目を作る。　さっきより水を多く入れたが。

「ラドビアス」

呼ばれて振り向くとユリウスの手には先程ラドビアスが果実酒の栓を切るために使ったナイフが握られている。　そのままラドビアスの首元にナイフを突きつけて壁際まで追い込む。　素直に壁に背中をつけているラドビアスの首にあてたナイフに少し力を加えると　　ついつと一筋血が流れた。

「何ですか、お知りになりたいことがあるなら普通に聞いてください」

「おまえは信用できない」

ユリウスがナイフを握った手に力を込めて新たに血が滴る。

弱気な二人

「はあー」

今日何度目かのため息をついて。 ラドビアスは何ということもないように、ユリウスがナイフを持つ手をあっさり掴む。そして一瞬のうちに体を反転させると、ユリウスを壁際へ押し付ける。

「私にナイフを向けるなんてお酒に酔ってらっしゃるんじゃないでしょうね？ ふいについて術をかける方が、何倍もあなたに勝つ目がありますのに」

「悪かったな、剣が使えなくて」

ずるずると壁に背中を預けて座り込もうとするユリウスをラドビアスが抱きとめて聞く。

「何をお知りになりたいのです」

横を向くユリウスの顔を強引にこちらに向かせる。

「カルラ様」

「その名を呼ぶな、おまえは本当に嫌な奴だ。おまえしか使える僕がいないというのに信用できない事がどんなに腹立たしい事が、おまえにはわからないのか」

「どこでどうなっても私はあなたの僕ですよ、ユリウス様」

ユリウスが腕を突っ張って、ラドビアスの腕から距離を取って見上げる。

「じゃあ聞くが、インダラは誰と一緒に国境を越えた？」

「どうしてインダラだけだと思われなんでしょうか」

答えるラドビアスにためらい無く平手が飛ぶ。

「答える！ ラドビアス」

その声にあきらめたようにラドビアスは小さく息を吐いた。

「……バサラ様とクビラ様です」

ユリウスがごくりと唾を飲み込む。 顔色も変わる。 バサラとクビラだと……。

「一人にしてくれ」

ユリウスの言葉にラドビアスが首を振る。

「今の主を一人にしてはおけません。離れませんが……殺しますか」
「ばか！ だからおまえは嫌いだ！」

ユリウスはぎりりと唇を噛む。ラドビアスの腕の中でユリウスは負けそうな気持ちと戦っていた。くそっ、どうにかしてあいつらの裏をかいてやる。こんな弱気になっている自分は本来の自分ではない。絶対になんとか……してやる。

「クロード様、今日は何のご用で？」

竜門から現れたクロードにガリオールが立ち上がって迎える。

「用っていうか、ユリウスにサイトスに行けって言われて。俺が居ない方がいいってさ」

自分で言葉に出してみて、いかに自分が傷ついたかを認識させられ、クロードは泣きそうになる。

「そうですか、主には何かお考えがあるのでしょうか。では直ぐ部屋をご用意いたしましょう」

別にしよげているクロードを慰めるわけでもなく、ガリオールは側の魔道師を呼ぶ。用意された部屋の寝台の上でクロードは転がりながら喚く。

「くそーっ。信用してるとか言ってたくせにもう、用済みかよっ」

ユリウスがまた自分の気持ちと戦っていることなど解かるはずも無く、クロードはただユリウスに打ち捨てられたように感じていた。「ショックだ。ちくしょう、落ち込んでしまった」

産まれてこのかた、誰かに期待されたり、誰かのためにがんばったことなど経験が無い。今まで自分のためだけに生きてきたクロードにとって、初めて感じる類の感情にどうやってやり過ごせばいいのかわけが解からない。他者にあてにされてないことが、こん

なに苦しいなんて思いもしなかった。

「あー立ち直れないかも」

ごろごろ寝台を転がりながら眠れない夜が更けていく。もう少しで朝日が顔を見せる一歩手前。薄紫に変わった空を窓から眺めてクロードは思う　必要だと思わせてやる。くそっ、ユリウスが窮地きゅうちに陥ったところを颯爽さつそうと助けてやる。

「やっぱりおまえがいないと私はだめだな。ラドビウスなんて屁の突っ張りにもならないよ」

とか言わせてやる！　ぐっとクロードは両の拳を握り締めたが、果たしてユリウスがそんな言葉を使うかは考えの外だ。

「いい事を思いついた」

そのいいことは誰にも話さないで実行するつもりだった。

「待つてろよ、ユリウス」

急に眠気が襲ってきてクロードは目を閉じた。

その時に備えて休養は必要だ。

擬態する者

深夜トラシュのサロンを冷たい空気が満ちている、暗い室内。

「剣に気付かれてしまった」

そう言った割には悪びれない様子の男。

「あなたはもう少し考えて動かないとだめですよ」

低いハスキーな声が咎めるように言う。

「いつまで待つんだ、もういいだろ。さっさと攫^{さら}って帰ろうぜ」

「攫^{さら}うって、私達は誘拐犯じゃないんですよ、まったく」

月明かりに照らされて顔半分が闇に浮かぶ。

「カルラだけが目的ではないでしょう、兄上」

呆れたように言った顔は、確かにトラシュの顔だったが……。

「そりゃあそうだがカルラを見たか。ベオークに居た時のままだった。男に変わってたらと思って心配していたが。俺は早く連れ帰りたいな」

唇をべろりと自分の舌で舐めながら男は笑う。　トラシュの反対側の男は、がっしりとした体つきに背負っている剣のシルエットが壁に大きな影を作っている。　柄の長い湾曲した剣を背負っている黒い影。

「まったく、全部三つづつあるメキラ兄上は擬態^{ぎたい}がへただから目立つし、ハイラは動きが鈍いしで兄上を選んだけど。私とインダラだけの方が良かったかもしれないね」

長い息を吐くと、あっという間にトーマスとの間合いを詰める。

それから、自分よりはるかに大きい男の胸倉を掴んで引き寄せてトラシュが低く囁^{ささや}く。

「勝手な事をするなよ。カルラに正体を簡単にばらしてみろ、私がおまえをばらばらにしてやる。意味が解かるかい、鳥頭」

「わ、解かった」

トーマスがごくりと喉を鳴らす。　トーマスの返事につこりと

人好きする顔に戻ったトラシュが男の服を離す。

「じゃあまた明日、トーマス」

その声は先程の低いハスキーな声では無く、いつものトラシュのものだ。

「そうだな」

トーマスが顔の汗を拭きながら部屋を出て行った。

「レジスタンスの中に気になる奴がいる」

「気になる、ですか」

自分の腕の中にいる主を見下ろして、ラドビアスが聞く。

「シャムシールに似ている長刀を持っている。私が今迄見たことがあるシャムシール使いは一人だけだ。大陸の南ではどうか知らないが、他の地であの刀を使う者は少ないだろう」

「クビラ様の事を言っておられるのですか」

「本人はシャムシールではないとぬかしていたがな。擬態しているくせに得物を変えていないなんて考えなしの馬鹿はクビラしかないだろう」

「ユリウス様」

「何だ」

「仮にもあなたのお兄様ですよ、そのクビラ様は」

ユリウスは、はっと大きく息を吐いた。

「私があいつと血が繋がっているなんて虫唾が走る。ついでに言えば他の奴らも大嫌いだ。湿った所にいる虫並みだ」

そう言ってラドビアスをじろりと見上げる。

「おまえもその手を早く離せ」

ユリウスは緩められたラドビアスの腕から逃れて、指に巻いてある綿布をするすると外す。

もう一匹はどこに隠れている？ 見つけて潰してやる。 取

りあえず解かっているクビラの方をこちらから急襲してやる。

「ラドビアス、明日クロードの名を使ってあいつをここへ連れてこい」

床にしゃがみこんで綿布を外した指を嚙んで新たに血を滴らせる
と、せつせと何かを書きつけるが。

「足りないな、ラドビアス、血が足りない……デビットを殺^やれ、
死体がいる」

「ユリウス様」

「少し早まったが丁度いい。最後の従者までうまく使ってやればダ
リウスも喜ぶだろう」

自分がどれだけ非道な事を言っているのか、すでにユリウスの頭
にはない。部屋に仕掛ける術の事で頭が一杯の主^{しゅ}にラドビアスは
軽く息を吐くと、頭を下げて部屋を出て行く。

……死体を作るために。

ユリウスは淡々と作業を進める 魔方陣は血が確保されてから
でないのだめだな。

モンドの廟から持ってきた呪符に自分の血を垂らして文字を書き
入れると息を吹きかけ、頭から抜いた髪をその呪符に包んでその呪
符を五角形に折って自分の懐に入れた。

次の朝、レジスタンスのアジトの戸が叩かれる。

『コン、コン……コン』その音の中から声がかかる。

「モンドの蝶は」

符丁を尋ねる声に訪ねてきた男が落ち着いて答えた。

「蜘蛛に捕らわる」

重たげな戸が少し開き、その隙間から男がうかがうように顔を出
す。

「誰だ、おまえ」

目の前に立つ長身の頬のこけた顔色の悪い男。 にこりと笑いな
がら相手の男が閉めようとする戸を引き止めるように押さえた。

「私はモンド州の公子の従者ですが、そちらのトーマス殿に小宮のほうへおいで願えますように仰せつかって参りました」

「ラドビアス、ああ、この人は大丈夫よ。何なのクロードったら先生を呼びつけるつもり？ トーマス悪いけど少しクロードの相手をしてやってくれるかしら」

入り口でもめているのかと後ろから早々とアジトに入っていた、アリスローザがやって来る。腰に手をやって後ろを振り返ると、奥のトーマスに声をかける。湾曲した大刀を背負った男は素直に戸口に向かう。クロードの従者の後に続いて小宮に向かう男の後ろ姿を見送りながらアリスローザは悪戯っぽく笑った。

今日のトーマスはやけに素直だね。後でクロードがみつちりしこかれているのを見に行くのもいいわね。

「解かっているんだろう？」

前に行くラドビアスの背中にかかる声。

「何が、でございますか？」

へっへっへっ……下卑た笑い声。

「おい、サンテラ！」

それでも知らぬ顔をしているラドビアスにじれて肩に手をやる男。

「俺だ、俺。上手く化けただろう？」

前に行くラドビアスがため息をついて振り返った。

「来られるのですか、来られぬのですか？」

「ああ、行くさ、あのガキ刀で二つにしてくれる」

にやにや笑って言う声は既にトーマスの声ではない。

「こちらへ」

手の平を上に向けて指し示された部屋を、男はおとないも無く開けると足音も荒く中に入る。部屋は陽が登ったというのに厚い力

ーテンが閉められ、薄暗い上に何やら香が焚^たいてある。

「坊主、来てやったぞ」

しかし部屋の中、丁度真ん中の椅子に座っているのはクロードでは無い。

「カルラじゃないか」

トーマスの姿を纏^{まと}ったクビラはずかずかと大股で歩いて、椅子に座るユリウスの元へ行く。

「何だ、俺に会いたかったのはおまえか」

いきなり屈んでユリウスを抱くと、それに応えるようにきつくユリウスも抱きつく。それを見て、ラドビアスがぱたりと小さい音をたてて外から扉を閉じた。

擬態する者（後書き）

だんだん、話が血生臭くなつてまいります。が皆様ついて来てくださ
いっ。

仕掛けられた罠

「えらく積極的だが……おまえ見た目よりごつい体だな……」

しかも腕がどんどん締め付けてくる。力自慢の俺が抵抗できないほどなんて……いくら何でもおかしい。息が苦しくなり力を振り絞って、ユリウスの体を撥ね退けよう顎に手をかける。渾身の力で後ろへ押すと、ぼきりと骨の折れる音がした。驚いたクビラにあらぬ方から声が聞こえた。

「何びつくりしているんですか、だからあんたは何百年経っても鳥頭なんだよ」

元の姿に戻ったクビラが声のした方へ顔を向けると、部屋の北東の隅に見知った姿を認め、びくりとおのれを抱く物……を見る。

術を施そうにも両の手を拘束されて締め付けてくる腕の中で、クビラは自分が捕まっている物の仰け反って開いた口の中に折られた紙片を見つける。

口を使って食いつくように取り出すとそれを床に吐き捨てた。

途端にユリウスの姿は消えうせ、若い男の姿に変わる。その男はすっかり血を抜かれたのか体が蠟のように白い。

「昔も趣味が悪かったけどあなたは今でもばかで変態なんだな、死体に口付けしたりしてさ」

ユリウスが印を組みながら言う。

「くそっ」

クビラはぎりぎりと体を締め付ける死体と格闘しながらそれでもだんだんとその関節を一つ一つ外していく。

それを見てユリウスは印を結ぶスピードを上げて、呪文を唱える口調も早口になる。大きくレーン文字の開始を表す『カノ』の文字を宙に描く。

『包蔵せよ！』ユリウスの声の後に……。床に昨晚、血で描いて隠蔽魔法で隠していた魔方陣が浮き上がると柵状になりクビラを取

り囲む。鳥かごのようなその柵の太さがどんどん太くなり隙間を埋めていく。

「くそうっ、やめろ！」

片手が自由になったクビラがシャムシールを抜いて投げつける。

後僅かで閉じようとしていた隙間にそれは突き刺さり、動きが止まる。大きく舌打ちしたユリウスが隙間に打ち込まれたシャムシールを抜こうと手を差し入れるが、その手はがしりと太い腕に掴まった。

「捕らえたぜ、カルラ」

思ったより早く死体から自由になったクビラにユリウスが目を見開く。

「捕らえたと言っても腕だけじゃありませんか。欲しいのならその刀を抜いて切って持って帰ればいい」

「何だと！」

クビラに力一杯引つ張られて肩口まで隙間に引きずり込まれてなお、ユリウスの憎まれ口は止まらない。

「この隙間から無理やり引つ張り込んで体中ちぎれてもいいっていうのか、その時になって泣いて謝っても遅いんだぜ」

脅しなのか、本気なのか殆ど笑い声でクビラが掴んだユリウスの手をぺろりと舐めた。

「気持ち悪いことは止めてください、そんな事をしなくてもあなたは充分気持ち悪いんだから」

尚も逆なでする言葉にクビラがユリウスの腕に噛み付いて、流石のユリウスも悲鳴を上げた。

「痛い、やめろ」

その声にクビラはにやりと笑う。もう一方の手を隙間に差し入れてぎりぎりと言を立てながら広げようとするのをユリウスは声も無く見つめる。血の魔方阵で作った檻を力技で壊そうとするなんて……なんてばか力なんだ。

ぐにやりと頭一つ出るくらいに広げた隙間からクビラが頭を出す。

「誰が気持ち悪いって？　良く聞こえなかったな。今近くへ寄るからもう一回言ってくれ」

クビラのばか力を見くびっていたかとユリウスは唇を噛んだ。

「……しかし何だ、さっきから匂っているこの匂いは……嫌な匂いだ」

クビラが顔をしかめる。

「そうですか？　私は全然気になりませんけど」

クビラの様子にユリウスの目が細くなる。

「それ、このレイモンドール固有の香木が主成分なんですけどね。体の動きを阻害する毒性が強いんですよ。それに何種類かの呪草を混ぜて作ってあるんですが。面白いことにレイモンドール生まれの者や、長年居る者は耐性が出来ているようでこの毒は効かないようにね」

ぜえぜえと息をするクビラを見ながら、ユリウスはゆっくり話しを続ける。

「だから呪法を行う時の基本の香にしているんです。けど大陸の出のあなたにはやはり毒性が強いでしょうね」

脂汗を流してクビラは、ユリウスの手をついに離すと床に倒れ込んだ。それと同時にユリウスが隙間に刺さった剣を抜く。直後、檻は間髪入れずぴたりと閉じた。腕を擦りながらゆるりと笑うユリウスの前に巨大な球体が出来ていた。

「焼尽呪文で骨まで灰にしてやる。アニラを……母を殺したつけを払ってもらうぞ」

そう言ってユリウスは剣を放り投げた。

「兄様、トラシユ兄様」

サロンから中座したトラシユに妹が声をかける。

「どうした？　アリス」

「小宮に面白いものを見に行かないこと？」

手を後ろ手に組んでにこにこと見上げるアリスローザに、トラシユが足を止めて聞く。

「面白いもの？」

「クロードがトーマスに小宮で剣術を習っているの。今朝、従者がトーマスを呼びに来たのよ」

くすくす笑いながら話すアリスローザにトラシユが確認するように聞く。

「トーマスが行ったのか！」

「え？ ええ……」

兄の険しい顔にアリスローザはびっくりする。いつも穏やかな

兄がついぞ見せた事の無い表情。

「いけなかった……かしら？」

「いや、いい。行ってみる」

言ってトラシユがアリスローザをおいたまま走り出す。アリスローザは後を追って走るがあっという間にトラシユの後姿は見えなくなった。

一体どうしたの？ あんな兄様初めて見たわ……でもこのところ少しおかしい感じはしていたのだ。いつもとは違う……どこがどうとは言えないのだが。ただ一番変なのは私の事をアリスと呼ぶことだ。今迄アリスなんて呼んだことは無かったのに……？ 取り残されたアリスローザは首を傾げて小宮へ歩き出した。

印を組んで距離をショートカットしながらトラシユは唇を噛んだ。

クビラ、カルラに落ちたか！

「お呼びですか」

指を鳴らすと後ろに黒い人影が現れてついて走る。小宮の入り口で二人は急停止した。目の前には一人の男が長刀を下方に構えて立っていた。

「サンテラか、持ち慣れぬ刀を持っているな。おまえは短刀の方が

好みだと思っていたけど」

ふっと笑ってトラシュが言うと、横の黒髪の男がすらりと自分の得物を抜いた。

トラシュを纏うバサラ

「ここは私が」

「じゃあ頼むよ、インダラ」

そう言って先を急ごうとするトラシュに、ラドビアスが打ちかかるうとするのをインダラが割って入る。

「おいおい、おまえの相手は私だ」

言いながら素早く間合いを詰めると、インダラは空いている手でラドビアスを殴りつけて離れる。ラドビアスはトラシュに気を取られていたため、顎にインダラの拳をまともに受けて、体勢をくずされたが懷からダガーをインダラに立て続けに三本投げつけた。その間に充分な間合いを取る。

太いラドビアスのバスターソードに対して、インダラの持つレイピアは細長く不利に見えるが……インダラは楽しそうに笑った。

「久しぶりに打ち合える機会は嬉しい限りだが、時間稼ぎのつもりか？ あきらめるんだな。この五百年カルラ様を独り占めにしていたのだからな。もうそろそろ主にお返しするのが筋というものだ」

「カルラ様と私はおまえのような下種が考えるような関係ではない。変な勘ぐりはやめろ！」

ラドビアスがバスターソードをインダラに振り降ろす。インダラはそのバスターソードをレイピアの柄のところで受ける。その剣にひらりと足をかけて弾みをつけて宙返り、ラドビアスの後頭部を狙ってレイピアを付き込む。それを間一髪、ラドビアスはバスターソードで頭上で跳ね返しざま、着地しようとするインダラの背中を蹴りつけた。

また一たび二人は睨みあう。

「おまえも存外甲斐性が無いな。まあそれなら我が主だけが、カルラ様と結ばれたお一人だと考えてよいのか？ それは我が主は喜ばれるだろうが」

「うるさい！」

ラドビアスの頬をレイピアが風を切る音とともに掠り血が滲む。

「動揺しているみたいだな、相棒？」

楽しそうにインダラは円を描くように足を運ぶ。

「おまえの話は昔から自分が思っているほど面白くない」

ラドビアスが頬の血を手で拭った。

階段を登りながら香の匂いがするのにトラシュが気付いて顔をしかめる。

嫌な……匂いだ。

ある部屋の前で特にその匂いがきつい。

この中か。扉を開けると同時に印を組んで呪を唱える。

『風勢我に寄りて力を成し外法を排外せしめよ、廃呪、解毒、封緘せよ』

呪文が終わるやいなや突風が吹いて窓が大きく開く。するとその風はうずを巻き、部屋中に満ちていた香を香炉ごと吹き飛ばすと部屋を覆っていた結界まで消した。

「カルラ久しぶりだな、元気そうだなにより」

久しぶりに会ったふつうの兄弟のような挨拶をして、部屋に入ってきたトラシュにユリウスの印を組む手が止まる。

「トラシュ……いつからだ、バサラ」

「うーん、ほんの十日前くらい……かな」

ではこちらに來た時にはすでに成り変っていたということか。
驚愕するユリウスにおかまいなくバサラは目の前の球体に目をやる。

「さて、その檻を解して中の獣を返してもらおうか。一応私達の兄と呼ばれているバカが入っているのだろう？ 禁術で作った檻はどうも私の呪法では解けないようだ」

宙にふいつと浮かぶと、足を組んでトラシユの姿でバサラがにやりと笑う。

「それに入っているばかりを返すから、それ持って家に帰るっていうのは無理だろうな」

「そりゃあ、無理だな。何年好き勝手させていたと思っているんだ、家出少女君」

「少女じゃない！」

バサラは声を荒げるユリウスの前にすつと降りると、ゆっくり顔をめぐらす。

「そうかな？ 少女に見えるけど……普通百年以上、幼体のままなんて考えられないけど」

ユリウスの顎を掴んで引き寄せるのをぱしりとユリウスが払う。

「幼体……だと？」

「おまえの体の事だよ。今でも前のままであるならね」

横を向いたユリウスを目だけで追って、バサラはクスリと笑った。「普通は遅くても四、五十年も経てばどちらかの性に決まるというのに、おまえときたら今だにどちらでもない。……いやどちらにでも変わる可能性のある体のまま。なぜかな？」

「知るわけないだろう、そんなこと！」

自分が気にしていることをずけずけと言うバサラにいらいとユリウスは返す。

「私思うに……おまえは自分が女性になることを拒否しているくせに、男性化に背く想いを抱いているから……じゃないか？」

ユリウスの背後にまわりこんで楽しそうに囁く。

「おまえもつくづくひつこいよね、ヴァイロンにこだわっているのだろう」

「ばかばかしい！」

ユリウスが思わず大声を出す。

「クビラがばかだと思っていたがおまえも底なしのばかだ。ヴァイロンは私がレイモンドールに逃げ込むために利用しただけの男だ。」

実際一緒にいたのだったって合わせても一年に満たない。それを、何だ
って……」

「その通り、ヴァイロンはそれだけの男だ。しかもあいつが死んだ
のはもう何百年も昔だ。いくら私達が長生きだからって一途にも程
があるというものだ。おまえ、女性としてヴァイロンに思いを告げ
たかったのじゃないか？　それが原因だと思うけど」

バサラは最後に少しばかりにした口調になり、ふんと鼻をならした。
「吟遊詩人かおまえは。話を作るな！」

ユリウスが毒づいてもバサラは気にも留めない。

「いろんな女で試したがどの女も孕むことは出来なかった。やつぱ
りおまえしかだめなようだよ」

言いながら、バサラがユリウスの背中に手を回す。

「何言ってる！　ハイラがいるだろう、この嘘つきめ！」

「あ、ああ……」

ユリウスの言に眉をひそめて、バサラはハイラの姿を思い出すと
苦い顔をする。

「あれは……女どころか人の姿とも思えないじゃないか。カルラ、
おまえと私は特別だ。いいかい、よく聞いて、カルラ。他の奴らに
は触れさせない、私と共にベオークへ帰ろう。私が守ってやると言
っただろう？」

甘い言葉を紡ぐバサラの腹にがしつと肘を打ちつけて、ユリウス
がバサラから逃れる。

「ばかが！　寝言は寝てから言え！　自分の母親と寝てたくせに！
何が特別だ！　他の奴に触らせないだと？　自分の血しか残した
くないだけだろうが！」

ユリウスはが次々と術をとばすが、バサラは易々と防いでユリウ
スを追い詰めて行く。

「正直、兄上たちは鬱陶うつとうしくて仕方がない。おまえがビカラの息の
根を止めてくれたら良かったのに。中途半端にしておくから後が大
変だったんだよ」

ひょいとユリウスが飛ばした炎で出来た剣を頭を傾けて避ける。
そして腰の剣を抜いてあっという間も与えず、ユリウスの左腕ごと壁に突き刺す。

「ぐはっ！」

痛みに顔を歪めるユリウスに長い口付けをして、バサラはにやりと唇を上げる。

「痛いだろう？ 四百五十年前くらい前だったか……確か私も左腕を傷つけられて痛かったな。あれはザーリア州城の地下だったよね、カルラ」

懐かしい昔話でもしているようにバサラが穏やかに言う。

囚われの君

「これで少しは解かったんじゃないかい、人の痛みがさ」

「おまえは人なんかじゃないだろ。それよりあの時左腕を無くしたはずだ」

突き立てられた剣の場所から血が流れて、ユリウスの顔から血の気が失せていく。

「そうそう、両手が揃ってないと印も組めないし困ったよ。ベオークに帰ってどうしようかと思ってたんだが……丁度寝込んでいる奴がいてさ」

くつくつと笑う酷薄な笑顔を見て。ユリウスは、トラシュの姿を纏っていても自分との相似を認めざるを得ない。

「ビカラの腕を……奪ったのか……」

バサラはユリウスに立てた人差し指を横に振って否定の仕草をするが。

「奪ったんじゃない。ちょっと借りただけさ。ビカラにはもう要らないだろう。寝台から動けないんだし……ね」

言っている言葉は肯定している。

「あれどうした？ 気分でも悪いのかい？ 顔色が悪いが……」

壁に突き刺された左手を残し、崩れるユリウスを抱きとめてバサラは剣を抜いた。そこへばたばたと軽い足音が近づく。

「兄様、クロードいました？」

アリスローザが部屋に走り込んで来て……止まる。

「兄様……？」

「おや、下で止められなかったのかい？ 二人ともお楽しみに夢中なのはいいが、鼠が入って来たのに気付かないとは……やれやれ」
穏やかな声で話すのはいつもの兄だが。トラシュに抱かれているユリウスの左腕からは血が流れ、トラシュ本人の持っている剣には、ユリウスのもものと思しき血がべっとり付いている。

「……兄様、ユリウス様はどうされたの……？」

この光景を見てさえ、アリスローザはトラシュがユリウスを刺したとは思えない。おろおろと目の前の兄に尋ねる。

「ああ、ユリウスがいう事を聞かないものでね、つい」

口をにんまりとさせて笑うトラシュに、ようやくアリスローザも疑うような目を向けた。

これは兄の形をとっているが兄ではない。急に恐ろしくなつてアリスローザが後ろへ後ずさるのを追うようにトラシュが一步前に出る。

「あなたは誰なの？」

「何を言ってる、私はトラシュだよ、アリス。父上に予定が変わつて私は、ユリウスとモンド州の廟に行くと言えておいてくれ」

トラシュはアリスローザにそう言い置いて、ユリウスを荷物のように肩に担ぐ。そして剣に付いた血を自分の上着で拭いて鞘に戻し、素早く印を組む。中央にある檻のことなどもはや眼中にない。トラシュの周りにぐるぐると風が巻き起こり、その渦の中に入つたままトラシュは大きく開いた窓から出て行つた。

何なの？ 後にはぺたりと座り込んだアリスローザが取り残された。

「お前達、久しぶりで仲良く遊んでいるのもいいがそろそろ終わりにしなさい。モンドの廟に行く」

対峙している二人の間にユリウスを担いだバサラがふわりと降りて、振り下ろされた互いの剣を呪で弾いた。

「カルラ様、血が！」

ラドビアスが担がれているユリウスの垂らされた左腕の傷に気が付いて、手をだそうとするのをバサラが払い退けてユリウスをインダラに渡す。

「おまえにはやってもらつた事がある。竜門を開けて案内しろ、モンドの廟だ」

「……バサラ様」

躊躇^{ちゅうちゆ}するようにバサラから目を背けるが……がくりと首をつな垂れて観念したようにラドビアスは印を組んだ。

「アルベルト！ ルーファス！ サイロス！ 解せよ」

暗闇がぱっくりと口を開けた。

「じゃ行こうか、久しぶりだな……サンテラもいてカルラもいる」
バサラが楽しそうに言うのをラドビアスは背中で聞いて、悔しうに唇を噛んだ。

レイモンドール国の首都サイトスの主城。その王の寝所にガリオールが佇^{ただす}む。

現王コーラルが二十七歳で即位してわずか十四年。なんと短い在位か。即位して直ぐに双子を授かった時点でこの王の治世は短いものになるとガリオールは思ったものだが。

普通は双子の成人を待つてからの崩御^{ほうぎょ}となる例が多いのだ。

まれに王があまりにも高齢で双子を儲けたときなど成人前に崩御する事があるが。それでも魔道の加護に護られているのか、王は人間の寿命に逆らうように永らえる。大抵は、双子が十七歳までになるまでこの世に留まるものなのに……わずか十四歳とは……。

今迄ここまで年少で『鍵』と契約を交わした王はいない。果たしてクライブ様は子を成すことができるのだろうか？ 今回は何もかも今までと違うようだ。

今朝から剣は幾度も姿を変えて『鍵』に戻り、陽炎のような空気の歪みが今も剣を取り巻いている。ガリオールにとって要は王自身のことより『鍵』を何事もなく次の王へ引き継ぐことが大事なのだ。

このレイモンドールを今ある形で恙^{つつがな}無く動かしていくことこそが彼の使命である。王はそのための駒……重要な駒の一つでしかない。王という器が大事なのであってその中身については王の血を

継いだ双子の一人なら顔ぶれが変わろうとあまり関係ない。 何十年かでどうせ変わっていくのだ。

まあ、御し易い人物にこしたことはないのは勿論だが……。

「父上……」

クライブが心配そうに父親の手を取る。 それを見て、自分の思いに埋没しかかっていたガリオールははっと意識を戻して先程の考えなど気取られぬように顔を取り繕った。

新王の契約

「ガリオール、父上のお姿が……」

目の前で苦しそうな息をしている父親の顔から青年期の若さが消えていることに気が付き、クライブがガリオールに助けを求めるように^{すが}縋る。

この人は……父上なのか……？ 赤味の強い茶色の髪に僅かに白髪が混ざり、目じりには昨日までは無かった皺がある……中年の男。

「クライブ殿下、御気を確かに聞いて下さいます。陛下のお最後が近いのですよ」

ガリオールの言葉に、クライブは目を見開いて父親を見つめた。
「ご葬儀の前に祭祀を執り行います。殿下、御気を強くお持ちになつて急ぎ魔道師庁の方へおいで下さい。祭祀のお召し物をご用意します」

茫然とするクライブを気遣いながらてきばきと指示をとばし、クライブに魔道師を一人つけて支度のために部屋から出す。

「誰か、クロード様を魔道師庁の私の執務室にお呼びなさい」
何度も繰り返してきた行事。しかし今回は上位の魔道師は呼び戻してあるルークとリチャードしかない。魔道師たちに命じて意識を失った王を寝台から細長い輿に乗せ変えて魔道師庁へ運ばせる。自分は剣を箱ごと捧げ持つて王の輿の後に続いた。その列にクロードが走り寄る。

「ガリオール、何？ 俺は何をすれば……」

ガリオールは小さい溜息をついて輿を先に行かせるとクロードに向き直った。

「陛下の崩御がお近いのです。祭祀を執り行いますのでクロード様も魔道師庁の方へお越し下さい。衣装は直ぐにご用意させますからね」

言つて踵^{きつす}を返すと剣を捧げ直し魔道師庁へ歩き、その後をクロードも追う。魔道師庁の最奥の双頭の竜の彫刻のある高い扉を開ける。輿より先に入ると、高い位置にある祭壇に剣を置いて出て来る。

「ルーク、リチャード手伝ってくれ」

「はいはい」

緊張感のないルークの返事に懽然とする。この自分と同期の魔道師は自分と同等の能力を持っているにも係わらず浮ついていて、一緒にいるとこちらまで調子が狂う。が、主はルークを高くかっているようだ。ガリオールも腹藏なく話せるのは王の半身出身の上位魔道師では無い、同期のルークだけなのだが……。

王を乗せた輿をルークとリチャードの二人で運び入れて、祭壇の前に設えた寝台に横たえる。この中には王と王の半身、祭祀をしきる上位の魔道師。そして新しく王となる者とその半身以外は入れない決まりだ。

現王の家族である王妃、長女であるマーガレット姫も入る事は出来ない。つまり王の死に目には立ち会えない。勿論これもガリオールが作った決まりなのだが。王の崩御に伴う『鍵』との契約を一部のもの以外に見せるつもりはガリオールには毛頭無かった。王とその半身がその生涯で二度訪れる場所、始まりと終わりの場所。ガリオールは石畳の床に膝について王の寝台に付き添っている男を考え深気に見た。

同じ竜印を持つ魔道師だが、半身の事は長く生きてきた自分にもよく解からない。自分は元を正せば子沢山の農夫の子供だった。おそらくこの国の黎明期^{れいめい}に魔道師庁に入ったもの達は自分と似たりよったりだろう。

貧乏人の子が口減らしのために廟に連れて行かれたのだ……。そこへ白い正装を纏ったクライブが緊張のためか青い顔をして入室し、その直ぐ後、うつむきかげんで王の半身と同じローブを纏ったクロードが入った。二人は、ガリオールが示した場所に膝をつ

いた。

「揃いましたか？ 閉めちゃいますよ」

相変わらず気の抜けるようなルークの声の後、ルークとリチャードがきつちりと内側から扉を閉める。と、同時に一瞬目を開けていられない程の光が、祭壇の上の剣から四方に飛びクライブは手で顔を覆う。

「ご逝去されました」

ガリオールが静かに言ってルークを見た。それに気付いてルークが弔慰を表すレーン文字の呪文を唱え、リチャードが印を切る。

剣は『鍵』に戻り、ガリオールが押し頂いてクライブの前に立つ。「これからクライブ殿下におかれましては王となる為、『鍵』と契約を交わして頂きます。

『鍵』を膝まづいているクライブに手渡す。

「『鍵』を顔の前に掲げてお持ち下さいまし」

大人しく『鍵』を掲げるクライブにうなずいてガリオールは続ける。

「わたしのあとにつづいて同じ言葉を仰って下さい」

「我、汝と契約する者なり。血の契約をする者なり」

ガリオールが目で促す。

「我……汝と契約する……うっ！」

クライブが胸を押さえてうずくまる。驚いてガリオールが駆け寄る。

「どうしました？ お加減が宜しくないのですか？」

「い、いや……大丈夫……だ」

苦しそうな声。

さつき、お会いした時は何とも無かったが……。ガリオールも気にはなるが『鍵』との契約は後回しには出来ない。再度クライブに声をかける。

「もう一度お願いできますか、殿下？」

「わ、解かった。……我汝と契約する……者なり……血の契約をす

る者なり」

「変じよ、と」

「……変じ……よ」

最後は消えそうな声になって『鍵』は掲げられるどころか右手に握りこまれて胸に押さえ付けられていたが『鍵』に変化がおこる。

「熱っ！」

火傷するかと思うほどの熱さにクライブは『鍵』を取り落とした。

『鍵』は形が曖昧になり……獣のような咆哮ほうこうが辺りの空気を震わ

す。世に新しい王が即位したことを知らせる竜の声と言われている。その後、に『鍵』は竜が巻きついていて美しい細工を施してある長剣に姿を変えた。剣の刀身には古い呪文が彫りこまれている。

そして……竜を象った美しい彫金の指輪になって床に転がった。

蒼白で細かく震えているクライブの手に床から拾い上げた指輪をガリオールがクライブの右手にはめる。

「クライブ国王陛下、ご即位おめでとうございます」

クライブの体調が悪いため仰々しい言葉も無い。儀式もそこそ

こに王となったクライブを祭祀所から退室させてガリオールは残された前王の半身に目を向けた。

「今からそなたはコーラルの名を与えられた。今日より上位の魔道師として魔道師庁のために力を尽くしてもらおう」

ガリオールの言葉にコーラルは深く頭を垂れた。

「コーラルの名を頂き魔道師庁の末席に加えて頂き真に有難うございます。魔道師庁のために生々世世力を尽くします」

ガリオールはコーラルの言葉に満足してうなずくとクロードに視線を向けた。物事を肅々じふじふと済ませたい性格のガリオールにとって仕方の無い事とはいえないいろいろ省略した今回の祭祀は不満が残る。

だが、一応すべてやるべきものの核は恙無く終わり、ガリオールはほっと胸を撫で下ろした。

「クロード様、今から国王クライブ陛下付きの魔道師としてサイトの魔道師庁に属して頂きます。この度は準備期間が無くて魔道師

としてのお勉強も途中でございましょうから続いてサイトスで学んで頂きます。……クロード様？」

あまりの反応の無さに言葉を止めてガリオールがクロードに近づく。

「クロード様？」

いつもならいちいちガリオールのいう事に反発したり、質問したり姦しいほどなのに大人しいというよりはまるで……。うつむくクロードの顔を両手で自分のほうへ向けてじつくりと見る。表情の無い顔、目の瞳孔が開いている、綺麗に切り揃えられた前髪が揺れた。

術にかかっている？

『解！』印を組んで大声を出すと、がくりと仰け反ってクロードが倒れるのをガリオールが支え起こす。ガリオールの腕の中でクロードは二、三度頭を振って目を見開いた。

「ガリオール、祭祀は？ 父上はどうなった？」

ごくりと喉を鳴らしてガリオールが呻いた。

「クライブ様でございますか？」

「何を言っているのだ、ガリオール？」

言ってから自分の着衣に気付く。

「何で私がローブを着ているのだ？」

「申し訳ございません、失礼いたします」

王の遺体も啞然としているクライブもその場に残したままガリオールが急いで魔道師庁から出て行った。

「やられたな、何か企んでいると思ってたが……ルーク、ガリオールの顔を見たか？」

いつものように軽口を叩くチャールズは深刻そうなルークの表情に驚く。

「クロード様は『鍵』をどう使うおつもりなのか、どう使ってしまったのかが問題だ」

灰色の瞳が心配そうにガリオールの走り去った方を見据えた。

謀る者と人外の道

「クロード様！」

王の寝所に走り込んで来たガリオールの声に、今まさに竜門を潜るうとしていた少年が振り向く。

「謀りましたね」

ガリオールが苦虫を噛んだように言う。

「ばれた？ ごめんガリオール。でも、俺剣が要るんだ。ユリウスが待ってるから行くね」

クロードは言うだけ言うと竜門に消えた。今、クロードを追ってサイトスを離れるわけにも行かず。ガリオールは考えた末、ルークを呼ぶ。

「クロード様をお守りしてくれ、『鍵』と契約なされたのはクライブ様では無くクロード様だ。後から私もここをリチャードに任せて行く」

「じゃあ、お先に」

ルークがクロードの後を追いつつボルチモアへ向かった後、ガリオールは脱力して長いため息をついた。長いレイモンドールの歴史の中でさえ、胸に竜印のある者が『鍵』と契約を交わした事など無かった。そんな事を考える者が出て来る事さえ、今まで頭に無かった。先程の体の不調は、竜印が成った為だったのか……ちらりとも考えなかった自分に腹が立つ。

しかし、竜印を持つということは主と繋がるということだ。

ガリオールをはじめ上位の魔道師たちでさえ、長時間『鍵』に触れていると体調が悪くなるというのに。あの少年がこの先どのくらい経典を身の内に置いておけるのか、誰にも解からない。

さて……これをどうするか、問題は山積している。

ボルチモアの州城敷地内の小宮の中、へたり込んでいたアリスローザの目の前にぼっかりと開く穴。

何？ 魔道師が使うと言われている人外の道。 何でここに？ 穴の縁に手がかかり現れた人物を見てアリスローザが声をあげる。

「クロード、どうして？」

少年の後に灰青色のローブを来た男が続いて出て来る。

「ごめん、アリスローザ、どうもこうも、俺ははなっから魔道側の人間だったんだ」

「私を騙していたのね」

アリスローザが噛み付くように言うのをやるせなくクロードは聞く。 こうなることは……解かっていたのに。

「騙すつもりは」
だま

言いかけてクロードは後の言葉を飲み込む。 騙すつもりが無かった……と言うつもりか、それは違う。 初めから騙すつもりだったのだ。

「ごめん」

それしか言える言葉が見つけれなかった。 そして目の前に圧倒的な存在感で部屋にある球体に目をやる。

「あれは何だ？」

「何かは解かりませんが主の為さった事であるのは確かでしょうね」
首を傾げてルークがクロードに言う。 灰色の長い前髪が顔半分を隠して表情はよく見えないが自分の主を心配して眉根を寄せている。 一体、ここでユリウスに何がおこったのか？

クロードの視線が床に投げられている剣を捉える。とら これは、トーマスの。 この中にトーマスがいる？ ではなくてトーマスに擬態した何者か。

クロードは急にアリスローザに腕を引かれてはっと後ろを見た。
「兄様が……いえ、あれは兄様じゃないかも。 とにかく兄様に化け

てた者がユリウス様を連れてモンドの廟に行くって……窓から出ていったわ」

青い顔でアリスローザが言いにくそうに小さく言った。さっきの出来事は本当の事なのにこうして口に出してみるとなんと臭い作り話のようだ。

それとも今迄私、夢でも見ていたの？ それも性質の悪い夢だ。魔道師を排斥^{はいせき}しようとしている兄が魔道師のように印を組んで、ユリウス様を攫^{さら}って窓から出て行くなんて。しかも、竜門からクロードが魔道師を従えて出て来るなんて。

「トラシュ様に擬態した誰か、ですね」

ルークが考えるように呟く。

「主が気付かない程、巧みに擬態できるとは？」

ルークの呟く声にクロードはインダラの姿を思い描くが。

いや、インダラとトラシュは同じ時間別の場所に居た、となると別の誰かがこの国に入ってきて来ているのだ。だとしたらユリウスの兄弟の内の誰かかその直系の僕だろう。

トーマスとトラシュ、二人なのか、他にもいるのか。

「新しい血痕があります」

ルークの指差す方を見ると、柱にべつとりと血がついていた。

「アリスローザ、ユリウスは怪我をしていた？」

「……していたわ」

他でもない、自分の兄がそれを行った事を、アリスローザは兄を別人と疑っていたにも関わらずクロードに言うことが出来ない。

「ルーク、廟へ行こう」

「はい」

竜門を開けるとクロードの後ろにアリスローザが走り寄る。

「私も連れて行って！ 兄様を追いかけては」

「それは出来ない」

強く肩を押してクロードがアリスローザを押しとどめて顔を見る。きっぱりと言われてアリスローザが大声を出す。

「私が足手まといになるって言うの？ そんな事には絶対ならないわよ、クロード」

「そっじゃ、無くて……」

クロードがため息をついてアリスローザの両肩を持って自分に向かせる。殆ど同じ背の高さの為、顔が真正面に来てアリスローザはどきりとした。

「竜道は人外の道だ。知ってるだろう？ 人は通れないんだ。俺は……俺は既に人ではないよ、その意味では。だから君には通ることが出来ないんだ」

「人で無いってどういう？」

アリスローザの頬に手を滑らせてクロードは再度、ごめんと言った。

ルークが印を組んでルーファスを呼ぶ。

「ルーファス、ここからイーヴアルアイ様が何処の廟に行ったの？」

「ご案内します」

ルークの問いに聞き取りにくい風音のような声が答える。

「クロード様」

「うん、行こう。待っててアリスローザ」

二人が暗闇に吸い込まれるように消えてその闇も現れた時のようにふいと消えた。

残されたアリスローザはクロードの触れた感触を確かめるように自分のほおに触れる。

夢じゃないのね。兄だと思っていた者は誰か確かめるべくも無く姿を消す。また、好ましく思っていた年下の元氣印の隣州の公子が、魔道師だと言い魔道師を従えて闇に消えた。私は今迄何を見ていたの？ この目に映っていたのはすべてまやかしかった

のか？ では今迄私がやってきた事は……？ そうだ。

「お父様、お父様にお会いしなくては」

今のアリスローザの困惑の淵から救い出してくれるのは父親しかない。悪夢の中から現実の自分の見知っている世界へ帰る。

その一心でアリスローザは主城へ急ぐ。父親が見せていたものも、己の見栄えのいい一面であることにアリスローザは気付いていなかった。

尋問（前書き）

この回はやや残酷な描写が入ります。こころしてお読みくださいませ。

尋問

モンド州ゴート山脈の廟。

ヴァイロンが命からがら山脈にあるハンゲル山にイーヴァルアイと会った五百年前は、長大な岩肌を掘り込んで造られた廟が一つきりあるだけだった。その後、長年に渡り次々と大小の廟がゴート山脈に建てられて、今ではモンドの廟と言えばゴート山脈一帯を指している。

「起きろ、カルラ。着いたよ、起きて」

昼寝をしている子を起こすように揺さぶるとユリウスが薄目を開ける。

「うるさい、寝かせろ」

「ふーん、寝起きが悪い子はお仕置きだな」

優しく言う言葉とは裏腹に、目を閉じるユリウスの左腕の傷口にバサラが指を突っ込んだ。

「ぐはっ、や、やめ……」

上がるユリウスの悲鳴。

「ほら、目が覚めたる？ 起こすの得意なんだ」

笑いながらバサラが血の付いた指をぺろりと舐めた。

「この……変態野郎！」

痛みに引きつりながらユリウスが悪態をつく。

この二人は本当に何から何までよく似ている。 ラドビウスは密かにため息をつく。

顔形は勿論の事、しゃべり方、思考傾向まで双子のように似ている。しかし、バサラがカルラのことを交配相手と見なしている以上、決して相容れる事はこの先無いのだろう。

「何を深刻な顔をしているんだ、サンテラ。晩飯の心配なら鹿肉の煮込みがいいな」

物思いに沈んでいたラドビアスにバサラが言う。

「今晚はそんな手の込んだ料理は無理です」

ラドビアスの律儀な応えに、からからと楽しそうにバサラは笑う。
「カルラのことか心配か？ ほら見てみる。傷口がもう塞がりかけている。私達の体がそんなに柔な体じゃないのを知っているだろう？」

バサラがユリウスの左腕を持ち上げてラドビアスに見せる。

「まあだけど痛みはそこら辺の人間と同じだ。いやどうなのかな？ そう思っているけど……血も流れるし……だからこそうする事に意味がある」

言うと同時にユリウスを押し倒すと、今度は右腕に剣を突きたてる。

「うぐっ！」

「お止めください！ バサラ様」

とび出したラドビアスを、インドラが後ろから羽交い絞めにして止める。

「手をだすな、サンテラ」

「くっ！」

何をされても生きてさえいればと思っていたが、思いの外自分は耐えられそうに無い。

「カルラ、もう右手も封じたよ。今度はどこがいい？ 要望は喜んで拝聴するが」
はいちよう

我が弟、いや妹か……カルラは剣術、体術が出来ない。それは意図して自分がその機会を奪ったからだ。自分の影響下から抜け出した後も習得しなかった事はこの際、福音だろう。それでやっかいな禁術を繰り出す両手を止めてしまえば簡単に攻略できる。

「じゃあ、おまえの首を」

ユリウスの返事に生徒を叱る先生のように言う。

「今のはダメだな。面白くない、減点一だ」
後ろに顔を向けて叫ぶ。

「インダラ、おまえの剣を貸せっ」

バサラの声に後方でラドビアスを押さえ込んでいるインダラが腰からレイピアを抜いて放ってよこす。

「無精者が！ 主人に投げてよこす奴があるか。カルラも私もうくな僕を持っていないな」

ひょいと受け取ったレイピアでユリウスの左太腿をついと突き刺す。

「ああっ」

「経典はどこにある、カルラ」

「……鼻噛んで捨てた」

「うっ」

バサラが右の太腿にレイピアを刺し替えた。

「おまえ言ってることがどんどん面白くなっているぞ。残念だな。また減点だ」

言いながら二度、三度と頬を張る。

「経典の場所はどこだ？」

「……バサラ、おまえさっきから同じ事ばかり言って……呆けたんじゃないのか、くそじじい」

バサラがユリウスの顎を掴んで目を細める。

「カルラ……もしかしておまえ楽しんでる？ 実を言うと私もちょっと楽しんじゃってるけどそろそろ遊びは終わりにしないか？ 母様に遊びは一刻だけといつも言われていただろ？」

太腿から抜いたレイピアをゆっくり右の胸に刺していく。ごぼごぼと空気の漏れる音がしてユリウスの口から血が流れ落ちる。

「……おまえは……母様と一刻以上……遊んでいただろ……ぼけ」
ふん、鼻を鳴らしてバサラが無造作にレイピアを抜く。

「次は左だけと言わないんじゃないや仕方ないな」

芝居がかった仕草でレイピアを上段に構えると躊躇い無く振り下ろした。が、そのレイピアはインダラを振り切ったラドビアスの剣が弾いた。

「お止めください、バサラ様。カルラ様を殺すおつもりですか！」

「……サンテラ」

ラドビアスの剣幕にバサラが値踏みするように見つめる。

「おまえはカルラにとって虜囚の価値があるのか？」

「ありません」

ラドビアスが短く応えた。

「ふーん、これでは埒が明かない。カルラも私も自分以外心を寄せる者がいないとは泣けるな」

バサラはレイピアをからんと放り投げるとユリウスの右腕に刺していた剣を抜いて腰に戻し、ざっと廟の中をざっと見回して白墨を見つけて掴むとその場にしゃがみ込む。

「仕方ないな……それとも初めからこうすれば良かった？」

ぶつぶつ言いながら魔方阵を描いているバサラに、やれやれとインドラが呆れたような顔を見せる。

「だって、楽しんでらしたじゃないですか」

「まあね」

さらさらと描きあげると立ち上がってラドビアスに声をかける。

「真ん中に寝かせる。線を消すなよ」

ラドビアスが魔方阵の真ん中にユリウスを降ろして下がったのを、バサラがばかにしたように見る。

「おまえ、最低の僕だな」

呟いてバサラは印を組んで呪を唱える。

『我に寄りて力を貸さんとせよ、捕縛、落手、剥縛、おまえの口蓋の主は私だ』

血の気無く仰向けに横たわるユリウスの胸倉を掴んで上体を起こす。

「経典の在り処を言え！」

ユリウスが口に溜めていた血を吐いてバサラの顔にかかる。

「経典の在り処だ、カルラ」

苦しそくに口を閉じようとするがユリウスの口が勝手に動く。

「……王に……王の体に封じてある……」

「バサラ様」

バサラとインダラが顔を見合す。大きく舌打ちしてユリウスの体を突き放すように床に落とすとラドビアスに命ずる。

「竜門を開ける、サンテラ！ サイトスだ。インダラ、カルラを頼む」

「はい」

ラドビアスとバサラが竜門に消えて、インダラが思いついたようにユリウスに屈み込む。

「そうでした」

ユリウスの口に手のひらを置いて術を解く。

『解！』

「寝台にお連れしますよ」

インダラが抱き上げるが、ユリウスの反応は鈍い。

本当にバサラ様も遊びが過ぎる。カルラ様が死んでしまっていたらどうするつもりだったのか。軽くため息について部屋を出るが……。

「はて、寝室は一体どこでしょう。聞こうにもここに居た魔道師は全員殺してしまったし。私も主と同じですね。考えが足りない」
くすりとインダラは笑みを浮かべた。

インダラの首

「ルーク、ユリウスが今命の危険にさらされているんじゃないかな」
「お解かりですか、クロード様」

モンドの廟の一つに姿を現した二人は沸きあがってくる不安を共有していた。それはユリウスと竜印で繋がっている所為だった。
『変じよ』クロードの言葉に指輪は姿を変え、長剣となりクロードの右手に収まる。そして目の前に広がる廟の中の有様に気付いてうっと呻いた。廊下には何人も魔道師が血を流して絶命している。生臭い匂いの中死体を踏まないように歩いて行くと、部屋の大扉が開いている場所にたどり着く。そこには大量の血痕と魔方阵が残されていた。

「この魔方阵は収奪ししゅうだつの形ですが」

ルークの言葉にクロードは頭を巡らす 収奪？ 何を……あ、そうか、ユリウスから經典の場所を術で聞き出したのだ。サイトスに向かったのか。クライブの身に危険が降りかかる。助けなきゃ、でもその前にユリウスは何処だ、サイトスか、いや違う。

クロードが『鍵』に命ずる。

「おまえの宿敵はどこだ」

クロードは剣に導かれるまま廊下に出てある部屋の前で止まる。

「誰です、まだ生きている者がいたのですか」

中から聞き覚えのある声がして、クロードはルークと左右に分かれて部屋に飛び込んだ。戸を開け放ったクロードの目に飛び込んできたのは寝台に寝かされている白い陶磁器のようなユリウス。そして、その横に座っているインダラの姿。

「何してる」

「クロード様、今カルラ様の傷の手当てをしておりました」

クロードが寝台に近づくと、ユリウスは服を脱がされて両腕と両足に綿布を巻かれている。それ以外一糸を纏わぬ血の気が無い体

の胸元に空いた刀傷にクロードは驚く。

「誰がこんな酷い事を」

「申し訳ありません、主が少々やりすぎたみたいで」

言いながらインダラは、傷口を手で触れながら呪を唱えて綿布で巻いていく。

その綿布を奪うように取り上げると、ルークはきつぱりとインダラに宣言する。

「あとの処置は私が致します。その手をどけて下さい。主の体に触れた感触も見た記憶も返して欲しいくらいです」

「インダラ、おまえは俺と片をつけるんだ。外に出ろ」

クロードがインダラに言って部屋を出る。

「ふふ……片をつける、ですか。いいんですかそれで」

寝台の傍らに立てかけてあったレイピアを取り上げて、インダラは立ち上がって薄く笑った。

「死んじやいますよ、クロード様」

「うるさい、来い！」

廊下に出たインダラにクロードが打ちかかる。レイピアの根元

でクロードの刀を受けてインダラの顔色が変わる。

「これは、護法神の」

へへっクロードが笑う。

「そういう事！ 契約したのは俺で」

再度、上段から切りかかる。

「経典があるのも俺の中だっ」

インダラは思いの他鋭い太刀筋に間一髪避ける。間を空けずに

真横から振り出された剣にレイピアを飛ばされた。インダラは素

早く飛びのいて壁に刺さったレイピアを引き抜く。

成るほど、護法神に護られているということか。以前と同じと見くびつているとこちらが死ぬな。インダラが印を組んで呪を唱える。

『夜陰、下弦、闇路を通り彼の者の行く手を阻め』

「インダラ、覚悟！」

剣を構えて走り込もうとしたクロードの体に黒い糸のような物が巻きつく。後から後から絡み付いてたちまち身動きが出来なくなつた。

「うわあ、気持ち悪い」

「失礼ですね、それ私の髪ですが」

余裕の表情を見せてインダラが近づいて行く。

クロードが

魔術においてまだ未熟で助かった。にまりと笑いながらレイピアをクロードの胸に狙いをつけて構える。そこへ古いレーン文字が流れる。

『解！ 焼尽せよ！』大きく呼ばれる声にインダラは身を伏せた。

その上を火焰かえんの竜が口を大きくあけて飛び、クロードの体を包みこんで燃え上がったあと一瞬で消えた。クロードに巻きついていた髪だけが焼け落ちてクロードの足元に灰になって溜まる。

「ルーク、助けてくれて嬉しいけど俺まで焼けるかと思ったよ」

「クロード様は『鍵』に護られておいでなので、まあ大丈夫かと思いましてね」

思つたつて……大丈夫だと知つてたわけじゃないんだ。あ

きれてクロードはルークを見た。ともかく。

「足りない魔術は助っ人が来たよ、インダラ」

上唇を舌を出して舐めてクロードはぴりつとした痛みにうへつと声をあげた。まったく無傷とはいかないか。

「そちらが火ならこちらは水でいきますか」

インダラが早口で呪を唱える。

『龍神降臨し我に力を与えよ、濁！ 爆！ 撃！』押し出すように組まれた手から龍の形を取った水流がクロードに向け噴射される。

宙にレーン文字が手早く描かれる。盾と風、勢い。

『冷滅すべし！』

ルークの呪文が風の盾となり、それに当たる側から水流が凍っていく。

「クロード様！」

ルークの声を合図に氷の間を潜って、クロードはインダラの懷にとび込む。クロードの剣は、インダラの印を組む手ごと腹まで刺し貫いた。

「ぐはっ！」

どうつと腹に剣を刺したままインダラが倒れる。

「返してもらうよ、インダラ」

足で支えてクロードは両手で剣を引き抜く。そこへルークの聲がかかる。

「ちやつちやつと首を刎ねて下さい」

クロードはぎくりとルークを見返す。

「竜印のある者はめつたな事では死にません。その者にもあるのでしょうか？」

この一見優しそうな笑みを浮かべている男も間違いなく、ユリウスの僕なのであった。

「私は剣が使えませんので」

こういうところもユリウス似なのか。汚い力仕事はお願いねと、後ろへ下がるルークにくそっと思いつながらクロードは剣を頭上に構える。そして剣は過たずインダラの首を刎ねた。ユリウスより長生きしていたバサラの従者の首が転がるのをクロードは目で追った。

「ルーク、ユリウスに付いていて。俺はサイトスに行く」

「お一人ではあまりに危険です」

「ユリウスを一人にしとけないだろ、クライブが心配だ」

「それはそうですが」

ルークをユリウスの所に行かせて、クロードが竜門を開けようと印を組んだところに声が……低いハスキーな声がした。

雷公羅漢召喚

「もうおまえがサイトスへ行く必要はないよ、クロード」

目の前に開いたばかりの竜門からトラシユの姿がゆっくりと現れた。

「ずるいな、おまえが王になったんだって？　行ったり、来たり手間をかけさせるなよ、クロード」

「おまえ誰だ、クライブとガリオールをどうした？」

「ああ、不意をついて術をかけて口を割らせたんで、何も手荒なことはしてないけど。あ、術を解すのを忘れた、かな」

男はにやりと笑って印を結んだ。

「私も術を解いておこう。この男の体は動きにくい」

背中がぱっくり割れて蟬が脱皮するように中から男が姿を現わす。古い衣服を脱ぎ捨てるように男の体を横に払った。

「この体では初めまして……かな、クロード。カルラのいや、ユリウスって名乗ってたんだったな。兄のバサラだ」

クロードはごくりと唾を飲み込む。亜麻色の軽くウェーブした髪を緩く結んで背中に垂らし、インドラと同じようなハオタイ風の片側に合わせのある服を着ている。そのバサラはあまりにユリウスに似ていた。細いがユリウスより幾分しつかりした卵形の顔に細い弧を描く眉、美しい水色の瞳の一つ一つが似ているが少しづつ違う。彼はバサラは大人の男の顔形なのだ。体つきもすらりとしているが華奢では無い。程よく筋肉のついた剣術も体術も得意な男の体だ。口の端を吊り上げて笑うその様はユリウスそのものだが。

「あれ？　私の僕はどこですか、クロード」

クロードが無言で指差す方をバサラが目で追う。

「あらら繋げるの大変なんですよ。まあいいでしょう、あと一仕事終えたらベオークに帰れますから許してあげましょう。この件は」

につこりと笑って自分の腰から剣を抜く。

「だからさっさと経典を寄こせ、くそがき！」

バサラの声が合図になってクロードも剣を構えて走り出す。上からクロードが振り下ろした剣をバサラが剣で打ち返しまえ左手に持っていたダガーでクロードの肩を刺す。

「痛ってえ！」

クロードが肩を庇って後ろへよろける。

「そりゃあ痛いだろうよ、私は二刀流なんだよ、クロード」

バサラは流れるような動きで瞬時にクロードとの間合いを詰める。右手の長刀で胸を狙って切りつけながら、クロードが長刀に気を取られている隙に左手のダガーで下弦から切りつけてくる。対峙してまだ間がないのにクロードはもう息があがっている。

「何、はあはあ言ってる？ おまえの師はカルラだからなあ、運動不足なんじゃないか？」

対するバサラは笑う余裕をみせて呪を唱えると、すいっと宙を駆け上がるようにして体を浮かべて立つ。

「今はダガーしか体に当ててないけど次はこっちでいくよ、クロード」

見せびらかすようにバサラが斜めに構えてみせた。

「刀身が波打っているだろう？ フランベルジュというのだよ、これで斬ると傷口が塞がりにくく、殺傷能力に優れていると言われている。解かったかい？」

バサラは言い終わると同時にクロードの頭上からフランベルジュを振り下ろした。クロードはその剣を受けずに転がって避けた。

床に剣を打ち付ける大きな衝撃音がしてバサラは床に着地をする。と、今度は低い姿勢から足を踏み出しながら横様にフランベルジュを振り抜く。

その横からの斬撃にクロードはようやく剣を合わす。そして左手から繰り出されたダガーは後ろから来たラドビアスのダガーによって止められ弾かれた。

「おい、今度はそちら側につくのかサンテラ、せわしない奴だな」
まったく、とバサラは呟いて剣を腰に収めると印を組んだ。

『我 召喚する者成り招魂！ 招請！ 招来！ 雷公羅漢！』

唱えられた呪文を聞いて、ラドビアスがクロードの服を掴んで目の前の部屋に飛び込む。

「何、何だよ」

クロードの問いが終わらぬ間に、もの凄い音と振動が廊下を伝わってクロードがいる部屋まで振るえさせた。

「バサラ様が雷公羅漢を召喚しょうかんしたようです」

ラドビアスがクロードに言う。

「って、説明になってない。」

「雷公羅漢らいこうらかんって何？」

クロードは戸を少し開けて外をうかがう。そこにいたのは異国風の黒い甲冑を着た大男。男が大太刀を振るい、その度に稲妻が走り雷がそこら中に落ちている。クロードは閉まらない口をあわあわとさせながらそつと戸を閉めてラドビアスをみた。

「あれは反則だろ……何、あれ」

「あともう一体別の羅漢をバサラ様は召喚できますが」

「こつちも何か無いの？ ラドビアス、なんか持ってない？」

「持つてるわけないでしょう」

だよね。 がっくりするクロードが壁に背中を預けて座った目の前に、竜門が開きユリウスを抱いたルークが出てきた。

「おい、何で今ここにユリウスを連れてくるんだ」

「うるさい、私の言うとおりにしろっ」

相変わらず苦しそうなユリウスにクロードは気が気でない。

「何するつもりだよ、勝てるの？」

「勝つんだよ、ぼけっ」

ユリウスが唇を吊り上げるのを見てクロードはああと天を仰いだ。
「おまえが『鍵』を継いだと聞いたが、そうならこちらにも勝算は充分ある。降ろしてくれ、ルーク」

気遣いながらそろりとユリウスをルークが立たせると、ユリウスが覚束ない足取りでクロードのところにやって来て、思わずクロードは立ち上がってユリウスを抱きとめる。

「少しこのまま、じっとしている」

ユリウスはクロードの胸元に手をやってレイン文字の呪文を唱えた。

魔獣召喚

『閻王の書、閲覧、開示せよ』言ってクロードを見る。

「魔経典、第五十章、第三節だ、クロード」

俺？ ユリウスの声に驚く間も無く頭の中ではぱらぱらと勝手にページが捲めくられるイメージにクロードは飲み込まれる。そしてクロードの口について古いにしえの言葉が流れて最後にある名前を叫んだ。
『アウントウエン！』

大きな声で言っておきながら何の意味か解からない。とまどうクロードの足元近くの床がぼこぼこ泡だつて解けた溶岩のように変わる。むっとするほど周りの空気が暑くなり、クロードはその場所から飛び退いた。そこから赤い塊かたまりがどろりと姿を現すと、ぶるぶると体を震わせたため、そこらじゅうに溶けた石が飛び散る。慌ててクロードは出来る限り距離を取った。姿を現したのは、大型の狼のような姿。背には大きな翼を持ち、床を打ち付ける尾は鞭むちのようなのだ。

「おまえが……アウントウエン？」

クロードの呼びかけに小さく炎を吹いてアウントウエンが応えた。
「行け！ おまえの主に仇名す者を始末しろ！」

クロードの開けたドアを一回り大きく破りアウントウエンが走り出て行く。大きな衝突音がしてその後獣の吼ほええ声が反響する。

「あいつらは放っておいてクロード、私達はバサラを捜すぞ」

「うん、だけどユリウス、経典の中身全部覚えてるのか」

「まさか、どこに何が書いてあるかぐらいしか覚えてない」

ぐらいつてそれって凄い事じゃないか。クロードはユリウスの頭の良さに改めて舌を巻く。

「とにかくクロードの体に経典が封じられているのは好都合だ。今までは私の自由に中をのぞくこともままならなかったからな」

ユリウスはにやりと笑う。

と、いう事は結界術も何も護法神が追いかけてくる前に納めた以降、ユリウスは何百年というものの経典を開いていないのだ。

そんな奴に凡人の俺の勉強の悩みはこの先解かることはないだろう。

クロードの緊張感の無い思いなどユリウスは気にもかけず、次の呪文を唱える。

『閻王えんおうの書、閲覧、開示せよ』

「クロード、魔経典第三十八章、第十五節！」

またもやクロードの頭の中でページが捲られる。　続いてクロードの口から発される古い言葉、そして頭のなかに現れる名前。

『サウンティトウダー！』

クロードの声に応えて敷かれた石板を突き破って勢い良く姿を見せたのは、先程と違って黒い塊。　大きく伸びをして体を伸ばすとその大きさに驚くが、その姿もクロードには珍しいものに映る。

大陸の南に棲むと言われているワニのような顔。　その頭には立派な角が二本あり、体は硬そうな鱗りんがびつしりと生えている。　その四肢には蹄ひづめでは無く鋭い爪が石板にくいこんでいる。　鱗に覆われている尾の先には鋭い棘があり、なんとも恐ろしい外見だが前足を二、三回かいて大人しくサウンティトウダーは伏せの姿勢を取った。

「クロード、乗れ、ルーク、私をクロードの後ろに乗せろ」

もつとつるつる、ぬるぬるしているのかと思ったがサウンティトウダーの背中以外にすべらかで安定していた。

「クロード、首にしっかりとつかまれ」

ユリウスはそう言っただけクロードの腰にしがみ付くが、痛むのかうつと小さく呻いた。

「大丈夫、ユリウス？」

「うるさい、それよりサウンティトウダーの体のどこかに逆鱗ぎゃくりんがあるらしいから気をつける」

え？

「それって具体的にどこら辺？」

「……知らない」

ええっ？

「私はアウントゥエンもサウンティトゥーダも今迄召喚した事など無い」

きっぱりとユリウスが言う。

「行くぞ」

ユリウスが懷から一本の髪の毛を取り出す。

「サウンティトゥーダ、この髪の毛の持ち主を探せ」

長い首を回してまえに突き出された亜麻色の髪をぱくりとサウンティトゥーダは飲み込むと立ち上がった。

「ラドビアス、ルーク後から来い」

クロードは自分の腰に回されたユリウスの腕に巻かれている綿布に血が新たに滲^{にじ}んでいるのに気付く。 まったく、元気そうに装っている割にはあまり時間はかけられない。

しかしクロードの気がかりも何も、サウンティトゥーダが走り出したことでクロードの頭から消え去る。 今も戦っている雷公羅漢とアウントゥエンを避ける為に、廊下の壁を激走している所為だ。 廟の1階の大きい吹き抜けになっているホールにサウンティトゥーダが降りたときには天地がどうなっているのか暫く定かではなかった。

そこへかけられる、低いハスキーな声。

「凄い物を出してくれるじゃないか、カルラ」

ホールの最奥で印を組みながらバサラが立っている。

『我召喚する者成り招魂、招請！ 招来！ 風公羅漢！』

あつという間もなく竜巻がホール中央に出現し、あまりの暴風にクロードが目を開じた後、がちやりと金属が床に当たる音がしてクロードは目を開けた。 髪を逆立てたこれまた雷公羅漢と同じよう

な甲冑を身に着けた大男が鎖鎌を携えてまさに仁王立ちしていた。

そこへ、バサラの声がホールに響く。

「そのトカゲを排斥^{はいせき}せよ！」

思いの外、素早い動きで鎖鎌が飛び、サウンティウーダの首に巻きついた。対するサウンティウーダが唸りをあげながら風公羅漢につつこんで行く。

クロードはユリウスに腰を掴まれたままサウンティウーダから転がるように落ちた。

「あ痛っ」

落ちた衝撃に顔を歪めるユリウスに手をかけて大丈夫かと言おうとしたクロードは、床の石に描かれている模様に気付く。俺

達は大きな魔方陣の中にいる。

『変化！ 変質！ 変転せよ！ 石岩、遡^{さかのぼ}及し水をたたえよ！』

バサラの声とともにクロードとユリウスがいる敷石の床が、ぐずぐずと崩れて水が溢れたと思う間にユリウスを飲み込む。

「ユリウス！」

クロードが腰まで水に浸かったところにバサラが水から少し上あたりを歩いて、クロードの前で止まるとぐいとクロードの手を掴んだ。

「羅漢出した後、お前達が隠れている間に何も仕掛けてないとでも思っていたか」

バサラが楽しそうにクロードに笑いかける。

「助けてやるからカルラに降伏するようにおまえから言ってくれないかな」

「誰が！」

「そんな事言っているの？ 手を離しちゃうよ。それにカルラももう引き上げないと、いくら私達がしぶとくても術を使わずに水の中に長時間いたら死んじゃうよ。傷も開くしね」

言いながらバサラは満面の笑みを浮かべる。こいつ、楽しんでいやがる。しかしこんな時の顔もこいつはユリウスに本当に似て

いる。

クロードは悔しそうに唇を噛んだ。

自爆の印

クロードの返事に満足そうにうなずいてバサラは、そのまま片手でクロードの全身を引き上げると腕を掴んだまま魔方陣の外へ連れ出すとすとんと降ろす。

「じゃあ大人しくね」

バサラはクロードの口に手を触れると印を組む。

『閉塞せよ』縫いとめられたように口が動かなくなり、クロードは念じて『鍵』を剣に変えようとするが『縛せよ!』バサラの声に体が硬直する。

「大人しくしろって言わなかったか、がき!」

クロードはバサラに腹を蹴られて転がる。

「おまえに説得させるのは止めだ、面白くないからな」

バサラは踵を返すとすたと魔方陣のほうへ歩いて行く。膝をついて水の中に深く手を差し入れると、水音を立てて白い手首を掴んで一気にユリウスの体を引き上げて抱き上げた。

「起きろよ、カルラ。おまえがこんなに昼寝好きだとは知らなかったよ」

ぐったりしているユリウスに大きく二回、三回と平手を打つ。

「ぐはっ」

水を吐いてユリウスがげげほとむせたように息を吹き返す。

「やっとききたか、おまえには聞くことがある」

そのまま濡れのユリウスを横抱きに抱えて立ち上がると、バサラはクロードを降ろしたほうへすたと歩く。

「昔からおまえは甘えん坊だが抱っこばかりしていたら抱き癖がつくというからな、これで止めだ」

バサラはどさりと放るようにユリウスを降ろした。そして横のクロードに人指し指を立てる。

「そこで大人しく待ってるよ、クロード。すぐに相手をしてやる。」

順番は守らなくっちゃな、おまえはカルラの次だ」

バサラの目がユリウスへと向く。

「おまえが強情なのは解かったからもう遊びは無しだ」

ユリウスのローブの胸倉を掴んで引き寄せると呪を唱える。

『我に寄りて力を貸せ、捕縛！ 落手！ 剥縛！おまえの口蓋の主は私だ』

「カルラ、クロードの体に封じている経典を解す方法を言え」

「……」

「カルラ、答えろ」

「……外縛印、外獅子印……被申護身印」

「呪文は？」

『フェフュー ウルズ スリサズ アンスル ラドウィン ハガル
ニイド イス』

ユリウスの言葉にバサラの眉間に皺が寄る。

「それは爆する事に関係している呪文だろう。カルラ、おまえって奴は」

吐き捨てるようにバサラが言うと、ユリウスが閉じていた目を開けてにやりと笑った。

「ばれたか、やれば良かったのに。今のは自爆の呪文だ、私だって同じ手を何度もくらうものか。反呪の印をさっき体に焼き付けたからバサラ、おまえの呪は私に効かないよ」

「くそっ！」

ユリウスの胸倉を掴んだまま体を床に打ち付けるようにして離すとバサラは立ち上がった。

「取り出せないならクロードごと消してやる」

「そんな事、護法神がクロードを守るさ」

ユリウスに右から拳をくらわせて黙らせるとバサラは顎に手をあててクロードを見る。 護法神はクロードを守っている、ではなく護法神は経典を守っている。

「もし、クロードが自ら死のうとしたらどうなる？ 体が残ってい

るなら次の体へ封じられるのをまてばいいが、自爆しようとしたら。護法神は止めるかな、試してみるか。カルラ、おまえはどう思う？」

バサラがクロードに近づく。

「大人しくしていたかい、クロード。順番が回ってきたよ」

『解！』解したその手で新たに印を組んでクロードの口に触れ、腕を取る。

『我に寄りて力を貸せ、捕縛！ 落手！ 剥縛！ おまえの口蓋と両手の主は私だ』

クロードが必死で抵抗しようとするが両手も口も自分のいう事を聞かない。

「外縛印、外獅子印、神申護身印」

バサラの言葉どおりにクロード手が印を組む。

「クロード、私の後に続いて唱えろ」

『フェイフュー ウルズ スリサズ……』バサラの後にクロードの声が続く。

「止める、バサラ！」

ユリウスが耐え切れず声を上げて呪文が途切れる。

「何だ、今大事なところなんだけど」

バサラが軽い調子で返す。

「クロードから経典を取り出すから……もう止める」

苦しそうに吐き出された言葉、それは体が不調な為ではない。

諦めたような声。

「そうか、へえ、そうなのか」

バサラがゆつくりとユリウスとクロードを交互に見る。

「クロードが大事なんだ。妬けるな、まあヴァイロンに瓜二つだものな、この子供は」

バサラが笑みを浮かべてユリウスの手を取る。

「じゃあクロードもベオークに連れて行こう。おまえが望むなら愛人として一緒に暮らしてもいいさ。私は寛大だからな、ヴァイロンはいくつの時おまえと会ったんだっけ。確か二十歳をいくらかも超え

てないくらいだったよな。竜印を解してヴァイロンと同じくらいの歳になったらまた竜印を施せばいい」

楽しい計画を披露するように喋るバサラにユリウスは眉根を寄せながらもよろよろ立ち上がった。両足から新たに出血してローブの下から落ちて床に広がる。

「バサラ、私を支えろ」

「了解」

楽しそうに両腕をユリウスの脇の下から差し入れて後ろから支えるように立つ。

「クロードにかけた術を解せ、経典の中身が要る」

支えられても辛いのかユリウスの声は細い。それに対してバサラは上機嫌で頷くと印を結んでクロードを自由にした。

「解！」

「バサラ、三ばつ耶印、不動根本印、外獅子印」

「クロード、閻王の書閲覧、開示せよ、魔経典第九十一章、第一節だ」

バサラが素早く印を組んでクロードを見る。

「……」

黙ったままのクロードを訝しげに見てバサラが怒鳴る。

「呪文を言え、クロード」

バサラは前にいるユリウスが小さく呪文を唱えているのに気付いてはっと離れようとするが印を組んだ手はそのまま一つになったように離れない。

「この後に及んでまた、謀ったな、カルラ！」

悔しそうなバサラにユリウスは薄く笑う。

「経典は九十章で終わりなんだ、その手は離れないよ、バサラ」

言いながらユリウスは床を指差す。自分の血で描いた魔方阵が二人の足元に広がっている。

「いつの間に」

「さっきの呪文ですよ、さっき倒れていた時に呪をかけていたのを

さっきの印で完成させたんだ」

ユリウスはバサラの組んだ手に自分の手を重ねる。

「バサラ、あなたの弟としてなら一緒にいて差し上げますよ。だから一緒に逝って下さい」

ユリウスがかすれ気味の大声を出す。

「クロード、約束を覚えているか」

クロードがこくりと頭を下げる。

「今が、その時だ、やれ、クロード！」

クロードは『鍵』に命じる。『変じよ！』『鍵』は剣に姿を変えてクロードの手に収まる。

「俺は、ユリウスを助けようと思って……こんな事するためじゃない」

「私を助きたいのなら殺れ、クロード、私を助けてくれ」

「クロード！」

ユリウスの懇願する声にクロードは右手の剣を両手でしっかりと握りこむとそのまま二人に剣の切っ先を向けて走り込む。自分の体重をかけてぶつかるように剣を突き刺す。ずぶずぶと肉を貫く音と感触が剣を通してクロードの手に伝わる。

「ぐはっ、このがき」

バサラが呻いて血を吐いた。

結界消滅

ホールの入り口で先程まで羅漢らと戦っていた魔獣に加勢していたルークとラドビアスが走り込んで来て目の前の光景に悲痛な声を上げる。

「カルラ様」

「イーヴァルアイ様」

深々と剣の根元まで差し込んでいる為に向かい合うような位置にいるクロードはそのまま体が固まったように動けない。

「ユリウス、嫌だ、こんなの」

自分が刺しているのにまるで自分も一緒に貫かれているような痛みをクロードは感じて手を離そうとするがその手はユリウスが伸ばした手が掴む。

「ユリウス、離してよ、俺、ユリウスが死んじゃうなんてやつぱり嫌だ」

嫌々をするように首を振るクロードの口にもう一方の手を当ててユリウスが苦しそうに息を継ぐ。

「悪かったな、おまえに嫌な役を頼んで……でもおまえしか頼めなかったんだ。約束を守ってくれて私は嬉しいんだ……おまえはやっぱり頼りになる奴だ……クロード」

クロードの目から流れる涙をユリウスが優しく手で拭ってやる。

やがてがっくりと手を降ろすユリウスに大声でこちらに引き留めようとするようにクロードが叫ぶ。

「ユリウス！」

ユリウスはにこりと唇をあげる。

「愛しているよ……クロード」

「俺だって、ユリウスのことクライブより、ダリウスより誰より」

そうだ、俺だって愛していたのだ。失いたくない、家族として。

「ユリウス、愛してる」

クロードの言葉にユリウスの目からも涙が零れる。

ああ、

私が本当に欲していた愛情をかけてくれる者と出会うことが最後に出来たんだな。 私は何て幸せな気持ちで死にいくことができるのだろう。

「クロード、ありがとう…… もう、随分と待たせている…… 人がいるんだ…… だから……」

ヴァイロン、もういいだろう？ おまえの言った通りこの国の結界を守っていたが、私にだって五百年は長かったよ。 もうおまえを追って行っても怒らないでくれ。

『おまえの為すべきことをしろ』

死に際の老いた指が私の顔に触れて、私は何度も連れて行けと。私を殺してくれと頼んだのにおまえはそう言って一人逝ってしまった。 けどもう、いいだろう？ ヴァイロン。

ユリウスががくりと上体を倒し、バサラはユリウスを支えている手はずそうとやつきになる。

「サンテラ、剣を、このがきをどけろっ」

ラドビアスがクロードの背後から手を回して、ゆっくりとクロードの硬く握った指を一つ一つ外していく。 全部の指が離れたところでラドビアスが剣を一気に引き抜く。

「サンテラ、カルラを離せ」

ラドビアスはバサラの組んだ手を潜らせるようにユリウスを動かしてバサラから離して抱きとめる。

「サンテラ、体の半分はここに置いていつてやる。早くしろっ」

バサラが大声を出す。

「もう、観念なさいませ、バサラ様」

ラドビアスはバサラに顔も向けずに言うところユリウスを抱いたままその場にしゃがんだ。

「カルラ様、私もお供させてください」

「くそっ、やられてたまるか」

バサラがよろよろと歩きながらホール中央の割れた床のなかに倒れながらも呪を飛ばす。そのまま水音を立てて落ちていくと水は瞬時に鏡のように凍っていく。

「バサラ様……」

ラドビアスが目を硬く閉じて諦めたように呟いた。

「ラドビアス、バサラが」

クロードがラドビアスの方へ向かおうとする目の前でルークの姿が一瞬に消えて砂の山が出来る。そしてラドビアスの腕の中のユリウスが砂で作った人形のように崩れてラドビアスの手から零れていった。

クロードははつとして自分の胸元を引き下げて左胸を見るがそこには何の印もなかった。

竜印が消えた。ユリウスが、イーヴァルアイが死んだからこの国にかけられていた術が解けたのだ。結界が完全に解けて二百人あまりの魔道師も今消えて逝った。

それではついにヴァイロンから続いた魔道の国としてのレイモンドールはここに終わりを迎えたのか。皮肉にもボルチモア州のドミニクが口先で言っていた、魔道師の支配しない国が今、誕生したのだ。

「何とか馬を調達してサイトに戻りましょう、クロード様」

思いを断つように立ち上がったラドビアスをクロードは複雑な思いで見つめた。

「おまえは何で消えてないんだ？ バサラもユリウスもいないのに」

それともバサラは生きているのか。クロードの問いに答えず、ラドビアスは歩き出す。

「サイトスは大混乱でしょうね」

「……そうだな」

首都サイトスの中枢は魔道師庁だ。

主だった官や大臣の職まで

魔道師が兼任していたのだ。王の首がどんどん変わっても変わらない政策が続けていたのは魔道師庁が国事を動かしていた事に他ならない。ドミニクの言っていた事は嘘では無い、国はガリオールら上位の魔道師の意向で動いていた。国が魔道師に牛耳られているのは本当だった。サイトスの国府は今壊滅状態にあるとっていい。

「でも途中、ボルチモアに行かなきゃあ。ベオークから来た奴がまだ一人いる」

「左様でしたな」

ラドビアスが相槌をうつ。クロードはその顔を伺うがラドビアスの胸のうちはクロードには解からない。

「立てますか？」

手を貸そうとするラドビアスを振り払って、クロードは何とかふらふらと立ち上がる。

「俺を……殴ってもいいぞ、お前にはその権利がある」

「いいえ、カルラ様がそう望んでおられるのは解かっておりましたから。私も一緒に逝けなかったのは残念ですが」

「ばか野郎、俺の気持ち治まらないんだよっ」

落ちていたラドビアスの声になぜか頭に血が上って大声を出してしまう。ラドビアスに背中を向けたクロードは彼の顔を見たくなかった。いや、見れなかった。どうか、俺を罵倒するなり、殴るなりしてくれよ、どうにかなりそうだ。

クロードの決心

「これじゃ、目立って仕方ないな」

「でも、馬より速いですよ」

クロードの後ろにいるラドビアスの言葉にそれはそうだけど……とクロードは自分が跨^{またが}っている獣を見る。

「まあ、戻す呪文が解からないんじゃないか」

サウンティトウダの背中の前後にクロードとラドビアスが乗って低空で森林地帯を飛行している。わずか後方にはアウントウエンが付かず離れず近くを飛んでいた。竜印が消えてクロードに封印されている経典を読むことも出来なくなり、魔獣たちを放っていくわけにもいかない。しかし、ボルチモア州の州都ケスラーに入るには街の中を通らなくては入れない。

「夜を待ちますか？」

「そうだな」

ケスラーに入る手前の小さな森の中、大きく枝葉を茂らせた大木の根元で休みを取る。

アウントウエンとサウンティトウダも近くに伏せをして寛いでいる。クロードは視線を二頭の獣から暮れ行こうとしている西の空へ向けた。まるで太陽が別れを惜しんでいるようにオレンジの色でその場を染めていく。

俺、これからどうしたらいい？ ベオークから来た奴を始末し

てサイトに戻って、それから？ 自分に用意されていた居場所

を己が壊してしまった……急にユリウスを刺した時の感触が甦^{よみがえ}ってきて。ショックを受けてクロードは息も出来ずオレンジ色に染ま

った自分の両手をただ、見つめた。

殺したくなんて無かった……我尽で気まぐれな兄……サイトにいる血の繋がった者たちなんかよりずっと好きだったのに。延々と繰り返される自責の呪縛にまたも囚われる。

「クロード様」

両肩をラドビアスに掴まれてやっと我に帰ってクロードは大きく息をした。

「……ラドビアス、おまえはこれからどうする？」

「クロード様に付き従わせて頂きたいと存じますがお許し願えますか」

頷くクロードにラドビアスが続けて言う。

「クロード様は王の位をクライブ様に移譲いじようされるおつもりですか」

「察しがいいな」

クロードがふつと笑う。

「俺が王になったのは『鍵』」を使ったかったからだ。ユリウスを助けたかったんだ。あの契約はクライブの名を騙かたって交わしたものだし、俺は魔道師だ。ユリウスが死んでこの国は生まれ変わる。これから政治に魔道を介入させたくないと思っているのに俺が王様じやまずいだろ？ クライブが王になって国を治めてくれたらいいと思うんだけど」

「では、クロード様はどうなさいます？」

「本当なら国が混乱している今、ガリオールの代わりにおまえがサイトスでクライブを助けて欲しいところだけれど……ラドビアスには俺と行ってもらいたい所がある」

クロードはラドビアスから夕暮れの山々へ目を移す。

「ベオーク自治国へ行こうと思っている」

そう言つて砂埃を掃つて立ち上がる。

「遠いですよ、ベオークは」

「……そうだな」

地理的にもベオーク自治国はこのレイモンドールからは遥かに遠い。大陸の東、ハオタイ皇国の北に位置する。それ以上に自分は魔道師としては下の下だろう。ベオークに行つて何ができるのか。そんな事は解からないが、自分に封じられた経典をどうするかを含めてベオークに行かなくては自分は先に進めない、そんな気

がする。 経典の始末はユリウスからクロードに託されたのだと思うのだ。

第一、このまま『鍵』を持っていたらまたベオークから魔道師が取り返しに来て一騒動だ。 やはりクライブではなくて俺が『鍵』と契約して正解だろう。 もし、取り出すとして命の保障などできないのだから……国王であるクライブじゃだめだ。

「陽が落ちましたね」

ラドビアスの声に顔を上げると、さっきまで赤味の強い光に包まれていた景色は変わり、オレンジ色の光は山々の稜線だけを残して薄青色の空にとって変わる。

やがてこちらに頭を向けている二頭の魔獣たちの目が赤く光始め、すっかり闇が濃くなった頃。 ケスラーの町並みの上空を飛んでいく大きな黒い影が闇にわずかにもう一つの闇を落としていく。

「一体、これは何だ？」

顎を擦りながらボルチモア州候ドミニクが州城敷地内にある小宮の一室で突然に現れた球体を見上げる。 隣の州宰代理のダニアンに尋ねるがダニアンにも解かるわけもなく、さあと首をひねる官吏たちと同じようにぼかんと見ている。

「この事をトラシユは何か言っておったか」

ドミニクの問いに後ろにいるアリスローザが無言で首を左右に振る。

誰も声をあげる者が無く、ドミニクが苛立ちを抑えきれず、大声を出す。

「誰か、これが何か解かるものは？」

「知っていると思うんだけど、たぶん」

ドミニクに応えるように放たれた声が壊れた窓の外から聞こえて、いつせいにそちらを見る。

「それは呪で形成した檻だ、そして中にいるのは……」

クロードの言葉を引き継いでラドビアスが続ける。

「ベオーク自治国から来たクビラ様です」

「あんたが裏で密約を交わしたビカラの弟だよ」

「無礼なっ」

州候である自分にこのような無礼な口を利く少年はモンド州の公子であつた筈。ところがモンド州に送つた使者は、そんな名前の公子はいないと追い返されてきたのだ。

「無礼者め、捕らえよっ」

その声にドミニクの後方に控えていた兵士たちが剣を構えるが、その間に大きな魔獣が割つて入つて威嚇いかくの唸りをあげる。驚く兵士たちの背後にもう一頭の朱色の大きな狼のような獣が飛び込んで来て挟みこむような布陣となる。

「俺に手を出すのは止めたほうがいい、もう直ぐ国軍がここに着くからな」

「国軍だと？ 誰の命で……」

僅かにたじろいでドミニクがクロードを見つめる。

「王への反逆罪は斬首かサイトの地下宮への終身幽閉だからね」
言いながらクロードは自分の手にはめている指輪をドミニクに見せる。

「先の王、コーラルが亡くなり、新しく『鍵』と契約したのは俺だ」

「まっ、まさか……」

「クロード？」

ドミニクとアリスローザが同時に叫ぶ。

『変じよ！』クロードの言葉に指輪はその姿を長剣へと変えてクロードの手に収まる。その剣をクロードはピシリとドミニクの喉元に突きつける。王の証を突きつけられてドミニクは驚愕きょうがくに目を見開いた。

「た、確かに……あなた様は国王陛下……」

「ラドビアス」

クロードに呼ばれてラドビアスが前に出る。

「ドミニク候と含む事無く話がしたい」

「畏まりました」

ラドビアスが喉元に剣を突きつけられて固まっているドミニクの前に立って印を組む。

『我に寄りて力を貸せ、捕縛、落手、剥縛、おまえの口蓋の主は私だ』

「ベオーク自治国と繋がっている証拠となる物を持っているか聞いてくれ」

クロードに頷いてラドビアスがドミニクに向く。

「ベオークからの書簡が何かもっているのか、答えよ」

ドミニクは助けを求めるように目をうるうる^{さまよ}と彷徨^{あらが}わせて抗う素振りを見せるが、口は勝手に動いてしまう。

「教皇ビカラからの親書は……私の寝所の絵画の裏に……隠している……」

ドミニクは自分の口を慌てて押さえるがもう遅い。それを軽く笑ってクロードがラドビウスに言う。

「正直に言ってくれてありがとう、ドミニク。ラドビウス、取ってきてくれ」

「畏まりました」

クロードに短く応えてドミニクにかけた術を解くとラドビウスは部屋を出て行った。

「お父様が反逆罪ってどういうこと？」

シヨックから立ち直ってアリスローザがクロードに詰め寄る。

「お父様は王には忠誠を誓っているわ、クロード、違うのよ私の話を聞いて」

剣を指輪に戻して右手にはめながらクロードは静かにアリスローザを見る。

クロードの決心（後書き）

いよいよお話も後半に入ります。引き続きよろしくお願いします。

王の初仕事

「アリスローザ、だいたい魔道を奉じる事は王の命だろう。その国の廟を襲ったりしている時点ですでに反逆罪は成立している。この国において魔道と王は別々のものじゃないだろう?」

「そ、それは……」

それでも私達は国のために……王のために戦っていたのに……。もどかしく思いながらどう、言ったらいいのかとアリスローザが頭を巡らす。その横を一枚の書簡を持ってラドビアスを通り過ぎる。

「それか」

「そのようです」

ラドビアスが書簡を巻いて留めてある紐を解いて、クロードに手渡す。それはハオタイで使われている文字で描かれているが、範字と互換性ごかんせいがあるらしくクロードにも意味が解かる。

「ふさわしい地位と読めるが……ラドビアス、俺は間違っているか」
横からのぞき込んだラドビアスがクロードが指差す文字を追って顔を上げる。

「それでよろしいかと」

「ドミニク候、ふさわしい地位とは何だ?」

ぎよっとしてドミニクはクロードを見て慌てて下を向く。

こんな子供が王だと言うのか……そしてこんな子供なのになんという落ち着き方だ。その上、ハオタイの文字にまで通じている……。

「私はこの国の未来を陛下のお立場を憂うれいでいたのでございます」
ドミニクはがばりとその場にひれ伏して声を上げる。

「魔道師に操られている者どもを排し、正しいご政道が行われんと切なる願ゆえい故のことでございます。陛下に弓を引く事など考えも及びません」

「よくもそんなに口がまわるな、ドミニク」

クロードがため息まじりに言う。

「俺はサイトに居たんじゃない、ここに居たんだ。何も知らないわけないだろう？」

クロードは面を厳しくして、後ろで魔獣たちに睨まれて固まっている兵士たちに声をかける。

「抗弁、弁解の類はサイトスへ行つてから正式な裁判の場でいくらでも聞いてやる。ドミニク侯爵の州管轄の任を今この時をもって解く。身柄を拘束して幽閉し、国軍到着後、速やかに引き渡すように」
クロードの言葉に兵士たちの先頭にいた州軍の將軍の肩章を付けている大柄な男の双眸が戸惑うようにクロードとドミニクの間を彷徨う。

「トレンス、私を裏切る気かっ」

ドミニクが迷っている將軍を自分側に引き戻そうと大声を出す。

「將軍、気持ちは解かるが今は自分の職務に忠実でいて欲しい。君たちが今迄職務のためにドミニクの命に従って動いていた事は仕方の無いことで不問にする。が今、この先からの俺の命に従わないことは後々君のみならず、州軍全部に関わってくる事になる」

落ちて着いた少年の声が將軍のうろつろと泳ぐ目を止めさせた。

「お前達、早急に王陛下のご指示に従え！」

「無礼者、私に触れるなっ、離せ、この下郎ども！」

両側から腕を屈強な兵士たちに取り囲まれてドミニクは手足をばたつかせて暴れるが、そのまま引きずられるように連行されて部屋を出て行った。

「クロード、私の話を聞いて。これは誤解なのよ」

アリスローザが駆け寄ろうとするのを兵士らが取り押さえる。

「アリスローザ、君はそんなつもりはなかったにせよ、きみの父親はこの国の王座を狙っていたんだ。きみは聞きたく無いかもしれないかもしれないが……。そして君も知らないこととはいえ、その企みに加担していた」

「嘘よ、そんな、お父様が」

「さっきのピカラからの書簡はそれを確約すると書かれていたんだ」
「嘘よ、信じないわ」

アリスローザの目から流れる涙にクロードはふいと顔を背けなくなる。泣かないでと慰めたくなるのを歯を食いしばって耐える。

「信じようと信じまいと真実はそういうことだ。自分が信じたく無いことから目を背けることは出来ない」

「クロード」

クロードの言葉にきつと睨むようにアリスローザが鋭い視線を向ける。クロードは、一瞬酷く傷ついた顔を浮かべたが、直ぐにその表情を消して將軍に命を下す。

「レジスタンス活動に加担していた嫌疑により元ボルチモア州州姫、アリスローザをドミニクと別に幽閉し、同じく国軍に引き渡すように」

挑戦的な目を向けながら連行されていくのを、クロードは追いかけて自分を弁解したくてたまらなかった。違う、俺の本心は

……こんな事を望んじやいない……。

しかし、現実にはクロードは無表情でアリスローザが連れて行かれるのを見送り、次の指示を出す。

「州城敷地内にある、古い教会の地下にあるアジトにレジスタンスの各グループのリーダーがいるはずだ。捕らえて他のアジトやメンバーの捕縛に係ってくれ」

「承知しました」

將軍が副官を残して手勢を引き連れて部屋を出て行く。

「後の者も俺とラドビアスを残して小宮から退城してくれ」

クロードの命に残された官吏と魔道師のダニアンが驚いて口を出す。

「……と言われますと？」

「言葉の通りだ、出て行ってくれ。用があれば呼ぶ」

ぱしりと言われればもうなすすべも無く。少年の覇氣はきに圧されて皆しおしおと部屋を出て行った。

ふーっとクロードが大きくため息をついた。

「疲れた、やっぱり俺には王は務まりそうにないや」

「そうですか？」

ラドビアスがにっこりと笑顔を見せる。

「王様になりたてにしてはご立派でしたよ」

いつか、魔術のときにもそんな風に言われたのを思い出しクロードは吹き出す。

「俺が何やつてもラドビアスはそう言うんじゃないの？」

急に十四歳の少年に戻ったように悪戯っぽくクロードは片目をつむった。

さっきのクロードは確かに王としての貫禄を見せて、大人たちにはちらとも遅れをとるものでは無かった。帝王学を幼い頃からまなんでいたクライブならいざ知らず。この前までモンド州の公子として、箱の中に入れられたような生活を送っていたはずのクロード。彼があれ程やれるとはラドビアスは思っていなかった。魔術にしても何をやらしてもこの少年は自分でも解からないような才能を隠し持っている。

「いいえ、本当にご立派でしたよ」

ラドビアスに言われて照れたようにクロードは赤くなった。

「やめてくれよ、それよりこの大きな檻？ を開けなきゃ」

クロードが見上げる球体の檻をラドビアスが確かめるように触れる。

檻の崩壊

「その中にいるのが……」

「クビラ様です、ビカラ様の弟君の」

クロードはユリウスに聞いた話を思い出す。

「二番目……だよな」

「カルラ様がお亡くなりになって、この術にも綻びほころが出来ておりましよう」

ラドビアスの言葉にクロードはうつと呻いて胸を押さえた。亡くなった　その一言で体の内側の柔らかい所を針でつつかれたように痛む。

「クロード様？」

ラドビアスの声にクロードはあわてて心に蓋ふたをする。

「……何でもない。それよりユリウスがかけた術はすべて消えるの？」

「消えるものと消えないものがありますが禁術は消えると思います
が……」

じゃあ、俺がモンドの城でおこなった忘却術はどうなのだろう？　もしかしてこのことを予感してユリウスは俺に術をかけさせたのだろうか。

「クロード様？」

度々自分の中に閉じこもってしまうクロードにラドビアスが気遣わしげに名を呼ぶ。

「何でもないよ、それにしてもクビラって檻から出して俺たちで何とかなりそうなの？」

ラドビアスは顎に手をやって考えるように歩く。

「そうですね、術はたいしたことはないと思いますが」
「他にたいしたことがありそうだけど？」

クロードにラドビアスが苦笑いする。

「それをあげ足取りと言つのですよ、クロード様」

「後でいう事があるなら、今言つといて欲しいってただだよ」
クロードが釘を刺す。

しいて言えば……とラドビアスが言う。

「体術というか、力が尋常ではありません」

そういうことを黙ってちゃだめだろ！ クロードはもう、と
膨れっ面をした。

「で、それじゃあどうする？ 作戦」

「作戦……ですか」

そうですねとラドビアスは生真面目に顔を向ける。

「では、私と魔獣の総力戦にクロード様による奇襲、でどうです？」

「それって別に作戦でも何でも無いじゃないか、そのまんまだろ」
呆れた顔でクロードがラドビアスを見る。

「まあ、そうですね」

あっさりラドビアスも言ってお互いに顔を見合わせて笑った。

「込み入った作戦など要らないと思いますがね、あの方には……」

そう言つてあれを、と指をさした。 檻のいたるところにひびが
入つて中から何かを叩きつける音が響いてくる。

「中でだいぶ暴れているようですな」

ラドビアスが洩らした言葉にクロードの表情が曇る。

「中に入っているの、本当に人なの？」

その間にも一つのひびが大きい亀裂になり、一旦そうなるとそこ
から四方へ亀裂が走つて物凄い音と舞い上がる粉塵ふんじんや瓦礫がれきを宙に飛
ばしながら檻は崩壊していった。

「サウンティトウダー！ アウントウエン！」

クロードの呼ぶ声に二頭の魔獣がクロードの傍らに走り寄った。
砂塵の中、ラドビアスが投げたダガーを掴む手が見えた。 が、
クロードが思っているよりずっと上からクビラの頭が見えて、その
全身が現われる。 思わず、後ずさりしてしまうほどの巨軀きよくだ。

これがユリウスとバサラの兄のクビラ……？ そう聞いても

半分は血が繋がっているとは思えないほどの二人とは似ていない。ユリウスはともかくバサラは細身ながらも背が高かったが、クビラの体躯の大きさは人の範疇はんちゆうの限界だろう。体の筋肉量が半端ではないのだ。古代の剣闘士のような猪首から背中、胸まわりその全てが筋肉の鎧でまもられている。バサラやインドラと同じ服を着ているのにも係わらず、まったく違う印象を受ける。

そのクビラにアウントゥエンが火を吹いて攻撃する。あつと言う間に黒焦げになるかと思われたが水の盾を使ってアウントゥエンを逆に追い立てている。

出来が良くないと言ってもそのレベルは高い基準においてのこと、決して低いわけでは無いのだ。

横からサウンティトゥーダが長い棘のある尻尾を振ってクビラのシャムシールと渡り合っている。硬い鱗に守られたサウンティトゥーダと剣を合わしながらアウントゥエンの炎を避けているため印が組めない。

「くそつ！ 厄介な！」

クビラがその体にまるで合わない素早い動きで、サウンティトゥーダの頭を抱きこむように押さえながらアウントゥエンに向かってダガーを投げた。ダガーは過たず、アウントゥエンの右目に刺さり、アウントゥエンが痛みのために大きく吠えて転がった。

「ざまあみる！ おまえは首をこのまま捻って殺してやるっ」

もの凄い力でサウンティトゥーダの首をぎりぎりとし締め上げるのをサウンティトゥーダも体をくるくる回して逃れようとする。しかしクビラの両腕はさらに力を入れて血管が浮き上がる。ばりばりとクビラの腕が当たっているところの鱗が音を立ててサウンティトゥーダの首が折れるかと思った時……。瓦礫の影からクロードが走り込んで来てクビラの背中に深々と剣を突き刺した。

「この、卑怯者のくそがきめ！」

クビラがサウンティトゥーダを離して片手だけでクロードを剣ごと跳ね飛ばした。壁まで飛ばされて背中を盛大に壁に打ちつけて

クロードはげふつと血を吐いて意識を飛ばした。

「痛いじゃないか」

体を中心まで剣で刺されたというのにクビラの歩みに少しの揺らぎも無い。投げられていた自分の得物を拾い上げて、確かめるように大きく二、三回振ってみる。上段にシヤムシールを構えて大股でクロードの元へ歩くのを見てラドビアスが呪を飛ばす。

『辺幅、変調、変転、王の前に防壁を築け！』

その声が終わる間も無く床の石板が激しい音と共に形を変え、倒れ込んでいるクロードの前に分厚い壁が出来た。

「ちつ、サンテラ、よくもやりやがったな」

踵を返してクビラがラドビアスに向かってシヤムシールを振り下ろす。金属を打ち付ける音がしてラドビアスが何とかダガーでシヤムシールを受け止める。だがクビラが力を込めて振り下ろした大型の剣を短剣で受けている為長いことは持ちそうに無い。

「苦しそうだな、サンテラ……諦めろ」

不敵にクビラが笑う。

ラドビアスが自分の頭上で何とかクビラの剣を受けながらクビラに言う。

「気付いていらっしやらないのでお教えしますけど……ご自分の腹に大穴が空いてますよ」

「腹？」

ラドビアスの声に自分の腹を見ようと気を逸らせた刹那、ラドビアスがクビラの剣を右に流して後ろに飛び退いた。

「なんだ、これは？ 俺の腹が」

自分の腹を触ろうとしてばかりと音を立てて自分の手が腹に出来た穴に収まるのを見てクビラが驚きの声を上げる。

「さっきのがきの剣は護法神だったのか」

言われるまで気付かないとは……やっぱりかだ、という言葉葉をラドビアスは口にしないが。

「死ぬのか、おれは……」

充血した目を虚ろに開けて口から涎を垂らしながらクビラが縊るようにラドビアスに近づく。

「早晚そうなりましようね」

ラドビアスは素っ気無く言ってクロードの方へ足を向ける。それを追いかけようとしたクビラが足を縛もつれさせて倒れた。どうつという音と共に倒れたクビラが立ち上がろうとして手を付く。ところが倒れた衝撃でクビラの体は腹から上下に分かれて間が砕け散って起き上がることは不可能な体になっていた。

「どうにかしろ、サンテラ！ どこだ、サンテラ！」

目が霞んできたのかラドビアスの名を呼びながら手を使って、上半身だけがうろつと床を這いずっていく。

その目の前に黒い鱗おろ覆おわれた脚がたんつと止まる。

「何だ？」

顔を上げるクビラにサウンティウーダが顔を下げて前脚でひよいとクビラをひっくり返した。

「止める、この蜥蜴とかげめっ」

クビラの大声など気にする様子も無くサウンティウーダがその大きな口を開けてバクリ……とクビラを飲み込んだ。

混乱の都サイトス

ラドビアスが助け起こされたクロードが目を丸くして呟く。

「飲んじやったよ……」

「大丈夫ですかね」

ラドビアスが心配そうにサウンティウーダを見る。

「お腹こわさなきゃいいんですけど。サイトスにはあれに乗っていないと時間がかかり過ぎますからね」

クロードとラドビアスの心配をよそに、サウンティウーダが満足そうに喉を鳴らした。

「クロード様」

床に落ちていた剣をラドビアスに渡されて指輪に戻すと右手にはめて、クロードは目を痛めたアウントウエンの所へ急ぐ。

「目を潰されたな、かわいそうに」

傷の具合を確かめようと顔をのぞくと血まみれの眼窩がんかの中に黒い物がのぞいている。

これは、なに？

「ラドビアス、これを見て」

ラドビアスがクロードの指示す所をのぞく。

「あ、目が生えてきたのでは？」

目が……生えるの？ まるであ、歯が生えてきましたね、という調子のラドビアスは驚く素振りを見せない。

「よく解かりませんが、この獣は魔物ですからね、そんな事もあるかもしれません」

そういうものなのか？ かなりいい加減なラドビアスの説明にクロードはラドビアスを見返す。結構ラドビアスは物事にこだわらない性格なんだ。まあ、でなけりゃあ、破天荒なユリウスの僕を何百年も務めることは無理だったか。そう言えば、モンドの廟長のルークもユリウス付きだったことがあると言っていたが。

あいつも良く似た性格だった。

クロードは火傷をした自分の唇にそつと触れる。 ガリオールなら三日あたりで気鬱の胃炎になっていることは請け合いだ。

そう思ったところで二人ともこの世にはもういないのだと気づく。

唇の痛みなのか、身のうちの痛みなのか、ぴりりとした痛みにクロードは胸が詰まった。

クロードがそんな事を考えているなどお構いなく、ラドビアスがクロードに声をかける。

「お疲れでしょうがこのままサイトスへ参りましょう」

「解かった」

「サウンティトゥーダ、済まないがまた乗せてもらうよ。しかしアウントウエンがもう少し熱くないなら乗せてもらうんだけど」

クロードの言葉にアウントウエンが小さく炎を吐いて、こくこくと返事をするように頭を上下に振った。 朱赤の体が徐々に暗い赤色に変わる。

と、いう事は。

「もしかして体温下げたの？」

そつと恐々アウントウエンに触れる。

「あ、これなら大丈夫だ」

かえって気持ちいいくらいだとクロードはにまりと笑った。

「ラドビアス、俺アウントウエンに乗るね」

「クロード様、お待ちを」

ラドビアスの声より早くアウントウエンに飛び乗ると首を軽く叩いて命ずる。

「行け！ サイトスへ」

ぶるぶると体を震わせてクロードを乗せたまま大きく伸びをしたアウントウエンが窓から飛び出す。 それを負けじとラドビアスを乗せたサウンティトゥーダもその後を追った。

サイトスの王宮はクロードが予想した通り大混乱に陥っていた。

下位の魔道師たちが王の執務室で転がっていたクライブ国王を（本当に文字通り床に転がっていたのだ）見つけたが一緒にいたはずの宰相のガリオールの姿はどこを捜しても見つからなかった。

大臣職を兼任していた上位の魔道師もサイトの王城に居たはずの全ての上位の魔道師たちの姿も消えた。それどころか竜門が閉じて竜道が使えない。そのため、モンド州のゴート山脈にある魔道教の本山にも連絡をつけることが出来なくなっている。結果を張りに出かけている他の上位の魔道師の所在すら今は解からないのだ。

混乱は国中にも広がっていた。州宰など、やはりサイトスほどでは無いにしても州の重要な役職についていたのが上位の魔道師だったからだ。

それだけでは無い。大陸とレイモンドールを隔てていた海峡は、一寸前も見えなかった霧が晴れ渡っている。海は、凪いでまるで内海のような穏やかさだ。その先には遠くにうつすらと大陸の陸地が見えてすらいる。この国の人間で今までこんな光景を見た者はいない。

何て不吉な……。海岸を見つめながら人々は囁きあふ。

その混乱の中、サイトの王宮、王の寝室に続くバルコニーに大型の獣が二体、音も無く舞い降りた。

「クロード様、ラドビアス様」

王に側づいていた魔道師が喜びの声を上げた。

今、この時点で生存が確認されている上位の魔道師は三人だけだ。クロード、ラドビアス、コーラルである。そのうちのクロードはついこの間上位の魔道師になったばかりで皆の本心を言えばあてにはしていない。そこに現れたラドビアスは魔道師庁に残された

下位の魔道師たちにとって縋る唯一の大木だった。

「ラドビアス様、国王陛下のご様子が……」

「解かっている」

『縛』されているのを解することも出来ない者たちばかり残ったのか。 コーラルは何をしている？

ラドビアスはため息をつく、王の寝台の天蓋から垂らてんがいされている布をかきわけた。 素早く印を組んでクライブにかけられていた術を解く。 途端にクライブがラドビアスに縋すがりつく。

「ガリオールが大変なことに……砂のようになって……」

ラドビアスの後ろから手を出したクロードがクライブの肩を掴む。 「落ち着け、クライブ。 魔道師のイーヴァルアイが死んでこの国にかけられていた術が解けたんだ。 竜印を持っていた魔道師は呪が解けて、本来の寿命が尽きていた者はすべて消えた。 勿論、ガリオールもだ」

「それは……」

驚きのために声も続かないクライブは自分の肩に置かれたクロードの右手の中指にはめられた指輪に気付いて、びっくりと肩を震わせてクロードを見た。

「君が『鍵』と契約したのか、クロード」

クライブの視線が問いかけるようにクロードに突きつけられて思わず、目を逸らしそうになるがぐっと堪えてうなずく。

「クライブ様、クロード様、こちらへおいで下さい」

その重苦しい空気を掃うようにいつの間に行ったのか、ラドビアスが円テーブルの所の椅子を引いて手招きしている。

「早速ですがモンド州のハーコート公様にサイトスへ登都されるよう書簡を送りたいのですが」

「ハーコート公？」

椅子に座った二人を見ながらラドビアスが説明する。

「モンド州はご存知のように魔道師の州宰をはじめ、州府に魔道師を置いておりません。今、この国で一番落ち着いている州です。その上、クライブ様の叔父君であられ、身分的にも申し分ありません。数年の暫定措置としてモンド州の州公の職を嫡子のダリウス様に任じられてハーコート様を宰相としてサイトスへお招きになることをお勧め致します」

それはいい。元から魔道師に頼って施政を行っていないので今の混乱とは無縁だし、ダリウスへの権の委譲も行われている。

しっかりした官吏もいる。ハーコートなら手腕に關しても人物的にも確かに最適な人選だろう。この不安定な時に謀反を心配する事もなくクライブを助けてこの国を立て直してくれるはずだ。

感心しながらクロードはさらさらと仰々しい言葉とか、堅苦しい文面を羊皮紙に書き付けているラドビアスを見ていると彼がペンを置いて顔をこちらに向けた。

「で、どちらがサインなさいます？」

王の資質

「そりゃあ、クライブだろう」

弾かれたように顔を背けるクライブをよそにクロードが言う。

「どうして『鍵』と契約したのは君じゃないかつ」

喰ってかかるクライブにクロードが淡々と言う。

「契約する時、俺はクライブとして契約したし、イーヴァルアイが死んでこの契約も意味が無くなったと思わないか」

「意味が無いってどういう？」

「んーとそれは……とクロードは、どう言おうかと頭をくしゃくしゃとかきむしる。

「つまり、もう竜道も無く国境を守る結界も消えた。この国は魔道から離れる時期が来た。この国の王も魔道に関わりのない者になるべきだと思うんだ。俺は不老だ、これは普通じゃない」

「王が不老なのは普通じゃない、のか？」

クライブが腑^ふに落ちないように言った。クライブにとって王が死を迎えるまで歳を取らないのは不思議でもなんでもない。常識だったのだ。

「普通じゃ無いんだよ、クライブ。魔術の介在しない国の王にクライブがなつてよ」

「周りの者は、祭祀中にクロード様が入れ替わったことなど知りませんしね」

混ぜ返すようにラドビアスがしれつと言ってペンをクライブに渡す。

「……解かった」

クライブは少しの間考え込んでいたが小さくうなずくと丁寧にサインをした。

「クロード様、指輪をお借りできますか？」

ラドビアスに指輪を手渡すと、ラドビアスが竜の飾りの部分に爪

をひっかけて上に跳ね上げるとそれは印章になっていた。 朱肉につけると慎重に羊皮紙に押す。

「そんなふうになっっているなんて知らなかった」

クロードは布で拭いて渡された指輪をへえーと眺めた。

「でもいちいち裁可^{さいか}する書類にこれを押すのは大変そうだな」

ラドビアスが笑いながら答える。

「一般の書類は違う印があります。 国治の大事、今の場合は宰相の任命要請です。 まあ、そんな場合だけです。 押しやすいほかの御璽^{ぎよじ}があるのですが、どこにあるか私が知らないのです今はこれを使わせて頂いたのでご心配無用ですよ」

いちいちクライブに貸さなきゃいけなかったら出かけられないところだった。 クロードはほっと息をついた。

「次にボルチモア州のことですが」

「ボルチモア州がどうかしたのか」

クライブが首を傾げる。

「ええっ、知らないの？ 謀反騒^{むほん}ぎがあつて……ガリオールに国軍出してもらったんだけど」

「謀反……」

この顔は本当に何も知らないって顔だ。 ガリオールの奴、本当に好き勝手にやってたんだな。 クロードはあーとため息をついた。

「とにかく、謀反を企てた州候を捕らえてサイトに移送させている。 国軍の責任者、左軍將軍が帰ってきたら詳細を聞いてよ」

「左軍……レミントン將軍が動いていたなんて、知らなかった」

シヨックを受けるクライブに構わず、ラドビアスは話を進める。

「スノーフォーク伯爵にボルチモアをお任せになつてはと思います
が」

「スノーフォーク？」

サイトに城を持つ貴族の名前にクライブが反応する。

「ボルチモア元州候ドミニクの子供の一人で、スノーフォーク伯爵

にご養子にいかれた方がいらしたはずです。確かルイス……」

「ルイス・カーランドのことを言っているのか」

「知っておられますか、クライブ様？」

「私の剣術の練習相手になってくれている……友人だ」

「左様でしたか。それに伴いスノーフォーク伯爵の位を格上げして頂くよう、お願いします。ドミニクの血筋に縁がある方で、今回の策謀に加担されなかったのは、スノーフォーク伯だけでしたから」

ラドビアスの話に納得がいかない風にクライブは眉根を寄せる。

「何で今更謀反を企てたドミニクの血筋を次の州候に任ずるのだ。
あなど王が侮られるとは思わないのか」

「今はそんな事言ってる場合じゃないからさ、クライブ」

横で大人しく聞いていたクロードが口を出す。

「ボルチモア州は州候が居なくなつた今でもドミニクの係累は山ほど残っているんだ。それを一掃している余裕は今この国にはないよと、するならスノーフォーク伯を州候に任ずることでボルチモアの者たちには王の温情を見せる。一方、スノーフォーク伯にとっては爵位が上がり、無冠の立場から州候として対面を保つたままサイトを
スを出す事ができる。なんといつても身内に謀反人を出したのだからこのままサイトスにいるのは肩身が狭いだろうし、ね。養子に入つたルイスにしてもスノーフォーク家から廃嫡はいてきされる心配がなくなる。そして、自分の生まれ育つた場所の跡取りになることができるんだから、王に感謝するつてもんじゃあない？」

「そう、言われればそうだ」

「だろ？ ラドビアス、考えたな」

クロードがラドビアスに笑いかけた。

相手の思っている事をこんなに的確に瞬時に解かってしまうクロードに、ラドビアスはユリウスがクロードのことを聡いのは解かっていると言っていたのを思い出す。

それにしてもカルラ様の人の資質を見極める目はいつも正しかった。

まだ、個性のかけらも見せないような幼子を一瞥^{いちべつ}して選んでいたが。そのどれもが後になってみれば正しかったのだと解かる。

王になる者は素直でまわりの意見をよく聞き、穏やかな性格の者が多い。対して王の半身として魔道師になる者は、自主独立の傾向が強く扱いにくいが頭がきれる者が多い。と、いうことは今まで魔道師序の言うとおり国政を行っている分にはクライブが王で良かったのだ。だが、王が自分で切り開いて行かなければならない局面に立たされているこの国の王にふさわしいのは……クライブ様ではない。

ラドビアスはそつと額に手を当てた。

「この件にはあと、三州の州候が係わっている。その後も決めないと」

クロードがため息混じりに言う。

「彼らの嫡子^{ちやくし}に継がせることにして、暫く国軍を駐留させましょう。州宰としてサイトスから官吏を送る事にして、何年かはサイトスの事実状直轄地扱いにすることでどうでしょう？」

ラドビアスがさらりと応える。

「その案で話を進めてくれ」

ラドビアスに返事を返すクライブにクロードもうなずく。しかし、こうなってみるとハーコートが一刻も早くサイトスへ来ないと、ラドビアスはサイトスを離れることは出来そうに無い。

ラドビアスの辣腕^{らつわん}ぶりにクロードはラドビアスがこのままサイトスへ留まることを選んだら……と心配になった。ガリオール以前の宰相がラドビアスだったことなどクロードは知る由も無い。しかし、それを心配するほどレイモンドールの政庁内はすかすかと脆^{もろ}くなっている。

不埒な相談

そんな時にラドビアスを連れて国を出ようとしている自分はやはり王の器ではない。

しかし、直ぐに出発出来るかと思っていたのに竜門が使えないのと上位の魔道師が消えたことが、国の機能をこんなに滅茶苦茶にするとは思わなかった。クロードはあーあと声を出す。

今までの王がユリウスとの契約を反故にするのを渋っていたわけだ。考えなしの俺が現れるまでは……。

「この混乱を一応立て直すにはどの位かかるかな？」

「どの程度かによりますが」

「最小限でお願い」

ふーんとラドビアスは考え込む。

「大枠を作るのに一年ほどでしょうね、それを軌道にのせるまでと仰るなら十年はかかるかと……」

「そんなに待てないよ！」

クロードが慌てて椅子から立ち上がる。

それを見てラドビアスがくすりと笑った。

「クライブ様、各州に早馬を飛ばして各州州候かその代理の者の登都をお命じ下さい。年を越しまして、後春の月に全州候の前でクライブ様の即位式と初心勅語ちよくち らまわを賜る式を取り行います。そこで今回のあらましとこれからの国事、州事についてお言葉をかけられるのが宜よろしいかと思えます」

「解かった。しかし、さっきから出発とか待てないとか。まさかどこかへ行くつもりなのか」

心配そうにクライブがクロードを見つめる。

「今すぐとはいかないみたいだけど……俺の中に封印された物を突っ返しに行ってきたんだ」

「突っ返すってどこへ、何を……？」

クライブは解かった様な解からない様なはぐらかされたクロードの言葉に頭を捻る。

「それはそうと」

ラドビアスがクロードの右手を指差す。

「対外的には王の証が無くなってしまうのはやはりまずいでしょうね」

「そう……だな」

クロードがラドビアスにやりと笑いかける。

「じゃ、作っちゃう？」

クロードの言葉にそうですね、とあうんの呼吸でラドビアスが返す。

「そ、それは偽物を造るということか！」

クライブが悲鳴のような声をあげる横で。

「国の最高の技師を集めて作らせてから忘却術で記憶を消しましよ
う」

「術でぱつと出せないの？　ぱつとさ……」

クロードとラドビアスは頭をつき合わせて、後ろ暗い相談を始める。

「そのような事、許されるとは思えない」

クライブの言葉は二人にあっさりと思殺される。

「あ、指輪だけじゃあだめだよな。鍵と剣も要る」

「ではついでにそれを王位継承の時の三種の神器とか言うことにしては」

「それ、いい！　それでいいよね、クライブ」

「そ、そのような……」

生真面目なクライブは絶句して、目の前で不埒な相談ふらちを続ける二人を啞然と見た。

さて……と、ラドビアスは立ち上がる。

「明日からは忙しくなりますよ。国境の結界が消えた今、我が国へ大陸の国の大型船が大挙して押し寄せてきます。大陸側の沿岸に兵

を大量に割くことと、サイトス以外の州の港の整備を急がせませんと。それに係る役人の増強も急務です」

そこまで言ってば、と手を打つ。

「いいですか、今日はもうはしゃいでいないで早くお休み下さい」
いきなりの子供扱いにクロードはむくれる。

「ラドビアスは？」

すでに歩き出していたラドビアスが振り向く。

「魔道師庁へ行つてまいります。コーラルがおりますから彼を祭祀長に命じて、これからの事を話し合つてきます」

てきぱきと言うとラドビアスは部屋を出て行った。

「クロード、頼みがある」

クライブが頼みの内容を言う前にクロードが応える。

「だめ」

「まだ、何も言っていないじゃないか」

クライブが拗ねたように言う。

「だってラドビアスを欲しいって話だろ、どうせ」
ぱしりとクロードが言う。

「正式に宰相として迎えたい」

「だめ……さてお子様は寝るか。前に居た部屋を借りるよ、お休みクライブ」

んーと大きく伸びをしてクロードは話を一方的に打ち切つて席を立つ。そして部屋の隅に目をやる。

「サウンティトゥーダ、アウントゥエン行くよ」

クロードが声をかけると、今迄置物のように微動だにしなかった異形のもものが伸びをして立ち上がった。

「……これは」

顔を引きつらせて目だけで姿を追いながら、クライブは椅子から立ち上がって後ろへ下がる。

「ああ、クライブには紹介するの忘れてたっけ？ こっちの赤っぱい狼みたいなのがアウントゥエン、黒っぱいワニみたいなのがサウ

ンテイトウダ、可愛いだろ」

自慢の愛玩物紹介のような説明にええっ？ と苦笑いしているクライブの前を横切って、クロードは部屋の隅にいる二頭の魔獣の頭をがしがしとかいてやりながら魔獣を引き連れ部屋を出て行った。

ユリウスにとってのクロード

「クロード様、起きて下さい」

ラドビアスに肩を揺すられ、うーんと寝返りを打って再び寝入ろうとする。が、それを見逃してもらえないわけも無い。がしりと両腕を取られて無理やり体を起こされたクロードは、やっと目を擦りながらラドビアスに声をかける。

「んー、お早うラドビアス」

「お早うございます、クロード様。明日からはお一人で起きてくださいね」

「えーっ冷たいなあ」

クロードが甘え半分に抗議の声をあげる。

「私は忙しいのですよ。今も仕事を中断して来ているのです」

ラドビアスが扉の所で洗面の器や水、替えの衣服を持って立っている女官のところへ歩いて行って、次々に受け取っては寝台際のテーブルに置いていく。

「何しろ皆怖がつてこの部屋には誰も入ってこれないのですから」

「……怖い？」

「そうです」

ラドビアスが顎をしゃくってみせる方をクロードが見ると、自分の寝台の足元側の部屋の一角が大きな固まり二つに占領されている。「怖い……つてこの事？」

首を自分の体につっ込むようにして丸まっている二頭の魔獣を微笑ましく見て、返す瞳で入り口で固まっている女官たちを見る。

結構可愛いと思うんだけど。サウンティウーダの大きな口（何しろ大男の上半身を一口なのだ）の横にある長い髭が寝息の度にゆらゆらと揺れている。アウントゥエンなんか赤毛の犬みたいだし。（しかし大きさは尋常じゃないのだが）薄く開いた口からのぞく大人の指ほどもある牙の間からべろりと舌を垂らして寝て

いるのも……可愛いと思うんだけどな……。

「部屋にこれらを入れるのを止めてもらわないと私以外誰もここへは入れないのでそれからクロード様お一人で起きてください。とりあえず、顔を洗って下さい」

事務的に言うラドビアスにクロードが甘えた声を出す。

「ラドビアスお願い、毎日起こしに来てよ」

という事は魔獣を部屋から出す気は無いのだと苦笑しながら、顔をあげたクロードをすかさずラドビアスは用意していた布でこしごしと拭いた。

「仕方ありませんね。何で私がお仕えする方は、皆手がかかる方ばかりなんでしょうかね」

呆れたようにいいながらも手は着替えの服を取る。

「さあ、着替えて下さい」

「はいはい」

クロードは生返事を返して夜着を豪快に投げ飛ばす。すかさず、首を伸ばしたサウンティトウダが口で咥えて受け止めた。

「うまい」

クロードが走りよって頭を撫でてやると、隣のアウントウエンがぐわつと喉を鳴らして自分にもやってくれと催促する。

「クロード様着替えて下さい、私は忙しいんです」

ラドビアスが、サウンティトウダの口に手をつ込んで夜着を回収してぴしりと言う。

「はいはい」

「クロード様」

「解かってるって」

アウントウエンの構ってくれ光線を背中に受けながら、着替えているクロードの髪にラドビアスがブラシを入れる。

「うわっ、そんなのいいよ」

「駄目です、じっとして下さい」

一人で仕度しろとか口では言うものの何やかやと世話を焼くラド

ピアスに以前、ユリウスがうるさいとか言いながら世話を焼かれていた事を思い出す。途端にクロードはしんみりしてしまった。

「どうか……しましたか」

ラドピアスの気遣う声にクロードは、はっと我に返る。

「いや、今日の服は紫だから……思い出して」

それを聞いてラドピアスのブラシをかける手が止まる。

「紫の服、ユリウスが好きだったよね。よく……着ていた」

紫の服にゆるく髪を後ろに編み込んで酒を飲んでいたエスペラントの成人のお披露目の宴。その時の姿が思い出されてクロードの胸が詰まる。あれはほんの数ヶ月前のことなのに。

「紫はヴァイロン様がお好きな色でしたから」

「ヴァイロン？ 初代の王だよね」

「はい、そうです」

「ヴァイロンってさあ、ユリウスにとって何だったの？」

ラドピアスは目を見開いてクロードを見る……暫くの沈黙。

「さあ、本当の所は私にも解かりません」

「待ってるって、ヴァイロンの事だよな」

びくりとラドピアスの^{まいた}瞼が痙攣するが口調は変わらない。

「私はその場におりませんでしたから……たぶん、そうでしょうね」
クロードは自分の生まれる遙か昔の男に嫉妬している、と思った

仕方ないのに。自分のような王の半身は数え切れないくらい

彼の前にいたのだ。クロードはその何番目なのか、いずれにせよ大勢の中の一人であることは間違いない。

「俺なんてユリウスからしたら只の僕候補だったのかな」

ラドピアスに否定してもらいたくてわざと口に出す。それを知
っているのかラドピアスが目を細めた。

「クロード様は特別でございますよ」

「本当？」

「ええ、もう、終わりますからじっとしていて下さい」

服と同じ紫の幅広のリボンで、クロードのシルバートロントの髪

をきゅつと結ぶ。

「思ったより話し込んでしまつて時間がありません、食堂へお急ぎ下さい。外にいる女官がご案内します。陛下がお待ちになつていますよ」

はい、終わりと背中を叩かれてクロードは外に追い出される。

「サウンティトウダ、アウントウエン！」

行きかけて二頭の魔獣に声をかけると二頭の魔獣が揃つて付いて行こうとする。それをラドビアスが手のひらを立てて止める。

「駄目です、あとで牛の頭でもやっておきます。まさか食堂へ連れて行こうなどと考えてないでしょうね、クロード様」

「まさか」

まさにそう考えていたが小さく舌打ちして二頭を見ると、魔獣たちも不服そうに鼻を鳴らしてその場に伏せた。

「さ、急いで下さい」

クロードは渋々食堂へ向かう。歩きながらヴァイロンとユリウスの事をはぐらかされたのに気付いた。

「こちらです、クロード様」

女官に案内された朝食用の小さな（と、いつでも充分広い）食堂に入ると、クライブがすでに上座に座っていた。クロードは済まなそうな顔を急いで作つて座る。

「お早う、クロード」

「お早うございます、遅くなりました。……だいぶ待った？」

「少しね」

クライブは笑いながら横に座る二人の女性を見やった。

気付いていた。部屋に入った時から当然見えていたのだから。じゃあ……この人が。

「クロード、私達の母上と姉上だ」

地下宮の少女

そう言つてクライブはその女性たちと優しく見詰め合う。

「えっと、お早うございます」

何と挨拶していいかわからず、やはりお早うかなとクロードは朝の挨拶をした。目の前の女性はクライブとクロードとは色目の違うブロンドの髪。サファイア色の瞳の美しい三十台後半の女性だった。その横にいる十代後半の母親似の女性は、ダリウスと婚約するというマーガレットらしい。

「お早う、クロード、会うのは十四年ぶりなのかしら」

「姉のマーガレットよ、本当にクライブとそっくりなのね。祭祀長になったクロードはお父様より随分と年寄りになってしまったけど

……あなたは歳を取るの？」

えんりよの無い物言いにクロードは言葉に詰まる。

「姉上、もういいでしょう？ 食事にしましよう」

クライブが助け船を出してクロードはこっそりため息を付く。

特段、感極まったとか懐かしくてどうか、そんな事を期待していたわけでは無かったがクロードは内心落胆してもそそと食事を続けた。

「慣れない執務に陛下はとても疲れているの。あなたも陛下の側つきとなるのなら少しは執務室に顔を出しなさい」

「え……？」

母親の言葉に、そうかこの人たちにとって自分は家族というより臣下なのだと、クロードは愕然^{がくぜん}とする。前王の半身コーラルと同じ、そういうこと。

「母上、姉上、今までとは違うのですよ、クロードは私の影にはありません」

クライブが慌てて言うが、クロードは我慢できずにかたんと席を立つ。

「申し訳ありませんが気分が良くないので失礼します」

何とかそう言って足早に食堂を出て行くと、自分の部屋に駆け込んだ。 やっぱ俺は血の繋がりで、長い空白を瞬時に埋めることができるとは思えない。 そんなことを期待していると返って白々とぽっかり空いた穴に落ちてしまう。 俺もユリウスも血縁とのかかわりに問題がある。 まあ考えてみればそれもこれもユリウスのせいなのだが。

一旦、クライブが王位につくと決めてから、クロードは意識して王の執務室には近づく事を避けていた。 日中は手の空いている兵士相手に剣や体術を学ぶ。 間に、執務の手が空いたラドビアスに魔術を習う。 それ以外はモンド州に居たときのように、一人で王宮内をうろついていた。 そのことについて王もラドビアスも黙認している以上、他の官が止め立てできるわけもなく、いつの間にかそれが普通になっていた。

勿論それについて表立って意見される事は無かったが、影ではいろいろ言われていることもクロードは知っていた。 だけど、特に爵位をもらったり、官職についたりするわけにはいかなかった。

俺はここから居なくなるのだから。 あてにされてクライブの対抗馬に祭り上げられて騒動になる懸念など小指の先程望んでいないのだ。 国王の食客扱いで丁度いい。

サイトの王城の地下には主に政治犯の貴族、それもあり上流の者だけが幽閉、投獄される為の裏宮が造られている。 断首されず、終身幽閉の刑を受けた者は一般の牢獄とは比較にならない程の恵まれた部屋で、飢えることも無く世話する者もいる……。 だがそこを出る事は死ぬまでない。

地下宮の入り口の前、警備の兵士たちが、がたりと崩れるように倒れた。 その倒れた兵士の間をクロードが縫って歩く。 大きな

錠前の穴に手を触れてから印を結ぶ。　びしりと言う音と僅かに閃光が走り、錠が外される。　ゆっくり分厚い戸を開くとぎいぎいと耳障りな音が地下にひびくが誰も起き上がる様子もない。入り口近くには審判が下される前に留め置かれる牢がある。　その牢の戸の錠もさつきと同じように外して戸を開ける。　部屋には薄茶のドレスを着た明るいブロンドの少女が座っていた。

天井近くにある明り取りの為の窓が横長に大きく取ってあり、地下にしては明るい。　だからといってここが獄であることには代わりがなかった。　戸の開く音に少女が振り向く。

「クロード！　いえ、国王陛下だったわね。何のご用かしら、王自ら罪人に会いに来るなんて」

その強い口調にクロードが思わず笑う。

「俺は、国王じゃないから不敬罪が加算されないけど君って相変わらずだな」

「国王じゃ……ない？」

アリスローザはクロードの右手に指輪があるのを認めて眉根を寄せる。

「その指輪は何？　偽物なの？」

怒りを含んだ顔でクロードを見る。

「ああ……これ？」

クロードがよいしょとアリスローザの向かいの椅子に腰掛ける。

「君には朗報かもね、レイモンドールの表舞台から魔道師は退場することになり、魔道師で『鍵』と契約した俺は王では無くなった。

兄のクライブが王だよ。戴冠、即位式はまだ先なんだけど」

「どういう事？」

「この国の魔道師の祖、イーヴアルアイが死んで術が解けて竜道も結界も消えた」

言ったクロードは自分の胸をそつとなぞる。　そこは竜印があった場所だった。

「魔道師が政治から手を引くの？」

興奮気味にアリスローザの声が大きくなる。

「ああ」

反対に幾分気落ちしたようにクロードうなずく。　　そうだ、

俺がこの手でイーヴアルアイを殺したんだ。　何度その話題に触れても慣れることが出来ない。　思うだけで胸が苦しい。

「そう、良かったわ、これからレイモンドールはいい方向へ変わっていくわ。ありがとうクロード。このことを知らせに来てくれて。裁判でお父様のように斬首となってもここで一生幽閉となっても悔いはないわ」

アリスローザがクロードの手を握り決然と言った。

「あのさ、君は裁判にかけられない」

クロードの言葉にアリスローザが握っていた手を離す。

「え？」

「ボルチモアへ返そうと思っっているんだ。この国が……ボルチモアがどう変わるか見てみたいだろ？」

「それはそうだけど」

口ごもるアリスローザにクロードはにやりと笑う。

「俺がモンド州の三男だったことを覚えているのは君だけなんだ。ユリウスっていう兄貴がいたことも。俺にとつて大事な思い出なんだ。一人ぐらい思い出話を出来る相手が欲しいと思っつてさ」

「クロード、それ本当の理由じゃないわよね」

「それだけじゃだめ？　じゃ君を地下宮に置いていたくない……つていうのも理由として脆弱わづかかな」

クロードの言葉にアリスローザの顔が赤く染まったが、それに気付く様子も無いのがクロードなのだった。

「また来るよ。スノーフォーク家に預けられる事になると思っけど、暫くはここがまんしてね。裏工作しなきゃあ」

すくつと立ち上がるとアリスローザの返事を待たずにクロードは牢の戸を閉めた。

魔獣の襲

昼過ぎサウンティトウダとアウントゥエンを連れて、クロードは王宮のはずれにある森にやって来ていた。

「退屈だつたろう？ 少し遊んでおいで。ただし人間は狩るなよ。あと、アウントゥエンは火を吹くの禁止だからな」

クロードの言いつけに二頭の魔獣はこくと頭を下げると相次いで消えていった。二頭を見送ってクロードは草地に寝転がって空を眺めていた。

「お一人で動くのは構いませんが、城内からお出になるなら一言お知らせ願います」

聞きなれた声に目を向けるとラドビアスが立っていた。

「でも俺がここに居るって解かってたんでしょ？」

「それはこの辺りで恐ろしい獣の叫び声が聞こえると官たちが騒いでいたからです」

「へへっ……」

悪戯っぽく笑うクロードの横にラドビアスが膝をつく。

「……で、地下宮には何のご用で行ったのですか」

さらりと尋ねる。

「アリスローザに会いに行ってたんだ。彼女、ボルチモアへ返そうと思ってるんだけど。できるでしょ？」

「それは……何とでもいたしますが、理由をお聞きしても？」

うーんとクロードは唸る。

「アリスローザには生きてボルチモアでこの国の行く末を見て欲しいと思ってるんだ。俺がベオークから帰って来たときに待っている人がいてほしいと思つたら駄目かな。いつになるか解からない。若いうちに帰れるのか、何十年かかるかもしれない。でも結婚して子供ができて……時が過ぎたあと俺が帰って来たときに笑って話ができる人が欲しいんだ。それは……クライブじゃない」

「そうですか」

ラドビアスは思わず口元を緩めてクロードの頭に触れる。

「本当はだめですけど彼女の罪を直接知っているのは数少ない者だけですし、何とかしましょう」

「ありがとう、ラドビアス。しかし、おまえこの時間ここに居ていいの？」

クロードが身をおこしてラドビアスを見る。朝早くから晩遅くまで仕事にかかりきりでその合間、合間にクロードの修業や勉強に付き合つて。いつ寝てるのか不思議になる。見上げた顔は前から顔色が悪いので、今の体調がどうかは窺えない。クロードに對しての態度も何も変わらない。

「それを心配して頂けるのなら大人しく城内にいらして下さい。今、クロード様より大事に思うことなど私には無いのですからね」

ラドビアスの言葉にじいんと嬉しくなったクロードは、その余韻に浸りたかった。だが何か重い物を引きずる音と荒々しい鼻息。生臭い血の匂いに邪魔されて立ち上がると、楽しそうな二頭の魔獣が揃って帰ってきたところだった。しかもお土産つきで……。

「これ、獲ってきたのか」

サウンティトウダがその大きな口に咥えているのは白馬で……たぶん王の騎乗する馬だ。その後ろからアウントウエンが咥えているのは茶色い大型の馬で馬車を引く馬だろう。

「あちゃー、今さら返しにもいけないよな」

「死んでますしね」

二人が顔を見合わせる横で二頭の魔獣が満足そうに尻尾を振る。

「こうなったら……骨まで残さずに食べてしまえ」

あとは知らぬ存ぜぬで通そうとクロードは腹を決めた……が。

「そんな事通るわけないでしょう。馬丁たちが今頃大騒ぎですよ。二頭を野放しになさってはいけません、何事も躰が大事です」

ラドビアスにきっちり怒られて、クロードは大きな馬の腹から臓物を引きずり出して夢中で食べている二頭の前に立って腰に手をや

る。

「おまえたち、勝手に食べ物を獲得の、サイトスでは禁止だからな！」

出来る限り低い声を出す。 えーっと言いそんな顔で口の周りを馬の鮮血でべたべたにした二頭がクロードを見る。

「解かった？」

クロードの声に頭を上下してこちらを注視する魔獣にクロードはにこりと笑う。 やっぱ可愛い。

「まあやつちやたもんは仕方無いからそれはゆっくりお食べ」

クロードの声を合図に二頭は先を争って馬の腹に頭を突っ込んだ。

朝、ラドビアスに例によって荒っぽく起こされてクロードは頭を掻きながら仕度を始める。

「あのさ、前に早馬を飛ばしたけど最北のダートベージ州までどのくらいかかるの？」

今日もクロードを捕まえて丁寧に髪を梳りながらラドビアスが答える。

「馬を替えながら一日中駆け通しで片道二十日はかかるかと。直ぐに返事を持って帰って四十日と少しはかかりましようね」

「そんなに……」

「なぜ州宰の魔道師が多かったと思われませんか」

「魔道師庁の意向を州政にいき渡らせるため？」

「それもありますか……。 サイトスからの政令の速やかな周知と州候への親書等の送付などを、竜道を使うことによって安全に地域の距離に係わらず、半日ほどで出来ていたのですよ」

「んーっ、それって俺を暗に責めてる？」

クロードが頭をかきむしる。

「止めてください。せっかく髪を梳いていますのに……どうされた

んです？ 何か気に病まれる事があるのですか」

ラドビアスの問いにこっくりとクロードが頭を下げる。

「それは皇太后様に関係ありますか？」

ラドビアスが濃紺のリボンできつちり髪を結びながら聞く。

「では、こちらに朝食を運ばせますか」

「えっ、いいの？」

クロードが勢い良く言うので、ラドビアスは当たりかと薄く笑う。

「私も一緒にご相伴させていただきますよ。そのほうが私もクロード様と話をさせて頂く時間が増えますし」

はい、出来ましたたとぼんと背中を叩いてクロードを開放すると、

ラドビアスは、クロードが脱いで飛ばした夜着を魔獣の口から抜き取って畳み小脇に抱えて戸に手をかけた。

「三種の神器が出来たと報告がありましたから、見に行きましょう」

「出来たの？」

「はい、良い出来栄えだと報告がありました。今日はがんばって皆様とお食事なさってください。終わったら祭祀庁へお連れしますよ」
クロードが大人しくうなずくのを見てラドビアスは部屋を出て行った。

三種の神器

祭祀庁か……。クロードは西側へ目を向けて権を手放し名前を祭祀庁と変えた場所を思い、またこれから向かう苦行を思い出し息を吐いた。砂を噛むような食事を終えてクロードが部屋に戻るとラドビアスが待っていた。

「参りましょうか」

二人が西側の長い廊下を通り、大きな扉を開けるとその中は一瞬として空っぽだ。

「何か働いている魔道師の数が少ないよね」

クロードが寂しそうに言う。

「はい、還俗して官吏になった者が大勢いますから」

ラドビアスは何の感傷もないように自分で次々と扉を開けていく。

そうか……。魔道師はもう国政に携わらない為、今迄国政に携わっていた者は官吏になったのだ。

やけに風通しの良くなった庁内を見回して、クロードはガリオリがてきぱきと指図をしていた頃との差に物悲しくなった。いつも俺は口先だけで後になって自分のしたことを思い知るのだ。

ラドビアスが大きな箱から細長い箱と小さい箱をそと取り出して机に置くと、括弧である紐を解いて箱を持ち上げる。

「クロード様、こちらへおいで下さい」

クロードが机を見ると、そこには美しい彫金が施されて宝石がそこここに散りばめられた剣と鍵、指輪があった。

「うわーきれいだね」

クロードがラドビアスの横で感心しながら眺める。レイモンドは三十日ほどを一の月として十二か月で一年としている。その四ヶ月ほどが厚い雪に完全に閉ざされる。その間、農作業などはまったくできない。そのことが長い事、この島国が貧しい要因であった。

しかし、この国は山中から稀少な宝石、鉱物が豊富に産出される。屋内作業としてそれを加工する技術がこの数百年のうちに発達し、他に並ぶ国はないと言われるようになっていた。他にも細かい細工を施した木工細工など、細工物全般においてレイモンドール産の物は他国の二倍以上はする高級品として出回っている。唯一、開かれていたサイトの港からはこういった品々が海を渡っていくのだ。

「でもこれ、本物と大分違うよね。本物より豪華で……」

本物よりかなりければいい。クロードは自分の指にある本物を目の前に上げる。

「そうですね、クロード様がお持ちの物は実用を兼ねておりますからね」

そうか、これらは見栄えがして豪華で神々しい感じがすればいいのだ。指輪以外は身につけることも使うこともないのだから。

「本物を知っているのはコーラルだけですから見栄えが良ければいいんですよ」

ラドビアスがあっさり言いながら、丁寧に包みなおして箱に収めていく。

「では、消しますか？ 職工たち」

ラドビアスの言葉にぎょっとしてクロードは唾を飲み込んだ。

「もしかして今、物騒なことを考えてましたか？ 消すのは記憶ですよ、クロード様。そういうお話だったでしょう」

くつくつと手を口元に当ててラドビアスが笑った。

「解かってるよ」

クロードはやられたと思いながら手にかいた汗を上着で拭いた。

穏やかな笑顔のこの男が何人も手にかけているのを知っているから、この手の冗談は笑えないのだ。

「一足先にハーコート公が近々サイトスにお着きになられます。ご長子のダリウス様も一緒にです、ダリウス様は直ぐお帰りになれるようですが」

「ダリウス兄様が来るの？」

久しぶりに会えると心が浮き立ったが、直ぐにダリウスは自分のことなど覚えていないのを思い出し一気に気が塞いだ。結局、二日後に到着したダリウスにも会いたくなくて、クロードは王城の城壁に上って海を眺めていた。結界が消えてここから大陸側の陸地が良く見えるのだ。

「王陛下……まさか？」

あまりにも聞き覚えのある声にクロードは思わず振り返る。

「ダリウス兄……」

兄様と続けそうになって慌てて言葉を飲み込む。不思議そうに見上げるダリウスはまた少し背が伸びて大人っぽくなっていた。長い黒髪も腰まで伸びている。

「あ、クライブ王の弟のクロードです。あなたは今度宰相を拝命されたモンド州公、ハーコート公爵のご子息でしたよね」

クロードの言葉にはっとダリウスが片膝を付いた。

「失礼いたしました。陛下の弟君とは知らず……しかしそのような方がこんな所で供もつけずにいらっしやるとは」

「ここから一番大陸が良く見えるんだ」

「実は私もそう聞いて参ったのですが」

そう言つて後ろに控えている従者を一瞥して、何かを思い出したようにクロードを見つめた。

「何？」

「いえ、以前にもどこかで同じようなことがあつたような気がして……思い違いでしょう。お気になさらないで下さい」

「別に気になど」

クロードは嬉しくて笑い出しそうになる。モンド州にガリオールが来た時もクロードは城壁に立ってダリウスが呼びに来たのだった。

記憶はなくなっているのでは無く。どこかへ仕舞い込まれているのだとクロードはダリウスを見ながら、やはり会えて良かった。

たと思った。

バルザクト・ロイス・ヴァン・ハーコート公爵がサイトスに到着して宰相の任に就いてから、急速に国政は形を取り戻していく。年が明けると、続々と各州から州候、または州候代理がサイトスに到着して王宮も賑やかになっていく。それから、あつという間に時が流れていく。

怠情なときも忙しくしているときも一刻は一刻のはずなのに通り過ぎていく時の流れは確かに違うのだとクロードは思う。

戴冠、即位式を迎えたその日、祭祀庁の大扉が左右に大きく開かれた。中ほどにある階を大きくぶち抜いた広い空間に、モンド州のゴート山脈にある廟の内部に似せた教会が造られている。今そこはぎつしりと貴族や軍の將軍らが両膝を床につけている。高い壇上には祭祀長のコーラルが厳かにレーン文字を宙に描いて、祝福の言葉を古代の言葉を紡いで大きく印を切る。最後にコーラルが美しい冠をクライブの頭に載せて戴冠式は終わった。人々が続々と祭祀庁から出て行き玉座のある大広間に場所を移す。

今度は新王の初心勅語が始まる。初めてクライブ国王を見る貴族達がひそひそと言葉を交わす。

戴冠式の夜

「クライブ陛下はおいくつであられるのだ？ 随分とお若いようだが」

「十五になられるのではないか……」

新王となったクライブのあまりの若さに戸惑いが広がる。今だかつてこのように若いまだ少年といえる歳で王位についた王はいなかった。魔道側が要求する王の血を受け継いだ双子の一人を差し出すには体が成熟している必要があったのだ。

王は『鍵』と契約すると不老になる為だから、魔道に守られている間、幼い子供が王になることは皆無だった。が、今は魔道の加護は無い。理由が解からず、不安ばかりが小波のように広がっていくばかりだった。

「国王陛下の御前であることをお忘れか、控えなさい」

大きい声では無い。しかし宰相ハーコートの声はざわついた広間の端から端へ一陣の風のように通っていく。

「陛下、お言葉を」

宰相のハーコートに軽くうなずいて、クライブが玉座から立ち上がる。

「皆も懸念^{けねん}しているこの国を覆っていた結界はもはや存在しない。各州から出たままになっている州宰や上位の魔道師も戻ることは無い」

小さくそこでどよめきがおこる。それほど州候たちにとって州宰の存在は大きかったのだ。

「この国の結界術の要だった魔道師のイーヴアルアイが亡くなったことが原因で竜道は消え、竜印を受けた者もまた然^{しか}りだ。これからこのレイモンドールは魔道に頼る事無く新しい国としてあらねばならない」

そこでクライブは一旦言葉を切って周囲をゆっくり見渡した。

「見ての通り私は若輩だ。政策、案件があれば遠慮なく奏上して欲しい。私からもこれからの国の有り様を勅書として記したので後で目を通すように。官の不足を補うために魔道師の還俗と各州に官吏を養成する大学の設立など早急に進めてもらいたい。これからは政治から魔道を排し人を以って司るつかさどこととする」

頬を赤くしてクライブが玉座に座り各州候、主だった貴族から拍手を送られてふーっと長い息をついた。

「ご立派でございましたよ」

につこりとハーコートに笑いかけられてクライブはもう一つ安堵のため息をついた。

それを一段下がった所に設けてある椅子に腰を降ろしていたクロードとラドビアスも、ほっと息をついてお互い顔を見合わせた。

それから長い州候のお祝いの挨拶が続き、終わったのはとつぷりと日も暮れた夜半の頃だった。

「疲れたーっ」

大声とともに部屋に駆け戻るとクロードは寝台に飛び込む。

「寝台に上がられるなら履物を脱いでください。明日からは祝賀の宴が始まりますよ」

「ええーっ、もう勘弁して」

「いくらなんでも王弟が全く顔を出さないわけにはいきませんが、午前中我慢なさったらうまいこと出して差し上げます」

ラドビアスの言葉にクロードはがばりと起き上がる。

「本当？」

「本当です」

じゃあ我慢してやるかと靴を脱ぎ捨てるが、それにしても俺が王でなくて本当に良かったとクロードは思った。

ごめん、クライブ。王の居室のある方へ手を合わせてクロードは正装のまま寝入ろうとしたが、ぐいと腕を掴まれる。

「お疲れでしょうがお湯を使って下さい」

「もついいよ、寝たい」

「ごろりと寝返りを打とうとしたクロードを軽々とラドビアスが抱え上げる。

「ぎゃあー何するんだっ」

「言う事をきかないからですよ、クロード様」

わざと横抱きににしてすたすたとラドビアスが浴室へ連れて行く。

「わーっ降ろしてよ、恥ずかしいよ」

「だったら初めから言う事をおきになればよろしいのです」

ぴしゃりと言って、それでも降ろすことなく歩くラドビアスの胸にクロードは顔を埋める。顔を上げたままだと廊下ですれ違う官の驚く顔を見てしまうからだ。浴室に入るとラドビアスがやつとクロードを降ろした。

「お一人で大丈夫ですか、お世話をする女官を呼びます？」

「ラドビアス！」

こいつ！ いつだって俺は一人で入ってるだろう。

真っ赤になったクロードにラドビアスがにこりと笑んでみせた。

「こちらにお着替えがございます、体を拭く布はこちらに。では見計らってお迎えにまいります」

ぱたんと閉まる音にクロードはやれやれと服を脱いで裸になった。「絶対日頃の憂さを俺をからかって晴らしているよ、ラドビアスの奴」

しかし、湯に体を浸すと体中の疲れがお湯に溶けていくのが解かる。

そして……一つ、名案も思いついた。ラドビアスと一緒に風呂に入ればいいじゃないか。上手い事やって服を脱がせて……と、中年の色ボケ親父のようなことを思いながらぶつぶつクロードが一人つぶやく。上半身だけでも脱げばその体に誰の竜印があるのか、無いのか確かめられる。口元までお湯に浸かりながらぶくぶくと泡を立ててクロードはそんな事を考えていた。そして……自分が靴を履いて来ていないことを思い出す。

俺、帰りも抱っこなのか。

浴室を出たラドビアスは、その足で祭祀庁へ向かう。大扉の前にいる警備の兵士も二人きりになっていて中に入るとコーラルが直々に出迎えた。

「ラドビアス様、何のご用です？」

「今日の祭祀の事と言えば解かると思うが」

「こちらに」

ガリオールが使っていた執務室に入ると上座の椅子をラドビアスに勧めて、反対側にコーラルが座った。

「やはり、ラドビアス様には解かると思っておりますが」

「古代レイン文字で呼ばわった名はクロード様だったな」

ラドビアスがきつく言ってコーラルの返事を待つ。

「はい、『鍵』と契約を交わした御方はクロード様でございますから」

コーラルは当然の事をした迄、と言うと後ろに控えていた魔道師に茶を入れるよう命じた。

矜持の行方

「この者、マルトはガリオール様に長く……といってもあなた様の尺度で言えばたったの十年ですがお仕えしておりました」

「だから、何だと？」

ラドビアスが突き放すように言う。

「それで、何ゆえ、クライブ陛下の術を解かなかったのか。何を考えているのだコーラル」

「私はコーラル前国王に十四年間、お仕えし……やっと魔道師庁でお役に立てるとガリオール様にお誓い申しあげておりましたのに。今の状況は納得しかねます」

コーラルは挑むようにラドビアスに言った。王の子として同じ日に生まれたのに、王の影として生きなければならぬ身の不運。

それを我慢できたのは、自分が王の死後、永遠の時を国の施政者の一人として生きる。そのために自分こそが選ばれたのだ、という誇りがあったからなのだ。それが……あっさりと奪い取られた。イーヴァルアイ様が亡くなったから竜道が無くなったという事も、結果がなくなつたという事も仕方ない。だからといってこの国を今迄支えてきた魔道を政治の表から排除するなどという事は我慢がならない。神聖な『鍵』を受け取つたのがクロード様であるなら王はクロード様なのだ。

「おまえたちがどう思うと勝手だが、クロード様は王位につくご意志は無い。無駄なことは止めなさい」

ラドビアスは立ち上がるとさっさと歩きだす。

「魔道師庁がこんなになってしまつてお寂しくはないのですか？」

ラドビアス様！

マルトがラドビアスの上着のすそを思わず握つて追いつがる。

「別に。おまえたちには気の毒に思うが、そんなに政治に係わりたいたのであれば還俗して官吏になればいいではないか」

ラドビアスは冷たく言ってマルトの手を払う。

「クロード様を浴室にお迎えに行くので失礼する。それと、もう、ここは魔道師庁ではないよ、マルト」

ラドビアスが出て行ったあとに何とも言えない暗い空気になって二人の魔道師は無言で立っていた。

「ラドビアス様には解かって頂けなかったが……そうだな、その手がある」

コーラルがぼそりとつぶやく。

「マルトおまえ、気持ちを同じくする者を連れて官吏になれ」

「コーラル様、何を」

「形だけの還俗を……サイトをこの国を魔道師の元に取り戻すのだ、マルト」

「……解かりました」

そしてこの国は魔道師の王を迎える。それはクロード様でもない、この私だ。晴れやかにコーラルは久しぶりに笑った。

三日程、祝賀の宴が続き各州侯らが各所領に帰って行く頃、地下宮のアリスローザの獄の戸が開けられる。

「アリスローザ様、お迎えに参りました、これからスノーフォーク侯様についてボルチモア州にお帰り頂きます」

「ラドビアス、クロードは？」

アリスローザがきよきよと辺りを見回しながら問うのにラドビアスは幾分素っ気無く応える。

「クロード様は上でお待ちです」

ユリウスに仕えていたこの男がクロードと一緒にいるのがアリスローザには気に食わない。国がほとんど魔道と距離を置いていくのに、ラドビアスといえるとクロードのほうはほとんど魔道側へ引き込まれていつか自分の前から消えていきそうだ。

この従者は表面上は礼儀正しく無礼な事をするでもないし、人当たりも大変いい。しかし、本当の所はどうなのだろう。優しそうな声音のわりに先程見せた顔は……かなり冷たかった。

ラドビアスに続き階段を上がり、迷路のような廊下を歩いていくと大きく曲がった所で突き当たった。そこは梯子が上まで続いていて上を仰ぐと四角に切られた、跳ね上げ式の扉があるようだ。

ラドビアスが先に立って梯子を上り、パズルのように板が組んである戸板を動かすと、歯車がかみ合ったような音がした。それを押し上げて開けると下から続くアリスローザの片手を掴んで引っ張りあげる。

「この地下宮の中を良く知っているみたいね」

こんな誰もこないような場所の……自分が仕えていたモンド州州城内ならともかく、首都サイトスの地下宮の隠し通路の事まで何でこの男が知っているのか。

「サイトスの主城を建て直す時に私もこちらにありましたもので」アリスローザの胸の内を読んだようにラドビアスが口にした内容に、アリスローザが目を見開いて掴まれた手首を振りほどいた。

それって四百年以上前の話じゃ……。

ラドビアスが軋む音を立てて次の戸を押し上げると固まった埃が落ちて来て、その先に二人がやっと立てるほどの足場があった。そこから最後の梯子が伸びている。

「足元にお気をつけください」

こちらに顔を向けたラドビアスが一人事のように言う。

「足を滑らせて頭をうつ……というのも……やはり止めときますか」しかしその後にはいつもの笑顔を見せる。

「先にお上がり下さい、アリスローザ様。戸は引き戸になっております」

生きた心地もせず、追われるように急いで梯子を上り、戸をあけて上に体を出す。急に昼間の力強い光がアリスローザの目を一瞬眩^{くら}ませて、今出てきたばかりの穴に足を取られそうになる。

「あつ」

バランスを崩したところをがっしりと肩を掴まれてひき戻された。「大丈夫？ アリスローザ」

「クロード！」

アリスローザに抱きつかれてクロードは目を白黒させた。

置いていかれる者

「一体どうしたの？」

「わ、私、あのね、クロード……」

「足がもつれたのでしょうか。長い事、狭い所においでだったのですから」

アリスローザの話は、ラドビアスが姿を見せて断ち切られた。

「これからスノーフォーク候の馬車の所まで案内させるよ。長い間、不自由な所に閉じ込めていたけど、許してくれよ」

州候の子供同士という立場から大きく身分が変わったというのに、クロードは少しも変わらない。

「クロード、ありがとう」

抱きつかれて距離が近い上に、につこりと可愛い笑顔で言われてクロードは赤くなって、しまったという顔をする。

「んーもう、いつも俺はアリスローザにいいようにされているみたいだ。あのさ、元気で。俺またボルチモアに行くから。いつになるか解からないけど覚えていて、俺のこと」

「クロード？」

ここを出て行くのは自分の方なのに、遠くに今にも行ってしまうようなクロードの言葉にアリスローザは切羽詰った気持ちになってそのままクロードに口付ける。

「アリスローザ様お急ぎください、案内の者が来ております」

ラドビアスの声にはっと離れたアリスローザの手をクロードが掴んで引き寄せるともう一方の手に丸くて平たい物をのせる。

「これを預かっていてよ、俺の大切な物なんだ。また、会うときまで君に持っていてもらいたいんだ」

「クロード？」

アリスローザは自分の手にのせられた竜を型どったペンダントを見つめる。

「俺っていつも君にはやられっぱなしだったけど、別れる時くらい俺にいい所を作らせてよ」

言って素早くクロードは、さっきのお返しとアリスローザに口付けた。

「クロード様」

ラドビアスが案内の従者からその様子を隠すように立ち塞がって、僅かに咎めるように名前を呼ぶ。

「じゃあ、またねクロード。すぐ会いに来てね」

顔を赤くして名残を惜しむように後ろを振り返りながら、アリスローザは去って行った。

俺が選べなかった人生……。州候の子供としての人生をアリスローザの中に見ているのかもしれない。だから強く頑張って生きて欲しいと思う。魔道師としての俺の人生も頑張るから。

そして別の感情もあると……。アリスローザのことを思うとき、会っているとき、苦しくて嬉しい。この感じはユリウスに感じていた愛とはまた違うものだということは、クロードにも解かっていた。けど今は無理やりにも心の隅に追いやっておかなくては。

クロードはアリスローザの立ち去った方を長い事見ていた。

そして、むつつりと黙って歩くラドビアスに気付く。

「何か、怒ってるのか、ラドビアス？」

「いいえ……ですが、あれはカルラ様から頂かれた物です」

「やっぱり怒っているんじゃないか」

無然とした顔のラドビアスにクロードは困ったように見上げる。

「俺にとって大事な物ってあれくらいしか思い付かなかったんだよ、許せラドビアス」

「別に私は怒っておりません」

そういう割にはラドビアスはクロードに歩調を合わせず背中を向けた。

「だからクロード様が私に謝る必要などありません」

即位式の後には少しずつラドビアスは政務から離れるようになり、午後は毎日つきっきりで剣術、体術、魔術をクロードに教えるようになった。

嬉しいんだけど一日くらい休みたいかも……。

しかし勉強をラドビアスに教えてもらうようになって、ぐんと自分でも術が上手くなったと思う。ラドビアスの教え方は論理的かつ解かり易く、以前の師であるユリウスがいかに先生として、はちやめちゃだったかという事も、良く解かった。

ユリウスはほとんど独学であれ程の魔術を収め、あらゆる国の言語に通じていたのには今さらながら尊敬するが、天才は優秀な教師にはなり得ない。なぜなら自分が一読して解かってしまうことが、どうして解からないかが解からないから……だ。

取っ組み合って喧嘩して楽しかった。そう、楽しかったんだ。もっと一緒にいたかったんだ、ユリウス。しばらくクロードは思い出に足を取られて動けなかった。

ある昼過ぎ、クロードは前方から宰相のハーコート公と話ながら歩いて来るクライブが目に入る。この所、朝食も自室に運ばせてラドビアスと食べているクロードは忙しいクライブと顔を合わすことも無い。

「クロード、久し振りだな」

「あ、陛下、お久し振りです」

そのクロードらしくない挨拶にクライブは、ほころばせていた顔を曇らせる。

「悪いが先に執務室へ戻っていてくれ、すぐ行くから」

ハーコート公と従者まで追い払うと、クライブは廊下に突き出たバルコニーにクロードを誘う。

「最近私を避けているのか、クロード？」

「いや別に」

向かい合った体勢になった途端、クロードがあーっと大声を上げた。その声にクライブが驚いて後ずさる。はあーと今度は大きなため息。

「どうした？」

クライブが今度はクロードに歩み寄る。クロードは目の前に立っているクライブと目線を合わそうとすると、やや上を向かなくてはならなかったのだ

「背が……伸びたな」

クロードの声に思わず自分の頭にクライブは手をやる。

「そうかな、伸びてないことはないと思うけど」

そう言うクライブは前は鏡のように似ていたのに、顔の輪郭が、肩から腕にかけての線が細い少年の体からの脱却を始めていた。

男の子が一番変わっていく時期に差し掛かっているのだ。男の子から子と言う文字が取れていく過程の時期。たったの一年ですっかり変わってしまう。俺はこの先どんな置いていかれる。

「クロード？」

自分を見て黙り込むクロードに居心地の悪さを覚えてクライブが呼びかける。

「ごめん、クライブ。また……ね」

うな垂れてクロードは部屋に帰った。肩を落として部屋に戻ったクロードをラドビアスが迎える。

「何か、ございましたか」

「あのさ、俺って経典を取り出さない限り死ぬまでこのままの姿だよな」

「そう ですか？」

ラドビアスはクロードが何を言いたいのか計りかねて首を傾げた。「もし俺が五十歳で経典を出したら俺は、十四歳からいきなり五十歳だよな」

「そうなりますね」

ラドビアスの淡々とした物言いにクロードが大声を出す。

「うわーっ、嫌だ！ 俺は今すぐ出発したい」

「クロード様？」

寝台に飛び込んでしたばた暴れるクロードの両肩を掴んでラドビアスが寝台に腰掛ける。

「一体、どうなされたのです？ 私に解かるように説明してください」

その言葉にクロードの動きが止まる。

「解からないの？」

「はい、解かりません」

不信という病

なんで？　と思ったがはたと気付く。ラドビアスは不老のま
ま何百年も年月を重ねてきているのだ。歳を取らないことへの恐
れや急に年老いてしまう不安を解かれというのも無理な話か……。
「とにかく、クライブと外見が変わっていくのが。俺だけ子供のま
まっというのが堪らないんだよ」

そう、訴えるクロードの顔を見ながらラドビアスは、そうですか
と短く応えた。

「クロード様」

両肩に置いた手を滑らせて手首を掴むと、クロードをひよいと上
体を起き上がらせる。そして壁にかけてある剣を取ってクロード
に差し出す。

「体を動かしたらすつきりしますよ」

ラドビアスの言葉に、やる気が出ないクロードはそれでも渋々剣
を受け取る。

「体を動かしたら背、伸びるかな」

「それは無理ですね」

「すつきりするだけ？」

「腕も上がります」

ラドビアスの返事にクロードは大きいため息をついて剣を支えに
立ち上がった。中庭で半刻ほど打ち合っただけでクロードはへろへろに
なって座り込んで水を飲んでいた。

「すつきりしましたか」

顔にかかる髪をかきあげながらラドビアスが聞いてきた。

「……そういえば、背のこと忘れていたかも」

「近く、出発しますか」

さっきと同じ調子で軽く聞かれてうっかり聞き逃すところだった。
「いいの？」

「いいですよ、お伴します」
クロードは晴れ晴れとした顔をラドビアスに向けて水をごくごく飲んだ。

数日後、朝食のテーブルにすでについていたクロードを見てクライブは驚く。前に話をしたのはこの間廊下で話しかけたきりだ。

「お早う、クロード」

「お早うございます。クライブ陛下、母上、姉上」

マーガレットの挑発するような言葉にも、母親の小言にも愛想良く答えるクロードにクライブは不信がる。だが最後まで以前のように勝手に食堂から退出するでなく、クロードは大人しく座っている。

「今日はやけに大人しいな、クロード？」

「ああ、今日は特別だから……」

「何が……？」

「それは内緒ですよ陛下、ごちそう様でした」

席を立つクロードに少し不安になって、クライブが手を伸ばしたのをクロードががしりと握って笑いかけた。

「じゃあね、クライブ」

久しぶりに名前を呼び捨てにされて、クライブはクロードとまた距離が近くなったような気がして嬉しくなった。やはりクロードはクロードだ。魔道師庁へ続く廊下で初めて会ったときのようなだ。あのときもあっさりとそう言っ……。クロードは手を離すところと身を翻して食堂を後にする。それを見送ってクライブはすくと椅子に座り直した。

また、来るよ、そう言っ……私の前からいなくなっ……たんだっ……た。

「クライブ陛下、少しクロードに気を許し過ぎですよ」

母親の言葉にクライブはびっくりして母親を見た。

「確かにあなたの弟でしょうが悪い噂もあるので、私はあの者

がコーラル陛下に仕えていたようにあなたに仕えるなら黙っていようと思っていました」

「母上？」

私の弟という事はあなたの子供ですよ。

クライブは今までもクロードに会うと冷たく小言を言う母を心苦しく見ていたのだが、それはサイトスに外れた振る舞いをするクロードのためを思えばかつてのことだと思っていたのに……。昨日のことが甦ってクライブはこめかみを押さえた。

昨日、久しぶりにぽっかりと半日の休みをもらって、新しく従者にした顔なじみの者と剣の手合わせした。その後、しばらくは和やかに談笑していた。新しく側付きになったのは、昔からクライブの遊び相手に選ばれたサイトスに居を構える伯爵以上の貴族の子弟らでクライブとは小さい頃から気心が知れている。

その中の左軍將軍のレミントンの息子のライアンが声をひそめる。「陛下、ここだけのお話という事でお許しを願いたい話があります」
「ここでは陛下もつける必要はないよライアン。君と私の仲だ。遠慮なくなんでも言ってくれ」

クライブは皇太子の時より全ての者が遠くに行ってしまったように感じて寂しくなる。消えていくのでは無く、いるのだが自分のまわりに今は無き結界が張ってあるように皆、一定の距離を置くのだ。王とはなんて孤独なんだ。

「では、言いますが……クロード様のことです」

クロードの事？

ライアンが咳払いを繰り返して、自分を鼓舞いんふしているのを見て、クライブは嫌な予感がする。

「早く言ってくれ、ライアン」

なかなか言い出さないライアンに焦れて強く言つと、ライアンの横にいた内務大臣の息子、ゴードンが口を切った。

「申し訳ありません、クライブ様。本当にいい話ではないので……私から申し上げます」

今年十八歳になり成人式を迎える、ゴードンがこの中で一番の年長者らしく決意したように声を上げ、まわりの二人が目に見えてほっとした顔をした。

「今、この国が大変な状況になっている原因がクロード様にあるという話があります」

「まさか！ 誰だそんな事を触れ回っているのは！」

クライブの剣幕にライアンは目を伏せる。

「気をお静め下さい。この後をお聞きにならないのですか」

ゴードンのいう事にクライブは、ぐっと拳を握り締める。

「解かったから……それで？」

「大陸の東にベオーク自治国という魔道師の国があるのをご存知ですか」

「話だけは、それが？」

「クロード様がベオーク自治国と通じておられると……。この度の混乱はベオーク自治国が結界を消して、このレイモンドール国をベオーク自治国の支配下に置く為に起こしたことはないかと」

確かにボルチモア州の事はベオークが裏で糸を引いていたと報告があったが、クロードはそれを阻止したのだ。それがなぜ反対に伝わっているのか。

「このレイモンドールの結界を張っていた要の魔道師の祖、イーヴアルアイを弑逆した（しころやく）のはクロード様であるとも」

「ゴードン！」

叫ぶように言うクライブにゴードンも顔色を無くし黙りこむ。

「もう、聞きたくない、帰る」

足音荒く歩み去ろうとするクライブにライアンが背中に向かって言う。

「クロード様は国の宝を持ってベオークに行かれるおつもりだと言うではありませんか、クライブ様、それは本当ですか」

宝……？　こんなでたらめを吹聴しているのは一体誰なのか。
「今聞いたことは根も葉も無い嘘だ。私とクロードの仲を割こうと
している者がいるようだ。とにかくこれ以上そんなばかな話を広め
ないでくれ」

クライブはそう言いながらクロードがどこかへ行くことを言っ
ていたのを思い出す。暗くなって久しぶりの剣術も打ち切って自室
に戻った。体調が悪いと寝台にもぐり込むと従者が天医を呼びに
出て行くのに乗っかってほかの従者たち、女官たちも追い出した。
いつもとあまりに違うクライブの様子に周りは戸惑うばかりだ。

嫌だ……私はあんな話を信じない。そう思うのにこの圧し
掛かる嫌な感じは何なのだ？　クロードは王位を欲していなかった。
それなのに『鍵』と契約した……なぜだ？

「この国の宝は何だと思われます？」

誰もいないと思ったのにいきなり自分の頭の中を見透かすように
放たれた言葉に、口をあけたまま声の主を捜す……。その者は気
付いた時にはクライブの目の前に立っていた。父親の面影を映す、
中年の魔道師姿の男。

「クロード……いや、コーラルになったのだよな」

「はい、陛下。クロードは言わば仮の名、王の半身の幼名みたいな
ものです」

コーラルは王の、と言うところを強く言って口の端をにと上げ
た。

「何の用だ、コーラル。私は気分が良くないのだ。大した用が無い
のなら下がってくれないか」

クライブはそのままコーラルに背を向ける。その様子に無然と
した顔を浮かべたコーラルがやや乱暴に寝台に手を付く。

「クライブ様の気鬱の原因の真相を知っていると私が言っても……
ですか？」

「コーラル？」

「クロード様は『鍵』をお持ちになってベオーク自治国へ行かれる

おつもりです。この国の王の証、五百年も大切に守られてきた宝ですよ、陛下」

それは！

尚も口を開こうとしたコーラルは、急に口を閉じて印を組んで姿を消した。

「隠形おんぎよういたします。この続きはまた後ほど、国王陛下」

天医を始め、宰相のハーコートや母親まで入ってきてクライブはコーラルを呼び止めることが出来なかった。このとき、医者になど治せない不信という病にクライブは罹患りかんしたのだった。

離れ行く者

クロードがそんなことをする筈が無い。話をすれば何もかも笑い話にできる。

「母上、お先に失礼する」

クライブは乱暴に席を立つとクロードを追いかけて走り出す。

慌てて食堂の外に控えていた従者がそれを追いかけた。

「お戻りになりましたか、クロード様」

荷物を二つにまとめて、サウンティトウダとアウントウエンにつけた鞍に括りつけながらラドビアスが顔だけ戸口に向けた。

「もう宜しいのですか」

「うん、クライブに会って来たし、何やかや考えていると出発なんて出来ないよ」

「そうですね」

クロードは用意されていた服に着替える。ラドビアスがクロードにマントを着せ掛けて前に回って留め金を止めると、二頭の魔獣をバルコニーに連れて行こうと彼の側を離れた。その時、大きな音と共にクライブが飛び込んで来た。

「クロード、何をしている！」

あまりの切羽詰った表情にクロードは眉根を寄せる。

「何って……前に言ってたろ。俺ここから出るから」

「どこへ行く気だ、クロード」

クライブがクロードの手首を掴んで詰問するような強い口調で聞く。

「どこって……ベオーク自治国に行く」

「え？」

あまりに何のてらいも無く聞きたく無かった言葉を聞いて、クライブは一瞬何の反応も出来ない。今何て？

「な、何をしに行くつもりなんだ……まさか『鍵』をベオークに渡

すつもりでは無いよな」

恐る恐る言うクライブの心情など解からないクロードは、頓着とんちやくなく応える。

「何でクライブ、知っているの？　そうだけど」

クロードの返事に雷に打たれたような衝撃を受けながら、クライブは小さく呻くように聞く。

「クロード……君が……イーヴルアイを殺したというのは……本当なのか」

自分で聞いておきながらクライブは返事を聞きたくないと耳を塞ぎたくなった。しかし、ここではつきりさせなくてはならないのは解かっている。

「言う必要はありませんよ、クロード様」

剣呑なふいん気を察してラドビアスがバルコニーからクロードの元に戻るうとするのをクライブが制する。

「止まれ！　話を聞くだけだ」

「一体どうした、クライブ」

敬称をつける事無く反対にクロードがクライブの肩を掴んで揺する。

何を動揺しているんだ？　しかしベオークの事といい、『鍵』のことなど誰に聞いたのか……そしてユリウスのことまで。さっきまでのお気楽な気分が吹き飛んでクロードは無言でクライブを見て、その後ろに控えている年若い従者たちに視線を移す。

何て陛下に似ていらっしゃるのか……。

祝賀の宴の二日目から顔を出したライアンら貴族の子弟たちにとって、表だって顔を出していなかったクロードを見るのは今日が初めてだったのだ。王弟にしてはあつさりしたシャツ。肩や肘に皮が縫い付けられた上着に、皮で補強してあるズボンにブーツを履きマントを羽織っているその姿は騎乗しての長旅の装いに違いない。えてして悪い噂は本当のことが多いものだ。ゴードンはライア

ンに目配せをする。直ぐに陛下の安全を図りクロードを捕らえることができるように。

「答えてくれないか、君がイーヴァルアイを殺したのか」

「だったとしたら、どうする気なんだ？」

必死で聞いた事にクロードがはつきり答えないことにクライブは苛立つ。

「君はベオーク自治国と通じていてイーヴァルアイを殺して結界を解き、この国の宝である『鍵』を渡そうとしている、のか？」

「……？」

今度はクロードが啞然とクライブを僅かに見上げる。

誰がそんな事を……しかし事実にくまなく嘘を少し練り込むことでこんなにも事を見る目は違ってしまう。だが、ユリウスを殺

したのは確かに俺で、その為に騙して『鍵』と契約したのも本当で……。ベオーク自治国に行こうとしているのも本当のことだ。その

せいで国が混乱の最中であることも俺のした事だ。しかし、経典のことやユリウスに関していることをここで言うつもりも無い。

「ベオークにそそのかされたわけじゃ無いし、『鍵』の最初の所有者はベオークにいる。この混乱を引き起こしたのは俺かもしれないが、今は何も言えない」

「では君を行かせるわけには行かない。君を……一旦、地下宮へ幽閉する」

クライブが傷ついた顔で言うのをクロードは痛ましい思いで見ることが、自分の意思を曲げる気も無い。

「話が終わりなら俺はもう行く、さようならクライブ」

「させるか！」

ゴードンが剣を抜き放ち、他のものもそれに習う。それを見てクロードが冷たく笑う。

「何をするつもりか知らないけど君たちの主は俺の手の中だよ」

クライブの背後から首に手を回してクロードが『変じよ』と言うのに応えて、指輪は長い剣に変わりクライブの咽元につきつけられ

29.

その先へ

「陛下！」

丸腰だと油断していた従者たちが悲鳴のように叫ぶ。見た目、クライブより細く楽に拘束できると踏んでいた彼らは上位の魔道師と対峙したことが無かった。

『縛！』ラドビアスが次々と印を組んで呪を飛ばしてその場にいた者は床に貼りついたように動けなくなる。そこへ二頭の魔獣も加勢しようとするが。

「サウンティトウダ、アウントウエンおまえたちは手出しをするな！」

クロードの一言でぴたりと動きをとめた。

「いい子だ。おまえたちはそこにいろ」

「クロード様、急ぎましょう。新手が来ますよ」

ラドビアスが縛されて突っ立っている者の間を縫って扉に行くと、レーン文字を描きつけて印を切る。

「簡単な結界を張りましたから一ザンほどは大丈夫ですが」

「うん、解かった」

クロードはクライブに剣をあてたままバルコニーに出る。

「このまま出て行くと言うのなら君はこのレイモンドール国を貶めた重罪人の烙印を押されて生涯追われることになるぞ、クロード」

クライブの目から涙が一筋流れる。

「行くな、クロード。嘘だと……冗談だと言ってくれ。わたしを一人にしないでくれ、君が必要なんだ」

「悪い、行くよ、クライブ。レイモンドールをよろしく頼む」

クロードは懇願するような目を向けるクライブを離して剣を指輪に戻すと、アウントウエンに跨る。

「ラドビアス、行くぞ！」

「はい」

サウンティトウダに跨ったラドビウスが呪を解くと同時に先に飛び出したクロードを追ってバルコニーから飛び立つ。

「矢を！ 早く矢を用意して撃ち落せ！」

やっと扉を開けた警備の兵士たちに命じるゴードンにクライブがため息まじりに言う。

「よせ、もう間に合わない。クロードは行ってしまった」

「クロード様は行かれたのですか」

「コーラル」

クライブは扉近くに立っている魔道師に気付いてすがるような目を向ける。

「おまえの言う通りだった。私は……どうしたらいい？」

「そうですね……影ながらご助力致しますよ、陛下」

につこりとコーラルが安心させるように笑いかけてくる。クラ

イブは亡き父親の面影をその魔道師に見て胸が詰まった。そうだ、

この者は父上の弟なのだ。私を心配して……導いてくれる。

しかし、自分の肩に手を置いたコーラルの瞳が氷のように冷たいことにクライブは気付かなかった。

クロードの目の前に広大な陸地が広がる。サイトスと海峡を隔てた位置にある、リスペイン王国だ。五百年前、そこはルクサン皇国という大きな国で戦闘好きな国王、ドリゲルトが支配していた。そのルクサン皇国が大量の軍隊をこの島国に送りこみ、一時は支配下に置いたがレイモンドール王ヴァイロンがこれを破り、ドリゲルトは憤死し、あれ程勢いのあったルクサン皇国も王のいない間に他国の侵入を許すことになる。今は三分割されてリスペイン王国、ポーチニア王国、イストニア連邦国の一部になっていた。

帰ってくる頃……この国はどうなっているのだろう。他国に蹂躪じゆうりゃんされているか。

そして俺が帰る場所があるのか……？ 俺は重罪人だったわけ。それでも自分は行くと決めて出てきたのだ。俺は俺の道を突き進む。引つかきまわして出て行く俺は卑怯者だが、すべてを終わらしたら絶対帰ってくるから……。クロードはつぶやいて自分が置いていくものを一度だけ振り返った。

サイトの王宮の一角から異形の物が二つ空へと飛び立っていく。それはこの国が魔術の国から脱しようとして吐き出したものかもしれない。魔道の加護を失ったレイモンドールはこれからどうなっていくのか。

クロードの目の前にはただ遙かな大陸の大地が広がっていた。

了

その先へ（後書き）

長い話に今まで付き合ってくださいありがとうございます。一応、クロード編は終わりです。混乱のレイモンドール編をアップしております。（転成の章）

また、外伝としてこの話をのせる時に切った黎明期の話をのせますのでよろしかったらお読み下さい。

似たような題名で混乱させてしまつて申し訳ありません。

1・レイモンドール綺譚

2・レイモンドール綺譚（転成の章）・・・本編の続きです。

3・外伝・・・レイモンドール綺譚（創成の章）・・・レイモンドール国の出来た頃の話です。

4・外伝・・・クロード冒険譚＞1話、1話独立した話です。＜

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5941c/>

レイモンドール綺譚

2010年10月8日10時16分発行